

---

# リリカル銀魂～魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀～

ナナフシ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リリカル銀魂〜魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀〜

### 【Nコード】

N2725Z

### 【作者名】

ナナフシ

### 【あらすじ】

赤夜叉さんの許可をもらって書きました。

赤夜叉さんの『銀魂×魔法少女リリカルなのは』〜魔法少女と銀髪の侍〜と黒龍さんの『リリカル銀魂ライダー〜異世界鎮魂歌〜』を参考に書いています。

天人によって侍は衰退の一途をたどっていた。

そんな中、己の侍魂を決して曲げぬ男が一人居た。その男の名は坂田銀時。この物語の主人公である。

銀時には相棒がいる。だが、人ではない。

銀龍と言う刀がある。

普段は姿を見せず、銀時が任意したとき、銀時がピンチの時に姿を現す。

銀龍はただの刀ではなく、喋る刀であった。

銀時は源外に呼ばれて工場に向かい、装置の実験体となった。

そして、飛ばされたのは『リリカルなのは』の世界だった！

銀時は魔法少女と出会い、事件に巻き込まれていく。

新八と神楽が無印編では出てきません。すみません……被らない様にしたらこうなりました。後、新八はロリコンアニメオタクにするつもりなので

僕が書いているもう一つの銀魂の二次小説『銀魂〜冷血の鬼姫の日常〜』のオリキャラ達が出てきます

第一訓：始まりは突然に（前書き）

ナナフシ「どうも！ナナフシです！」

銀時「こいつが書くなんてな」

ナナフシ「悪いか！後、黒龍さんに一言……銀龍の件ありがとう」「  
ざいます！」

銀時「考えてくれたもんな」

ナナフシ「もう俺マジで感謝感謝です！」

銀時「その内銀八先生をやるつもりだからよろしく！」

ナナフシ「それでは『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の  
刀』 始まります！」

## 第一訓：始まりは突然に

ここは江戸の歌舞伎町。ここに万事屋銀ちゃんと言う何でも屋がある。

中では銀髪で天然パーマの男、坂田銀時。この物語の主人公である。他には……て、あれ？居ないんですけど。

「ああ、新八はお通のライブ、神楽は定春の散歩だ」  
え？マジで？

「マジだ」

銀時は地の文と会話をしていた。  
プルル、プルル。

すると、電話が鳴った。

銀時が電話を見てダルそうに取る。

「ハアイ、万事屋でえす」

銀時が怠そうに言った。

『銀の字か？』

「んだ。じーさんじゃねえか」

電話の相手は江戸随一の機械師<sup>からくり</sup>、平賀源外からであった。

『依頼なんじゃが』

「何だよ」

銀時は訪ねた。

『新しい発明品を開発したから来てくれ』

「絶対ロクな発明品じゃねえだろ。それに実験体にされるのがオチだ。断る」

『そんな事言っただけなのか？』

「あ？」

『来ないなら今までのツケ今日までに耳揃えて払え』

銀時はそれを聞いて行かざるを得なかった。

「行くか……」

『主よ……ちゃんと扱わなければならないではないか』

「銀龍ぎんりゅうの言う通りです」

銀時は誰も無いのに、手に突然刀が現れてそれと話していた。

銀龍は白かった。柄から鞘まで白かった。鍔は白銀だった。

刀身は見せてないが、刀身も白銀である。

銀龍はまた姿を消した。

銀龍は普段は見えないのだ。銀時の任意、ピンチの時に姿を現す。

そのまま銀時は工場へ向かった。

\*

「おい、じーさん」

銀時が工場の中に声を掛けた。

「来たか銀の字」

工場の中から老人が一人出てきた。

平賀源外である。

「ん？銀の字。あいつ等はどうした？」

源外は新八と神楽が居ない事を聞いた。

「二人共野暮用」

銀時はそう言った。

「まあ、良い。中に入れ」

源外に言われて銀時は工場の中に入った。

「おお〜！」

中に入った銀時は驚きの声を上げた。

工場の中には大きな装置があった。

「おい、じーさん、何だよこいつア？」

「こいつはな瞬間移動装置だ」

「瞬間移動装置？」







第一訓：始まりは突然に（後書き）

ナナフシ「上手く書けるか不安」

銀時「前向きに考える」

ナナフシ「そうだな！」

ナナフシが元気を取り戻した途端だった。

新八・神楽「ナナフシイイイイイイ！」

ナナフシ「はい？つてゴフアアアアアア！」

ナナフシは新八と神楽に蹴飛ばされた。

ナナフシ「何！？」

新八「何で僕達が出てないんだアアアア！」

神楽「そうアル！駄眼鏡はともかく何で私が出てないアルかアアア

アアア！」

新八「神楽ちゃん！？」

ナナフシ「いや、これは考えがあつて」

新八・神楽「死ねええええええええええ！」

ナナフシ「ぎゃあああああああ！」

銀時「……これからよろしく頼むぜ」

## 第二訓：主人公は厄介事に巻き込まれるのがお決まり（前書き）

ナナフシ「次回から銀八先生コーナーを始めたいと思います！」

銀時「いきなりだな！」

ナナフシ「いや、今回リリカルなのはキャラ出るからさ」

銀時「それでつて……」

ナナフシ「今回は銀龍が使われる！」

銀時「ネタバレ！」

ミラクル「ナナフシはそう言う人だし……てか、何故ミラクル

（エイト）！」

ナナフシ「ミラクル」と神楽は前書きと後書きに出してるんだよ。

無印編出番ないから」

銀時「だってよ。神楽、ミラクル」

ミラクル「いや、銀さんまで！」

神楽「ミラクルの理由が知りたかったら、『銀魂』冷血の鬼姫の日常』の質問コーナー、もしくは霜月サヤの『妖と夜叉』を見る  
と理由がわかるネ」

ミラクル「僕は新八じゃあああああ！」

銀時・ナナフシ「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪侍と白銀の

刀』始まるぜ！」

ミラクル「無視するなアアアアア！」

## 第二訓：主人公は厄介事に巻き込まれるのがお決まり

「だアアアアアア！チクシヨー！！あのクソジジイのせいで何か良くわからねえ場所に飛ばされちまったじゃねえか！あのクソジジイ！！帰ったら絶対瞬間移動させてやるからなア！」

目が覚めた銀時は怒りを露わにしながら怒鳴っていた。

『主よ。落ち着いてくれ』

銀龍ぎんりゅうが銀時を慰める。

今怒鳴っていても仕方がないと言って銀時を慰めた。

『それに主よ。周りを見る限り江戸ではない事は確かだ』

銀龍の言葉を聞いて銀時は……。

「ああ！ちくしょう！イライラする！あの綺麗な星空までイライラする！あんなに綺麗なのにイイ！」

銀時は顔を上に向けて怒鳴る。

銀時がそう怒鳴っている時だった。

ドカーン！

「！？」

爆発音らしきものが聞こえた。

『主！行ってみましょう！』

「言われなくてもわかってらア！」

銀時は腰に挿してある『洞爺湖』を握りしめながら轟音の方に向かった。

\*

銀時が聞いた轟音の発信源は動物病院であった。

そしてそこには栗色の髪をリボンでツインテールに結んだ美少女 -

・・・高町なのはがフェレットを抱えていた。  
そして驚く彼女の眼前には病院の壁に埋まって、黒い何かがかもがいている。

ブヨブヨと形を変えて少し気持ち悪さを覚える。

なのはは慌ててフェレットを抱えて逃げ出した。

なのはは学校帰りに酷い怪我をしたフェレットを拾い、動物病院で手当をもらった。

そして夜、頭の中に謎の音が聞こえて、気になったなのはは動物病院に来た。

そして今の状態になっているのだ。

私、高町なのははフェレットさんを抱えてあの、変な怪物から逃げています。

あの怪物にも驚いたけど、フェレットさんが喋った事にも正直驚いています。

それに周りにも景色もおかしいし、正直頭の中はぐちゃぐちゃなの。

「あの、お礼は必ずします！ だから僕にあなたの力を……！」

「お礼とかそんな事言ってる場合じゃないでしょ」

フェレットさんがさっき私に力があるって言ったけど、正直私にそんな力があるかは分からない。

全然今の状況は把握できないけど、あの怪物をどうにかする力があるなら。。。

「ぐおおおおおおお！！」

私が逃げながらそう考えていると、怪物が雄たけびを上げて私に飛び掛ってきた。

「っ!!」

私はもうダメだと思い思わず目を瞑ってしまった。

でも、いつまで経ってもくるはずの痛みがこない事を不思議に思った私はゆっくりと目を開けた。

「おいおい、トラブル遭遇とはついてねえな」

黒い服の上に白い和服を半分抜いた状態で着て、銀髪に木刀を持った男の人が立っていました。

なのはがピンチになったその時に銀時がなのはの前に立ち、木刀で怪物を抑えたのだ。

銀時はそのまま怪物をぶっ飛ばした。

「おいおい、トラブル遭遇とはついてねえな」

銀時はまたメンドーな事に首を突っ込んでしまったと思い、メンドくさそうに頭を掻く。

そして、後ろに居るのはに顔を向ける。

「っで、大丈夫かお前？」

「え！は、はい！ありがとうございます！」

なのはは俺を言っで頭を下げる。

「あの、ありがとうございます」

フェレットも頭を下げた。

「イタチが喋った！」

銀時はフェレットが喋った事に驚いていた。

「あの、フェレットなんですけど」

「イタチもフェレットも変わらねえだろ」

「いや、変わりますよ！」

銀時とフェレットが言い合いをしていると……。

「グオオオオオオ！」

銀時にぶっ飛ばされた怪物は怒っている様だった。

「改めて見ると気持ち悪いなコイツ」

銀時は怪物を見ていつもの様なダラけた口調で答えた。

まあ、この人、エイリアンとか、人に寄生する刀とかと戦ってますしね。

銀時は横目で怪物を見ながらなのはに話し掛ける。

「えっと、お前等名前は？」

「え？た……高町なのはです」

「僕はユーノ・スクライアです」

なのはとユーノは戸惑いながらも自己紹介した。

「じゃあ、なのはとユーノ、お前等はそこに居るよ」

銀時は軽く手を振るうと怪物の元へ向かう。

「えっ！？ちよつと待ってください！危ないですよ！」

ユーノは必死に叫んで銀時を止めようとした。

ユーノは銀時が木刀で怪物を吹き飛ばしたのを見ていた。

だが、アレは『ジユエルシード』と言う『ロストロギア』思念体。

魔法も使えない銀時がどうにか出来る相手ではない。

銀時にも自分を抱きかかえているのは同様『リンカーコア』があり、しかもなのはより高い魔力量を有しているのがわかる。

だが、なのは同様魔法の力に目覚めていない事をわかっている。

銀時は魔法なしの肉弾戦戦わなければならない。

それは無謀と言いようがない。

だが、ユーノは後々驚かされる。

ズバババババ！

銀時はユーノの予想を遙かに上回っていた。

銀時が思念体に近づいた時襲ってきたが、銀時は凄まじいスピードで木刀を振り、思念体をバラバラにした。

「す……すごい！」

「なんて強さだ」

なのはとユーノは銀時の強さに驚いていた。

バラバラになった怪物の破片は飛び散り、壁や電柱を破壊する。

なのはは銀時の剣の強さに見惚れていた。自分の家族も剣の腕はかなりの物だが、銀時の剣技はそれ以上の物を感じた。

「はい、終了オ」

銀時は思念体を倒したと思い、腰に木刀を挿し、なのはとユーノの所に戻る。

だが、思念体の欠片はじょじょに集まっていき、さっきの丸いブヨブヨの怪物に戻った。

「グオオオオオオオ！」

怪物は雄叫びを上げて銀時に襲いかかる。

「危ない！」

なのはが叫び声を上げ、銀時は後ろを振り向く。油断していた事もあり、銀時は木刀の刀身で防ごうとした。

『我が主よ……油断してはダメではないか』

銀龍がそう言っ姿を現して、銀時に銀色のオーラを纏う。よく見るとこれは魔力である。

その纏ったオーラはシルバー・オフ・アーマー白銀の鎧と言う。

オーラそのものがバリアジャケットの強度を持ち、AAランクの攻撃を喰らっても平気になる。

更にはそれを纏っている時の銀時は身体能力が上がる。

何とかそれで怪物からの攻撃を防いだ。

そのままシルバー・オフ・アーマー白銀の鎧は消えた。

ユーノはシルバー・オフ・アーマー白銀の鎧に驚いていた。

（い、今のは魔力で出来ていた！何であの人が魔力を使えるんだ！？）

ユーノはそれだけではなく、銀龍にも驚いた。

（そ、それに刀が喋ってる！）

ユーノはデバイスかと思ったが、デバイスではない事は確かである。そしてなのはは……。

「か……刀が喋ってる！」

銀龍に驚いていた。

それと同時に白銀シルバー・オブ・アーマーの鎧の綺麗さに見惚れていた。

「あ？こいつか？不思議だよな……喋ってたから……」

銀時も始めての時は驚いていたらしい。

でも今では慣れている。

銀時は怪物に目を戻した。

「ぐおおおお！」

まだ動いている。

鞘から銀龍を抜いた。

そして銀時は銀龍を振り上げた。

「オラア！」

そして振り下ろした。

すると銀色の斬撃が放たれた。

それも魔力で出来ていた。

これを魔力操作マジックコントロールと言う。

銀時の戦闘スタイルに合わせた魔法攻撃が出来る様になる。

つまり、自分の考えた魔力攻撃が可能になる。

(魔力の斬撃まで……一体何者なんだこの人！？)

ユーノは驚きの連発であった。

そして斬撃が怪物に直撃して真つ二つに斬れた。

だが、やはり元に戻ってしまう。

「ちっ、こいつ不死身か……」

『厄介ですね』

銀龍も色んな攻撃方法があるが全て無駄だと踏んだ。

「どうすれば良いの!？」

「いけない!あれを何とか『封印』しなければいけないんだ!」

「その封印ってどうすれば良いの?」



なのはとユーノが封印の事について話しているのに気付き、銀時は銀龍でバラバラに斬つたり、魔力攻撃を行つたりして時間を稼いだ。「さつき言つた事は覚えてる？」

「魔法の事？」

「そう、それを使うにはさつき渡した宝石が必要なんだ」

「これの事？」

なのははさつきユーノから貰つた赤い綺麗な宝石を見せた。

「それで、それを手に、目を閉じ……心を澄ませて……僕の言つた通りに繰り返して……」

なのはは目を閉じてユーノが言つた言葉を繰り返す。

「我……使命を受けし者なり……」

「我……使命を受けし者なり……」

「『契約の元、その力を解き放て』」

「『えと、契約の元その力を解き放て』」

「『風は天に…星は空に……』」

「『風は天に…星は空に……』」

「『そして、不屈の心は……』」

「『そして、不屈の心は……』」

『『『この胸に！！』』』

なのはとユーノの声が重なる。

『『この手に魔法を……レイジングハート！セーットアップ！』』』  
するとなのはの体が光に包まれていく。

<Stand by ready, set up!>  
「うわっ！眩し！」

あまりの光に銀時が目を細める。

光が収まると白いバリアジャケットを着ており、手にレイジングハートを持って浮かんでいるのが居た。銀時はその姿を見て啞然した。

「僕らの魔法は発導体に組み込んだプログラムと呼ばれる方式です。そしてその方式を発動させるために必要なのは術者の精神エネルギーです！！そしてあれは……忌まわしい力の元に生み出されてしまった思念体。あれを停止させられるにはその杖で封印して元の姿に戻さないといけないんです！！」

なのははレイジングハート見て聞く。

「よくわかんないけど……どうすれば良いの？」

「攻撃や防御みたいな基本魔法は心に願うだけで発動しますが、より大きな力とする魔法には呪文が必要なんです！」

「呪文？」

「心を澄まして……心の中にあなたの呪文が浮かぶはずですよ」

そう言われてなのはは目を閉る。そしてなのはは目を開ける、その目は真剣そのものだった。

「リリカル、マジカル」

「封印すべきは忌わしき器、ジュエルシード！」

杖を掲げながら呪文を紡ぐなのは、それを見ながらユーノは叫ぶ。

「ジュエルシード、封印！」

<Sealing Mode. Setup>

なのはの魔力系が敵を縛り上げ、怪物の額に『???』の文字が浮かび上がる。

<Stand by ready>

「リリカル、マジカル……ジュエルシード、シリアル????、封印

！」

その時銀時が、

「なに、あのセリフ!? 恥ずくない!」

『主よ……あの子も恥ずかしいのだぞ』

場の空気を壊すようなセリフを言った。銀龍はなのはも恥ずかしがつていると言った。なのは恥ずかしがつているのは本当だ。

レイジングハートの声に答え、なのはは何故かくるくる横回転しながら呪文を紡ぐ。

<sealing>

そして、なのはの魔力糸が怪物を貫き、宝石の状態に封印する。

「それがジュエルシードです。レイジングハートで触れて」

なのははフェレットの指示に従い、レイジングハートの先を近づけるとジュエルシードが宙に浮かび杖のコア（赤い宝石）に取り込んだ。それと同時に周りの景色が異空間のような不思議な景色から元の普通の景色に戻った。

そしてゆっくりと地面に降りる。

「ふう……」

なのははバリアジャケットを解き、安心して息を吐く。

そしてバタリとユーノが気を失って地面に倒れた。

「フェレットさん大丈夫!？」

なのはは気絶したユーノを抱きかかえて心配そうな顔をする。

さっきのユーノだって自己紹介したって言うに……。

「な、なあ」

「ふえっ!? な、なんですか?」

突然銀時に声を掛けられたなのはは驚いた顔で聞く。

「いや、ここにいると不味くね?」

「えっ?」

なのはは銀時に言われ、周りの景色を見る。道路や電柱は壊れたり没落したりなどかなり酷い状況だった。

更に、

ピーポーピーポーピーポー！

パトカーのサイレンの音が向こう側から響いてきた。

『主よ。このままだとどっからどうみても我等がやった様にしか見えぬぞ』

銀龍の言った言葉を聞いて銀時は……。

「に、逃げろオオオオオオ！」

「ご、ごめんなさー！ーい！」

銀時となのははその場からすぐ離れる為に全力疾走した。

『我は戻るか』

銀龍は呑気に言っつて姿を消した。

第二訓：主人公は厄介事に巻き込まれるのがお決まり（後書き）

ナナフシ「銀龍も活躍うううう！」

銀時「そうだな」

銀龍『我は出番が少なくとも多くとも構わん』

ナナフシ「だろうな」

ミラクル（エイト）「いい加減名前を戻せええええええ！」

なのは「新八さん、落ち着いてください」

銀時「なのは、違うぞ。そいつはミラクルだ」

なのは「わ、わかりました」

ミラクル「何吹きこんでんだアアアアアア！」

神楽「それではまたアル！次回から教えて銀八先生コーナー始める

アル！質問があれば送ってきてほしいネ！」

### 第三訓：謎の組織にはご用心（前書き）

ナナフシ「ハイ、今回はオリキャラ出ます」

銀時「出るのか……」

ナナフシ「はい！」

ミラクル「いつまでこの名前なんだアアアアア！」

ナナフシ「いや、広めたいな〜って思ってる」

ミラクル「何でだアアアアア！」

ナナフシ「いや、だってさ。その名前の生みの親である『霜月サヤ』がさア。広めてくれても構いませんって」

ミラクル「元に戻せええええええええええ！」

なのは「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まり  
ます」

### 第三訓：謎の組織にはご用心

銀時となのは、ユーノが走り去る所を見ていた人物が居た。

「ククク、面白い力じゃねえか」

それを見ていたのは、天然パーマの男で、背中には薙刀を背負っている。

「それにしても銀の兄貴もここに迷い込んだとはな」

男はそう呟いた。

「銀の兄貴と銀龍（銀龍）のコンビは相変わらずだなア……ククク」

男は楽しみに満ちた笑顔だった。

男がそうやってしていると……。

「雷雅（雷雅）ここ居たの」

後ろからロングヘアの女がやって来た。

男の名前は雷雅と言うらしい。

「おう、忍か」

雷雅は女の事を忍と呼んだ。

「探したのよ。アンタは私達『雷撃』のリーダーなんだからね」

忍は雷雅に向かってそう言った。

「わかってるよ。今さっき面白いもんを見ていたんでな」

「面白いもの？」

雷雅の言葉に忍は首を傾げて聞いた。

「銀の兄貴が来ている」

「『白夜叉』が！」

忍は雷雅の言った言葉に驚いていた。

「どうやら俺等と同じ様に迷い込んだのかもしれないな」

雷雅は不気味な笑みを浮かべながら言った。

「で、どうするの？」

「ちよっくら挨拶してくるわ。攘夷戦争で『迅雷』と恐れられたこ

の俺……疾風雷雅（疾風雷雅）がな」

雷雅はそう言うと言った姿を消した。  
実は凄く速いスピードで移動したのだ。  
「まったく……先に戻ってよ」  
忍も姿を消したのであった。

\*

銀時達三人はその後公園に居た。

『とりあえず自己紹介から始めるか』

「そうだな」

銀龍が言った事に頷いた三人。

銀龍も自己紹介と言う事で姿を現した。

「俺の名前は坂田銀時。頼まれれば何でもやる万事屋つてのをやってんだ。後、銀ちゃんでも銀さんでもテメエ等の好きな様に呼んでくれ」

『我は主の相棒である。銀龍だ』

「私は高町なのはです」

「僕はユーノ・スクライアです」

それぞれ自己紹介を終わらせた後、銀時達はユーノから魔法の事を聞いた。

ユーノからそれを聞き終わった後、銀時も自分の事情を話した。

ユーノは銀時の話を聞いて『次元漂流者』だと言った。

「『次元漂流者』？」

銀時はもちろん、なのはもわからなかった。

「簡単に言えば迷子ですよ。未開の世界から何かの拍子で別の世界に飛ばされた人の事です」

銀時はそれを聞いて、

「マジでか？」



確かに辺りを見回す限り江戸ではない。

それに天人さえもいなかった。

銀時はそれを信じるしかなかった。

「で、僕からも聞きたいんですが」

「何だ？」

ユーノは銀時に聞いた。

「その銀龍は一体なんなんですか？」

「あ、それは私も気になります」

ユーノとなのはは銀龍が気になる様だ。

「コイツか？……」

銀時は黙り込んだ。

そして……。

「何だろうな」

ズーン！

銀時が言った言葉に二人はズッコけた。

「何で持ち主であるあなたが知らないんですか!？」

「いや、俺もよく知らないんだよねエ。たまたま見つけて使ってる

？的な」

「いや、何ですかその理由!？」

銀時が言う事にユーノはツツコンでいた。

『主が我を見つけたのは幼少の頃だ。これ以上は言えん』

銀龍はそれだけを言った。

「まあ、わかりました。後一つだけ良いですか？」

『なんだ？』

「あなたはデバイスでもないのに何故魔法を使えるんですか？」

ユーノの言葉を聞いた銀時は……。

「え!？あれ魔法だったの!？」

「今まで知らなかったんですか!？」

銀時は攘夷戦争でも使っていたが魔法だとは思っていなかったらしい。

たぶん銀時は「不思議な能力が使える刀」とでも思っていたのだろう。

ユーノは銀時が魔法に気付いていなかった事に驚いた。

「いや、て言うか。俺の世界で魔法は架空の産物だから」

まさか自分が普通に魔法を使っていたとは思ってもよらなかった銀時だった。

そして視線を銀龍に戻す。

『我か……確かにデバイスとやらではない……我は目覚めた時には主に拾われていたのだ』

どうやら銀龍も何故銀時の魔力を解放する事が出来るのかわからならしい。

『我は何処で作られ、何処で何をしたか、何故この能力を持っており、使い方、名前しか覚えていないのかは謎なのだ』

つまりは記憶には能力と使い方、名前しか覚えていなかったらしい。

『だが、主は我が何者であろうと拾ってくれたのだ』  
銀龍はそれ以来銀時と一緒に居る様だ。

「ま、コイツも自分自身がよくわからねえんだよ」

銀時がそう言っているとユーノは「そうですか」と言っ引いた。

「でも、凄いですよね」

なのは目を輝かせながら銀龍を見ていた。  
すると……、

「楽しそうじゃねえか……俺も混ぜてくれよ」  
いきなり男の声が聞こえた。

その声が出た方向を見ると……雷雅が居た。

「雷雅！」

「よオ、銀の兄貴」

雷雅はニヤリと笑った。  
ゾワッ。

なのはとユーノは恐怖を感じた。

雷雅の目は戦いたいと言う目だった。

「デメエ……何でこの世界にいやがる！」

銀時は敵意を剥き出しにして言った。

なのはとユーノは敵意剥き出しの銀時にも驚いた。

「何……俺も銀の兄貴と似た理由でこの世界に来たんだよ」

雷雅は銀時にそう言った。

「デメエも！」

「ああ、俺達の組織のバカ機械師からくりのせいでこの世界に飛ばされたんだよ」

「俺達？と言う事は『雷撃』の奴らも！」

「ああ、居るさ」

雷雅は「ククク」と笑いながら言った。

「まあ、今回は挨拶に来ただけだ……今度会う時が楽しみだな……アハハハハ！」

雷雅は笑って去っていった。

「銀さん……あの人は誰ですか？」

「強者を求める戦闘狂野郎だよ」

銀時はそれだけを言った。

「でだ……その話は置いてこうぜ」

銀時はこれ以上聞かれないうちに言った。

「思えば銀さんって行く当てがないんですよね？」

「ん？ああそうだな」

銀時はなのはの言った言葉に頷いた。

「なら、家に来ませんか？」

「え？」

銀時はなのはの言葉に驚いた。

「助けて貰ったお礼もしたいですし。それに銀さんと銀龍さんともっとお話がしたいのでノノノ」

なのはは頬を赤らめながら言った。

銀時がなのはを助けた時、銀時が格好良く見えたのであろう。

「マジで良いのか？お前の家族が何て言うかわからないぞ」

『そうだぞ。主は大丈夫だが、見ず知らずの男を家に入れるのはどうかと思つぞ』

銀時と銀龍はそう答えた。

「大丈夫です。私を助けてくれた人つて説明すれば、お母さん達は銀さんを泊めるのを許してくれると思います」

「そうか？ならお言葉に甘えて」

銀時はそう言った後、「あ、後」と言った。

「その『ジュエルミート』集め俺も手伝うぜ」

「銀さん『ジュエルシード』だよ」

銀時の間違いをなのが訂正した。

「居候させて貰う代わりに手伝つてやるよ。俺は万事屋だからな」

銀時がそう言った。

「でも……」

ユ一ノは渋っていた。

「十歳を満たない女の子がそれを集めるのは危ないだろ。だから俺も手伝つてやるんだよ」

『我もその意見には賛成だな』

銀龍は銀時の意見に賛成した。

「わ、わかりました」

ユ一ノは銀時と銀龍との言い合いでは勝てないと思つたのだ。

銀時はこうしてなのはの家に居候する事になった。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハアイ、それでは銀八先生コーナーを始めます。アシスタントは」

なのは「高町なのはです」

銀八「はい、その内魔王になる高町なのはがアシスタントだ」

なのは「なりません！」

銀八「早速質問行くけど、一つしか来てないんだよね」

なのは「そうなんですか？」

銀八「ああ、と言う訳で始めるぞペンネーム『月光閃火』さんから  
の質問

『ども…月光閃火げっこうせんかという。

しかし…タグにもあったが、また新八をそう扱うか…(黒)。(そう  
言いながら、黒いオーラを放ちつつ右掌から紫焰を立ち上らせる  
(汗)

輝刃「…閃火…とりあえず落ち着こう…(汗)。あ…さっそくだが  
質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1. 銀龍に質問…銀龍って話にもあった通り『喋る刀』だが、やはり  
人間の姿にもなれるのか？

あゝ…確かに、そういうタイプの武器って大概何かしらの人化設定はありそうだもんな…。次は俺からだ。

2. ナナフシさんに質問…というか忠告ね？タグにもあった通り、『新八はロリコン』なんてあったけど…あんまり酷い扱いはしないですよ？（黒笑み& a m p ;紫焰メラメラ（汗））

輝刃「…とりあえず、加減はしとけよ（汗）？俺も種族上言えた義理では無いが…（汗）。「…」」  
月光閃火の言葉に黙り込んでいた。

銀八「まずは一つ目だが」

銀龍『我か？我は人の姿になる事は無理なのだ』

銀八「だそうです。二つ目の質問の答えをナナフシ」

ナナフシ「き…気を付けないと…」

ナナフシはガクガクとなっていた。

銀八「と言う訳で『月光閃火』さん。あまり脅したらダメだぞ」

なのは「質問は以上です」

銀八「それではまた次回」



#### 第四訓：化け犬には気を付けよう（前書き）

ナナフシ「ミラクル が広まると良いなあ」

ミラクル 「いい加減にしろオオオオオオオ！」

ミラクル が木刀で襲いかかってきた。

ナナフシ「うん、これくらいなら大丈夫だよね！ロケラン！  
ドカーン！」

ミラクル は黒こげになった。

銀時「『月光閃火』に殺されてもしらねえぞ」

ナナフシ「……やりすぎたか？」

銀龍「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』 始まるぞ」



#### 第四訓：化け犬には気を付けよう

なのは朝目覚めてユーノに挨拶をしてから、リビングに向かった。いつもより、騒がしい声が聞こえる。

何故なら……。

「おはようございます。銀さん」

「おう、おはよう」

銀時が居候仕始めたからだ。

銀龍は姿を消しているので気付かれていない。

銀時が居候した事により騒がしくなったのだ。

朝ご飯では……。

「てつめ、離しやがれ！これは俺のウィンナーだ！俺はコイツを生まれる前から目をつけてたんだぞ！」

「ふざけるな！お前こそ離せ！」

「銀さん！お兄ちゃん喧嘩しないで！」

銀時と恭也はウィンナーを箸で引っ張り合う。

そして喧嘩する二人を宥めようとするなのは。

こんな風に騒がしくなったのだ。

\*

なのは学校でユーノと念話をしていた。

ユーノは魔力が回復したらこのまま自分一人でジュエルシード探しすると言ったが、なのはも手伝うと言った。

ユーノは渋ったのだが、なのはは魔法が自分のやりたい事かもしれないと言いながら、ユーノを説得する。

その上で銀時ものりくらりとユーノを説得し、最終的にはユーノ

は折れた。  
そしてこれからはなのはと銀時がジュエルシード探しを手伝うことになった。

\*

なのはは放課後に町の神社に来ていた。ユーノも一緒である。

ジュエルシードの反応があったからだ。

そしてそこにはジュエルシードを取り込み、子犬から巨大な犬に変わった怪物がいた。

たまたま飼い主と散歩をしていた犬が落ちていたジュエルシードを取り込んでしまったのだ。

体は鎧のような黒く堅そうな皮膚で覆われ、目は四つになり、鋭そうなたをむき出していた。

「気をつけてなのは！ 現住生物を取り込んでいる！」

「どうなるの？」

「実態がある分、強い」

ユーノ目を細くしながら化け物になった犬を見ている。

これからは化け犬と呼ぼう。

「なのは！ レイジングハートの起動を！」

「起動つてどうやるんだっけ！？」

「えっ……！？」

なのはの言葉を聞いてユーノは呆けた声を出してしまう。

なのはが起動の仕方を忘れてしまったとは思っていなかったからだ。

ユーノはなのはの肩に乗って言う。

「ほら、“我使命受けし者”からの起動パスワードだよ！」

「あんな長い覚えてないよ！」

なのはとユーノがもたついてしていると、化け犬が唸り声を上げてなの

はに向かつて駆け出す。

「じゃあもつかい言うから僕の言う言葉を繰り返して！」

「わ、分かったの！」

ユーノとなのははレイジングハートの起動に注意がいつていたので気が付かなかつたが、化け犬は二人のすぐ前まで来ていた。

ユーノは化け犬が近づいて来ている事に気づき声を上げる。

「危ない！！！」

「えっ！？」

ユーノはなのははに声を掛けてなのはが反応する時には既に間に合わず、化け犬はなのははに襲い掛かる直前だった。

なのははダメだと思い目を瞑った時……

ドカア！

「グワアッ！」

と何かがぶつかる音がした。

なのはははゆっくりと目を開けると、化け犬は自分の目の前から離れた所で呻きながら倒れ、自分の目の前には木刀を構えた銀時の背中があった。

「銀さん……」

なのははつい銀時の名前を呟いてしまった。

銀時はなのはの言葉を聞いて振り返る。

「おいおい、随分メンドーな事になつてんじゃないか」

銀時は愚痴を零しながら化け犬を横目で見る。

化け犬は銀時の攻撃が思った以上に重いらしく、まだ立ち上がれずふらついていた。

「あの、どうして此処に？」

ユーノは慌てていたので銀時を呼ばずに来たのだ。

だから銀時がここに居る事を疑問に思った。

「ジャンプ探してたらたまたまお前達が神社に行くのが見えたんで

な」

「ジャンプ？」

『まあ、主の言った事は忘れてくれ』

ユーノが聞き慣れない言葉に首を傾げていると銀龍がそう言った。

銀時がジャンプを探していて、なかなか見つからず、探していた途中でなのはとユーノが神社に入っていくのが見えたので銀時は後を追って今の場面に遭遇している。

銀時がそう説明し終わると……。

「グルルルル！」

化け犬が怒りの形相で銀時をにらみつけていた。

どうやら銀時に木刀でぶつ飛ばされたのが頭に来た様だ。

「おいおい。それにしても何だよアレ？ あの変なブヨブヨの化け物といい、コイツと良い、ジュエルシードってのはモンスター製造機ですかコノヤロー」

銀時がダルそうに化け犬を見ながら愚痴を零した。

「気をつけてください！ 昨日と思念体と違って現住生物を取り込んでいるから強くなっているはずです！」

ユーノがさつきなのはに言った忠告を銀時に言うが、銀時は「はいはい」と軽い返事をした後、木刀を肩に掛けながら化け犬に近づくと、それを見たユーノは慌てて銀時に声を掛ける。

「ちよっ！だから危ないですってば！」

ユーノも昨晩の戦いで銀時が思念体を圧倒していたのは知っていたが、今回の相手は現住生物を取り込み昨晩の思念体よりも強い。

銀時が銀龍のおかげで魔法を使えるのは知っているが、銀龍を出さずに向かっている。

魔法なしで銀時が肉弾戦で戦えるとは思わなかったからだ。

だが、ユーノの考えはすぐに覆された。

近づいて来た銀時を化け犬がここぞとばかりに爪で引き裂こうとするが、銀時はそれを簡単に木刀でいなしていく。

上からこようが、下からこようが、斜めからこようが全ての攻撃を

完璧に防衛していた。

(す、凄い……!!)

ユ一ノは目を見開いて驚いていた。肉弾戦だけではどうやったって限界があると思っていたが、自分の考えがまったく意味をなさない事を銀時の戦いを見て思い知った。確かに今の戦いの様子は銀時が押されているように見えるが、それはまったくの逆。

銀時が最小限の動きで化け犬の攻撃を防いでいたのだ。そして攻撃した手が木刀で弾かれた事でスキができた。すかさず銀時が反撃の態勢に入った。

「おいたいも大概にイ！」

銀時は木刀を振り上げ飛び上がる。

「しやがれエエエエエ!!！」

ズドン!!

重い一撃が化け犬の脳天にクリーンヒットした。

ドサツ!

化け犬は声も上げずに白目を剥いてゆっくり倒れた。

「はい終了」

銀時は腰に木刀を挿す。

「や、やったアアア!!！」

なのはは銀時の勝利を見て喜び飛び上がった。

銀時が勝った事をつい自分のように喜ぶところは子供らしいと言え

るだろう。

『ユーノよ。主を甘く見てはいけないぞ』

「は、はい」

(僕は……彼の事を侮っていたのかもしれないな……)  
ユーノはユーノで、思い返していた。

魔法の才能があるのはにはこれから手伝ってもらおうと思っていたが、やはり銀時には極力手伝ってもらわないようにしようと思っていた。

それはユーノが純粹に銀時の事を気遣っていたからだ。

いくら腕に覚えがあつても魔法がなければ何もできない。さっきまでそう思っていた。

だが……銀時の戦いを見てその考えを改めた。

そして帰ったら改めて銀時にジユエルシード集めを手伝ってもらおうと思った。

「おい。倒したは良いんだけどよ、この後どうすんの?」

銀時は二人に歩いて近寄りながら聞く。

なのはとユーノも“あっ”と思出し、ユーノがなのはに言う。

「なのは。さっきも言ったとおり、僕に続いて起動パスワードを言  
つて」

「うん」

なのははユーノ言葉に頷き、レイジングハートを握り締める。

(銀さんがあれだけ頑張ったんだから、私も……!)

銀さんの役に立ちたい。

そんななのはの思いに反応したのか、レイジングハートが強く光を  
発した。

<Standby Lady・Setup>

「えっ……? レイジング、ハート?」

「これは……!」

レイジングハートから女性の声が聞こえ、なのはとユーノは驚いて

いた。

そして光が収まると杖の姿になったレイジングハート持ったなのは姿があつた。

「これって……」

なのはレイジングハートを見て呆然としてしまった。

「まさか起動パスワードなしで起動させたなんて……」

「なんだ？ 何かおかしい事でもあんのか？」

ユーノは今更ながらなのはの才能に驚いていた。

やはりなのは自分よりも遥かに魔法の才能があると実感した。

銀時は二人の様子から何か問題があるのかと思ひ首を傾げる。

『主よ。聞くからにはパスワードがいるらしいのだ』

「なるほど。それなしで発動したからか」

銀時は銀龍の言つた事を聞いて理解した。

「なのは。次に防護服を」

「うん。レイジングハート、お願い」

<Barrier jacket>

そしてまた桃色の光になのはが包まれる。

そして光が収まると、白いリアジャケットを身に着けたなのはがいた。

(あ、あの服のデザインってさっきの服だったんだな)

銀時はなのはのリアジャケットがなのはの聖祥小学校の制服に似ていると気づく。

結構どうでも良い事に気づいた銀時なのであつた。

そしてその後、昨晚の思念体同様、桃色の紐で気絶している化け犬を縛り封印する。

なのはがジュエルシードを封印する横で、銀時とユーノは話をしていた。

「何で銀さんは銀龍を使わないんですか？ 自分にもリンカーコアがあるのはわかるでしょ」

「え？ そうなの？」

銀時はユーノの言葉に驚いていた。

「でなければ使えていませんよ」

「そうなのか……俺はてっきり銀龍が持っているのかと思ってた」ズテン！

ユーノは銀時の言葉にすっ転んでしまった。

『主の魔力を使って我は初めて魔法を使えるのだ』

「そうだったのか」

銀時は納得がいった様だ。

「で、話を元に戻しますけど」

「銀龍を使わない理由か？今はこいつだけでことが足りてんだよ」

銀時は木刀を握った。

「ま、たまに使うかもな」

銀時はそう言った。

「そうですね」

ユーノはそれを聞いて引いた。

銀龍の存在がドンドン気になりだしたユーノだった。

何故デバイスでもないのに持ち主の魔力を解き放てるのか……。

それが謎だった。

なのはが封印を終えたので、帰った。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハイ、質問コーナー始めるぞ。今回のアシスタントは」



銀龍『銀龍だ』

銀八「刀がかよ！」

銀龍『気にするな。字くらいは読めるぞ』

銀八「そうか？なら、質問行こうか」

銀龍『まずはペンネーム』黒龍『さんからだ。』

『黒龍』では、早速質問にいきましょう」

1・ミラクル に質問。ロリコンに堕ちる予定だそうですね？ リリカルなのはの世界には一生行かない方が良くないですか？

2・なのはに質問。こっちの小説のミラクル を見てどう思いますか？

3・ナナフシさんに質問。ナナフシさんはリリカルなのはのキャラであるクロノや、組織である管理局が嫌いですか？

新八「おいしいiiiiiiiiiii! いい加減僕をミラクル 言うの止める!」『だそうだ。一つ目だがミラクル よ』

ミラクル 「誰がミラクル じゃあああああ! 後、黒龍! それは僕を出番なしにしるって言う意味かアアアア!」

ミラクル は思いつきり叫んだ。

銀八「哀れだなぱつつあん。二つ目の質問の答えをなのは」

なのは「最低だと思っています」

銀八「こつちのなのはに嫌われてやんの。三つ目」

ナナフシ「僕はあんまりクロノは嫌いじゃありませんよ。時空管理局は……大きな組織には裏があるからあんまり好かないな……寧ろ、他の人の作品を見るとクソと思うから」

銀八「すんごい言いようだな……」と言う訳で『黒龍』さん廊下に立つてなさい」

銀龍『最後の質問だ。ペンネーム『支配者』さんからの質問だ』  
『質問です』

この物語での無印編では銀時の味方キャラやフェイトの味方をしてくれる銀魂キャラはいないんですか？』だそうだぞ」

銀八「これネタバレにならないか？まあ、今の所はありません。雷雅達が支配者さんの所と言うジユド達みたいな感じですね……つまりは裏で糸を引いているような……銀時は見ていけばわかると思いますと言う訳で『支配者』さん。廊下に立ってなさい」

銀龍『それではまた』

#### 第四訓：化け犬には気を付けよう（後書き）

ナナフシ「もう……黒龍さんの所パクった様にしか見えない」  
銀時「おいおい」

ナナフシ「とりあえず、次回はね……大丈夫かな……」  
銀龍「それではまた次回」

## 第五訓：間違いは誰にでもある（前書き）

ナナフシ「連続投稿！」

銀時「おいおい」

ナナフシ「良いじゃん別に……………それに早くフェイト出さないと…  
…」

銀時「思えばまだだったな」

ナナフシ「いや……………向こうに銀魂キャラ居ないからさ……………」

銀時「おいおい」

ナナフシ「砲撃が来る前に出さないと……………」

なのは「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まります」

## 第五訓：間違いは誰にでもある

銀時ははなのはの父親である土郎が監督を務める翠屋JFCのサッカーの試合を成り行きで見ている。まあ銀時はつまらなそうにしていたが。

アリサとすずかとはその時に挨拶をした。

銀時はその時思った。

アリサと神楽の声と同じだと気付いたのだ。

銀時が居る理由はなのはに誘われたからである。

銀時はメンドくさがっていたがなのはに「銀さんも一緒に行かないの？」（上目遣い+涙目）で頼まれて渋々ついてきたのだ。

それで今に至ると言う訳である。

\*

そしてその夜、なのはと銀時、ユーノはビルの屋上に立っていた。ちょうど暴走したジュエルシードを封印したところである。

なのはとユーノ後ろには銀時が立っている。

なのはは、今とても後悔していた。

なぜならジュエルシードの気配に気づいていたのにそれ勘違いだと思ってしまったからである。

今町はジェルシードの暴走ので発生した被害で酷い有り様になって

いる。

「ごめんユーノくん私・・・ジェルシードの気配に気づいていたのに、それを勘違いだと思ってた」

なのはは、今にも泣きそうだった。

「なのは・・・」

ユーノはどんなのはに言葉を掛けて良いか分らないでいた。すると……。

「よぉ、なのは」

銀時はいつものダルそうな声でなのはに声を掛けた。

「・・・銀さん」

なのはは、泣きそうな顔で俯いていた。

こんな失敗をして、銀時の顔をまともに見れないでいた。

「別におまえが気に病む必要はねえ。だからそうやって自分を責めるんじゃないよ」

『そうだぞ。なのはよ』

「銀さん、銀龍さん・・・でも、これは全部私のせいで・・・」

なのはは、まだ俯いて辛そうにしていた。

場の空気がさらに重くなった感じがした。

「はぁー」

銀時は溜息をつきながら頭を掻いた。

なのはは、こんな事になったのは自分のせいだと言う考えが頭の中を巡っていた。

長い沈黙が続いた。

「いい加減にしろやアアアアアアアアアア!!」

突然、銀時が豹変して怒声を上げた。

鬼の形相になった銀時は、なのはの頭に拳骨を食らわせた。

「ッ!!!」

なのはは、両手で頭を押さえて痛みに悶えた。

「ちょッ!? 銀さん、何やってるんですか!!」

ユーノは、なのはないも悪くないのに銀時が怒ったことに声を荒げた  
「フェレットもどきは黙ってる!!」

銀時の凄みある言葉にユーノは押し黙った。

「なのは、俺が怒ってんのは別にお前が失敗したからじゃねえ」

銀時は首を横に振る。

「ふえッ!?!」

なのはは涙目になって頭を抑えながら銀時の顔を見る。

「そうやってお前がいつまでも後ろばっか向いているからだ」

「ッ!」

なのはは何かを気づいたような顔をする。

銀時の言う通り今の自分は自分を責めているだけで前を向こうとしていない。

銀時は坦々と語り続ける。

「確かに過去にあつた事は消せやしねえ!。だからと言って、過去の過ちを振り返るなとも言わねえ」

『主よ……!』

銀時は空を見ながら何かを思い返す様に言う。

その顔がどこか寂しさを漂わせていた。

銀龍は銀時が何を思い出しているのかはわかっていた。

再び銀時はなのはに顔を向ける。

「だからそう言うもんを全部背負って前に進むんだ。なのは、おまえはどうしたい?」

なのはは、銀時の問いを受けて顔を俯かせる。

そして再び顔を上げる。

「私、ただ誰かに傷ついてほしくなくて、ユーノ君のお手伝いでジュエルシード集めをしようって決めました。けど、今は違います!

こんな失敗を起こさないために、皆を守るためにも、自分の意思でジュエルシード集めを続けます!」

なのはの顔には強い意思が籠っていた。

「そうか」

なのはの答えに満足だったのか銀時は微笑を浮かべながらなのはの頭を撫でる。

「けどな、なのは。お前はまだガキなんだからよ、もっと周りを頼れ。甘えていいんだよ。お前にはユーノだけじゃねえー、他にもお前を心配してくれる奴が、支えてくれる奴がいるんじゃないか？」

銀時はなのはの頭をゆっくりと撫でながら何かを諭すように言う。  
「ま、お前がまた立ち止まった時には、いつでも俺がお前の背中を押してやるよ」

そう言って銀時はなのはの頭から手を離れた。

「銀さん……」

なのはは銀時に顔を向けた。

『我にも頼って良いぞ』

銀龍は姿を現してそう言った。

「もう一人で悩むんじゃないぞ。良いな？」

「はい！」

なのはは嬉しそうに頷く。

「銀さん、銀龍さん、本当にありがとう」

なのははその時、目を奪われそうなほど良い笑顔でお礼を言った。

ユーノはなのはの笑顔を見て少し顔を赤くしていた。

まあフェレットだから誰にもそんな変化なんて分らないけど。

なのはは顔を赤くしながら銀時を見ていた。

銀時はなのはへのフラグを強化したのだった。

\*

そして時間は夜になる。

とあるビルの屋上にはそこに二人の人間と一匹の獣がいた。

一人は黒いマントなびかせ黒い斧のような杖を持った金髪の少女。



「ロストロギア……形状は青い宝石、一般名称はジュエルシード」  
少女はそう呟いた。

「早く手に入れないと……母さんのためにも」

「ワオオオオオオオン！！！！」

そしてその声に答えるかのように金髪の少女の近くに控えていたオカミが夜の街に遠吠えを響かせた。

そして数瞬、その場にいたはずの一人と一匹の姿が消える。

少女 『フェイト・テスロツサ』は自分の大切な人のために目的の物を集める。

第五訓：間違いは誰にでもある（後書き）

ナナフシ「やっと……フェイト来た……」

銀時「殺されなくてよかったな」

ナナフシ「たぶん、フェイト視点も出てくるかも」

銀時「かもかよ！」

ナナフシ「後……見直したらユーザーのみになってた……これ解除した方が良いかな？」

銀時「好きにすれば？」

ナナフシ「だよね……解除しとくので感想待ってます」

銀龍『それでは次回は主となのはがフェイトと遭遇するぞ！』

第六訓：迅雷ってどれだけ速いの？（前書き）

ナナフシ「アハハハハハハハ！！！！」

銀時「どうした！ナナフシ！？」

ミラクル「テスト……赤点取って追試になったそうですよ」

銀時「それですかよ！てか、何が落ちたんだよ！」

ナナフシ「食品学」

銀時「そんなやつあったか？」

ナナフシ「俺が通ってるのは調理師専門学校だよ」

銀時「マジかよ！？」

ナナフシ「本当だよ」

銀時「でも、お前高校生って！」

ナナフシ「三年制の調理師専門学校……つまり、卒業と同時に調理師免許と高校卒業資格が貰えるんだよ」

銀時「そうなのか……で、学科だけなのか？」

ナナフシ「アハハハハ！」

神楽「中華料理が落ちたらしいアル」

銀時「おい！」

ナナフシ「アハハハハハ！」

ミラクル「もう始めましょう」リリカル銀魂く魔法少女と銀髪の

侍と白銀の刀く『始まります！』

ナナフシ「おっと、今回は銀時VS雷雅です！後、黒龍さんが考えてくれた技を一つ出しますので！」

銀時「おい！」

## 第六訓：迅雷ってどれだけ速いの？

翌日。

銀時ははなのはとなのはの兄の恭也そしてなのはの友達であるアリサと一緒に月村すずかの家に遊びに来ていた。

あ、銀龍は姿を消してるけど。

銀時が何故なのは達と一緒に居るかと言うとまたなのはに「銀さんも一緒に行かないの？」（涙目＋上目遣い）で誘ってきたので、渋々着いてきたのだ。

そして月村邸に来た銀時の第一声が……

「でか!？」

だった。

まあお金持ちの中のお金持ちである月村家の家はめっちゃくちゃでかい。

さすがに一般庶民である銀時にとっては驚かすにはいられなかった。ついでに銀時の服装はいつも通りだが、木刀は竹刀袋に入れている。月村邸を見て呆然している銀時に恭也が声を掛ける

「おい、何しているんだ。置いて行くぞ」

銀時はその言葉を聞いて、なのは達の後を追った。

銀時達は月村邸の庭に来た。

銀時は庭にある椅子に座った後、恭也が美女と一緒にどこかに行くのが見えた。

「ん？ アイツと一緒にいるねーちゃん誰？」

「あつ、あの人はすずかちゃんのお姉さんの月村忍さんです」

「ちなみにあの二人付き合っているのよね」

「マジか？」

そして銀時は……。

『主やめろよ』

銀龍が姿を消したまま銀時の耳元で囁いた。

銀時は大人しくした。

とりあえず恭也の話はここまでにしてなのは達は紅茶を飲んだりお菓子を食べながら楽しそうに話していた。

銀時は話に参加していない。

銀時はこういうのにあまり参加しないのだ。

とりあえず銀時はお菓子食べながらなのは達の話の話を耳を傾ける程度に聞いていた。

(何か詰まんねえ)

銀時がそう思った時だった。

「キユーキユー！」

さっきからネコに追われてたユーノが鳴き声を上げながら銀時の肩まで上った。

「うおッ!？」

突然ユーノが自分の肩に登って来た事に驚いた銀時は少しバランスを崩すがすぐに持ち直す。

そして自分の右肩に乗っているユーノを見ると、さっきから追いかけて来たネコを見下ろしながら少し怯えていた。

(なんつつか、コイツも苦労してんだな)

ちよっとユーノに同情した銀時であった。

その時、なのはは一瞬驚いたような顔をした。

【ユーノ君!】

なのはは念話でユーノに話し掛けた。

【うん。近くにジュエルシードがあるね】

どうやら二人はジュエルシードの気配を感じ取ったようだ。

ユーノは、銀時の肩から降りて森の中に走っていった。

アリサ達を巻き込まないためだ。

「ごめんねアリサちゃん、すずかちゃん。ユーノ君どこかに行っちゃったみたいだから探してくるね」

そう言っつて、なのはは席を立つ。

「ユーノが？ 私たちも探すわよ？」  
「ううん、大丈夫。すぐ見つかると思うから」  
手を振りながらなのは言う。  
なのは達の様子に銀時は気付いた。もしかして二人がジュエルシードの反応を捉らえたと思ったのである。  
「じゃあ、俺も行くか」  
銀時が頭を掻きながら立った。  
銀時はなのはの後を追った。

\*

なのは、ユーノ、銀時は森の中でジュエルシードを探していた。  
なのはバリアジャケットを着て、手にはデバイスの『レイジングハート』を持つてる。  
「なのは、こちら辺にあるのか？」  
「そのハズなんですけど……」  
すると大きな足音のような音が聞こえた。  
『この足音は？』  
銀時達は辺りを見回す。  
「アレ！」  
ユーノが何かを見つけて前足で見つけたモノを指す。  
『！！！！』  
ユーノが指したモノを見て皆驚いた。  
「にゃ〜」  
皆の目の前に大きな大きな猫がいたのだ。  
どれくらいでかいかと言うと体長八メートルはありそうなほどだ。  
『でかいな』  
銀龍は呑気に言った。

「えっと……これは……」

「多分あの子の『大きくなりたい』って願いが叶えられた……んだと思う」

大きな猫を見ながら、なのはとユーノは苦笑いした。

「いやア、でかいなア」

銀時は大きな猫を見ながら言った。

後、ユーノが言った事を聞いて思った。

（ああ、ジユエルシードってそんな感じか）

銀時は巨大化した猫を見ながらジユエルシードの力を認識した。

例えて言うならいい加減なドラゴ○ボールだと思った。

「でも、あのままじゃ危険だから早く封印しないと」

ユーノは『広域結界』と言う辺りの空間と時間軸をずらす魔法を使った。

「そ……そうだね。流石にあのままじゃ、すずかちゃん困っちゃうだろうし……」

そうやってなのははレイジングハートを構えた。

銀時は頭を掻きながらやる事を決める。

「よし……帰るか」

『そうだな』

銀時と銀龍はそう言った。

「って待ってくださいよ！」

ユーノは銀時を止めた。

「銀さん何帰ろうとしてんですか！？ 封印するんでしょう封印！」

！手伝ってくれるって言ったじゃないですか！？」

「あん？ あんなでかい奴はウルト○マンに任せとけば良いんだよ」

「ウル○ラマン！？ ウルトラ ンってなんですか！？」

銀時とユーノがそうやって揉めていると、背後から金色の光が通過して猫に直撃した。

「にゃ〜〜！」

猫は悲鳴を上げてよろけた。

「だ、誰!？」

全員が光が発射された方へ振り返った。

そこには金髪のツインテールで黒い服を着た少女　　フェイトが空中にたたずんでいた。

そして、フェイトはなのは達を見る。

(私と同じ魔導士……)

フェイトはなのはを見ながらそう思った。

(でも……母さんのためにも、ジュエルシードは譲れない)  
フェイトは、なのは達の方へ飛んでいった。

\*

「あれは……まさか僕と同じ世界から来た魔導師!？」  
フェイトを見てユーノが驚く。

『と言う事はジュエルシード狙いだな。主よ』

「はいはい、わーったよ」

銀時は竹刀袋から木刀を取り出した。

フェイトは木の上に着地した。

なのは達は木の上に立ってるフェイトを見つめた。

フェイトの持つバルディッシュは鎌のような姿の『サイズフォーム』になる。

「申し訳ないけど、頂いていきます」

フェイトはバルディッシュを構えて、なのはに襲い掛かる。

「なのは!」

ユーノが叫ぶ。

バルディッシュの刃がなのはに迫る。

ガキン!!



「!!!」  
だがバルディッシュの刃がなのはに届くことはなかった。なのはに当たる直前、刃は一本の木刀によって止められた。攻撃を止められた事にフェイトは驚いた。

「銀さん!!!」

なのははフェイトの攻撃を止めた人物の名前を叫ぶ。

銀時はそのまま木刀を横薙ぎ振る。

「くっ!」

フェイトは銀時の力に押され後退し、体勢を整えて少し地面に近い辺りで体を浮かせる。

フェイトを後退させた後、銀時は肩に木刀を掛けながらフェイトに言葉を掛ける。

「おいおい、ガキが随分物騒なモン振り回してんじゃねえか」

軽口叩く銀時をフェイトは睨みながら質問する。

「……何者ですか?」

「俺か? 俺は坂田銀時です。趣味は当分撰取。キャプテン志望してまゝす」

銀時はいつものダルそうな声で言った。

「それでお前は? お前も何者なんだよ」

「……」

名乗らなかった。

「おいおい、自己紹介も出来ないのか? 今の世の中なア、自己紹介くらい出来ないと友達も祿に出来ないぞ! って何処かの誰かさんが言っていました!!!」

ズーン!

銀時の最後の言葉にその場に居た全員がズッコケた。

「何処かの誰かさんって誰ですか!?!」

「何処かの誰かさんだよ!」

ユーノは銀時にツツコンだが、銀時の答えは変わらなかった。

「フェイト……フェイト・テスタロッサ」

フェイトは銀時達に名乗った。その後……。

「フェイトー!!」

オレンジ色のいん「狼だ!」狼……アルフがやって来た。

「大丈夫かい!？」

「うん」

フェイトはそう言った後地上にいる銀時となのはを見る。

アルフもつられて銀時達を見る。

「他の魔導師かい？」

「うん」

アルフの問いにフェイトは答えた。

「よし! あたしが連中の相手をするから、その隙にフェイトはジ

ユエルシードを回収して!」

「でもアルフ……」

「大丈夫。あたしはフェイトの使い魔だよ? 心配いらないうて」

「……うん。お願いね」

アルフの言葉を聞いてフェイトは微笑んで、巨大猫の方へ向かった。

「マズイ! ジュエルシードを封印するつもりだ! 止めないと!

!」

ユーノが叫んだ後、フェイトを追いかけようとする。

「そうはさせないよ!!」

だがその時空からアルフがユーノに迫る。

「ユーノ君!」

なのはがユーノに向かって走る。

「大丈夫だよ、なのは!」

ユーノは防御の障壁を張ってアルフの攻撃を防いだ。

それを見て安心したなのはは足を止めて安堵する。

「ちっ!」

舌打ちした後アルフは一旦、ユーノから離れる。

「なのは! ジュエルシードを!」

「う……うん!」

ユーノに言われて、なのはが走り出す。

「させないって言ったろ！」

アルフは素早く動いてなのはの背後に回り襲い掛かる。

「なのは!!！」

ユーノが叫んで、後ろを振り向いてアルフの攻撃に気づいたなのはは咄嗟に目を瞑ってしまふ。

その時。

ガキン！

「お前：！」

アルフは声を上げ、目の前で自分の爪での攻撃を木刀の刀身で防いでいる銀時を睨みつける。

「銀さん!!！」

銀時に助けられたなのはは嬉しそうな顔で銀時の名前を叫ぶ。

「わりのいが、そう簡単に傷つけさせねえぜ」

ニヤリと微笑を浮かべてアルフの攻撃を防いでいる銀時。

銀時はそのまま思いつきり木刀を振った。

アルフは後ろに飛ばされ、着地した。

銀時とアルフが対峙していると……

「!!！」

銀時は何かに気付いた様に後ろに飛んだ。

ドスツ！

何かが地面に刺さる音がした。

銀時が立っていた所を見ると薙刀が刺さっていた。

「これは!？」

銀時は驚いた。

この薙刀は……。

「よオ、銀の兄貴」

雷雅の薙刀だった。

雷雅が薙刀がある所に姿を現したのだ。

「あんた誰だい!？」

アルフは雷雅に言った。

雷雅はそれを聞いて振り返った。  
ソクツ。

雷雅の目を見た途端逆らつてはいけないと思った。

「何……お前等の手伝いをされる様に雇われた者よ」

雷雅は不気味な笑みを浮かべた。

「銀の兄貴は俺に任せな」

アルフはそれを聞いて頷いた。

「なのは、ユーノ……ここは俺に任せろ」

「わかりました」

なのはとユーノは一度会った事がある雷雅が危険だとわかっていた。  
そのまま銀時と雷雅だけが残った。

「さア……勝負と行こうぜ……銀の兄貴」

「雷雅！」

銀時と雷雅が睨み合い……同時に動いた。

雷雅が突きを放ってきた。

銀時はそれを右に交わした。

雷雅はそのまま右に薙刀を振った。銀時はそれを木刀で防ぐ。

そのまま銀時は雷雅の腹に蹴りを入れ、蹴り飛ばした。

雷雅はすぐさま態勢を取り直して、銀時を見た。

「銀龍を使う気はねえか」

「当たり前だ」

雷雅の問いに銀時は答えた。

「なら……本気で行く」

雷雅がニヤリと笑うと目の前から姿を消した。

『主！出たぞ！』

「わかつてらア！」

雷雅の異名は『迅雷』……その名の通り、素早いのだ。

素早さで相手を翻弄し、そのままドンドン斬っていくのだ。

銀時は雷雅が何処に行ったか辺りを見回しながら一生懸命探してい

る。

すると……。

ブシュツ!

銀時の体に切れ目が入った。

それが始まりの様にドンドン銀時の体に切れ目が入っていく。

「ククク、銀の兄貴……俺を捕らえられるかな?」

雷雅が銀時にそう言った……と同時に木刀を弾かれた。

木刀は地面に落ちた。

取りに行こうとするが……雷雅が行かせない。

「ちっ!」

「銀の兄貴……得物がないぜ?」

雷雅の姿は見えないがきつと笑っているであろう。

銀時は銀龍を取り出した。

「ククク、銀の兄貴!勝負だ!」

雷雅はまだ連続で銀時に襲いかかる。

銀時の体にドンドン切れ目が入る。

そして……。

「オラア!」

雷雅が上に現れて、突きを放った。

銀時はそれに反応して、後ろに飛んで避けた。

「なっ!!!」

雷雅は驚いていた。

自分の攻撃が避けられたのだから。

銀時はそのまま白銀シルバー・オブ・アーマーの鎧を纏った。

そして、銀龍を鞘にしまった。

「やべえな」

雷雅は態勢をまだ整えていなかった。

「喰らえ」

銀時が一瞬にして雷雅に近づいた。

すると……。

ズバババババババババ！

雷雅の体に斬った後が出来る。

銀時は雷雅に近づいた時に斬撃を浴びせたのだ。つまりは強力な居合い切りを放ったのだ。

「瞬銀……」

銀時はそう呟いた。

雷雅はそのまま地面に倒れたがまた立ち上がった。

『まだ立ち上がれるのか』

銀龍は驚いていた。

「ハアハア……今回はここまでだ……またな」

雷雅は姿を消した。

『主よ。なのはの元へ向かおう』

「おう」

銀時はなのはの元へ走っていった。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハアイ、今回も質問コーナー始めるぞオ。今回のアシスタントは」

ユーノ「アシスタントのユーノ・スクライアです」

銀八「はい、それじゃ張り切って行こうか」

ユーノ「まずはペンネーム『月光閃火』さんからの質問

『1・雷雅（名前：合っているだろうか？（汗）に質問：銀時の『甘党』のように食べ物の好みのこだわりってあるのか？

あゝ…確かに、それは気になるかも…。桂の兄ちゃんも大の『そば好き』だし。次は俺からだ。

2・ナナフシさんに質問：というか、この前の質問の続きだ…。第四訓の前書きでやり過ぎたな？（黒笑）：全身煤まみれ決定（そいうって、漆黒笑みを浮かべながら右掌から立ち上らせた紫焰でナナフシの全身を煤まみれにする）

輝刃「あゝあゝだから言わんこつちやない…（呆）。あと、閃火は新八を蔑むような事柄も嫌悪感を抱くからな。」「って作者大丈夫なの!？」

銀八「ナナフシなら」

ナナフシ「ぎゃあああああああ！……！」  
ナナフシの断末魔が聞こえた。

ユーノ「……」  
ユーノはナナフシを哀れな目で見ていた。

銀八「で、雷雅どうなんだ？」

雷雅「特にねえな。食のこだわりなんて……」

銀八「らしいです。と言う訳で『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

ユーノ「次です。ペンネーム『黒龍』さんからの質問です

『黒龍「酷い意味の納得のされ方だ！！」で、では、質問します」

1・ミラクル に質問。ユーノが“あなたのツツコミより僕のツツコミの方が冴えている”と言ってましたが、どうしますか？

2・なのはに質問。ミラクル が“なのはちゃん萌えエエエエエエエエエ！！！”とか叫んでましたけど、どう思いますか？

3・銀さんに質問。結婚するのならなのはとフェイトのどっちが良いですか？

新八「お前は僕を虐め過ぎだろうがあああー！！！！！！！！！！」

『そんな事言ってますんよオオオオオオ！？』

ユーノは一つ目の質問にツツコンだ。

ミラクル 「僕のツツコミより冴えているだとオオオオオオオオ！勝  
負しろオ！」

ユーノ「え！？だから言ってる……あああああああ！！」

ユーノはミラクル に連れて行かれた。

銀八「……二つ目だが」

なのは「……」

なのはは黙り込んだまま、黒龍さんの所の方角にレイジングハートを向けた。

なのは「デイバインバスター！！」



と、黒龍さんの新八に放った。  
まあ、こっちでは新八はまだだしね。

銀八「放っちゃったよ！最後は却下で！」  
銀八は言うが……聞いてしまったなのはが。

なのは「銀さん……」（涙目＋上目遣い）  
で、銀時を見ていた。

銀時「これは……言えない」

銀時はさすがに言えなかった。

銀八「むかつく！と言う訳で『黒龍』！廊下に立っている！」  
銀八は黒龍さんに八つ当たりした。

ユーノ「やっと解放された」

ユーノが新八から解放されて帰ってきた。

銀八「次行くぞ」

ユーノ「はい。ペンネーム『黒神』さんからの質問  
『質問します。』

銀時へ

『リリカル銀魂 Strikers』攘夷戦争』に関する質問を2  
つ。

その1 自分の専用デバイス『ブレイシルバー』でのバリアジャケツトに関する感想を。(黒笑)

その2 桂の重要人物扱い、神楽とエリオの関係、九兵衛のキャラ崩壊、山崎の彼女持ちなど大抵のキャラクターは原作とは程遠くありませんでしたがそのご感想を。

『銀魂王デュエルモンスターズSD』に関する質問を1

貴方はここでは決闘者として覚醒しており、使用デッキは白のイメージとして『青眼の白龍』フルフェイス・ホワイトドラゴンを使いこなします。

そんな自分の決闘者としての感想は? 『銀さん、お願いします』デュエリスト

銀時「一つ目だが、おいしいiiiiiiii!これ完全にコスプレじゃねえか!?何でブレイルーのラグナの服なんだアアアアアア!武器も武器だし!」

銀時は完全にコスプレに怒っていた。

銀時「二つ目だけど、ツラの重要人物として扱うとはなア……神楽とエリオは良いと思うぜ別に。一番驚いてんのが、九兵衛のキャラ崩壊とジミーの彼女持ちだわ!特に九兵衛はもう誰!?!」  
銀時は九兵衛のキャラ崩壊に驚いていた。

銀時「最後だが、良いんじゃないかねえか?見た限りスゲエ使いこなしてるし。俺も使えるんじゃないかねえか……あつちの俺みたいに」

銀八「と言う訳で『黒神』さん廊下に立ってなさい」

ユーノ「最後です。ペンネーム『獄黒』さんからの質問

『質問』

総悟と神楽と銀時とトシに  
にじファンでは、神楽と総悟の恋愛小説があります。どう思いますか。』  
『それでは指定の四人お願いします』

沖田「誰がチャイナなんかと！」

神楽「それはこっちのセリフアル！」

沖田と神楽は喧嘩を始めた。

銀時「神楽と総一郎君がなア」

沖田「総悟です。旦那」

喧嘩をしながら銀時に間違いを指摘した。

土方「チャイナと総悟がか……ブフツ」

土方は妄想しただけで笑ってしまった。

沖田「覚えとけ、土方コノヤロー!!!」

沖田は青筋を浮かべながら土方に怒鳴った。

銀八「ハイ、と言う訳で『獄黒』さん廊下に立ってなさい」

ユ一ノ「質問は以上です」

銀八「それではまたア」

第六訓：迅雷ってどれだけ速いの？（後書き）

ナナフシ「さすがに長すぎた」

銀時「だろうな」

ナナフシ「雷雅は相変わらず速いねエ」

銀時「それがあいつの戦闘スタイルだからな」

ナナフシ「思った。黒神さんの所のスバルの刹那の瞬間移動と雷雅のスピード……どっちが速いんだろう？」

銀時「さア」

ナナフシ「もし、刹那の瞬間移動が地雷亜並み、もしくはそれ以上だったら雷雅より速いね」

銀時「雷雅は地雷亜の次かよ」

ナナフシ「まあね。それではまた次回！」

瞬銀

シルバー・オブ・アーマー

白銀の鎧を纏い、身体能力が上がった事で使える技

刀を鞘に納め、一瞬にして相手に近づき相手にいくつもの斬撃を浴びせる技。

簡単に言えば、強力な居合い切りである。

第七訓・温泉では心と身を癒そう（前書き）

ナナフシ「今回はまあ……なんて言えば良いんだろうか……」  
銀時「おい！」

ナナフシ「とりあえずなのはお願い」

なのは「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』 始まります」

## 第七訓：温泉では心と身を癒そう

銀時がなのはの所に向かう途中でフェイト達が飛んで行くのが見えた。

銀時がそのまま見ていると、

「銀さん！」

「なのは」

バリアジャケット姿のなのはが飛んでやって来た。

そして銀時の近くに降り立ったなのはは申し訳なさそうな顔で銀時に謝る。

「ごめんなさい銀さん！ ジュエルシードあの子に取られちゃったの！」

なのはは巨大猫の所に付いた時には既に黒い魔導師にジュエルシードを取られていたと銀時に説明した。

「銀さんに任されたのに、何も出来なかったの……」

なのはは悲しそうな顔で俯いていた。

銀時が体を張って自分をジュエルシードの元まで導いてくれたのに対し、自分は何も出来なかった事が悔しくてなにより悲しかった。落ち込んでいるなのはの頭に銀時は手を置く。

それに気づいたなのははゆっくりと顔を上げる。

「ま、しゃあねえよ。取られたんなら取り返せば良いだけの話だ。

そう自分を責めんじゃねえよ」

銀時はそう言ってなのはの頭をゆっくりと撫でた。

「銀さん……」

なのはは銀時に慰められた事でつい嬉しくなり涙を流しそうになるが、すぐに笑顔を作って言う。

「うん！」

なのはは今度あの魔導師に遭ったら銀時のためにも次は頑張ろうと思っただ。

\*

翌日。

銀時は高町家と一緒に海鳴温泉来ている。

ちなみにアリサは執事の鮫島とすずかは姉の月村忍と一緒に来ている。

何故銀時達と一緒にいるかと言うと、なのはの親である土郎や桃子に誘われて一緒に温泉に行く事になったのだ。

銀時としても温泉と言う心体がリフレッシュできる上に美味しい料理が食べられると思ったのですぐに着いて行くと言った。

そして女湯ではなのは達が温泉に入っていた。

そして、なのはの腕の中には、

「キューキュー！」

オス男のフェレットであるユーノが鳴きながら暴れていた。

顔も赤くなっている。

「ユーノったら、初めての温泉でそんなにはしゃいじゃって」

「可愛いね」

一緒に入っているアリサとすずかは勘違いしながらユーノに触れる。

（銀さん！助けて〜！！）

ユーノは念話で隣の男湯に入っているであろう銀時に助けを求めた。だが、魔導師でない彼に念話が届くことはなかった。

\*

「良い湯だね」

「そつだな」

銀時と士郎は頭に畳んだタオルを乗せて気持ち良さそうに温泉に浸かっていた。

ユ一ノは届くはずのない念話を銀時にずっと送っていた。

\*

温泉を上がった後、なのはは銀時にアルフと会った事を話した。

「マジでか？だってあれ……犬じゃなかったか？」

銀時はアルフの事を犬と言った。

狼なのにね。

なのははそのままアルフが脅してきた事も話した。

「それでやめんのか？」

銀時はなのはに訪ねた、

「やめません。誰かが傷つくなんて嫌だから……」

なのはは銀時にそう言った。

銀時はフツと微笑みながらなのはの頭を撫でた。

なのはは顔を赤くしながら笑っていた。

銀時はなのはを撫でるのをやめて立ち上がった。

「何処に行くんですか？」

なのはは銀時に訪ねた。

「ちよつくら出掛けてくらア」

銀時はそう言う外に出て行った。

\*



銀時は旅館の周りを歩いていて、旅館の周りは森に囲まれていて、鳥の鳴き声などが聞こえてくる。

そんな森の中で銀時は探していた人物を見つけた。木の上にフェイトが座っていた。

(やっぱな)

銀時はアルフが居るのならフェイトも居るのではないかと思い探していたのだ。

「おーい」

「……」

銀時の声に驚きフェイトは『パルディッシュ』を取り出した。

フェイトは銀時を睨みながら警戒している。

「いや、別に戦いに来た訳じゃねえから」

銀時はそう言うがフェイトは警戒を解かない

「坂田銀時……何か用？」

フェイトは警戒しながら言う。

「銀時で構わないぜ」

銀時はそう答える。

「それじゃ、銀時……何か用？」

もう一度銀時に言った。

「何……たまたま見つけただけだよ」

銀時はそう言った。

「そう……」

フェイトはまだ銀時を睨んでいる。

「なあ、フェイト、お前は何でジュエルシードを集めてんだ？」

「それは言えない」

フェイトは銀時の問いを断った。

「どうしてもか？」

「どうしても」

銀時がもう一度問うがフェイトの答えは変わらなかった。

「まあ、それなら良いや」

銀時は旅館に戻ろうとする。

「銀時……何しに来たの？」

フェイトの言葉に銀時は振り返った。

「だから言っただろ？ たまたま見つけたただけだって」

銀時はそう言った。

フェイトは思った。

敵の魔導士の味方である銀時だが、何故か信頼が出来る気がする…

…。

フェイトは考えて口を開いた。

「銀時に私がジュエルシードを集めてる理由を言っ」

銀時はそれを聞いて止まり、フェイトは銀時に近づいた。

「私がジュエルシードを集めている理由は母さんの為なんだ」

「お前の母ちゃんの為に？」

銀時はフェイトの言葉に首を傾げた。

「母さんがジュエルシードを必要としているの。私はそれを集める様に言われたの」

「ジュエルシードは何に使うんだよ？」

銀時はフェイトに訪ねた。

「わからない。集めろって言われたただけだから」

フェイトは銀時にそう言った。

「そうかい。これはなのはに言わないで置いてやるよ」

銀時はフェイトの頭を撫でながら言った。

フェイトは顔を赤くしながらくすぐったそうにしていた。

「ま、お前はガキなんだからちつとは周りを頼れよ。アルフって言う最高のパートナーも居るじゃねえか」

「うん」

「それに……俺はなのはの味方だからボンボン助ける事は出来ねえがお前が危なかったら助けてやるよ」

「え！？」

フェイトは銀時の言葉に驚いた。

「でも、それじゃあ」

「だから言つたる？俺はなのはの味方だからお前をそんなに助ける事は出来ねえが……でも、お前が困っていたら助けてやるからよ」

銀時はそれだけを言うつと旅館に戻つていった。

フェイトは顔を赤くしながら銀時の背中を見送つた。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生!!」

銀八「ハイ、質問コーナー始めるぞ。今回のアシスタントは」

フェイト「フェイト・テストロッサです」

銀八「それじゃあ質問行こうか」

フェイト「まずはペンネーム『黒龍』さんからの質問

『黒龍』では、質問します」

1・ミラクル に質問。なのはがちみの事を好きだと言つてました  
がどうしますか？ニヤ（・）（・）ニヤ

2・なのはに質問。なんでも銀さんがあなたと結婚したいと言つて  
ますが、どうしますか？

3・銀龍に質問。あなたが一番苦手な人は誰ですか?』まずはミラクル」

ミラクル 「フェイトちゃんまで!?それよりも黒龍!それ本当!」

なのは「そんな事言っていないよおおおおお!」

ミラクル 「なのはちゃアアアアアん!」

ミラクル はなのはに向かって走り出した。

なのは「にゃああああああああ!」

ミラクル 「ぎゃあああああああ!」

なのははミラクル にデイベインバスターを撃ち込んだ。

なのは「黒龍さん!嘘をつかないでえええええええ!」

なのはは黒龍さんに向けてスターライトブレイカーを撃った。

銀八「おい!二つ目だが」

なのは「本当ですか銀さん!」

銀時「んな事言っつてねえよ!黒龍の嘘を信じるんじゃない!それに子供じゃ無理だろ!」

なのは「それじゃ大人になったら良いんですよね!」

銀時「そう言う問題じゃねえ!」

なのはと銀時はそんなやりとりをしていた。



ナナフシ「ヤケドはありませんけど煤まみれになりました……オリキャラですが、投稿しても構いませんよ。オリキャラを見て使うかわらないか決めるので」

銀八「先に二つ目を答えたよ！で、ユーノどうなんだ？」

ユーノ「うん、たぶんフェレットにしかなれません」

銀八「まあ、原作ではフェレットだからな。と言う訳で『月光閃火』さん廊下に立ってなさい」

フェイト「次です。ペンネーム『支配者』さんからの質問

『さあ、質問行きましょ

雷雅へ

神速剣術の剣心を如何思いますか？

銀さんへ

今回の格好ってコスプレになるんじゃないんですか？つまりコスプレマニアなんですね。

ミラクルさんへ

地獄汁を送りますから誰かに飲ませて遊んで下さい。て言うか全員に飲ませてほしい』って三つ目怖いんですけどそオオオオオ！」  
フェイトは三つ目を見て驚いた。

ミラクル 「ふははははははは！今までの恨みいいいいいいいい！  
新八が地獄汁を持って走ってきた。」

銀八「作者ガード」

ナナフシ「え？ぶびやああああああああ！」

地獄汁は全てナナフシが飲んだ。

ミラクル 「……まあ満足ですね」

ミラクル はいつもナナフシに苛められているので満足して去って  
いった。

フェイト「ひ、一つ目だけど」

雷雅「あの剣術はスゲエなア……ククク、一度手合わせを願いてえ  
なア……ククク」

銀八「本当に戦闘狂だな！！」

フェイト「二つ目の答えて銀時」

銀時「なつてたまるかアアアアアア！黒神と真王の所になつて  
けどここではなつてたまるかアアアアア！」

ナナフシ「デバイスが手に入ったらなるかも」

銀時「やめろおおおおおおお！」

銀八「と言う訳で『支配者』さん廊下に立ってなさい」

フェイト「最後の質問です。ペンネーム『獄黒』さんからの質問  
『はあくい、またまた質問おくらせていきまゝす。では、  
・ナナフシさんへ、また、コラボするんですか？（コラボするんだ  
ったらさっさと行って、断られて、玉砕して、落ち込んでる。）  
あつ、ちなみに私ナナフシさんけっこうすきですよ。（いじりがい  
ありそうだから。）』ナナフシ可愛そう」

銀八「一つ目だがコラボなんてしてねえぞ？それにあいつは前向き  
だから落ち込みもしねえぞ。逆に「あ、来ねえや！」ってぐらいだ  
からな。後、限度を考えろよ。幾ら何でもナナフシは怒りだす時が  
あるからな。これ見て結構心痛めたらしいぜ。あいつどっちかって  
言うところだから」

フェイト「ナナフシSだったんだ」

銀八「と言う訳で『獄黒』さん限度を考えて質問を送れよ」

フェイト「それではまた次回」



**第七訓・温泉では心と身を癒そう（後書き）**

ナナフシ「銀さんがフェイトにもフラグを立てた」

銀時「お前がやったんだろ！」

ナナフシ「まあね。それではまた次回」

第八訓：子供は夜更かしをしてはいけません！（前書き）

ナナフシ「今回はおまけ2を載せます」

銀時「投稿されたキャラクターを載せるんだよな」

ナナフシ「はい！と言う訳でフェイト！お願い！」

フェイト「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始  
まります」

## 第八訓：子供は夜更かしをしてはいけません！

外は夜であり、その闇に一つの月が光っていた。  
そして影は三つある。

銀時となのはとユーノである。なのはは足に桃色の羽を生やして飛びながらある場所に向かっている。

その向かっている場所とは旅館の近くにある森の中だ。  
何故ならそこにジュエルシードの気配を感じたからだ。

森の中にある橋が架かった池には既にジェルシードを封印し終えたフェイトとアルフとがいた。

「これで、二つ目……」

「順調に集まってるねフェイト」

封印をし終えて安堵の息を漏らすフェイトにアルフは笑顔で賞賛する。

アルフとしてもこの調子ならすぐに全部のジュエルシードが集められると思った。

ただ、あの白い魔導師まそうまがいなければ話だが。

フェイトが丁度封印を終えた時だった。

「あ…あれって！」

銀時となのは、ユーノがやって来た。

「おいおい、ガキがこんな時間まで起きてちゃダメだろうが」

「銀時……」

フェイトは銀時を見た。

自分は銀時とは戦いたくない……。

フェイトはそう思った。

（戦いたくない……戦おうとしたら……考えるだけで胸が苦しくなる）

フェイトは困った表情を浮かべた。

「フェイトどうしたんだい？」

アルフがフェイトに訪ねた。

「うん、なんでもない」

フェイトはアルフにそれだけを言った。

「それを・・ジュエルシードをどうする気だ！？それは危険な代物なんだ！」

ユーノがフェイト達に向かって叫んだ。

「さあね。答える理由が見当たらないよ。それにあたし親切に言ったよね？良い子にしないでないとガブツと行くよって・・・」

アルフは目をギロリと光らせた。

「いやいや、それは親切とは言わねえ……」

銀時が言っている時だった。

アルフが人から狼に変わったのだ。

「おわあああああ！」

銀時はそれに驚いて尻餅をついた。

「ひひひひひ、人が犬になった！！」

「あたしは狼だ！」

銀時の言葉にアルフは叫んだ。

「犬も狼も同じだろ」

「違う！！」

アルフは銀時に怒っていた。

「やっぱり彼女は使い魔だったか」

ユーノは狼になったアルフを見ながら言った。

「使い魔？」

なのはは聞き慣れない言葉に首を傾げた。

「そう。あたしはこの子に造って貰った魔法生命。主の魔力を命とする代わりにその命と力の全てを賭けて護るのさ」

アルフが自分について説明した。

「フェイト……なのはだってお前が悪い奴じゃないってわかってんだ」

「そうだよ。だから私達が分かり合える事だって！」

「それとこれとは話はが別なんだよ！」

「っ！？」

フェイトが肯定の意を見せた事でなのはは声音を強くしながら必死にフェイトと分かり合おうと試みるが、なのはの言葉をアルフが声を上げて遮る。

「あんた等二人の言うとおりアタシはともかくフェイトは良い子だよ？ でもね、だからと言ってアタシ達とあんた達が分かり合えるって理由にはならないんだよ！！！」

「それに……私達はジュエルシードを集めなきゃいけない。それは貴女も同じ事。だったら私達はジュエルシードを求めて争う敵同士って事になる」

「だから！ そんな勝手に決めない為に話し合いつて必要なんだと思うっ！！！」

( やっぱ母ちゃんの為か…… )

銀時はそう思った。

フェイトの言葉に、なのはは声を大きくして言った。

なのはは必死にフェイトと分かり合おうと言葉を投げ掛けるが、フェイトはそれを受け付けないかのように目を閉じた。

「言葉だけじゃ……何も変わらない……伝わらない！」

フェイトとなのはの空中戦が始まる。

そう言つてフェイトは目を開く。

バルディッシュを構えてフェイトは『ソニックムーブ』でなのはの背後に高速移動して、バルディッシュを死神の鎌のような形にした『サイズフォーム』に変形させて金色の刃でなのはを斬ろうとする。

「くっ！」

< F l i e r f i n n >

なのはは足から翼の様なものを展開し、空に舞い上がってフェイトの初撃をかわした。

「けど、だからって！！！」

「賭けて。それぞれのジュエルシードを一つずつ」

なのはの言葉にまったく聞く耳を立てないフェイトは、なのはを追って空を飛ぶ。

「なのは！」

まだ魔導師として未熟なのはではフェイトに苦戦を強いられるとユーノは考えた。

それに純粹に心配もしている。

ユーノは慌ててなのはを援護しようとするが、ユーノの前に一つの影が立ちはだかる。

「あんたの相手はアタシだよ！」

牙を見せながら威嚇するアルフが居た。

「おいおい」

「銀さん！」

「え？何？なのはとフェイトの所に行けっか？行けっか！？」

「お願いします！」

「無理だよオ。俺空飛べないし」

「それにあんたもあたしが相手だよ」

『まったく……主よ……空ぐらい飛べるだろうに』

銀龍が姿を現した。

「刀が喋ってる……！」

アルフは驚いた。

「ええ？でも行くのメンドーだからなア」

銀時が愚痴を言う。

「銀さんアナタ飛べるんですか！？」

ユーノは驚いた。

『飛べるぞ。ほら』

いきなり白銀の鎧を纏い、背中にドラゴンの様な銀色の翼が二つ生えた。

「二翼一对の翼だな」

銀時がそう言った。

（ま、魔力……！こいつ魔導士でもないのになんで魔法を使えるんだ

い！？)

アルフは驚いていた。

てか、皆驚くよね。

「それって？」

シルバー・オブ・アーマー

「白銀の鎧のもう一つの能力だよ」

銀時はそう言った。

「でも、今頃行っても無駄か……」

銀時が空を見る。ユーノもつられて見てしまう。

\*

なのはとフェイトの空中戦。フェイトの足元と前方に魔法陣が展開される。

「Thunder smasher」

バルディッシュから金色の閃光が放たれる。

「Divine buster」

なのはのレイジングハートからも桜色の閃光が放たれた。

二つの閃光が火花を散らせて激しくぶつかり合う。

「レイジングハート！お願い！！」

「All right」

なのはの言葉にレイジングハートが応える。

桜色の閃光が更に勢いを増して金色の閃光を押ししていく。

「！！」

金色の閃光は桜色の閃光に掻き消された。

フェイトは少し表情を強張らせた。

地上で見ていたユーノは驚いた。

「なのは…強い！」

だがフェイトの使い魔アルフは冷静だった。

「でも…甘いね」

アルフは勝負の結末を読んだ。

「なのは!!!」

ユーノが叫ぶ。

「あっ!?!」

なのはの砲撃はフェイトには当たらなかった。

なのはの上空からフェイトは、鎌に変形したバルディッシュを振り下ろす。

「!!!」

鎌の刃は、なのはの首筋に当てられた。

勝負は決した。

「Pull out」

レイジングハートから女性の電子声が聞こえて、赤いコアからジュエルシードが一つ出てきた。

「レイジングハート…何を!?!」

「きっと主人思いの良い子なんだよ」

フェイトはジュエルシードを受け取ると、地上に着地した。

「さっすが、あたしのご主人様」

アルフはフェイトの下へ戻る。

「待って!」

なのはも地上に降りる。

なのはの声にフェイトは足を止めた。

「できればもう、私達の前に現れないで。今度会ったら、きっと加減なんて出来ない」

振り向かず、なのはにそう言った。

そしてその後銀時を見た。

「!!!」

銀時を見て驚いた。

刀を持っており、更には銀時は銀色の魔力を纏ってあり、背中にはドラゴンの様な銀色の翼が二つ生えていた。



(魔導士でもない銀時が何で魔法を!?)

フェイトもやはり驚いた。

もしかしたらなのはを助けるつもりだったのかもしれないと思った。フェイトは銀時を見るのをやめて去っていった。

「ばいばい」

アルフもフェイトの後を追った。

余談だが銀時に生えている銀色の翼を見て驚いたのは当たり前である。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生!!」

銀八「ハイ、質問コーナーを始めるぞ。今回のアシスタントは」

なのは「高町なのはです」

銀八「それじゃあ行こうか」

なのは「まずはペンネーム『支配者』さんからの質問  
『質問です

ナナフシさんへ

地獄汁を送りますから復讐して下さい

凶悪な怪物のラスボスはいますか？

ミラクルへ

なのはが貴方の事を阿呆眼鏡と言っていましたが無如しますか？  
『作者は？』

銀八「ナナフシなら」

ナナフシ「ふははははははは！仕返したアアアアアア！」

ミラクル「ぶぎやあああああああああ！」

新八は地獄汁を飲まされて気絶した。

二人「……………」

二人はそれを見て黙り込んだ。

ナナフシ「二つ目ですけど……………A、S編の最後のやつですよ。一様考えてますよ」

銀八「だそうだ。三つ目だが新八が気絶の為答えられません……………つて言うかあいつなら」なのはちゃんがそんな事を言うはずがない！  
とか言っただけだな」

なのは「そ、そうなの？」

銀八「ああ、と言う訳で『支配者』さん廊下に立ってなさい」

なのは「次です。ペンネーム『黒龍』さんからの質問

『黒龍』しっつれないな！！」「ホン……………兎にも角にも、質問します」

1・ミラクル へ。今度はフェイトがあなたを好きだと言ってますけどどうしますか？ (。・。・) ニヒ

2・トツシーへ。なんとなのはとフェイトがあなたを好きだと言ってまふぎやあああああああああああああああああああああああああ  
あ!!!!!!.....  
すみません。質問を間違えました。そっちの私に質問なんだけど、  
銀時の事をどう思う？ byフェイト。

3・私、高町なのはが質問します。そっちの私、頑張ってください  
!!

銀時「ん？ なんかお前等、顔に赤いモンが付いてんぞ？」

フェイト・なのは

『ケツチャップだから(ニコ)』 『そっちの私とフェイトちゃん  
が黒龍さんを殺っちゃったよオオオオオオ!』

銀八「いや、生きてるからな！ 一つ目だが」

ミラクル 「本当ですk」

ドカアン！

言いかけた時に金色の閃光が飛んできた。

フェイト「黒龍さん……嘘を吐かないでください」フェイトはそう言った。

フェイト「で、二つ目だけど……格好いいよ。何故か信頼出来るんだよ銀時は」

フェイトはそう答えた。

なのは「三つ目だけど私頑張るよ！そっちの私も頑張って！」

銀八「と言う訳で『黒龍』さん廊下に立ってなさい」

なのは「最後です。『黒神』さんからの質問

』と言う訳で質問。

銀さんへ

もしここで魔導士に目覚めたのであれば、バリアジャケットは是非とも『ラグナ・ザ・ブラットエッジ』のコスプレへ（黒笑）

神楽へ

僕の小説では貴方はエリオとは師弟関係と言う形になりました。しかしそのせいでキャラは醜い嫉妬を抱いたジェイソンと化しました。そんな彼女を見てどう思いますか？（黒笑）

ナナフシへ

出来ればこの新八はロリコン設定はなしにしたほうが良いです。  
出なければ僕は間違いなく新八を軽蔑して酷い扱いをしなきゃいけ  
なくなります。』一つ目だけど銀さん」

銀時「なつてたまるかアアアアアア！絶対嫌だからな！」

ナナフシ「考えとこ」

銀時「やめろオオオオオオオオ！」

銀八「二つ目だが神楽」

神楽「恐いアルウウウウウウウ！何が原因アル力！？」

銀八「それは向こうの神楽と月詠が原因だよ！」

なのは「にゃはははは、三つ目だけど」

ナナフシ「すみません……それは出来ません……必要になりました  
んで。理由はこの後のおまけ2をみてください……あ、でもロリコ  
ン設定は要らないかも……でもアニメオタクに墮ちる事がなくなる  
のでやっぱ無理です」

銀八「と言う訳で『黒神』さん廊下に立ってなさい」

なのは「それではまた次回」

『おまけ2』投稿されたオリキャラ紹介。

ナナフシ「二つ来てます。二つ共『月光閃火』さんからです」

名前：神宮寺 漸呀しんぐうじ ぜんが

年齢：20代前半くらい（実年齢は忘れた（汗）

性別：

容姿：金髪のウルフヘッドに淡い黒の瞳、ほどよく引き締まった体格のクールガイで甚平姿がトレードマーク

性格：飄々としているが仲間思いで気さくな好青年、だが戦いとなれば一転して勇猛果敢な熱血漢に変わる

武器：『エンオウ炎鳳』（銀時の『銀龍』と同じく突然漸呀の前に現れいつの間にか契約し長い付き合いになっている『喋る刀』、『銀龍』とは違い性格はしつかり者で漸呀とはよく口喧嘩になるが、共に信頼し合う仲間でもある）

詳細：かつては攘夷戦争で銀時達と共に戦場を駆けたとも戦友であり、【戦場の中を勇猛果敢に駆け抜け、その『黄金』色に輝く髪を血で紅く染め行くその様は正に『戦鬼』。故に彼の者は：『おうごんせんき黄金戦鬼』と呼ばれた】と敵味方問わず言わしめた程の剣豪戦争の終焉と共にその行方を眩ませ、その後妹（詳細は後ほど）と共に放浪の旅をしていたが：知り合いのからくり機巧技師（源外）の依頼で次元転送装置の実験に付き合わされその際のいざこざで次元転送装置が暴走を起こし次元の歪みに妹共々引き摺りこまれ銀時達と同じ目に遭う（汗）ちなみに、特殊な家柄な為かその身には『不老（寿命で死ねない）』と『鋼体（どんな病気で数分で治る& amp;人智を超えた舌と胃腸（汗））』を持っている

名前：神宮寺 葵しんぐうじ あおい

年齢：10代後半くらい（実年齢は忘れた（汗））

性別：

容姿：金髪の肩まであるウェーブヘアに淡い黒の澄んだ瞳、身長が平均的（165cmくらい）な割に意外と抜群のスタイルで顔立ちはやや童顔、兄と同じ甚平姿だがどちらかと言えば華やかな方  
性格：普段はおしとやかな大和撫子だが、一度武器を手に取ると一転してお転婆で男勝りな性格に変わる武器：薙刀（刀身は木製、どんなにぶっ叩いても壊れない（汗））

詳細：漸呀の実妹であり、漸呀に負けず劣らずの強さを持つ攘夷戦争終焉後、実兄である漸呀の帰還と同時に放浪の旅に付いて行く事になり、その最中立ち寄ったからくり機巧技師（源外）の工房でのドタバタの後漸呀と共に次元の歪みに引き摺り込まれて銀時達と同じ目に遭う（汗）漸呀と同じく特殊な家柄な為かその身には『不老』と『鋼体』を持っているちなみに、実は隠れオタクな所があり…新八と出会った時に同族の勘を感じ親愛と共にその本質の『武士としての芯の強さ』に強く惹かれ恋愛感情を抱く

ナナフシ「どうでしたか？後『月光閃火』さん……『炎凰』の事なんですけど……どんな能力ですか？『銀龍』と同じでよろしいんでしょうか？後、デザインをお願いします」

銀時「後二人目だけど新八に春が来た!？」

ナナフシ「来ましたよ……これは兄が採用されるのに妹が採用されないのは可笑的でしょ？それに俺も新八に春を迎えさせてやりたかったのよ！」

銀時「お前……」

ミラクル 「ありがとう！『月光閃火』さん！！」

ナナフシ「で、『炎鳳』を見て思った……『銀龍』と『炎鳳』だけじゃなんだな……って」

銀時「は？」

ナナフシ「つまり『銀龍』は『龍』、『炎鳳』は『鳳凰』じゃないかな？これを見て思った……どうせなら後三つ作らねえ？って」

銀時「おい！」

ナナフシ「一つは『虎』、もう一つは『麒麟』、もう一つは『玄武』って」

銀時「何故！？」

ナナフシ「五つとも中国関係じゃん！だから！」

銀時「そう言う事がよ！」

ナナフシ「その内の一つ『虎』を魔剣士になるスバルに使わせる気満々」

銀時「何故！？ティルヴィング・エアを使うんじゃないのかよ！？」

ナナフシ「魔剣士化ネタはStrikers編を書く時に許可を黒神さんから貰おうかなって。それにティルヴィング・エアも使わせるよ。でも、そのままじゃアストリーが変わらない気がするから持たせようと思った」



銀時「なるほど」

ナナフシ「『虎』はスバルのイメージカラーに合わせて『蒼』にするつもりだから」

銀時「そうかよ」

ナナフシ「ついでにこの五つを『五天魔刀』、もしくは『五天神刀』にしようかと思っている」

銀時「凄い所まで来たぞ!？」

ナナフシ「と言う訳で募集開始!」

銀時「何の!？」

ナナフシ「下記を御覧あれ」

・スバルに銀時同様『喋る刀』を持たせる

- 1、賛成
- 2、反対

・『銀龍』達『喋る刀』五つをどっちの呼び方にするか

- 1、五天魔刀
- 2、五天神刀

・『虎』『麒麟』『玄武』を元にした『喋る刀』の名前とデザインを募集します。たぶん『銀龍』と同じ能力だから。ちゃんと自分でも考えていますので。

ナナフシ「これぐらいかな。後、一番目が反対が多かった場合は『虎』の方の名前も変わるかも」

銀時「でも、もし一つ目が賛成だったらこのスバル……凄いなに  
ならねえか？」

ナナフシ「まさかア。スバルに『虎』を使わせる理由はこの五つの中  
中でスピードがあるからですよ」

銀時「なるほど。『虎』を静剣用にしようって言う考えか。それに  
スバルは速いからな」

ナナフシ「そう言う事です。それでは協力お願いします！締め切り  
は12月20日までです」

第八訓：子供は夜更かしをしてはいけません！（後書き）

ナナフシ「ご協力お願いします！」

銀時「おいおい」

ナナフシ「それではまた次回！」

## 第九訓：綺麗な物にはトゲがある（前書き）

ナナフシ「やつとここまで来た」

銀時「おいおい」

ナナフシ「今の所のアンケート数です」

スバルが銀時同様『喋る刀』持たせる。

1、賛成 4票

2、反対 1票

『銀龍』達『喋る刀』五つをどっちの呼び方にするか

1、五天魔刀 2票

2、五天神刀 3票

ナナフシ「今の所こうですね」

銀時「おいおい、二番目は良い勝負じゃねえか」

ナナフシ「12月20日まで受け付けているのでよろしくお願いします！」

なのは・フェイト「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』 始まります」「」

## 第九訓：綺麗な物にはトゲがある

銀時は公園に居た。

誰もいない公園で、一人ベンチに座り込んで考えていた。

ジュエルシードは危険な物なんだ！

ユーノが言った事を思い出す。

「危険な物ねえ…」

そう呟いて夕焼けの空を見上げた。

\*

銀時はなのはとユーノと一緒に街中でジュエルシードを探していた。

三人がジュエルシードを探している時だった。

いきなり空が暗くなり、海では激しく雷鳴が轟く。

「こ…これは!？」

別々に探してたユーノが街の異変に驚く。

「こんな街中で強制発動!？」

空を見上げてユーノは叫んだ。

「く…! 広域結界! 間に合え!」

ユーノの足下に緑色の魔法陣が展開された。

すると、ユーノの広域結界で世界の色が変わった。

そしてなのははジュエルシードの光を確認した。

『あれはジュエルシードの光だな』

銀龍がそう言った。

なのははレイジングハートを構える。

「リリカルマジカル！」

レイジングハートに桜色の光が集束される。

「ジュエルシード、シリアル19！」

バルディッシュにも金色の光が集束される。

「封！」

「印！」

二人のデバイスから閃光が放たれた。閃光を受けたジュエルシードは光を失い、宙にたたずんだ。

なのはと銀時は急いでジュエルシードのある場所に向かった。

ユーノも走る。

「やった！なのは、早く確保を！」

「そうはさせるかい！」

空からアルフが襲い掛かる。

ユーノが障壁を張って防御する。

銀時は木刀を腰から抜いて構える。

「おっと、あなたの相手は俺だぜ！」

急に銀時の後ろから声が聞こえ振り返ると……刀を持ち、和服を着た男が居た。

「テメエは！」

銀時は後ろに飛んでそいつを見た。

「あれま。雷雅の次はあなたですか……人斬りさんよオ」

「ククク、久しぶりだねエ……白夜叉」

銀時の目の前に居る男は『雷撃』の一人……川下 斬<sup>ざん</sup>だった。

この男は人斬りの異名を持ち、雷雅同様戦闘狂である。

「銀さん……この人は？」

ユーノが銀時に訪ねる。

「雷雅が作り出した組織『雷撃』の一人、人斬りの異名を持つ川下 斬だ」

「人斬り!!」

ユ一ノは驚いた。

「お前じゃあ無理だ!こいつは俺に任せろ!」

「わ、わかりました」

ユ一ノは斬を銀時に任せた。

銀時と斬は対峙しあう。

「で、お宅等はこの世界で何がしたいんだ?」

銀時は斬に訪ねる。

「ただ強者を求めているだけだ」

斬はニヤリと笑う。

「そうかい」

銀時のその言葉が合図の様に二人は走り出した。

「オラア!」

「ハア!」

ガキーン!

木刀と刀がぶつかり合う。

銀時と斬は一度後ろに下がった。

「行くぞ!」

銀時は斬に向かって、走り、連続で木刀を振る。

「くっ!」

斬は銀時の型が変わる剣に苦戦した……そして。

ドカア!

「ぐっ!」

木刀が斬の顔面に直撃した。

「ちっ!」

斬は素早く刀を振る。

銀時はそれを後ろに飛んで避けた。

「さすが白夜叉だ」

斬は不気味な笑みを浮かべる。

「へ、ただのザコにやられっかよ」

銀時はそう言った。

「そうかい……」

すると、斬は銀時の目の前まで移動して刀を振り上げてきた。

銀時はそれを何とか避けて、斬に向かって木刀を振った、

斬はそれを刀で防ぐ。

「ちっ！」

「甘いよ白夜叉！」

斬は銀時の腹に蹴りを入れ、蹴り飛ばした。

「ブッ！」

銀時はそのまま地面を転がり、素早く起き上がると目の前に斬が来ていた。

斬は思いっきり刀を振り下ろしてきた、

銀時はそれを木刀で何とか防いだ。

銀時はその態勢のまま斬に蹴りを入れた。

「ぐっ！」

斬が怯んだ所に木刀を振り下ろし、斬の顔面に直撃する。

「があああああああ！」

そのまま斬は殴り飛ばされた。

斬は起きあがると銀時を見る。

「ククク、今回はここまでだ」

「あ？どういこうった？」

斬が空に指を差す。

銀時はつられてその方向を見る。

\*

フェイトは、なのはの後ろに回る。

「Flash move」



足に展開した翼が羽ばたき、なのははフェイトの後ろに回った。

「Divine shooter」

レイジングハートから桜色の閃光が放たれる。

「Defencer」

フェイトは金色の障壁を張って閃光を防ぐ。

「フェイトちゃん！」

「……！」

突然、名前を呼ばれてフェイトは驚いた。

「話し合っただけじゃ……言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけ

ど……話さないと、言葉にしないと伝わらない事だっけとあるよ

「！」

「…………！」

フェイトは何も答えない。

「何も知らないのにぶつかり合うのは私、嫌だ！」

声に出して必死に自分の想いをフェイトに伝える。

「私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノ君の探し物だか

ら。最初はユーノ君のお手伝いで集めてたけど、ジュエルシードの

力で街の人や大切な人に危険が降り懸かったら嫌だから！」

「…………！」

フェイトは黙って、なのはの話聞く。

「これが……私の理由！」

「……私は……！」

なのはの想いに戸惑いながらフェイトが答えようとした時、

「フェイト！答えなくていい……！」

アルフがそれを止めた。

「……！」

「優しくしてくれる人達の所で、又ク又クと甘ったれて過ごしてきた

たガキんちよに何も教えなくていい……！」

アルフの言葉に銀時は顔を陰しくした。

（何か関係あるのか？あいつの母親と……）

銀時はそう思った。

「じゃあな白夜叉」

斬は姿を消した。

銀時は気にしなかった。

あっちの方が一番気になるからだ。

「あたし達の最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ！」

アルフの言葉でフェイトは我に帰り、ジュエルシードの方へ向かった。

なのはもジュエルシードへ向かう。

そしてジュエルシードの前で、二人の持つデバイスがぶつかり合った。互いのデバイスにヒビが入る。

その瞬間、ジュエルシードから強烈な光が放たれた。

「フェイト！」

「なのは！」

アルフとユーノが叫んだ。

フェイトと、なのははジュエルシードから離れた。

フェイトは傷ついたバルディッシュを見た。

「大丈夫？戻ってバルディッシュ」

「Yes, sir」

バルディッシュは小さな三角系になり、フェイトの手の甲の手袋に戻った。

フェイトは目の前に佇んでるジュエルシード目掛けて走った。

「フェイト！ダメだ危ない！！」

アルフの制止も聞かず、フェイトはジュエルシードを掴み取る。するとジュエルシードから強い光が放たれる。

「く…！」

フェイトはその場に座り込み、魔法陣を展開させる。

「止まれ」

光が激しさを増す。

「止まれ…止まれ！」

手袋が破れて血が吹き出る。

「あのバカガキ!!」

木刀を手放して銀時はフェイトに駆け寄った。

「銀時！何のつもり!？」

「こっするんだよ!!」

ジュエルシードを握るフェイトの手を握った。

直後、銀時の体に激痛が走り、手から血が吹き出た。

「ぐあああああ!!」

銀時は悲鳴を上げた。

「銀時！」

「「銀さん!!」」

フェイトとなのは、ユーノは銀時の名を叫んだ。

「がああああ!!」

体に激痛を受けても銀時はフェイトの手を離そうとはしなかった。

「あいつ！敵なのに何でそんな事をするんだい!？」

アルフは銀時の行動がわからなかった。

「銀時！」

フェイトが銀時の名を呼ぶ。

「バ…バカヤロー……さつさと……封印しやがれ…！」

「銀時…！くっ！止まれ、止まれ、止まれ、止まれ！」

懇願するようにフェイトはジュエルシードを握り締める。

やがてジュエルシードの光が収まり、魔法陣も消える。

銀時は地面に膝をついた。

「「銀時（銀さん）!!」」

フェイトは銀時の体を支え、なのはは銀時の木刀を拾った。

「銀時！しっかりして!!」

銀時の手からポタポタ、と血が地面に落ちる。

「…へへ…フェイト……オメーはやればできる子だと信じてた…ぜ

………」

銀時の言葉にフェイトは口を開いた。

「何で私を助けようとしたの？何で？私はあの子の敵だよ」  
フェイトは涙目で言う。

「前……言っただろ……忘れたのか……？」

「あっ」

フェイトはあの言葉を思い出した。

『それに……俺はなのはの味方だからボンボン助ける事は出来ねえ  
がお前が危なかつたら助けてやるよ』

フェイトはあの時銀時が言った言葉を思い出したのだ。

「銀時……」

「へへ……俺は少し疲れたわ……」

銀時はそのまま目を閉じた。

そしてフェイトはアルフに銀時を運ぶ様頼んだ。

「わかったよ」

アルフはそれを承知した。

銀時はフェイトを助けようとしてくれたからだ。

アルフは銀時を抱きかかえて、フェイトと共にビルを渡りながら去っていった。

『主は我に任せておけ』

銀龍はなのはとユーノの目の前に現れてそれだけ言う姿を消した。

（銀さん……）

なのはは銀時の木刀を強く握った。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハイ、質問コーナー始めるぞオ。今回のアシスタントは」

銀龍『主の相棒である銀龍だ』

銀八「それじゃ、質問行こうか」

銀龍『まずはペンネーム』獄黒『さんからの質問だ』

『では、質問しますね。』

・なのはに質問、ダークマターをたべると、銀時に「銀さんなんて大嫌い」って言うの、どっちのほうが いや？』だそうだ。  
なのはよ』

なのは「銀さんなんて大嫌いって言うのが嫌に決まってますよおおおおおお！」

銀八「だそうだ。と言う訳で『獄黒』さん廊下に立ってなさい」

銀龍『次だ。ペンネーム』支配者『さんからの質問だ』

『銀時へ』

あなたに『コスプレ・ザ・侍』の称号を与えます。

ナナフシさんへ

何で新八が『ミラクル』になっただけでしたっけ？……主よ」

銀時「んな称号いるかアアアアアアアア！そんな称号貰っても俺悲しいだけだから！」

銀八「プププ、その称号貰えよ」

銀時「絶対嫌だ！」

ナナフシ「二つ目ですけど……これの生みの親『霜月サヤ』さん曰く、『人気投票ミラクル八位おめでとう』って言う意味らしいですよ……ついでにこれを作るきっかけになったのは原作者が「ほら、新八ミラクルだね」って言ったそうです。それでミラクルと八位を合わせて『ミラクル』になりました」

銀八「そう言う意味かよ！それでは『支配者』さん廊下に立ってなさいー」

銀龍「次だ。ペンネーム『黒神』さんからの質問だ  
『では質問を。』

黒神

「マヨラーへ、前から聞こうと思いましたが、銀時はリリカルキヤラにメツチャモテまくっています。『リリカル銀魂シリーズ』の貴方は全然モテていないような気がします。

そんな自分は銀時以下だと思つか？（黒笑い）」

ティアナ

「いきなり喧嘩売るような質問しちゃったよこの人オオオオ！？」



銀時「3だけとんでもねえ質問しやがった!?!?!」『三つ目は子供に答えさせて良いのか?』

銀龍は疑問に思った。

なのは「え!?想像!?え、え、えええええ!?にや……にやああああああ!／＼／＼」

なのは顔を真っ赤にさせ、頭から湯気が出て倒れた。

銀龍『……一つ目だが』

フェイト「隣に居るよ!ずっと居ても良い!」

フェイトはそう言った。

銀八「んで、二つ目は?」

ナナフシ「そうですね……不良みたいな奴と自分が正しいと思っている奴ですかね。偽善が一番嫌いですね……そう言う奴見ると苛立ってきます」

銀八「時空管理局が嫌いな訳だ。と言う訳で『黒龍』さん廊下に立つてなさい!」

銀龍『最後だ。ペンネーム『坂井ゆら』さんからの質問

』「銀八先生に質問です」

1.なんでミラクルは

そんなに変なんですか?







第九訓：綺麗な物にはトゲがある（後書き）

ナナフシ「……」

銀時「……何あの状況？俺人質みたいじゃん」

ナナフシ「……」

銀時「何か答えるよ」

ナナフシ「……人質ではないでしょ？」

銀時「それかよ！知るかよ！」

ナナフシ「と言う訳でまた次回！」

第十訓：ちゃんとした食生活をおくれ！（前書き）

ナナフシ「面白い物見つけたぜやふう〜……と言つ訳でなのは、フ  
エイト」

なのは・フェイト「はい？」

ナナフシ「これあげる」

ナナフシが懐から二枚の写真を取り出す。

それを見て、二人は顔を赤くし、目を輝かせる。

なのは・フェイト「良いの！？」

ナナフシ「良いよ良いよ」

二人はナナフシからそれを貰った。

銀時「何渡したんだ？」

ナナフシ「気になります？」

銀時「ああ」

ナナフシ「これ」

ナナフシが見せたのは銀時に猫耳と尻尾が生えており、銀時の顔が  
ニツコリ笑っていて、愛らしい写真だった。

ナナフシ「これ……銀時ラバーズに見せたらひとたまりもありませんよ。  
愛らしい姿だもん」

銀時「何じゃこりやアアアアアアアアアア！！」

ナナフシ「ふふふ、これを他の次元の銀時ラバーズに……」

銀時「やめるオオオオオオオオオ！」

ナナフシ「ゴフアアアアアアアア！」

なのは・フェイト「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀  
の刀』 始まります……可愛い／＼／＼」

## 第十訓：ちゃんとした食生活をおくれ！

フェイト達はマンションの部屋に戻った。気絶してる銀時を、フェイトの部屋のベッドに寝かせて傷の手当てをしている。

フェイトの方の傷は銀時が庇ったおかげで軽いもので済んだ。

「これでよしと」

アルフが傷の手当てを終える。

「銀時……」

フェイトはそつと銀時の手に触れた。

「ごめんなさい……私のせいで……」

フェイトは悲しげに顔を俯かせた。

「フェイト……」

隣に座ってるアルフは優しくフェイトの肩を抱いた。

「ごめんね銀時……本当にごめんなさい……」

俯きながらフェイトは謝った。

その時。

「何勝手に自分のせいにしてんだコノヤロー」

声がした。

フェイトは顔を上げて銀時を見た。銀時はいつの間にか目を開けていてフェイト達を見ていた。

「銀時！」

「気がついたのかい！？」

「ああ」

ゆっくりと銀時は上半身を起こした。

「銀時：本当にごめんね。私のせいで……銀時を危ない目にあわせて……」

フェイトはまた悲しそうな表情で顔を俯かせる。

銀時がため息をついた。

「顔上げる、フェイト」

銀時の優しい声が聞こえた。フェイトはゆっくりと顔を上げた。

「銀時……」

「コイツは俺の意志で動いて、できた傷だ。だからそうやって自分を責めるんじゃないよ」

「銀時……」

場の空気が少し和らいだ感じがした。

「けどな、フェイト」

銀時は微笑んで、しばし間をとった。

「やっぱりお前のせいだろうがアアアアア……」

突然、銀時が豹変して怒声を上げた。

鬼の形相になった銀時は、フェイトの頭に拳骨を食らわせた。

「っ……!!」

フェイトは両手で頭を押さえて痛みを悶えた。

「あんた何やってんだい!？」

アルフが銀時に飛びかかろうとして……

「おすわり!」

「わんっ!……は!」

銀時の言葉でアルフは思わず、おすわりをしてしまった。

「フェイト。何でお前は一人で無茶をするんだ?」

「……」

フェイトは黙り込んでいる。

「ガキのくせに、何でも一人で背負おうとしやがって」

「……」

フェイトはまだ黙り込んだままだ。

フェイトの様子に銀時は二度目のため息をついた。

そしてゆっくりと片手をフェイトに伸ばした。

「!」

また殴られると思ったフェイトは、ビクツと体を震わせて目を閉じた。

だが、頭には痛みではなく暖かさを感じた。ゆっくりと目を開ける

と、銀時はフェイトの頭に手を乗せていた。

「お前は、まだガキなんだからよ。もつと周りを頼れ。甘えていいんだよ。お前にはアルフって最高のパートナーがいるだろ？」

微笑みながら銀時はフェイトに言った。

言われてフェイトはアルフを見た。アルフも微笑みながらフェイトを見つめてる。

「ま、俺もな」

そう言っつて銀時はフェイトの頭から手を離した。

「銀時……」

フェイトは銀時に顔を向けた。

「もう一人で無茶するんじゃないぞ。いいな？」

フェイトを真っ直ぐに見ながら銀時が言う。

「……うん」

フェイトは首を縦に動かして答えた。

フェイトの答に銀時は満足そうに笑った。二人の様子を見守ってたアルフも嬉しそうに笑って尻尾を振ってる。

その時だった。

銀時の腹の虫が鳴った。

「あ……」

三人は同時に声を上げた。

「飯……良いか？」

銀時が訪ねるとフェイトは頷いた。

「思えばテメエには挨拶してなかったな。俺は坂田銀時だ」

「あたしはアルフだよ」

二人は挨拶をした。

\*

フエイトとアルフが夕食をテーブルの上に置いた。

「それじゃあ食べよっかフエイト」

「うん。いただきます」

とフエイトが食べようとした時。

「ちよつと待て」

「え？」

銀時がフエイトを止めた。

「フエイト。アルフ。これは何だ？」

銀時はテーブルの上を見た。

「何って夕食だけど……」

テーブルに置かれてるのはインスタント料理と冷凍食品ばかりだった。

「バツキヤロオオオオ!!」

テーブルに置かれた料理を見て銀時はテーブルに足をのつけて二人に怒鳴った。

「「えっ!?!」」

銀時の勢いに圧されてフエイトとアルフは体を大きく震わせた。

「育ち盛りがこんなモンばっか食って、ちゃんとしたメシ食わねーとどーなると思っただあぁ!!」

銀時は怒りの形相で二人に怒鳴った。

「あの…えつと……ごめんなさい……」

銀時の迫力に圧されてフエイトは戸惑いながら謝った。

「それからアルフ!!」

銀時はアルフを指差した。

「お前は何を食おうとしてんだ!?!」

「何って……」

アルフは手に持つてる箱を銀時に見せる。

「ドッグフードだけど」

「やっぱ犬じゃねえか!?!」

「違う!狼だ!」



アルフが怒鳴り返す。

「ドッグフード片手に持って言っても説得力ねーんだよ！！ってかお願いだからドッグフード食べるのはやめてくれ！何か見えて悲しくなってくるから！！」

銀時は頭を抱えて叫んだ。

「あゝ銀時…大丈夫かい？」

恐る恐るアルフが声をかける。

「ちっ。しょうがねえ。俺が作るしかねーか」

そう言つて銀時は台所に向かい冷蔵庫の扉を開けた。

「！！！」

冷蔵庫の中を見て銀時は絶句した。

「今度はどうしたんだい銀時？」

アルフが歩いてきた。

「冷蔵庫の中が空じゃねーかああああ！！」

再び銀時が叫んだ。

「それに銀時、その手で出来るの？」

「あ……」

銀時はフェイトに言われて気付いた。

\*

結局銀時達はインスタント料理を食べて夕食を済ませた。

ソファに銀時達は座っていた。

「なのはとユーノは心配してねえかな？……それに木刀置いてきてしまった」

銀時は完全に人質状態だと思っていた。

「ここが何処だかわからねえから帰りようがねえし……しかもこの町の事よく知らねえし」

銀時は諦めていた。

「銀時大丈夫？」

「ああ……」

フェイトの問いに銀時は答えた。

「しょうがねえ。ここに住んで良いか？俺なのは所に帰るにも帰られねえから」

銀時が聞くとフェイトは頷いた。

「まあ、あたしのご主人様が良いなら良いよ」  
アルフも許可をした。

『まったく……主よ。我を忘れてはいないか？』  
いきなり銀龍が姿を現した。

「おお、銀龍」

『まったく、私の自己紹介もせねばならんのに』  
「すまんすまん」

銀時が銀龍に謝っていた。

フェイトとアルフは銀龍に驚いていた。

「銀時……それは？」

フェイトが訪ねると

「こいつか？こいつは」

『我は銀龍と言う。主の相棒だ』

銀龍はそう答えた。

「デバイス……ではなさそうだね」

フェイトは疑問に思った。

『うむ、ユーノと同じ反応か』

「ま、こいつのおかげで俺は魔法を使えるんだけどな」

「え！？」

二人は驚いた。

「それデバイスじゃないのに！？」

フェイトは声を上げた。

「ああ、不思議だよな」

銀時は答えた。

「不思議な刀だねえ」

アルフは銀龍を見る。

「いやいや、犬の耳と尻尾がある方が珍しいぞ」

『そうだな』

「あたしは狼だ！」

アルフは狼と言った。

『それにしても獣の耳いてもあいつとは全然違うな』

「ああ、そうだな」

銀時と銀龍の言葉にフェイトとアルフは首を傾げた。

それは銀時が元の世界で万事屋の下の階に住んでる、全然萌えない猫耳年増女を思い出していた。

「何を話してるの銀時？」

フェイトは銀時に訪ねた。

「いや、アルフを見てな。俺の知り合いにも頭に獣の耳が付いてる奴がいるんだよ。でもソイツは顔は濃いし、性格は悪くて最悪なんだわ」

「ソイツも使い魔なのかい？」

「いや『天人』だ」

「天人？」

アルフは首を傾げた。

「要は宇宙人だ」

「へえ」

「んで、ソイツに比べたらお前の方が可愛いなと思ってな」

「えっ!?!」

銀時の言葉にアルフは顔を赤くする。

「ちよっ…！何言ってるんだい銀時!?!急にそんなこと言われたら恥ずかしいじゃないか!?!/!/」

アルフは両手で頬を押さえながら尻尾を左右に振る。

「ああ。お前は可愛い…」

銀時は口元を吊り上げた。

「犬だ！」

「狼だ!!!」

アルフは銀時の言葉を即座に否定した。

「はいはい。わかったよ」

「それよりもこの世界にそんなのが居たなんて」

フェイトは銀時がまだ『次元漂流者』とは知っていない。

「何言ってるんだ？俺の世界の話だよ」

「え？どついう事？」

銀時の言葉に二人は首を傾げた。

『思えば主よ。この二人に我等の事は話していないぞ』

「そうだったな」

銀時はフェイトとアルフに説明した。

「銀時は『次元漂流者』だったの!？」

フェイトは驚いた。

「まあな」

「そんな世界が存在するんだね」

アルフは銀時の世界に驚いた。

「思えば銀時って魔導士じゃないよね？」

「あ？そうだが」

「銀時って何者なの？」

フェイトは銀時に訪ねた。

「思えば凄い事やってのけてたね。銀時は」

アルフも思った。

雷雅との戦い、斬との戦い、どれも凄いものだった。

「俺は『侍』だ」

「『侍』？」

フェイトとアルフは首を傾げた。

「自分の武士道ルールを持ってて、そいつを貫くのが侍だ」

「自分のルール…」

フェイトが小さく呟いた。

「ふ〜ん。じゃああの木刀は？真剣とやり合って折れないなんて丈夫だよな」

アルフは銀時がよく使っていた木刀を聞いた。

『あれでやるうと思えば隕石も壊せるからな』

「「隕石を！？」」

二人は驚いた。

隕石を木刀で壊せるなんてありえないからだ。

「凄い木刀なんだね」

『だが、あれは……！』

急に銀龍は黙り込んだ。

銀時が黙らしたからだ。

「あれはな、修学旅行に行った時に洞爺湖に住む仙人に貰ったんだよ」

「仙人に貰ったのかい！？」

「す……凄いよ銀時！」

銀時の話にはフェイトとアルフは驚く。

確かに銀時の木刀は辺境の星に生える『金剛樹』と呼ばれる樹霊一万年の木から作られた代物で、そこらの真剣より丈夫で何でも斬れる。

だがこの木刀、なんと通販でお手軽に手に入るのだ。しかも中には紛い物もあるとかないとか。

「銀時って凄いんだね」

フェイトは完全に銀時の嘘を信じている。

（主……知らんぞ）

バレた時の恐ろしさを銀龍は想像した。

「後だがな。お前の母ちゃんに会わせてくれねえか？」

「え？」

フェイトはそれだけ言うと黙り込んだ。

アルフはフェイトに何か言っているようだ。

『で、でも』

『銀時ならあの人からフェイトを護ってくれるかもしれないよ』

『大丈夫だよアルフ。母さんは私の為だって言ってたし』

微妙に聞こえる声。

(やっば何かあんのか?)

銀時は疑問に思った。

「ダメか？」

銀時は訪ねた。

「……」

フェイトは黙っている。

『我と主は会って話がしたいだけだ』

銀龍も頼む。

「わ、わかった。良いよ」

フェイトはそう言った。

銀時はフェイト達と翌日に行く事になった。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハイ、今回のアシスタントは」

アルフ「フェイトの使い魔のアルフだよ」

銀八「と言う訳で質問行こうかア」

アルフ「まずはペンネーム『支配者』さんからの質問

『「銀時に質問

一人ぼっちですね。さびしくて死にたくなりませんか？  
唯でさえ主人公っぽくないのに

ミラクル に質問

本名無視されてますね。それって貴方には存在価値が無いと思われ  
てるからじゃないですか？

んで、3つ目の質問

皆さんへ

屁怒紹ティラノと戦って勝ってますか？  
実際に送りますんで皆さんで戦ってみてください（黒笑）『ちよっ  
と三つ目ええええええええええ！』

銀八「来る前に他の二つ答えるぞ！銀時！」

銀時「寂しいが死にたくはならねえよ！てか、唯でさえ主人公っぽ  
くないのってどういう事だ！」

銀八「二つ目！」

ミラクル「何だとオオオオオオオオ！そう思っているのか！？作者  
！」

ナナフシ「いや、気に入ってるだけ」





銀八「むかつく！三つ目だが」

雷雅「そうだな……今の所は……フェイトかなのはだな」

銀八「だそうだ。と言う訳で『黒龍』さん廊下に立ってなさい」

アルフ「最後だよ。ペンネーム『月光閃火』さんからの質問

『輝刃』…基本的に伏せ字の意味が無いな…(汗)。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1・雷雅に質問…ぶっちゃけ、好きな女性のタイプって…居るか？

たはは…(汗)おもいつきリストレートなの言ったな…(汗)。次は俺からだ。

2・ナナフシさんに質問…色んな『リリカル銀魂シリーズ』の銀時のように、現実でモテたらどうする？もちろん、言い寄ってくる女性性は皆ブツ飛んだ娘ばかりで(苦笑)。

輝刃「…それはある意味大変そうだな…(滝汗)。いくら男のロマンと例えば、言い寄ってくる女性達が皆ブツ飛んだ娘ばかりなのだからな…(汗)。「『一つ目だが」

雷雅「そうだなア……俺は今まで戦闘にしか興味がなかったからな……どっちかって言うとないかもな」

銀八「だそうだ。二つ目だが」

ナナフシ「嬉しいですけど、それはさすがにちょっと……俺銀さん

じゃないんで無理です……」

銀八「だそうだ。と言う訳で『月光閃火』さん廊下に立ってなさい」

アルフ「質問は以上だよ」

銀八「それではまた次回」



第十一訓：自分の子供を虐待してはいけません！（前書き）

ナナフシ「暇だから連続投稿」

銀時「おい！」

ナナフシ「何か面白いから次は銀さんの犬耳と尻尾のやつをなの  
とフェイトにあげた」

銀時「またかよオオオオオオオオ！」

ナナフシ「ふははははははははははは！次は何にしてやろうかなア！」

銀時「やめてくれエエエエエエエエ！」

銀龍「……『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始  
まるぞ」



銀時が気分を悪くしてゲロを吐いた理由。

それは『高次空間内』という空間が、今までいた所とは別の環境の空間だからだ。この空間の環境に慣れていない銀時は気分を悪くし、ゲロを吐いたのだ。

「わ…悪い…：…先行っててくんねーか？…後から行くからよ…」

「う…うん。わかった。無理しないでね銀時」

「ゆっくり休んでな」

そう言っ二人は母親の所に向かった。

一人残った銀時は、座り込んで気分を落ち着かせた。

\*

しばらくして銀時の気分は落ち着いてきた。

「ふー。やっと落ち着いたぜ」

ゆっくりと立ち上がった。

「あ…フェイトに部屋の場所聞くの忘れてた…」

銀時は軽く舌打ちをした。仕方なく適当に中を歩くことにした。

しばらく歩いていると長い廊下に出た。

『主…：…思ったのだが白銀シルバー・オブ・アーマーの鎧を纏えばよかったのではないか？』

「あ…」

今さらの様に思い出した。

（さてと…：…何で集めているのか聞き出すか）

銀時はフェイトの母親に集めている理由を聞くつもりだった。

頭を掻きながら銀時は悩み続ける。

少し歩くとアルフを見つけた。

だが様子がおかしい。アルフは扉の脇で頭を抱えてうずくまってる。

「何やってんだアイツ？」

銀時は首を傾げた。同時にある事に気がついた。

フェイトがいない。

(一人で母親に報告してんのか?)

そう思いながら銀時はアルフに近寄った。

「おい。こんなトコで何やってんだ?」

アルフに声をかけた。

銀時の声に反応したのか、アルフの耳がピクンと動いた。ゆっくりと顔を上げて銀時を見た。

「銀時……」

アルフは立ち上がり、涙目になって銀時に抱き付いた。

「銀時っ!!」

「おわっ!? おいアルフ! 何だよ急に!？」

銀時は慌てながらアルフに尋ねた。

「銀時…お願いだよ……フェイトを…フェイトを…助けて……」

「!!」

泣きながら懇願するアルフに銀時は目を細めた。

その時、扉の中から何か音が聞こえてきた。

「…こいつぁ何の音だ?」

銀時は扉を覗んだ。

「フェイトが…フェイトが……」

「此処にいる」

銀時はアルフに残るように言って、扉の前に立った。

大きく息を吸い、

「うるぁあああ!!」

叫びながら扉を蹴った。扉は開き、銀時は部屋の中に入った。

「!!!」

部屋に入って銀時は目を見開いた。

バリアジャケットを引き裂かれ、体中に傷ができたフェイトが倒れていた。

「フェイト!!!」

銀時は駆け寄ってフェイトを抱き起こした。

「フェイト！おい！しつかりしろ！」

「……あ……銀時……？」

フェイトはうつすらと目を開けて銀時を見た。

「いきなり扉を開けて入ってきて……貴方、一体何者？」

前から声が聞こえた。

銀時は顔を上げて声の主を見た。

そこには、まるで虫けらを見るような眼で見ってくる黒髪の女が立っていた。

この時が、坂田銀時と大魔導師プレシア・テストロッサが初めて対峙した瞬間だった。

「……人に名を名乗らせる前に、自分から名乗るのが礼儀だって母ちゃんに習わなかったか？」

銀時の言葉にプレシアは不快そうに眉間にシワを寄せた。

「……私はプレシア。大魔導師プレシア・テストロッサよ」

「俺は銀時……坂田銀時だ」

銀時はフェイトを抱いたまま立ち上がった。

「アルフ！」

銀時は大声でアルフを呼んだ。扉の外からアルフが駆け寄ってきた。

「フェイト！！」

「フェイトを連れて傷の手当てをしろ」

そう言つて銀時はアルフにフェイトを預けた。

「う……うん。銀時は？」

「俺はあの女と話がある」

「……銀時……気をつけなよ……」

アルフはフェイトを抱えて部屋を出た。

部屋には銀時とプレシアの二人つきりになった。

「テメー、フェイトの母親だろ？何であんな仕打ちをした？」

「何故？あの子は、この大魔導師プレシア・テストロッサの娘なのよ。それなのに、回収してきたジュエルシードはたったの四つ。この程度の成果しか上げられなかったから賤しんせをしただけよ」



プレシアの言葉に銀時は怒りを燃やした。

「…フェイトがただけ頑張ったか…ただけ辛い思いをしたか、わかってんのか？」

怒気を含んだ視線をプレシアに向ける。

「さあ？そんなのは私の知った事じゃないわ」

「デメエー！」

『さすがにそれは許せん！主！我を使え！』

銀龍は姿を現した。

プレシアは銀龍に驚いた。

「それは何？」

「銀龍だが？」

プレシアは名前を聞いて疑問に思った。

（銀龍…：何処かで聞いた気がする）

プレシアは考えたが思い出せなかったため、また銀時を見た。

「目障りだわ。いい加減消えなさい」

プレシアから紫色の雷が銀時に向かって放たれた。

「ちっ！」

銀時は横に跳んで雷をかわした。

（速い！）

銀時の素早さにプレシアは少し驚いた。

（魔力による肉体強化？違うわ。あの男からは全く魔力を感じない）

プレシアは杖を銀時に向けて再び雷を放つ。

魔法が使えるが、銀時は避けることしかしなかった。

「いつまで逃げ切れるかしら！？」

プレシアの容赦のない雷が銀時に迫る。

「くっ！」

銀時は後ろに跳び、雷は銀時の前に落ちた。

後ろを向くと壁があった。

（ヤベッ！このままじゃ壁にぶつかる！）

だが銀時は、壁にぶつからなかった。当たる直前に壁は横にスライ

ドして道が開かれたのだ。

「！！！」

この時、初めてプレシアは焦りの色を浮かべた。

「おわっ！」

銀時は床に倒れた。

「何だここ？隠し通路か？」

立ち上がりながら銀時は隠し通路を見渡した。

少し狭い通路の先に何かを見つけた。

「なっ！？」

ソレを見て銀時は驚愕した。

通路の先にはガラス張りのケースのような物があり、その中に一人の少女が裸で入っていた。

「…フェイト…！？」

『これは一体！？』

銀時は驚いた。

中にいる少女はフェイトに瓜二つだった。

銀時がケースに近づこうとした時、

「アリシアに近寄らないで！！」

「！！」

プレシアの怒声と共に雷が銀時を襲った。

「うおっ！！！」

銀時はなんとか雷を回避した。

プレシアも通路に入ってくる。

「おい…こいつぁどういう事だ？」

銀時は目の前にいるプレシアを睨みつけた。

「何でフェイトがもう一人いるんだ？」

「フェイトがもう一人？ふん。笑わせないで」

銀時の言葉にプレシアは鼻で笑った。

「私の可愛い『アリシア』を、あんな人形と一緒にしないでほしいわ」

「人形だと…？」

『…………』

プレシアの言葉に、銀時は目を細め、銀龍は黙り込んだ。

「フェイト・テスタロツサは、私がアリシアの代わりに造った生命体よ。」フェイト”の名前はその当時のプロジェクトの名残よ」

「な…！？」

銀時は目を見開いて驚愕した。額から汗が流れる。

「けど姿形は同じでも、あの子はアリシアではなかった。アリシアの記憶をあげても無意味だった」

銀時は黙って聞いている。

「アリシアはもつと素直で明るくて、いい子だった…いつも私に笑顔を見せてくれた」

プレシアは遠い目をしていた。

「だから私は、あんな出来損ないを捨ててアリシアを蘇らせる事を決意したのよ！」

プレシアの目がカツと見開かれた。

「ジュエルシードを使って、失われた秘法を用いる約束の地『アルハザード』へ向かって、娘のアリシアを蘇らせるのよ…！」

プレシアは両手を高らかに挙げて言い放った。

銀時はジッとプレシアを見つめた。プレシアの姿を見て銀時の脳裏に一人の男が浮かんだ。

林流山。

銀時のいた世界の有名な機械技師だ。

自らの実験中に娘を死なせてしまい、死んだ娘を蘇らせようと『芙蓉プロジェクト』を計画した。

娘・芙蓉の人格データを機械人形からくりになぎょうに引き継がせ、娘が死んでしまった苦しみや悲しみから逃れるために流山自身も実験体に使い、自分の人格データを機械人形に組み込んだ。

全ては死んだ娘のためではなく、自分のためにしたこと。

『あやつを思い出したか？』

「まあな……」

銀時と銀龍は喋りあった後、プレシアに向いて銀時は口を開いた。

「…プレシア」

プレシアは、上げていた視線を銀時に戻した。

「テメーは娘のために、娘を生き返らせようとしてんじゃねえ」

「……何ですって？」

銀時の言葉にプレシアは目を鋭くする。

「フェイトを造ったのも、アルハザードに行つて娘生き返らせようとしてんのも全部、自分のためだ」

「！？」

プレシアの目が見開かれる。

「テメーは自分の寂しさを埋めるために、フェイトとアリシアの魂を弄んでんだ」

プレシアの顔が怒りで歪んでいく。杖を握る手に力が入る。

「……黙りなさい」

「テメーは、娘が死んだ事実から逃げてるだけだ」

「…黙れ」

銀時の言葉がプレシアの心に突き刺さる。

「今のテメーが、胸張つてアリシアに”母親”だと言えんのか！！？」

「黙りなさいって言ってるのよ！！」

プレシアから、巨大な雷が銀時に向かって放たれた。

「ぐあああああ！！」

『主！！』

雷は銀時に直撃した。

（避けなかった！？）

避けると思っていたプレシアは少し驚いた。雷がおさまる。

銀時は火傷を負い、着物は所々焦げて煙が出てる。肩で息をしながら銀時はプレシアを見る。

「…気が済んだかよ？」

「く…！うるさい！その減らず口を黙らせ…」

杖を掲げようとしてプレシアの動きが止まった。

「う…ごほっ！」

突然プレシアは手で口を抑えて、その場に膝をついて咳込んだ。

「おいっ！どうした!？」

プレシアの異変に銀時が駆け寄る。

床にはプレシアの血が付着していた。

「あんた…まさか病に……」

プレシアは杖を立てて立ち上がった。

「…ふふ。大魔導師でも…不治の病は治せないのよ…」

プレシアは皮肉な笑みを浮かべた。

「…私を殺すなら今がチャンスよ」

目の前の銀時を睨みつける。

「…んな事するかよ。あんたを殺すのが目的じゃねえ。それに…」

銀時は一旦、言葉を切った。

「フェイトのヤツが悲しむ」

「……………」

プレシアは顔を俯かせた。

「銀時…」

「ん？」

プレシアはゆっくりと顔を上げた。

「貴方なら…雷をかわしながら一気に私の懐に入り、その銀龍と言う刀で斬れたはずよ…何故そうしなかったの…？」

「だから、俺あんたを斬るのが目的じゃねーんだよ」

メンドくさそうに頭を掻きながら銀時は答えた。

プレシアは顔を少し俯かせる。

「…銀時…」

「今度は何だ？」

「……私は……間違っていたの……？」

俯いたままプレシアは銀時に聞いた。

だが銀時はその問いには答えない。

「もし……間違っているなら……私は……私はどうすればいいの？」

プレシアはその場に座り込んでしまう。

「……さあな」

『それは自分で見つけると良い』

銀時は歩き出した。

静かにプレシアの横を通り過ぎる。通路の扉の前で銀時は足を止めた。

「ただよお」

「！」

プレシアは振り返って銀時の後ろ姿を見た。

「フェイトの母親も、アリシアの母親も、世界中であんただけなんだよ」

「……！」

銀時の言葉にプレシアは目を見開いた。

「じゃあな」

銀時は通路から出ていった。

一人残されたプレシアはケースの中で眠ってるアリシアを見つめた。

「アリシア……私は自分のために……貴女を弄んでいたの……？」

近寄ってケースに触れる。

「私は……どうすれば………」

プレシアは力無く床に座った。

その時、プレシアの口から一人の少女の名前が出た。

「フェイト……」

\*

『主らしいと言えば主らしいな』

「うるせえ」

銀時はそう言った。

『主よ……プレシアは我を知っているかの様な顔だった』

「だったら何か言うだろ」

『私の予想だが、何処かで聞いた事があるのかもしれぬな』

「知りたいのか？」

『いや、我は今で十分だ……それに悲しい過去なら思い出したくない』

「……」

銀時と銀龍はそんな会話をしていた。

その時だった。

「銀時！」

銀時に気付いたアルフが駆け寄った。

「あんた……！どうしたんだい、その体は！？」

プレシアの雷を受けてボロボロになった銀時の姿を見てアルフが叫んだ。

「あ？お前これはアレだよ？ドーナツ作りに失敗したんだよ」

「何言ってるんだい！？あの女にやられたんだろ！？」

「大丈夫だよ。それよりフェイトはどうだ？」

銀時は、ベッドで寝てるフェイトを見た。

「……今は落ち着いて眠ってるよ」

銀時は椅子に座って、眠ってるフェイトを見つめた。

「ん……」

フェイトが目を覚ました。

「フェイト！」

アルフが目には涙を浮かべる。

「……アルフ……銀時……」

フエイトは二人を見て小さく呟いた。

「よお」

銀時が声をかけた。

フエイトはボロボロになってる銀時の姿を見て驚いた。

「銀時…！その傷…どうしたの？」

「これか？」

銀時は、指で耳の穴をほじる。そして、アルフにも言った言葉を口にした。

「ドーナツ作りに失敗した」



第十一訓：自分の子供を虐待してはいけません！（後書き）

ナナフシ「俺的には『月光閃火』さんが考えてくれたオリキャラをA、S編に出したい」

銀時「そうかよ」

ナナフシ「いやア……早くA、S編が書きたい……そして銀さんハ―レムを狙う！」

銀時「狙うな！」

ナナフシ「ま、それでは次回！」

第十二訓：会いたくない奴とは会うもんだ（前書き）

ナナフシ「はい！支配者さんの所に銀龍が出る事になりました！」

銀時「喜んでんな」

銀龍『あんな風なお願いは初めてだったそうだ。更にはよく読むリカル銀魂シリーズの一つだからな』

ナナフシ「嬉しいに決まってるでしょ！と言う訳で『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』が始まります！」

## 第十二訓：会いたくない奴とは会うもんだ

翌日。

銀時はフェイト達を止める方法が思い浮かばず、ジュエルシード集めに付き合うことになった。

屋上に銀時達が立ってる。

「もうすぐ発動するジュエルシードが近くにある」

夕焼けの空を見上げながらフェイトが言う。

後ろには銀時と狼形態のアルフがいる。

（マズいな…今はまだフェイトにアリスアの事はバレないが、ジュエルシードを集めれば、いずれはバレる）

銀時は表情を険しくして考える。

（何か…何か方法は……ないか！？）

\*

夕方。

学校からの帰り道。

ユーノが赤く丸い石をなのはに渡した。待機状態のレイジングハートだ。

「レイジングハート。直ったんだね？よかった」

「Condition green」

レイジングハートは、なのはに答えた。

「また、一緒に頑張ってくれろ？」

「All right, my master」

なのははレイジングハートを握った。

「ありがとう」

なのはは銀時の木刀を見た。

銀時は無事なのか心配なのだ。

( 銀さん…… )

\*

銀時達はジュエルシードがある場所にやってきた。海が見える公園。公園内には銀時達以外、誰もいない。公園内にジュエルシードの光の柱が現れた。一本の木の中に、ジュエルシードが入っていた。木に変化が起る。

「ゴオオオオ!!」

二本の腕が生えた巨大な木の化物になった。

「元氣いいなオイ。その元氣を少し分けてほしいぜ」  
木の化物を見ながら銀時が呟いた。

「フェイト」

アルフがフェイトに声をかけた。

「うん。あの子もいる」

フェイトは、なのはの姿を捉らえた。

「フェイト」

今度は銀時がフェイトを呼んだ。

「何？」

「あの化物の相手は俺がしてやつからな」

「え？」

銀時の提案にフェイトは戸惑った。

「でも……」

「言っただろ？」

銀時はフェイトの頭に手を乗せた。

「お前はガキなんだから、もっと周りを頼れ」

「!」

銀時は前に出る。

木の化物と対峙する銀時。

「銀さん！」

なのはは銀時の名を呼んだ。

「よっ、なのは」

銀時は無事であると確認させる。

なのは安堵の息を吐く。

「あ、銀さん！木刀です！」

銀時に木刀を渡した。

「ありがとな……あいつは俺が何とかするからな」

「え？でも」

「心配するな」

銀時はそう言うのと左手には銀龍を握った。

右手には木刀である。

木の化物は、目の前にいる銀時を睨みつけている。

「ゴオオオオオ！！！」

銀時を睨みながら木の化物は雄叫びを上げた。

「ギャーギャーギャーギャーやかましいんだよ。発情期ですかコノヤロー」

「ヤロー」

銀時は構えを取る。

「ゴオオオオオ！！！」

木の化物が雄叫びを上げながら、木の根を振り上げた。そして銀時

目掛けて木の根を振り下ろす。

「うおおおお！！！」

銀時は叫びながら木の化物目掛けて走り出した。

「だらああああ！！！」

銀時は、木刀を振るって自身に迫る巨大な木の根を切り裂いた。

次々と襲いかかる木の根を木刀と銀龍で切り裂いて銀時は木の化物に迫る。

\*

「っ…強い！」

戦いの様子を見てるアルフが驚きの声を上げた。

「銀時…こんなに強かったんだ…」

隣に立つてるフェイトも驚いている。銀時が強い事は知ってるつもりだったが、本当に『つもり』だったようだ。

銀時の戦いはアルフから聞いていたが、予想を遙かに超えていた。

「銀さん……凄い！」

なのはは驚きの声を上げた。

今まで一緒に戦ってきたが、まだ驚きを隠せない。

ユーノも同じである。

\*

「ジュエルシード斬りじゃあああー！」

銀時は叫びながら、木刀を振り下ろして木の根を斬った。

『斬って斬って斬りまくるんじゃあああああー！』

銀龍の言葉に合わせる様に銀時は銀龍を振るって、木の根を斬る。

銀時は木の化け物の前まで迫る。

「ジュエルシード…」

銀時は木の化物に攻撃するが、

「ガアアアアア！」

木の化物は、障壁を展開して防いだ。

「ちっ！」

銀時は一旦、木の化物から離れた。

「あいつ、生意気にバリアなんか張ったよ！」

「今までのより強いね」

フェイトはバルディツシユを持つ手に力を入れる。銀時を助けたい気持ちを必死に抑える。

（大丈夫…銀時ならきつと……）

フェイトは銀時を信じて待った。

「ゴオオオオオ！！」

木の化物が両手を上げながら雄叫びを上げた。

「近所迷惑だコノヤロー」

銀時は目を鋭くした。

「ジュー」

『エー』

「ルー」

銀時は木刀と銀龍を構える。

「『シード』」

銀時は凄まじい気迫を放つ。

更には銀龍からも気迫を感じられた。

「ゴオオ！？」

銀時と銀龍の気迫に、初めて木の化け物は動揺した。

銀時は地を蹴って、木の化物の顔の前まで跳んだ。

「割りじゃああああ！！」

木刀と銀龍を振り下ろす。

木の化物は障壁を展開した。銀時の攻撃は障壁に当たり、ガラスが碎けるような音を立てながら障壁は割れた。

「うおおおお！！」

銀時は一人木の化物の眼前にまで迫った。

「ジュエルシード狩りじゃああああ！！！！」

上段から木刀と銀龍を振り下ろし、木の化物を縦に斬った。

銀時は地面に着地した。銀時が斬った木からジュエルシードが出てきた。

「やった！やったよフェイト！」

「うん！」

銀時の勝利にアルフとフェイトは喜んだ。  
なのも喜んでいた。

「さっさと封印だ！」

銀時が言うつとフェイトとなのははハツとした。

銀時に言われて、フェイトはバルディツシュを構えた。  
なのもレイジングハートを構える。

「ジュエルシード、シリアルフ！」

「封印！」

ジュエルシードに光が降り注いだ。

光が収まり、空中にジュエルシードが佇む。フェイトとなのははジュエルシード挟むように対峙する。

「…ジュエルシードには衝撃を与えたらいけないみたいだ」

「うん。この間みたいになったら、レイジングハートも、フェイトちゃんのバルディツシュも可哀相だしね」

なののは言葉にフェイトは少し戸惑った。

「…だけど、譲れないから」

フェイトはバルディツシュを鎌の形状に変えた。

「私は…フェイトちゃんと話がしたいだけなんだけど…」

なののはもレイジングハートを構える。

銀時達は地上で二人の様子を見てる。

「アレ？何やってんの？何やるうとしてんの？嫌な予感がするんですけど」

二人を見上げて銀時は言う。

『あの二人戦うつもりだぞ……しかもジュエルシードの近くで銀龍が言った。』

ジュエルシードの近くで二人が戦ったら、またジュエルシードが暴走するかもしれない。

「おいイイイ！！フェイト、なののは待てエエエ！！お前等そんなト



「コでやり合ったら、またジュエルシールド暴走するぞ!!」

銀時が必死に叫ぶが、二人の耳には届いていない。

フェイトと、なのはは同時に動いてデバイスを振り下ろす。

「ああああ!!」

銀時は頭を抱えて叫んだ。

だが二人のデバイスが当たる直前、

「ストップだ!」

二人の間に青い魔法陣が展開され、そこから現れた黒いバリアジャケットを羽織った少年がデバイスを受け止めた。

「!!?!?」

突然の乱入者に二人は驚いた。

「ここでの戦闘は危険すぎる!」

地上にいる銀時達も呆然と見上げている。

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか」

時空管理局の者と名乗る少年が現れた。

「まずは二人とも武器を引くんだ」

クロノに言われてフェイトと、なのはは一旦デバイスを引いた。

ジュエルシールドを空中に残して、三人は地上に降りた。

(おいおい、ここで管理局のお出ましかよ…)

銀時は、クロノと名乗る管理局の魔導師を見つめながら顔を険しくした。

『どつする主』

「どつするって言われてもなア」

銀時は険しい表情のまま悩んだ。

フェイトと、なのはの間立っているクロノは交互に二人を見た。

「このまま戦闘行為を続けるなら…」

クロノが言いかけた時、突如空からオレンジ色の魔力弾が降ってきた。

「はっ!」

クロノは青い魔法陣を展開して魔力弾を防いだ。  
全員、空を見上げた。

アルフが空中に佇んでいた。

「フェイト！撤退するよ！離れて！！」

アルフが再び魔力弾を放つ。

フェイトは戸惑いながらも空中にあるジュエルシールド目掛けて飛んだ。

なのはとクロノは後ろに跳んで魔力弾を避けた。銀時達も離れる。魔力弾は地面に当たり、土煙が立ち込めた。

フェイトはジュエルシールドに手を伸ばす。

その時、クロノは青い魔力弾をフェイトに向かって放った。

「ちっ！！」

銀時は、素早く木刀を魔力弾に向かって投げた。投げたと同時に銀時は走り出した。

フェイトの手前で、魔力弾は銀時の投げた木刀によって弾かれた。

「ああっ！！」

フェイトは、魔力弾と木刀がぶつかった衝撃を受けて地面へ落ちていく。

「フェイト！！」

急いでアルフはフェイトの元へ向かう。地面にぶつかる前に、アルフはフェイトを背中で受け止めた。

クロノは意識をフェイト達から銀時に向けた。

「何の真似だ！？」

銀時に向かって叫びながら黒いデバイスを構える。  
だが銀時はクロノには何も答えない。

「抵抗するなら相応の対応をするぞ！！」

言いながらクロノは数発の魔力弾を銀時に向かって放つ。

銀時は魔力弾を避けながら一気にクロノに近づく。

「銀時！！」

アルフが叫んだ。

銀時とクロノの距離はどんどん縮まる。

（こいつ！魔法を使っていないのに、なんて速さだ！）

面には出さないが、クロノは銀時の身体能力に内心驚いていた。

クロノは再び魔力弾を撃った。銀時は上に跳んで魔力弾をかわした。

（上？今まで左右に避けていたのに何故？）

クロノは上に跳んだ銀時の姿を見た。

銀時の右手には、先ほど投げたはずの木刀が握られていた。

「なっ！？」

「ふっ！」

銀時は、上段から木刀を振り下ろしてクロノのデバイスを地面に叩き落とした。地面に着地して、木刀をクロノの顔に向けた。

「チエックメイトだ。管理局さんよ」

言つて、銀時はニヤリと笑った。

銀時が上に跳んだのは、落ちてくる木刀を掴むため。

その場にいる全員が驚いた。

特に管理局や魔導師の事をよく知っているフェイトやアルフ、ユ-

ノは驚愕を隠せなかった。

「か…勝っちゃった…」

銀時の後ろにいるアルフは、開いた口が塞がらなかった。

（あの管理局の人間は、間違いなく一流の魔導師だ。その魔導師に

銀時は勝った！？しかもアツサリと！？）

木の化物に勝った事にも驚いたが、今はその時以上に驚いている。

「凄い…」

フェイトも驚いて、目を大きく見開いていた。

木刀を突き付けられてるクロノは動けなかった。

「き…君達はどれだけ危険な事をしているのか分かっているのか！？」

「さあな。どんだけ危険か教えてくれませんかね？黒井教務官さん」

「僕はクロノだ！それに教務官じゃなくて執務官だ！」

銀時に向かってクロノが怒鳴る。

「そう怒るなよ。短気は損気だぜ？カルシウム摂れ。カルシウム摂れば全てうまくいく」

『主はうまくいってないだろ』

銀龍がツツコンだ。

「か、刀が喋っているだと!？」

クロノは銀龍に驚いた。

「もうその反応は飽きた」

『うむ、嫌と言う程皆が言うからな』

銀時と銀龍はそう言った。

「下がってるクロノ」

男の声がした。

「テメーじゃソイツの相手は荷が重すぎる」

クロノの後ろの林の中から三人の男が現れた。

「なっ!？」

男達を見て銀時は驚愕した。

男達は黒い制服を着て、腰に刀を挿してある。

「おいおい、何でテメエ等が居るんだ？」

そう、その男達は、近藤勲、土方十四郎、沖田総悟であった。

「モニターの映像を見てまさかとは思ったが：本当にテメエだった

とはな」

煙草たばこをくわえた男が言った。

土方十四郎。幕府の武装警察『真選組』の副長。鬼の副長と恐れら

れている。常に瞳孔開き気味。

「いや、奇遇ですねエ旦那」

栗色のサラサラヘアの男が言う。

沖田総悟。真選組の一番隊隊長。組随一の剣の使い手で腹黒いドS。

「おおっ！本当に万事屋だ！」

ゴリラ顔の男が大声で言った。

近藤勲。真選組の局長。新八の姉・お妙に付き纏うストーカーでもある。

『どうしてお前等がここに？』

銀龍が訪ねた。

すると土方は表情を曇らせた。

「…いろいろあったんだよ。それよりテムエこそ何でこんな所にいる？」

「おいおい、銀龍の質問に答えろよ」

木刀を降ろして土方に言う。

「ま…まさか…！？」

突然、近藤が声を上げた。

「まさかお前も俺達と同じように、『魔法少女リリカルなのは』のDVDを持っていてる事に気付かないで瞬間移動装置を使ってこの世界に来たのか！？」

「『違うんだけどオオオオオオオオオオオオオオ！？』」

銀時と銀龍は瞬間移動装置は一緒だが、こつちの場合は暴走である。

「てか、『魔法少女リリカルなのは』て何！？」

銀時は疑問に思った。

「これでさア、旦那ア」

沖田が銀時に見せる。

「おいおい…マジかよ」

銀時は驚いた。

パッケージに載っているのはとフェイトに驚いた。

銀龍もだ。

「ここアニメの世界かよ……」

銀時は驚愕した。

『で、それを持っていたのはまさかだと思っが』

銀時が土方を見る。

「ちっ、俺だよ」

土方は舌打ちをしてから言った。

『やはりな』

銀龍は理解していた様だ。

真選組のメンバーで、アニメのDVDを持つてる可能性があるのは土方だけだと考えていたからだ。いや…正確に言えばDVDを持っていたのは『土方』ではない。

『トツシー』。土方が妖刀『村麻紗』を手にした事によって生まれた、もう一人の土方十四郎。主にアニメ等の二次元の作品が好きなヘタレたオタク。別人格ではなく、れっきとした土方十四郎の人格の一部なのだ。

「あの野郎…いつの間にかアニメのDVDなんざ懐にしまいやがって…！」

土方は拳を握って怒りを燃やした。

「ブハハハハ！何？お前またトツシーに体乗つとられたの？」

土方を見ながら銀時は笑った。

「テメー何笑ってやがんだ！斬るぞコラ…！」

土方が銀時に掴みかかる。

「やれるもんならやってみやがれ！マヨラー侍さんよオ！」

「上等だコラ！」

いつもの銀時と土方の争いが始まる。

「君達！少しは落ち着いて…！」

クロノが二人を止めようとしますが、

「うるせー！ガキはすっこんでろ…！」

二人に怒鳴られてしまう。

銀時の後ろで様子を見てるアルフは、どう動くべきか迷っていた。

その時、銀時はチラッとアルフに目配せした。

「！」

アルフは銀時の意図に気付いた。銀時は”逃げる”とアルフに目配せしたのだ。

（銀時……ありがとう…ごめんよ…）

アルフは心の中で銀時にお礼と謝罪をした。フェイトを背中に乗せたまま、気付かれないように静かに動いて、アルフは去っていった。銀時と土方はまだ言い争ってた。

「テメーには、いろいろと借りがあるからな。延滞料金も含めてキツチり返してやるぜ！」

「土方さん」

沖田が声をかけた。

「何だ？」

「金髪の魔導師、いなくなっちまいました」

沖田の言葉で、全員の視線が銀時の後ろに集まった。フェイトとアルフの姿はなかった。

「しまった！」

クロノは顔を険しくした。

「…万事屋。テメーわざと俺と口喧嘩して…」

土方は、目の前にいる銀時を鋭い目で見つめた。

「あ？何の事かわかんねーな」

「ちっ」

\*

土方は舌打ちした。

時空管理局の次元空間航行艦船「アースラ」。

緑色の長髪の女性がモニターを眺めていた。

「戦闘行動は迅速に停止。ロストログアの確保も終了。よしとしましょう。事情もいろいろ聞けそうだしね」

リンディ・ハラオウン。時空管理局提督”アースラ”艦長である。

\*

公園。

銀時達の前にリンディの映像が現れた。

「クロノ。お疲れ様」

「すみません。片方は逃がしてしまいました」

「ううん。まあ大丈夫よ」

リンディは視線を銀時達に向けた。

「その方達と話がしたいから、アースラに案内してくれるかしら？」

「了解しました。すぐに戻ります」

クロノが返事をする则映像は消えた。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「質問コーナー行くぞオ。今回は」

フェイト「フェイト・テストロッサです」

銀八「それじゃ、まずはペンネーム『黒龍』さんからの質問だ

『黒龍』では、質問に移ります」

1. アルフに質問。銀さんに惚れましたか？ 今の所あなたが一番銀さんと付き合っても問題ないですよ。

2. なのはとフェイトに質問。あなた達二人は美女ではなく、美少女なので、ぶっちゃけ銀さんと恋に落ちる事は倫理的に社会的に無理ですよ？ 諦めたら？ (笑)

3. ナナフシさんに質問。リリカルなのはが一番人気アルヒロインはぶっちゃけフェイトですよ？ なのはは次だと思っんですけど、



「どう思いますか？」一つ目だが

アルフ「あたしはその……あの……／＼／」

銀八「ありや惚れてるな。二つ目だけど……二人とも怖い」

なのは・フェイト「大人になったら出来るよオオオオオオオオオオ  
！何で毎回諦めたらなのオオオオ！」

なのはとフェイトは黒龍さんの所に飛んでいった。

銀八「黒龍確か隠れてるんだよな。……って言うかアシスタントは  
！？まあ良いや。ナナフシ最後」

ナナフシ「そうですねエ……リリカルなのはでは一番人気ですよ  
フェイト。なのはは確かに次かもしれないね……でも、僕はどっ  
ちかって言うとなのはの方が好きですけどね。だからメインヒロイ  
ンの可能性が大なんですよね。（フェイトもだけど）」

銀八「だそうだ。と言う訳で『黒龍』さん、そっちになのはとフェ  
イトが向かったから気を付けてください。最後だ。ペンネーム『支  
配者』さんからの質問だ。

『銀時に質問

甘い物以外に好きなものありますか？

ミラクル に質問

本名に戻りたいですか？面白いからそのままで言いと思いますけど

## 神楽に質問

「ってか神楽って誰？」って完全に喧嘩売ってるよ三つ目！」

銀時「そうだなア……ジャンプだろ？それ以外だったらねえ」

銀八「だろうな。二つ目だが」

ミラクル「戻りたいわアアアアアア！ナナフシがなかなか飽きないんじゃアアアアアア！」

銀八「最後だが」

神楽「支配者！それどういう事アルカ！ミラクルは覚えてて何で私は覚えてないアルカ！喧嘩売っているアルカ！なら相手をするヨ！」

神楽は支配者さんの所まで走っていった。

銀八「と言う訳で『支配者』さん。そっちに神楽が向かったのですがどうかしてください……返り討ちに合うのが目に見えてるけど。質問はここまでだ。それではまた」

第十二訓：会いたくない奴とは会うもんだ（後書き）

ナナフシ「次回は『アースラ』ですなア……僕は管理局の様な偽善  
大嫌いなんで」

銀時「そうか」

ナナフシ「と言う訳でまた次回！」

第十三訓：お茶に砂糖を入れてはいけません（前書き）

ナナフシ「もうすぐでアンケートが終わります」

銀時「そうだな」

ナナフシ「さあ、どうなるかな」

銀時「さあな」

ナナフシ「楽しみだな」

なのは「と言う訳で『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まります」

### 第十三訓：お茶に砂糖を入れてはいけません

銀時達はアースラにやってきた。

「フアンタジーの次はSFか…何でもありだな」

銀時が呟いた。

魔法やら使い魔やらジュエルシードなど、いろんなモノを見てきた銀時達は、もう驚きはしなかった。

先頭に立つてるクロノが、なのは達に振り返った。

「ああ。もうバリアジャケットとデバイスを解除しても平気だよ」

「あつ、そうですね」

なのははバリアジャケットを解除して、レイジングハートを待機状態にした。

クロノは視線をユーノに向けた。

「君も、元の姿に戻ってもいいんじゃないかな？」

「ああ、そういえばそうですね。すっかり忘れてました」

「え？」

なのはは首を傾げた。

ユーノの体が光輝く。光の中でユーノの体は、フェレットから人間の姿に変わった。見た目は、なのはとそう歳が変わらないくらいの少年の姿だ。

「えっ!？」

ユーノの姿を見て、なのはは驚いた。

銀時は、

「おお」

と呟いただけで、そんなに驚いた様子はない。

「ふう。なのはにこの姿を見せるのは久しぶりになるのかな？」

ユーノは顔を、なのはに向けた。

なのはは、驚きながらユーノを指差している。

「ふええええ!!?」

アースラに、なのはの声が響いた。

「な…なのは？」

ユーノは首を傾げた。

「ユーノ君って…ユーノ君って…！」

なのははユーノの正体に動揺を隠せないでいた。

「そんなに驚く事か？フェイトんとこのい…：…狼も人の姿に変身してたじゃねえか」

銀時は冷静に言う。

『そうだな』

銀龍もそう言った。

「お前らの間で、何か見解の相違でもあるのか？」

今まで黙ってた土方が言った。

「えっと…なのは、僕達が初めて会った時、僕はこの姿じゃ？」

「ち…違う違う！最初からフェレットだったよ〜！」

なのはは、首を横に振りながら答えた。

言われてユーノは記憶を辿った。額に指を当てて最初に会った時の事を思い出そうとする。

「ああっ！」

そして思い出した。

「そ…：…そういえば、この姿まだ見せてなかった」

「だ…：…だよね？ビックリした〜！」

なのはは大きく息を吐いた。

『ん？そういえば…』

銀龍も何かを思い出した。

『ユーノ、海鳴温泉に行った時、フェレット姿で、なのは達と入らなかったか？』

「あっ！」

ユーノは銀龍に言われて声を上げた。

「……………！！！」

思い出した、なのはは顔を赤くして俯かせた。

「いや…違うんだ、なのは！あれは……」

ユーノが、なのはに説明しようとした時、

「おい」

銀時が声をかけた。

「じゃあお前何？フェレット姿なのをいい事に、お前女湯に入ったの？」

銀時は、軽蔑の眼差しでユーノを見つめた。

「いえ…その……」

真選組の三人を見た。みんな冷たい視線をユーノに向けている。いや、沖田だけはイジメ甲斐のありそうな獲物を見つけて、ドSな笑みを浮かべていた。

『ユーノよ……』

銀龍も呆れていた。

「いや違うんです！僕はそんなつもりじゃ……！」

もはや、この場にユーノの味方はいなかった。

ユーノが絶望した時。

「ユーノ」

「銀時さん！」

銀時がユーノの前に立った。

「誰にでも間違いや失敗はあるさ。次はこうならないように気をつけな」

優しく銀時が言った。

「銀時さん……！」

ああ、僕にも味方がいた。ユーノがそう思った時。

「でもな、ユーノ」

銀時は微笑んだ。

「やっぱお前最低だろうがアアアア……！」

突然、銀時が怒声を上げた。

「ええっ……?!？」

ユーノは銀時の豹変ぶりに、驚いた。

やったらんかいイイイ！という銀時の声を合図に、土方、沖田、近藤がユーノに襲い掛かった。  
ガキだからって優しく許されると思うなよ！銀魂は甘くねーんだよ！SMシヨアの始まりでイ！と、鉄拳、蹴りがユーノに降り注いだ。  
「ぎゃああああ！！」  
ユーノの悲鳴が、アースラの中に響き渡った。  
なのはとクロノは、静かにその光景を見守る事しかできなかった。

\*

「艦長。来てもらいました」

銀時達は艦長がいる部屋に到着した。

中に入って、銀時達は少し驚いた。部屋の中には、盆栽やお茶の道具、畳や獅子脅しが置かれていた。

何この妙な和風空間？と銀時達は思った。

畳の上には、艦長のリンデイが正座していた。

「ようこそ。まあ皆さんとりあえず座って楽にしてくださいね」

笑顔でリンデイが言った。ふとリンデイはユーノの姿を見た。

ユーノは服はボロボロで、顔や腕、足には青アザが出来ていた。

「えっと…君は何かあったのかな…？」

戸惑いながらリンデイは尋ねた。

「……いえ……何もありません……」

力無くユーノは答えた。

ユーノの答にリンデイは苦笑いをした。とりあえず銀時達は畳の上に座った。

「どうぞ」

銀時達の前に、お茶と羊羹ようかんが差し出された。

「ありがとうございます」



なのはが礼を言った。

「私は時空管理局提督『アースラ』の艦長、リンディ・ハラオウンです」

それから互いに自己紹介をしてユーノ達は、これまでの事をリンディ達に話した。

「まあそうだったの。あのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのは貴方だったんですね」

話を聞き終えたリンディが言った。

「…それで僕が回収しようと…」

「立派だわ」

「だけど同時に無謀でもある！」

クロノの言葉に、ユーノは顔を俯いてしまう。

「あの、『ロストロギア』って何なんですか？」

なのはがリンディ達に尋ねた。

\*

銀時達はリンディ達から『ロストロギア』について話を聞いた。

次元空間の中には幾つもの世界が存在する。その中には、他の世界よりも進化しすぎた世界がある。その世界を滅ぼした危険な技術の遺産。それらを総称して『ロストロギア』と呼ぶ。使い方によっては世界どころか次元空間を滅ぼす程の力になる。

話を聞いた、なのは達は自分達がとんでもなく危険な物に関わっていた事を理解した。

ふと、なのははリンディを見た。

リンディはお茶の中に角砂糖を入れていた。

「あっ！」

お茶に角砂糖を入れるという行為に、なのはは驚いた。しかもリン

デイは何の躊躇いもなく、角砂糖を入れたお茶を飲んだ。

（まるで主だな）

銀龍は、そう思いながら銀時を見た。

銀時は、リンデイの行為を見ながら不敵な笑みを浮かべていた。

（おもしろえ）

対抗心を燃やした銀時は、角砂糖が入ってる器に手を伸ばした。なのは達とリンデイ達が、銀時の動きに気がついた。銀時はみんなの視線を浴びながら、リンデイが入れた倍くらいの数の角砂糖をお茶に入れた。

「なっ!?!」

銀時の行為にリンデイは驚いた。リンデイだけでなく、なのは達も驚いてる。

銀時は、リンデイの前で沢山の角砂糖の入ったお茶を飲んだ。

（まさか、この男も私と同じ!?!?しかも私よりも多く角砂糖を入れた!?!）

リンデイは目を見開いて驚いた。隣に座ってるクロノも目を丸くしている。

銀時はリンデイに不敵な笑みを見せた。

「!?!」

銀時の笑みを見たリンデイは、更に角砂糖をお茶の中に入れた。

「か…艦長!?!」

クロノが驚きの声を上げた。

（さあ、これで私の勝ちよ!）

そう思つて、リンデイは銀時を見た。

「!?!?!」

そして驚愕した。

銀時のお茶の中には、更に足した角砂糖と、お茶と一緒に出された『羊羹』が入っていた。

（よ…羊羹をお茶の中に!?!?!?わ…私でもそんな発想はできなかつたわ!?!）

動揺しながら、リンディは銀時の顔を見た。

銀時は、またも不敵な笑みを浮かべてリンディを見ていた。

（ふん！糖尿病寸前まで糖分摂取をしてきた俺に敵うと思ったのか？）

銀時は邪悪な笑みを浮かべた。

「俺とあんたとじゃ、糖の器が違う」

「！！」

銀時の言葉を聞いて、リンディは畳に両手をついた。

「わ…私の負けだわ」

悔しそうにリンディは顔を俯いた。

「いや、何がやりたいんだ二人とも？」

銀龍がツツコンだ。

『くだらない争いをしてどうするまよ』

「バカヤロー銀龍。ここで引いたら、糖分王の名折れだろうが」

言って銀時は、角砂糖と羊羹が入ったお茶を飲んだ。

『そんな称号いらぬだろ』

と、銀龍が銀時にツツコンだ時、

「刀の言う通りだ」

土方が口を開いた。

「お茶に角砂糖を入れるなんざ、テメーらの味覚はどうかしてるぜ」

そう言う土方は、お茶の中にマヨネーズを入れていた。

『お前もだろうが！』

即座に銀龍がツツコンだ。

『何故お茶にマヨネーズを入れる！？』

「食い物だけでなく飲物にもマヨネーズを混ぜるのが、一流のマヨラーってもんよ」

土方はフツと短く笑った。

『全然格好良くないぞ！？』

三人の味覚馬鹿のせいで、場の緊張感は完全に消えていた。

なのは達は、銀時達の並外れた味覚に、ただただ目を丸くして驚く

しかなかった。

リンディが敗北から立ち直って顔を上げた。コホン、と小さく咳をする。

「これよりロストロギア『ジュエルシード』の回収については、時空管理局が全権を持ちます」

「えっ!？」

リンディの言葉に、なのはとユーノは戸惑った。

「君達は今回の事は忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

「でも…そんな…」

「次元干渉に関わる事件だ。これ以上民間人を巻き込むわけにはいかない」

なおも戸惑う、なのはにクロノが言った。

「まあ急に言われても気持ちの整理がつかないでしょう。今夜一晩ゆっくり考えて、それから改めて話をしましょう」

リンディが、なのは達に言った。

土方は、リンディの言葉に目を細めた。

「ちよつと待て」

クロノが、なのは達を送ろうと立ち上がったところで、土方が口を開いた。

「何かしら？」

リンディが土方に顔を向けた。

「何で考える時間なんて与える？民間人を巻き込むつもりが無いなら、そんなもんは必要無いだろ」

煙草に火をつけながら土方が言う。

本当に事件から手を引かせようと考えているなら、話し合う時間など必要無い。なのに何でリンディはあんな事を言ったのか。

「まっ、あんたの考えてる事は大体読めてるがな」

フーッと、土方は煙草の煙を吐いた。

「大方、コイツらの方から協力を申し出るように誘導して、足りな

い人員を補強しようって魂胆だろ？」

土方の鋭い眼がリンディを射抜く。

いや、土方だけではなく近藤、沖田、銀時も眼を鋭くしている。三人もリンディの考えに気付いていたようだ。

「……………」

リンディは無言で表情を険しくした。

「本当ですか艦長！？」

クロノがリンディに尋ねた。どうやらクロノの方は、本心から手を引かせようと考えていたようだ。

「そんな姑息なマネしねーで、堂々とソイツらに頼んだらどうだ？ そしたら俺も余計な口は挟まねえ。決めるのはソイツらだからな」  
そう言つて、土方は腕を組んで目を閉じた。

「リンディ艦長。立場上、あなたの方から民間人に協力を頼めないのはわかる。だが、だからと言ってこのような手段で彼女達を巻き込む事を、俺達は認めることはできん！」

近藤がリンディに言った。

しばらく場が沈黙に包まれた。

「あ…あの…！」

なのはが沈黙を破った。

「私にお手伝いさせてください！」

全員が、なのはへ振り向いた。

「その…リンディさんに言われなくても…きっと私、自分から頼んでいたと思います」

「し…しかし……………」

なのはの言葉にクロノが戸惑う。

「お願いします！」

立ち上がって、なのはは頭を下げた。

「ぼ、僕もお願いします！」

ユーノも立ち上がって頭を下げた。

「だつとよ艦長殿」

銀時が笑みを浮かべて言った。

「俺もあんたのやり方は気に入らねえ。だがコイツらは、あんたに言われたからじゃなく、本当に自分の意志で手伝うと言ってる」

銀時は真っ直ぐにリンディを見つめてる。リンディも銀時の視線を受け止めてる。

「……わかりました。あなた方の乗艦を許可します」

「艦長！？本気ですか!？」

「二人の善意を利用してしようとした私には、この頼みを断る事は出来ません」

リンディは静かに語った。

「高町なのはさん。ユーノ・スクライアさん。先ほどは、あなた達を利用してしようとして申し訳ありませんでした」

リンディは二人に頭を下げた。

「い……いえ……そんな……」

頭を下げられて、なのははあたふたする。リンディは頭を上げた。

「ご協力に感謝します。それと改めて、二人ともよろしくお願いします」

「は……はい！よろしくお願いします!」

「お願いします!」

こうして、なのは達は管理局に協力する事になった。

「では、なのはさんは一度ご家族とお話をして、また明日、公園にきてください」

「はい!」

「クロノ。二人を元の世界へお送りして」

「……はい」

クロノはまだ納得していないようだったが、渋々了解した。なのはとユーノ、クロノが部屋から出ていった。

リンディは銀時に顔を向けた。

「あなたはどうしますか?」

「あ?俺か?」

銀時はお茶を飲み干した。

「俺達も協力させてもらうぜ。あいつらだけじゃ心配だからな」

『なのはとユーノが心配だしな……それにフェイトもだ』

銀時と銀龍はそう言った。

「わかりました。あなた方もこれからよろしくお願いします。それと……先ほどは失礼しました」

リンディは、なのは達を利用しようとした事を銀時達にも謝った。

「まあ……アイツらなら、どっちにしろ協力を申し出たかもな」

銀時が言った。

『そうだろうな』

銀龍も答えた。

「後、一つ聞いて良いですか？」

「何だ？」

リンディが銀時に訪ねる。

「その銀龍は本当にデバイスではないと？報告は受けましたが『喋る刀』なんて」

「ああ、こいつはデバイスじゃねえぜ」

『うむ、皆がそう言うからな』

銀龍はそう言った。

「わかりました」

リンディが承知した後、沖田が立ち上がった。

「あゝ俺、腹減っちゃいましたよ。そろそろ飯にしませんかい？」

「そうだな」

沖田の言葉で、全員が立ち上がった。

「それじゃあ食堂へ案内します」

リンディが先頭に立って銀時達を案内した。

(……フェイトとアルフのやつ……大丈夫だろうか?)

二人の事を思いながら、銀時はリンディの後を歩いた。

(銀時は次元漂流者だから保護してくれるよね)

フェイトは銀時が心配であった。

「…ねえフェイト…もう止めようよ…」

アルフはフェイトに詰め寄った。

「本気で捜査されたら…此処だつていずれはバレちゃうよ」

「…でも私、母さんの願いを叶えてあげたいの」

「あたしは…！」

アルフが声を荒げる。

「フェイトには幸せになつてほしいんだよ！フェイトが泣いたり悲しんだりすると、あたしの胸も苦しくなるんだよ！」

アルフは床に伏せて、必死にフェイトを説得した。

「アルフと私は精神がリンクしてるから、私の感情が流れちゃって  
いるんだね…ごめんね。私、もう泣かないよ」

フェイトの決意は固かった。アルフの説得もフェイトには届かなかった。

「なら…約束して…あの女の為じゃなくて、フェイトは自分の為  
に頑張るつて！そしたらあたしは、全力でフェイトを護るよ！」

「うん。ありがとうアルフ…」

フェイトは、優しくアルフの頭を撫でた。

(銀時…)

フェイトの表情が少し暗くなった。

(ごめんね銀時…無理しないつて約束…破るかもしれない)  
フェイトの目から一筋の涙が流れた。

(あれ…？もう泣かないつて…決めたばかりなのに…)  
アルフは顔を俯いていて、フェイトが泣いている事に気付いていな  
い。

(銀時…)



銀時の事を考えると、胸が苦しくなる。

(…会いたいよ……銀時……)

フェイトは、アルフに気付かれないように、そっと涙を拭いた。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生……!」

銀八「ハイ、質問コーナー始めるぞ。今回のアシスタントは」

ユーノ「ユーノ・スクライアです」

銀八「それじゃあ行こうか」

ユーノ「ペンネーム『黒龍』さんからの質問

『黒龍』そうですかそうですか。もう良いです。こうなれば質問で  
報復してやります!! 質問です」

1.なのはとフェイトに質問。なんと銀さんのタイプはグラマーな  
人らしいです。残念でした。

2.フェイトに質問。銀さんが、“あ、俺ガキは無理だからお前と  
は付き合いねえわ”とか言っていました(黒笑)

3.なのはとフェイトに質問。なんとリリカルなのはの人気投票で  
はフェイトが圧倒的票数で一位だそうです。二人はどう思いますか  
? 『完全に報復してますね』

銀八「だな。一つ目だが」

なのは「なら、なれる様に頑張る！」

フェイト「私も！」

銀八「Strikers編では大人だもんな。二つ目だが」

フェイト「そうなんだ……」

フェイトは暗い顔をする。

銀八「大人になった時を考えろよ」

フェイト「そうだね！」

フェイトは立ち直った。

銀八「三つ目だけど」

なのは「凄い人気だねフェイトちゃん」

フェイト「私人気あるんだ」

銀八「だそうだ……って何二人ともデバイスとバリアジャケット出してんの？」

なのは「また苛めの質問でしたからア」



『遊戯王の主人公が使うエースモンスターの攻撃力は大抵2500』  
・『遊戯王の主人公が最初に戦うデュエリストのエースモンスターの攻撃力は大抵3000』では土方さんと決闘デュエルしましたが、見事に大勝利しました。  
そして土方に向かって負け犬と叫びましたがその感想を

マヨラーへ

貴方は銀時に決闘デュエルで敗れてしまい、あげくに負け犬と言われちゃいました。  
そのご感想を（黒笑）

なのは・フェイトへ

新八の前のデッキは女の子をばかり入れていたハーレムデッキですが、そんな新八のデッキのご感想を（黒笑）『銀さん』

銀時「いい気味だぜ そのままもつと負けちまえ」

銀八「だそうだ。で、負け犬」

土方「誰が負け犬だ！負け犬だとオオオオオオ！納得いかねえ！万事屋ア！斬ってやらあ！」

銀時「無駄無駄」

銀時は土方から逃げている。

銀八「最後だが」

なのは「……最低ですね」

フェイト「私もそう思う」

ミラクル「ガーン」

銀八「と言う訳で『黒神』さん廊下に立ってなさい」

ユーノ「質問は以上です」

銀八「また次回」

第十三訓：お茶に砂糖を入れてはいけません（後書き）

ナナフシ「追試タルかった」

銀時「ご苦労さん」

ナナフシ「と言つ訳でまた次回！」

第十四訓：鎖で遊んではいけません！（前書き）

ナナフシ「連続投稿！」

銀時「おい！」

ナナフシ「暇で暇で」

銀時「知るか！」

フェイト「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始  
まります」

## 第十四訓：鎖で遊んではいけません！

ここはアースラの食堂

『思えばこの連中は、アニメの世界だと知っているのか？』  
銀龍が疑問に思い訪ねる。

「リンディ艦長とクロノには、この世界がアニメの世界である事を教えてある」

「まあ最初はリンディ艦長達も、自分達がアニメのキャラクターである事には信じられなかったみたいだがな」

近藤が腕を組んで言う。

「そりゃあそうだ。自分達がアニメのキャラクターで、住んでいる世界が架空の世界だなんて、すぐに信じられるわけがない。」

「ちよつといいかな？」

なのは達を送りに行ったクロノが、戻ってきた。

「銀時。貴方に聞きたい事があります」

「あ？何だ？失望官さん」

「失望官じゃない！執務官だ！！いい加減覚える！」

「わーったよ」

銀時は、手をヒラヒラ動かしながら答えた。

クロノが、コホンと咳をする。

「貴方はあの金髪の魔導師と一緒に行動していた。彼女の目的は何だ？」

真剣な表情で銀時に尋ねるクロノ。

だが、銀時は。

「あつ、すんませーん。チョコレートパフェお願いしますーす。え？話何だっけ？」

「人の話を聞けエエエエ！！」

叫びながらクロノは、強くテーブルを叩いた。

「あゝはいはい。アイツの目的ね」



「ちゃんと聞いてたのか!？」

クロノは肩で息をしている。

「おいおい、もう疲れたのか？新八だったらもつとイケるぜ？」

「聞かれた質問にだけ答える!!それに新八って誰だ!？」

『落ち着いたらどうだクロノよ』

銀龍に言われて落ち着くクロノ。

「質問の答ね。目的はわかんねーよ。俺人質みたいなもんだったから」

「そうか……」

クロノはそれで引いた。

「明日の会議で、君達の事を紹介する。遅れずに来てください」

「へいへい」

銀時は軽く返事をし、クロノは食堂を去っていった。

\*

翌日。

アースラの会議室。

局員達が椅子に座ってる。

その中には万事屋、真選組、なのはとユーノの姿もあった。なのはとユーノは、緊張のせいか表情が固い。

リンディが局員達に、これからの事について説明している。

「……というわけで本日もって、本艦の任務はジュエルシードの回収に変更されます」

局員を見渡しながらリンディが言う。

「また、今回は特例として問題のロストログアの発見者であり、結界魔導師でもあるこちら」

リンディがユーノを見る。

「はい！ユーノ・スクライアです！」

ユーノは緊張しながら立ち上がり、自己紹介をした。

「それから彼の協力者でもある現地の魔導師さん」

「た…高町なのはです！」

なのはもユーノ程ではないが、緊張しながら自己紹介をした。

「最後に真選組以外の一般の協力者です」

「主よ」

銀龍が喋った事にやはり皆が驚いた。

銀時と銀龍はそれを無視した。

「たくつ、しょうがねえなア」

メンドくさそーに銀時は立ち上がった。

「どーも。坂田銀時です。趣味は糖分摂取で、キャプテンを志望してまゝす」

緊張した様子もなく、ダラけた声で自己紹介する。

『我はこの主の相棒の銀龍だ』

銀龍も挨拶をした。

「え…えつと…彼らが臨時局員となって事態にあたってくれます」

「よろしくお願ひします！」

なのは、ユーノは頭を下げて挨拶する。

銀時は椅子に座って欠伸あくびをかいている。

真選組の三人はそれを見て頭を抱えた。

\*

森の中。

なのは達は管理局が見つけたジュエルシード発見場所にいた。

そこには不死鳥のような姿の巨大な怪鳥がいた。怪鳥は、ユーノの緑色の鎖に繋がれて鳴き声を上げながら暴れる。

「あゝあゝダメでさア、ユーノ」

そう言いながらユーノに近づいたのは沖田だった。

「沖田さん？」

「鎖の締め具合が甘えぜ。もっとキツく締めな」

そう言つて沖田は、一本の鎖を思いつきり引つ張つた。

「グアアアアア！！」

怪鳥は先ほどよりも大きな悲鳴を上げながら暴れた。

「おっ、なかなかいい悲鳴上げるじゃねえか。道具持ってきてくりゃあよかつたな」

沖田は、道具を持つてこなかつた事を心底後悔した。

「あの…この鎖は相手を痛ぶるための物じゃないんですけど…」

ユーノは、やんわりと沖田に言つた。

「他に道具はねえのかイ？」

「いや…それは……」

沖田の質問に、ユーノは困つた顔をする。

「じゃあ鎖の数もつと増やしな」

「いや貴方、鬼？」

二人がそんなやり取りをしてる間に、なのははジュエルシードを封印した。

「あゝ全然イジメ足りなかつたけど、仕方ねえや」

沖田は少し残念そうな顔をした。

そんな沖田を見て、なのはとユーノは顔を引きつらせた。

\*

遺跡。

フェイトとアルフがいた。

「フェイト。ダメだ。また空振りみたいだ」

「そう」

フェイトは目の前にある遺跡を見つめた。

「やっぱり向こうに気付かれずに、隠れて探すのは難しいよ」  
「うん。でも、もう少し頑張ろう」  
フェイトは空を見上げた。

(銀時…今頃どうしてるかな?)

\*

時の庭園。

プレシアは一人王座に座っていた。

(フェイト…今頃、私のためにジュエルシードを集めてるのかしら……)

プレシアは考えた。

(坂田銀時…あの男の言葉を聞いてから…何故かフェイトの事を考えるようになったわ……)

銀時に言われた言葉を思い出す。

「ああ…そうか……」

プレシアは気付いた。

「フェイトはフェイト。あの子はアリシアの代わりなんかじゃない……こんな事に今まで気付かなかったなんて…」

プレシアはため息をついた。

「アリシアもフェイトも私の娘。私は二人の母親」  
ようやく気付いた真実。

プレシアは、自分にこの事を気付かせてくれた男を思い浮かべた。

「銀時…魔法も使えないただの人間が、この大魔導師に向かってあんな事を言うなんて…いい度胸をしているわ」

プレシアは短く笑った。

「…自分の大切なものを…自分で傷つけていたなんて……」

プレシアは自嘲の笑みを浮かべた。それからプレシアの表情は、少しずつ暗くなっていた。

「何故…」

手が震える。

「何故…… やつと大切なものに気付いたのに……」

目には涙が浮かぶ。

「私は死に近づいていくの？」

あの男のお陰でようやく気付いたのに。 フェイトが大事だって気付いたのに。

プレシアは両手で顔を覆った。

「……フェイト……」

自分の娘の名を言いながら、プレシアは涙を流した。

\*

クロノとオペレーターのエイミー・リミエツタがフェイトについて調べていた。

「フェイト・テストロッサ。かつての大魔導師と同じファミリネームだ」

画面を見ながらクロノが言った。

「じゃあ、その関係者かな？」

「わからない。偽名かもしれない。でも、もしかしたら、その大魔導師と繋がりがあるかもしれない」

\*

銀時達がアースラに移ってから十日目。なのはが回収したジュエルシードは8、9、10の計三つ。

一方、フェイトが回収した数は2、5の計二つ。残るジュエルシードは六つ。だが、その残り六つが見つからずにいた。

銀時達は食堂にいた。

それぞれ料理を持って、席に着いたのだが。

「……………」

なのはとユーノは、苦い顔をしていた。原因は銀時と土方にあった。銀時は白いご飯の上に大量の『小豆』をかけた。

土方はカツ丼の上に大量の『マヨネーズ』をかけていた。

小豆テンコ盛りの『宇治銀時丼』と、マヨネーズたっぷり『カツ丼土方スペシャル』。

「銀さん……土方さん……それは？」

なのはは恐る恐る聞いてみた。

「ん？宇治銀時丼だ」

「土方スペシャルだ」

二人はそう答えた。

「食うか？」

銀時がなのはに宇治銀時丼を差し出した。

『主……さすがにそれは』

「あの……じゃあ……一口だけ」

『なのは！？』

銀龍は驚いた。

「やめとけ。そんなのまずいに決まってる」

土方が言う。

「お前の犬の餌と一緒にするな」

「何を！？」

銀時と土方は睨み合っている。

なのははと言うと。

ゆっくりと宇治銀時丼に箸を伸ばし、少し掴んで口の中に入れた。

もぐもぐ、と口の中で噛んで飲み込んだ。

「おいしい」

「おっ、マジで」

銀時は少し身を乗り出す。

「うん！凄くおいしいよ銀さん！」

なのはは目を輝かせている。

「おおっ！やっとこの味がわかる奴に出会えたぜ！」

なのはと言つ同士が見つかつて大喜びする。

『マジで?』

その場に居た皆が呟いた。

「万事屋」

「何だゴリラ」

近藤が銀時に声を掛けた。

「フェイトちゃんを管理局に保護を頼まなくて良いのか?」

近藤が銀時に聞く。

公園の時に、体を張ってまでフェイト達を護つたのだ。銀時なら、リンディ艦長に頼んでフェイト達を保護して貰おうと考えそうなのだが。

「今、アイツらを管理局に保護してもらっても、何の解決にもならねえんだよ」

宇治銀時井を食べながら銀時は答えた。その顔は険しかった。

「何かワケありか?万事屋」

近藤が銀時に尋ねた。

「ああ。まあな」

銀時は、井と箸をテーブルに置いた。

「アイツはよお。ガキのくせに一人で何でも背負おうとして、無茶ばっかする厄介なヤツなんだよ」

そう言つて銀時は頬杖をついた。

「銀さん」

「ん?」

なのはが唐突に銀時に話し掛ける。

「私もね。小さい頃はよく一人だったんだ」

「…そうなんだ」

銀時は頬杖を解いて話を聞く。周りの皆も黙つて話を聞いている。

「私が小さい頃に、お父さんが仕事で大怪我しちゃって…しばらくベッドから動けなかった事があるの」

なのはは話を続ける。

「喫茶店も始めたばかりで、まだ人気はなかったから、お兄ちゃんやお母さんもずっと忙しくて」

「……………」  
なののは話を、銀時は黙って聞いている。

話をしている時の、なののは顔は少し寂しい表情をしていた。

「お姉ちゃんは、ずっとお父さんの看病で…………だから私、割と最近まで家にいる事が多かったの」

そう言っつて、なののは笑顔を作った。

「銀さん」

「ん？」

「一人ぼっちの子にしてあげるのは、大丈夫って優しく言う事でも、心配する事でもないと思うんだ」

「……………」

銀時は黙っつて、なののは答を待つ。

「同じ気持ちに分け合える事。悲しい気持ちも寂しい気持ちも半分にできる事だと思うんです」

なののは答を言う。

答を聞いた銀時は、静かに目を閉じた。

銀時も最初は一人だった。家族もいない。一人で生きてきた。そんな銀時を一人の人物が拾った。

それから銀時には仲間ができた。気持ちを分け合い、解り合える大切な仲間。

だが、その仲間の多くを天人との譲夷戦争で失ってしまった。

そして時を経て、銀時に新しい仲間。いや、家族と呼べる者達があった。

銀時は目を開けた。

「…そうだな」

そう言っつて銀時は微笑んだ。

その時、アースラ内に緊急事態のアラームが鳴った。



**第十四訓：鎖で遊んではいけません！（後書き）**

ナナフシ「次回は竜巻と対決」

銀時「俺も行くのか？」

ナナフシ「それは次回を待っていてください！」

第十五訓：乱入者っているんだね（前書き）

ナナフシ「調子に乗って三話連続投稿」

銀時「おい！」

ナナフシ「今回は『黒神』さんのリクエストです」

銀時「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まるぞ」

## 第十五訓：乱入者っているんだね

曇天の海。

海上には巨大な金色の魔法陣が展開されていた。

「アルタス、クルタス、エイギアス……」

魔法陣の上には、呪文を唱えてるフェイトがいた。

魔法陣から少し離れた場所には、狼形態のアルフが心配そうにフェイトを見つめていた。

（海の中にあるジュエルシードの位置を特定するために、電気の魔力流を海に叩き込んで強制発動させる。それは間違ってないけど……）  
アルフの表情が険しくなる。

「はああああ！！」

呪文を唱え終えたフェイトが、海に向かって巨大な雷を放った。

海から六つのジュエルシードの光の柱が現れる。

「見つけた……残り六つ！」

フェイトの呼吸が荒くなる。

（これだけの魔力を打ち込んで、さらに全てを封印するなんて……いくらフェイトの魔力でも絶対限界を超えてる！）

フェイトの心配をしながら、アルフは数日前まで自分達と一緒にいた、銀髪の男を思い浮かべた。

（銀時…… あんたなら……フェイトを上手く抑えられたのかな？）

アルフが考えていると、

「アルフ！」

フェイトがアルフに声をかけた。

「空間結界とサポートお願い！」

「あ……ああ！任せといて！」

フェイトの言葉でアルフは考えを切り替えた。

（弱気になるな！あたしはフェイトの使い魔なんだ！銀時は体を張

ってフェイトを護ったじゃないか！だったら！）  
アルフは決意を固めた眼をする。  
（あたしも全力でフェイトを護るんだ！！）  
フェイト達の前で、ジュエルシードの光は巨大な竜巻になった。  
「いくよバルディッシュ。頑張ろう」  
バルディッシュを構えて、フェイトは嵐の中を飛んだ。

\*

緊急事態のアラームを聞いた銀時達は、ブリッジに入った。  
銀時達は画面を見た。ジュエルシードの力に弾き飛ばされても必死に戦うフェイトの姿が映っていた。

「フェイト！」

「フェイトちゃん！」

銀時となのはが、フェイトの名を叫んだ。

「なんとも呆れた無茶する子達だわ！」

画面を見ながらリンディが呆れ半分、心配半分に行った。

「無謀ですね。間違いなく自滅します」

クロノが悪びれた様子もなく言った。

その言葉に、銀時は眉をひそ顰めた。

「あれは個人が出せる魔力の限界を越えている」

「あの…私急いで現場に行きます！」

なのはが、ブリッジの転送装置に行こうとした時、

「その必要はないよ。放っておけば、あの子は自滅する」

クロノがそれを止めた。

「!？」

クロノの言葉に、なのはは驚いた顔をして動きを止めた。

銀時と真選組の三人は、表情を険しくした。

「仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところを叩けばいい。」

「でも…」

クロノの非情な言葉に、なのはは戸惑った。

「今のうちに捕獲の準備を」

「了解」

クロノの指示を受けたオペレーターが準備をする。

「私達は、常に最善の選択をしなきゃいけないの。残酷に見えるかもしれないけど、これが現実よ」

リンデイが険しい表情で画面を見上げた。

フェイトは、まだジュエルシードを封印しようと必死に戦っていた。画面を見上げていた銀時が口を開いた。

「最善の選択？最低の選択の間違いだろ」

「何だと!？」

クロノは、振り返って銀時を睨んだ。

「俺達のいた世界にも、幕府って組織があるが…どうやらテーマも、幕府と同じくらい腐ってるみてえだな」

「貴様…！口を慎め!!」

クロノが銀時に向かって叫んだ。

直後、銀時の眼がカツと見開かれた。

「目の前で苦しんでるヤツらを救おうともしねーで、世界を管理するなんて大層な事吐かしてんじゃねエエエ!!!」

銀時の怒声がブリッジに響き渡った。

その声にクロノとリンデイだけでなく、ブリッジにいる局員全員がたじろいだ。

『主の言う通りだ!』

銀龍も流石に怒りだして怒鳴って叫びだす。

『世界を救う前に、目の前で必死に戦ってる少女を救ったらどうなんだ!？苦しんでる女の子を見捨てるなんて、お前ら薄情者以前に、そこらの罪人と変わりはない屑野郎だ!』

「ざ…罪人!？」

銀龍がリンデイ達に向かって怒鳴った。

世界を救う為とは言え他人の命を見捨てるような行為…いや、他人の命を犠牲にしてまで自分の都合勝手な正義を突き通すような行為は偽善な考えで銀龍が怒らない訳には行かなかった。

「き…君達は…！」

銀時と銀龍の言葉に、クロノは歯を食いしばる。

「今のはクロノ達が悪い、そして万事屋の言うとおりだ」

と土方は鋭い視線でクロノ達をにらみつける。

土方は、静かに煙草とライターを取り出した。

「確かに何を優先させるべきかは、俺にもわかる。だがな、目の前で弱ってるガキを見捨てるテメーらを見ているだけで虫唾が走るぜ」

「土方さんまで!？」

土方の言葉に、クロノは大きく目を見開いた。

続いて沖田が言った。

「目の前で苦しんでる奴がいたら、いい奴だろーが悪い奴だろーが手え差し伸べる。でしたよね?近藤さん」

「その通りだ」

沖田の言葉に、近藤は大きく頷いた。

それから近藤はリンディを見つめた。

「リンディ艦長。俺達はあんたの部下でも管理局の者でもない」

隣にいる土方と沖田も、目を鋭くしてリンディを見つめた。

「俺達は真選組だ!」

毅然とした態度で近藤が言い放った。

銀時達や真選組の言葉に、クロノは表情をどんどん険しくした。

「貴方達は、事の重大さがわかってているのか!? おふざけはその変な天然パーマに変なマヨネーズ方のライターだけにしろ!」

ブチイ x 2



銀時はなのはに近づいてなのは自身の気持ち聞きに来た。

「なのは……てめエは、フェイトを助けたいか？」

「はい！私は…フェイトちゃんを助けたいです！」

なのはの言葉に、なのはは決意のこもったまなざしでそう言う。銀時は『OK』と言うと、ユーノに振り向く。

「ユーノ、転送魔法でなのはをフェイトの元に移動させる！」

「は……はい」

ユーノの足元から魔法陣が現れた。なのはもユーノの魔法陣に入ろうとしたその時だった。

「待って！」

声が聞こえ、なのはは振り向くと、リンディだった。リンディはオペレータに目配せをし、転送装置を起動させた。

「行動…許可します。気をつけてね」

「……はい、ありがとうございます！！」

「急ごう、なのは！」

リンディにお礼を言って、なのははユーノと一緒に転送装置に向かった。

\*

荒れ狂う海上で、フェイトはバルディッシュを構えて竜巻に突っ込もうとする。もう何度弾かれたかわからない。バルディッシュの魔力の刃も失った。

それでもジュエルシードを封印しようとした時。

「……！」

バリアジャケットを着て、レイジングハートを持った、なのはが現れた。

「フェイトの邪魔するなアアア！！」



なのは気付いたアルフが、噛み付こうとする。間にユーノが入り、魔法陣を展開してアルフを止めた。

「待ってくれ！僕達は戦いにきたんじゃない！」

「えっ!？」

アルフが驚きの声を上げる。

「今はジュエルシードの封印を！」

叫んで、ユーノは巨大な緑色の魔法陣を展開した。魔法陣から緑色の鎖を放ち、竜巻に巻きつけて動きを抑える。

「フェイトちゃん！」

なのはは、フェイトの隣に移動した。

「二人でジュエルシードを止めよう！」

レイジングハートの赤い玉から、桜色の魔力が出る。桜色の魔力は、バルディッシュの黄色い玉に入っていた。

「Power charge」

バルディッシュに魔力の刃が戻る。

「Supplying complete」

フェイトは隣にいる、なのはに顔を向けた。

なのはは、頷いて応える。

ユーノが必死に竜巻を抑える。途中からアルフもオレンジ色の鎖を放って、一緒に竜巻を抑える。

「ユーノ君とアルフさんが止めてる今のうちに！」

隣にいるフェイトに顔を向ける。

「二人で”せーの！”で一気に封印するよ！」

レイジングハートを構える。

「デイバインバスター、フルパワー！」

「All right, my master」

なのはの足下に、巨大な桜色の魔法陣が展開された。

フェイトもバルディッシュを構えて、巨大な金色の魔法陣を展開する。

「せーの！」

なのはが合図する。

「サンダー……」

「デイバイン……」

二人ともデバイスを構える。

「レイジー……!!」

巨大な雷が、竜巻に向かって放たれた。

「バスター……!!」

桜色の閃光が竜巻に直撃した。

金色の光と桜色の光が六つの竜巻を飲み込んだ。

\*

アースラのブリッジ。

「ジュエルシード、六個全ての封印を確認しました！」

オペレーターのエイミーが報告する。

「な……なんてデタラメな……!!」

クロノが驚く。

クロノだけでなく、ブリッジにいる全員が驚いていた。

「こいつぁスゲーや」

画面を見て、沖田が呟いた。

銀時は小さく微笑んだ。

その時だった。

「未確認物体がジュエルシードに近づいています!!」

オペレーターが声を上げた。

「……!!」

皆は驚いた。

「モニターに出せる?」

「はい!!」

モニターには機械らしきものが映っていた。

「おいおい、まさか雷雅の所の！」

「雷雅！？あいつもこの世界に来ていやがるのか！？」

土方は驚いた。

雷雅は自分の世界では殺人犯として指名手配されているのだ。

しかも全員浪人だ。

戦闘狂である雷雅は強者を求めているのだ。

機械は人型で、背中には悪魔の翼みたいのがあり、腰には刀を挿してある。

「ちっ！」

銀時は転送装置に向かった。

「何処に行くの！？」

「俺も行くんだよ！」

そう言つと銀時は行ってしまった。

\*

海上。

フェイトと、なのはの前に六つのジュエルシードが現れた。

嵐は収まり、雲が割れて太陽の光が差し込む。

「えっと…半分こ…で良いよね？」

「……………」

フェイトは無言で頷いた。

半分ずつジュエルシードを回収し、全てのジュエルシードを封印した。

回収を終えたフェイトは、アルフを連れて、その場から立ち去ろうとした。

その時だった。

「！！！」

機械がフェイトとなのはの元に向かってきているのだ。しかも腰にある刀を抜いて……。

「何あれ！？」

なのはは驚いていた。

フェイトは魔力弾を撃つが刀で弾かれる。

「！！！」

フェイトは驚いた。

そして、そのままフェイトに刀を振り下ろしてきた。

「フェイトちゃん！！」

なのはが叫んだ。

フェイトは目を閉じた。

ガキイイイイン！

金属同士がぶつかる音がした。

目を開けると銀色の魔力を纏っており、その魔力で出来たドラゴンの翼を広げた銀時が銀龍を使って、そいつの攻撃を防いでいた。

「銀時！」

フェイトは銀時の名前を呼んだ。

「危ねえ……」

銀時はギリギリだな、と言う感じだった。

そして、そのまま銀龍を振るい、機械は後ろに後退する。

「大丈夫かフェイト？」

銀時が言う。

「うん」

フエイトは答える。

「さてと……やりますか」

銀時は銀龍を構えた。

『そうだな』

そして動き出した。

\*

「銀時が魔法を使っているだと!?!」

クロノは驚いていた。

クロノだけじゃない、アースラ全員が驚いていた。

「え?あれって魔法なの?」

「凄いですねエ旦那。前から使っているのは見ていやしたが、まさか魔法だったとは」

「銀龍のおかげだったな」

土方の言葉を聞いてリンディは思う。

(銀龍……デバイスでもないのに持ち主が魔力を使える様にするなんて……一体)

リンディは不思議に思った。

\*

「オラア!」

銀時が銀龍を振り下ろす。

機械はそれを刀で防ぐ。

「ちっ!」

銀時はそのまま蹴飛ばした。  
白銀シルバー・オブ・アーマーの鎧のおかげで身体能力も上がっており、蹴りは通常より強かった。

機械はそれを喰らい、怯む。

銀時は銀龍を鞘に納めた。

そして、一瞬にして相手に近づき、抜刀した。

すると機械にいくつもの斬撃が入る。

「瞬銀」

銀時は呟いた。

だが、機械はまだ壊れては居なかった。

「随分頑丈で」

コアに当たってなかった様だ。

銀時は魔力を溜め始める。

（あの技を使うか）

銀時はそう考えた。

それを狙う様に肩にあったランチャー二つを銀時に向ける。

「ちっ！」

銀時は弾を切り裂くつもりだった。

だが、ランチャーの先端に何かが溜められている。

『主！あれは魔法の砲撃だ！』

銀龍は言った。

「ちっ！なら！」

銀時はそのまま魔力を溜めるのに集中する。

そして……。

機械から魔法が放たれた。

「こっちも丁度終わったぜ！」

銀時がそう言っていると魔力を白銀の龍にして撃ちだした。

「はくてんりゅう白天龍！！」

それはだいぶ大きく、しかもスピードがだいぶあった。

「あっ、通常より溜めすぎたかも」

銀時がそう呟いた。

そのまま相手が放った魔法は打ち消され、機械を白銀の龍が飲み込んだ。

跡形もなく吹っ飛んだ。

『…………』

その場に居たなのはやフェイトはもちろん、アースラの皆までもが驚いていた。

白銀の龍はそのまま天に昇っていった。

『主…………溜めすぎだ。あやつなら中間ぐらいで十分だ』

「やつぱ？」

銀時と銀龍は普通に話をしていた。

フェイトはそのまま去ろうとする。

「待てフェイト」

銀時がフェイトを呼び止めた。

「また無茶したら二人とも拳骨だからな」

「……………！」

銀時の言葉にフェイトは目を見開いて、肩を一瞬振るわせた。

アルフも驚いてる。

それからフェイトは、アルフを連れて姿を消した。

「フェイトちゃん…………」

フェイト達が去った後に、なのはは小さく呟いた。

\*

マンションに向かうフェイトとアルフ。

（銀時…………私達の事…………心配してくれてたんだ…………）

フェイトは、胸に手を当てた。

（ありがとう銀時…………）

心の中でお礼を言いながら、フェイトはアルフと共にマンションに戻った。



## 第十五訓：乱入者っているんだね（後書き）

ナナフシ「『黒神』さんがリクエストした部分を出しました」

銀時「何処からだ？」

ナナフシ「何処からと言うと、「最善の選択？最低の選択の間違いだろ」から「リンディにお礼を言って、なのはユーノと一緒に転送装置に向かった。」の所までが『黒神』さんのリクエストです。これでよかったですか『黒神』さん」

銀時「読者の皆、この気まま野郎に付き合ってくれてありがとう」  
ナナフシ「それは連続投稿を言っているのか！？」

銀時「そう」

なのは「それではまた次回」

はくてんりゅう  
白天龍

魔力を白銀の龍の姿で打ち出す技。

その威力はSランク以上。魔力の溜め方にはよってはSSSランク以上にもなるが、そうになると少しに溜めに時間が掛かる。

魔力が溜まるほど、大きさと速さは上がる。

第十六訓：決闘に横槍を入れるな！（前書き）

ナナフシ「アンケート結果発表！」

銀時「イエーイ」

ナナフシ「銀さん！？ノリ悪いよ!？」

銀時「ダルいしよ〜。さつさとやろうぜ」

ナナフシ「たくっ！それでは結果です」

スバルが銀時同様『喋る刀』を持たせる

1、賛成 4票

2、反対 1票

『銀龍』達『喋る刀』五つをどっちの呼び方にするか

1、五天魔刀 2票

2、五天神刀 4票

ナナフシ「と言う訳で、スバルは持つ事になりました」

銀時「なるほど」

ナナフシ「で、『銀龍』達『喋る刀』五本は『五天神刀』となりました」

銀龍『そうか』

ナナフシ「後書きで投稿された『喋る刀』を紹介します」

銀時「それじゃ、『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀  
』始まるぜ！」

## 第十六訓：決闘に横槍を入れるな！

会議室。

銀時、銀龍、真選組、なのは、ユーノ、クロノとリンディが集まっていた。

「まったく。勝手にジュエルシードを半分ずつ分けて…」  
壁に寄り掛かりながら、クロノがため息をついた。

「す…すみません」

なのはが謝る。

「何もしようとしなかった奴が、文句言う資格があんのか？」

「何!？」

銀時の言葉に、クロノは食ってかかる。

「やめなさいクロノ」

「…はい」

リンディに言われて、クロノは渋々下がった。

「で？今回の事件について、何かわかったのか？」

煙草をくわえながら土方が尋ねた。

「ああ。エイミイ映像を」

クロノはテーブルに歩み寄った。

「はいはい」

スピーカーからエイミイの声が聞こえた。

エイミイの声の後、テーブルの中心に映像が映し出された。

映し出されたのはプレシアだった。

「あら」

「!」

映像を見て、リンディは少し驚き、銀時は表情を険しくした。

「一体誰ですかイ？」

沖田がクロノに尋ねた。

「僕らと同じミッドチルダ出身の魔導師。プレシア・テストロッサ

だ」

映像を見ながらクロノが説明する。

「専門は次元航行エネルギーの開発。偉大な大魔導師だったが、違法研究と事故によって放逐された人物です」

「テスタロツサって…」

名前を聞いて、なのはが呟いた。

「あのフェイトという少女はおそらく」

「プレシアの娘…ね」

リンディが険しい表情で呟いた。

なのはは、プレシアの映像を見つめる。

「この人が、フェイトちゃんのお母さん…」

「つまり、この女が今回の黒幕ってことか…」

土方が腕を組んで言う。

「プレシア・テスタロツサは、違法な素材を使った実験を行い失敗。中規模次元震を起こした事で中央を追放され、それからしばらくの内に行方不明となる。今わかってる事はこれくらいです」

クロノが説明を終える。

「ご苦労様。貴方達は一休みした方がいいわね」

なのは達に顔を向けて、リンディが言った。

「あ…でも…」

「特になのはさんは、長く学校休みっぱなしにするのはよくないでしょう」

優しく微笑みながらリンディが言う。

「一時帰宅を許可します。ご家族と学校に少し顔を見せた方がいいでしょう」

そう言っってリンディは席を立った。

「銀さんと真選組の皆さんも、その間自由に休んでください」

『うむ、そうか』

銀龍は答えた。

銀時は険しい表情で、ジッとプレシアの映像を見つめた。

(プレシア……)

\*

時の庭園。

フェイトとアルフは、プレシアにこれまでの事を報告しにきた。プレシアは玉座に座り、フェイトは部屋の中心に立ってる。

「…ジュエルシードを、全ては回収できませんでした…」

怯えながらフェイトが報告する。

「…回収したジュエルシードの数は…全部で九つ………」

プレシアは、宙に佇む九つのジュエルシードを見つめた。

「ご…ごめんなさい、母さん………」

顔を俯かせて、フェイトはプレシアに謝った。

「………残りのジュエルシードを必ず回収するのよ。いいわねフェイト？」

「え…？あ…はい………」

フェイトは、少し呆然とした顔で返事をした。

いつもなら、ここでプレシアの折檻が始まるのだが、今回は違った。

「何をボーツとしているの？早く行きなさい」

「…はい………」

言われてフェイトは部屋を出た。

扉の前で待ってたアルフは、プレシアの折檻がなかった事を不思議に思いながら、フェイトの後を歩いた。

二人がいなくなり、部屋にはプレシアだけになった。

「ゴホツ…！ゴホツ…！」

プレシアは口を押さえて咳込んだ。自分の手は赤く染まり、床には血の池ができています。

「………私には…もう時間がないわ………」

口元に付いてる血を拭きながら、プレシアは顔を上げた。  
「こんな私といても…フェイトは幸せにはなれない……」  
自分の死を覚悟しながら、プレシアはフェイトの幸せを考えた。

\*

高町家。

「……とまあ、そんな感じの十日間でしたのよ」

「まあ、そうなんですか」

リンデイと、なのはの母親の高町桃子は、意気投合して楽しく談笑している。

「ははは……」

二人の様子を見て、なのはとユーノは内心苦笑いを浮かべていた。  
一方、真選組は特に用事も予定もないので、海鳴市の街を見て回った。

\*

銀時はフェイト達が使ってるマンションの部屋にいた。部屋の中に、フェイト達の姿はなかった。

「やっぱいねーか」

頭を掻きながら部屋を見渡した。

「まあ向こうは、管理局と一緒にいる俺とは会いたくねーと思ってるだろうな」

言いながら銀時は、部屋を出ようとした。扉を開けて、一度振り返って誰もいない部屋を見た。

「…またな」

小さく呟いて、銀時は部屋を出て扉を閉めた。

\*

時刻は夕方。

銀時は、高町家を目指して歩いていた。

「あつ、銀さん！」

歩いていると、なのはと出会った。

「なのは。どうした？」

「心配になったから、迎えにきました」

無邪気な笑顔で、なのはが答えた。

「そうか。わざわざ悪いな」

「いいえ」

二人は並んで歩いた。

なのはは、隣を歩く銀時を見上げた。

「あの…銀さん」

「何だ？」

「フェイトちゃんと居る時何してたんですか？」

「あ？ああ、特に……ってか、何でそんな事聞くんだ？」

「い、いえ……特に意味はないんです」

なのはは銀時にそう言った。

「なのは」

「何ですか？」

呼ばれて、なのはは銀時を見上げた。

「たぶん近い内に、フェイトの奴はジュエルシードを手に入れるために、なのはの前に現れる」

さっきまでと違って、銀時は真剣な表情で話す。

「はい」

「はい」

なのはも真剣な表情で、銀時の話を聞く。

「わかってると思うが、フェイトは強えぞ」

「はい」

なのはは、頷いて答える。

「フェイトちゃんと戦うのは辛いけど……でも私、どうしてもフェイトちゃんを助けたいんです！」

強い決意を表すように、力強くなのはが言った。

なのはは、決意の顔を見て銀時は微笑んだ。

「どうやら、俺の出番はねえみてーだな」

「銀さん……」

「なのはは」

銀時は、なのはを見た。

「思いつきりぶつかっていけ！」

「はい！」

銀時の言葉に、なのはは笑顔で力強く答えた。

\*

二日後の早朝。

時間はAM5:27。

なのは達は家の門の前に立ってる。

「ふあゝ。何もこんな朝早くに出なくてもよくな？」

欠伸をかきながら、銀時は背伸びをする。

「俺、朝弱いんだよ」

「ごめんなさい銀さん」

なのはは謝った。

『主はいつもこんな感じだ。気にするな』

銀龍がそう言う。

「お前ら。喋ってねーで、さっさと行くぞ」

そう言って土方が歩き出した。



\*

海鳴臨海公園。

時間はAM5:55。

なのは、銀時、ユーノの三人がいた。真選組の三人は公園の入口で待機してる。

なのはは小さく深呼吸をする。

「ここなら…いいよ」

なのはが口を開いた。

「出てきて、フェイトちゃん！」

姿の見えないフェイトに向かって、なのはが叫んだ。

朝の冷たい風が、頬に当たる。風に当たって林がざわつく。

なのはと銀時は、後ろを振り返った。

バルディッシュを持ったフェイトが立っていた。隣には狼形態のアルフがいる。

「銀時…」

銀時を見つめながら、フェイトが呟いた。

「安心しろ。こいつはお前と、なのはの戦いだ。俺とユーノは余計な手は出さねえ」

そう言っつて銀時は腕を組んだ。

なのははバリアジャケットを着て、レイジングハートを持つ。

「ただ捨てればいいってわけじゃないよね？」

片手にレイジングハートを持って、なのはは言葉を繋げる。

「逃げればいいってわけでもない」

真っ直ぐにフェイトを見つめる。

「きっかけはジュエルシード…だから賭けよう。お互いが持つてる全部のジュエルシードを！」

「Put out」

なのはの周囲にジュエルシールドが現れる。

「Put out」

フェイトの周囲にも九つのジュエルシールドが出る。

「それからだよ。全部それから」

両手でレイジングハートを構える。

フェイトも下段にバルディッシュを構える。

「私達の全てはまだ始まってすらいない……」

銀時とユーノ、アルフが黙って見守る。

「だから、本当の自分を始めるために……」

対峙する二人の魔導師。

「始めよう。最初で最後の本気の勝負！」

\*

アースラ。

「戦闘開始みたいだね」

なのはとフェイトの戦いの様子を、画面で見ながらエイミーが言った。隣にはクロノが立っている。

「ああ」

クロノとエイミーは、ただ戦いの様子を見守っているだけではない。なのはが戦闘で時間を稼いでる内に、こちらで帰還先追跡をしておくという作戦だ。

「頼りにしてるんだから、逃がさないですよ」

「おう！任せとけ！」

エイミーが親指を立てて返事をした。

\*

「始まるな……」

「なら、こつちもやるうぜ」

銀時は聞き覚えのある声に驚いた。

そして、声のした方向を向く。

「雷雅！」

「よオ……銀の兄貴」

雷雅はニヤリと笑った。

ユ一ノとアルフは驚いている。

「様子を見に来たんだがなア……暇でな。それで丁度銀の兄貴が居たんでな」

雷雅は薙刀を構える。

「いやア……俺嫌な奴に好かれたねエ」

銀時も木刀を構える。

「勝負！」

雷雅が言うと同時にどちらも走り出した。

「オラア！」

銀時が木刀を振り下ろした。

雷雅はそれを薙刀で防ぐ。

雷雅は銀時にそのまま蹴りを入れた。

「ぐっ！」

銀時は怯む。

その隙を見逃さず、薙刀を振り下ろした。

「ちっ！」

銀時は舌打ちしながら後ろに飛んで避けた。

銀時はすぐさま雷雅の懐に入り、木刀を振り上げた。

ガンツと鈍い音が聞こえた。

雷雅の顎に直撃した。

「ぐっ！」

雷雅は二、三步退いた。

「やっばおもしれえ……」

「ククク」と雷雅は笑う。

「ま……今回は挨拶程度だ……また会えると良いな」

雷雅は何しに來たのか……そのまま姿を消した。

銀時は空を見た。

\*

（最初は、ただ魔力が強いただけの素人だったのに……）

フェイトは自身に迫る桜色の魔力弾を、バルディッシュで切り裂く。

（……強い！）

フェイトもバルディッシュを強く握り締める。

（でも……負けられない！）

フェイトは空中で静止した。

（母さんの為にも……絶対に負けられない！！）

両手でバルディッシュを掴んで、前に構える。フェイトの足下に、

巨大な金色の魔法陣が展開された。

\*

「ん？フェイトのヤツ、何か大技でも出すのか？」

ユーノ達と、地上で観戦していた銀時が目を細めた。

「マズイ！フェイトは本気である子を潰す気だ！」

アルフが焦った声で言う。

「っーことは……アレがフェイトの切り札ってヤツか……」

焦るアルフの隣で、銀時が冷静に言う。

空中にいるフェイトの周囲に複数の…いや、無数の魔力弾が佇む。  
なのはがレイジングハートを構えようとした時、

「あっ！！」

なのはの両手両足を、金色の魔法陣が拘束した。

「ライトニングバインド」

フェイトが小さく呟いた。

「なのは！今サポートを！」

ユーノが魔法陣を展開しようとした時、

「やめる、ユーノ」

銀時がそれを制した。

「余計な事はすんな」

「余計な事！？」

「でも銀時…フェイトのアレは本当にマズイんだよ！」

アルフが戸惑いながら言う。

「これはアイツらの決闘だ。そいつを邪魔する事は俺が許さねえ」

今の銀時の言葉には、普段にはない凄みが加わっていた。アルフと

ユーノは何も言い返せず、黙って二人の様子を見守った。

（銀さん…ありがとう）

三人の様子を見ていたなのはは、心の中で銀時に礼を言った。

「アルカス、クルタス、エイギアス…」

その間にもフェイトは、呪文を唱え続けていた。

「疾風なりし天神よ、今導きの元に撃ちかけ。バリエル・ザリエ

ル・ブラウゼル」

呪文を唱え終える。

「フォトンランサー・フアランクスシフト」

手を空に掲げ、バインドで拘束されてるなのはを睨み、

「打ち砕け！ファイア！！」

手をなのはに向けて振り下ろしたのを合図に、無数の魔力弾がなのはに襲い掛かる。

無数の魔力弾がなのはに降り注ぎ、爆発する。

「なのは！」

「フェイト！」

ユーノとアルフが叫んだ。銀時は黙って見つめてる。

やがて魔力弾を撃ち終える。フェイトは残った魔力を集めて、魔力弾を作る。なのはのいる所に煙が立ち込める。

フェイトは魔力弾を片手に、立ち込める煙を見つめる。やがて煙が晴れてくる。

「撃ち終わると、バインドってのも解けちゃうんだね」

煙の中から、ほぼ無傷のなのはが姿を現した。

障壁を張って、あの魔力弾の雨を防ぎきったのだ。

「マジでか？」

流石の銀時も、この時は驚きを隠せず少し顔を引きつらせた。

「今度は…こっちの番だよ」

レイジングハートを突き出すように構える。

「受けてみて…デイバインバスターのバリエーション！」

前方に巨大な魔法陣を展開する。

「Starlight Breaker」

桜色の魔力がなのはの前に集まり、集束され、巨大な桜色の魔力弾が生成された。

「これが私の全力全開！」

レイジングハートを振り上げた。

「スターライト・ブレイカー!!!」

なのはがレイジングハートを振り下ろすと、巨大な桜色の閃光がフェイトに向かって放たれた。

「はあ!!!」

フェイトは、片手に持つてる魔力弾を桜色の閃光目掛けて放った。

フェイトの魔力弾は、桜色の閃光に掻き消された。

「!!!」

驚いたフェイトだが、すぐに障壁を張って防御する。だが、障壁は

桜色の閃光の前に簡単に破れてしまう。  
フェイトは、成す術もなく閃光の中に飲み込まれた。

\*

やがて閃光が収まり、二人の姿が見えてきた。

「なのは！」

「フェイト！！」

なのはは、空中で息を切らし、フェイトはバルディッシュを手放して海に落ちていく。

「フェイトちゃん！」

海に落ちる前に、なのははフェイトを抱き抱え、バルディッシュも掴んだ。

フェイトを抱えて、なのはは銀時達の元へ飛んでいった。

「ん……」

銀時達の元へ着いたところで、フェイトが目を覚ました。

「フェイト！」

「あつ、フェイトちゃん気がついた？」

アルフとなのはが声をかけた。

「……………私……負けたんだね……」

フェイトの表情が暗くなつた。

「フェイト」

銀時が声をかけた。フェイトは、銀時に顔を向けた。

「よくやったよお前は。最後まで諦めずに戦ったんだ。恥じる事なんて何もねーぜ」

そう言つて銀時は微笑んだ。

「銀時……」

銀時の言葉に、フェイトは目に涙を浮かべる。

「あんだ…本当にいい奴だねえ銀時い……」

銀時の隣にいるアルフは泣いていた。

「何でお前が泣いてんだよ」と銀時。

「Put out」

バルディッシュからジュエルシールドが出てきた。

その瞬間。

「アアアアアア！！！」

空が曇り、黒い雲から巨大な紫色の雷がフェイトに降り注いだ。

「フェイト！！！」

「フェイトちゃん！！！」

銀時となのはが叫ぶ。

九つのジュエルシールドは、雲に出来た歪みの中に消えていった。

よるけるフェイトを銀時が抱き抱える。

「プレシアアアアアア！！！」

雲の歪みに向かって、銀時は怒りの叫び声を上げた。

アースラでは、プレシアの居場所を突き止めようとしていた。

エイミイが座標を割り出した。

リンデイが立ち上がる。

「武装局員、転送ポードから出動！任務は、プレシア・テストロツサの身柄確保！」

\*

時の庭園。プレシア・テストロツサの部屋。

プレシアは、手で口を押さえて咳込んでいた。

「ハア…ハア…次元魔法は…もう体が耐えられないわね……」  
顔を苦痛で歪ませる。



「それに…今のでこの場所も掴まれた……」  
プレシアは、隣に映し出されてるフェイトの姿を見つめた。  
「フェイト…よくここまで戦ったわね……」  
フェイトを見つめながら、プレシアは優しく微笑んだ。  
「こんな母さんの為に……今まで、よく頑張ったわね…」  
愛おしそうにフェイトを見つめる。  
「銀時…アルフ……フェイトをお願い……」  
プレシアは、二人にフェイトの事を託した。  
「さあ…全てを終わらせましょう」

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハイ、質問コーナー始めるぞ。今回のアシスタントは」

近藤「真選組局長の近藤勲だ！」

銀八「ゴリラか」

近藤「ちよっ！銀八先生！？」

銀八「質問行くぞオ」

近藤「無視するな！まあ、良いか。まずはペンネーム『咲夜』さんからの質問

『それじゃあ質問です

こっちの銀さんは棗鈴という女の子になりましたけど  
銀龍や近藤達はどう思いますか？』マジで！？万事屋女になったの  
！？』

銀八「ああ、転生してな」

銀龍『主が女になってしまつとは』

土方「万事屋が女か……プフッ」

沖田「面白そうですア（黒笑）」

銀八「一人よからぬ事考えてるよ！と言う訳で『咲夜』さん廊下に  
立ってなさい」

近藤「次だ！ペンネーム『黒神』さんからの質問  
』では質問、

ナナフシさんへ

第二章では桂もエリザベスも出ますか？

ミラクルへ

ここでも僕のところでも出番がない気分はどうでしょうか（黒笑）



2・フェイトとなのはに質問。マヨ方さんのもう一つの人格であるトッシーをどう思いますか？

3・ユーノに質問。淫獣になったご感想をどうぞ。『一つ目だが』

クロノ「不愉快だ！本当の事を言っただけだ」

銀時「ほう……まだ足りねえみてえだなア」

土方「覚悟しろよ……」

クロノ「ぎゃあああああああああ！」

銀八「あいつ等はほっといてなのは、フェイト」

なのは「何て言えば良いんだろ……ちょっと気持ち悪いかな」

フェイト「何故か嫌な予感がする」

銀八「フェイトのその予感は当たると思うぜ。最後だが」

ユーノ「何で淫獣ですか！？って言うか悲しいですよ！」

銀八「と言う訳で『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

近藤「次だな。ペンネーム『支配者』さんからの質問  
『質問です。』

なのはへ、

クロノが貴方の人形を作ってエロイ目で見まくっていました。如何しますか？

沖田へ

クロノが貴方の事を土方よりも無能な変態だと罵っていました。如何しますか？

フェイトへ

クロノが貴方の人形を作って『乳クリマンボー』をしていました如何しますか？』一つ目からだな」

なのは「スターライト・ブレイカー！」

クロノ「僕そんな事してんぎゃあああああああああああ！」

沖田「良い度胸ですねエ」

クロノ「沖田さん!？」

クロノは沖田に何処かに連れて行かれた。

その後……。

クロノ「ぎゃあああああああああ！」

断末魔が響いた。

銀八「最後まで耐えてくれ」

フェイト「サンダースマツシャー！」

クロノ「ぎゃあああああああ！」

クロノはボロボロになった。

銀八「と言う訳で『支配者』さん。クロノを保健室に連れて行きなさい」

近藤「それだけ！？最後の質問だ。ペンネーム『真王』さんからの質問

『真王』仮妻だ。間違えんな。未婚だろうが。質問」

『冷血の鬼姫に出演のオリキャラズの容体プロフィール作ったら？』

『そっちのオリキャラズを超次元学園に参加させたいんですが…』

『雷雅は獲物をとられるのが嫌ですか？』『一つ目だが』

ナナフシ「考えようですねエ……誰も元にしていないからなア……

まあ、作ってみます。二つ目ですけど、良いですよ」

近藤「最後だが」

雷雅「そうだなア……獲物を取られるのは嫌だな。俺が目を付けてるのに、仲間でもない奴が殺る場合はそいつを殺る」

銀八「相変わらず恐っ！と言う訳で『真王』さん。廊下に立ってなさい」

近藤「質問は以上だ！」

銀八「それではまた次回！」

第十六訓：決闘に横槍を入れるな！（後書き）

ナナフシ「もうすぐ無印編が終わる」

銀時「そうだな」

ナナフシ「投稿された『喋る刀』です。まずはスバルが使う事になるやつから」

名前：天虎てんこ

デザイン：鞘と柄は白虎のように白く、刀身は虎の模様が描かれている。刀身は青みが掛かっているので、蒼い光を薄く放つ。

鐔は普通とは異なり、白い虎の頭部を模したような形状で、虎の口から刀が出ているように見える。

ナナフシ「ですね。次は『麒麟』です」

名前：雷麟

デザイン：鞘と柄が黒く、刀身は黄色い。柄の先端には黒い束ねられた糸がある。

鐔はない。

ナナフシ「名前の投稿はありましたが、デザインは俺自身が作りました」

銀時「おいー！」



ナナフシ「一様、『炎凰』のデザインも紹介します」

デザイン：刀身は赤く、鳳凰が描かれており、鞘と柄は黒い。鍔は少し特殊で、羽が丸を描いた感じのやつ。

ナナフシ「これが『炎凰』のデザインです」

銀時「最後は『玄武』を元にしたやつか……」

ナナフシ「……まだ決まってない」

銀時「は？」

ナナフシ「投稿もされてないし、俺自身も考えたがうまく見つからない」

銀時「おいおい」

ナナフシ「『玄武』はまだ募集します。俺も頑張らねえと」

銀時「それじゃ、また次回な」

第十七訓：笑顔にも色んな種類がある（前書き）

ナナフシ「後書きで、『玄武』を発売したいと思います」

銀時「おい！」

ナナフシ「それではどうぞ！」

銀龍『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まるぞ』

## 第十七訓：笑顔にも色んな種類がある

管理局の武装局員が、時の庭園に到着した。

アースラのブリッジに銀時、真選組、なのはとユーノ、それにフェイトと人間形態のアルフが入室してきた。

フェイトは銀時となのはの間に立っている。局員がフェイトに拘束具を付けようとしたが、

「んだコラ！お呼びじゃねーんだよ！殺すぞ！」

「ケツの穴にホース突っ込んで、水流して奥歯ガタガタ震わせてやりましょうかい？」

と、銀時と沖田の脅しで拘束具は付けられなかった。

ブリッジには、時の庭園の様子が画面に映し出されていた。

「お疲れ様」

リンデイが銀時達に近寄ってきた。それから、フェイトに顔を向けた。

「フェイトさん？初めました」

フェイトは、手に待機状態のバルディッシュを握って顔を俯かせる。

「総員、玉座の間に進入。目標発見」

時の庭園では、武装局員がプレシアのいる部屋に突入していた。

「プレシア・テストロツサ。時空管理法違反の容疑で逮捕します」

「速やかに武装を解除してください」

局員の言葉に、プレシアは動じる事なく玉座に座ってる。

局員がプレシアを囲み、数名の局員が後ろに回る。

プレシアは後ろに回った局員を睨みつけた。

（あれ？ちよつと待て……このまま映像が映し出されると……）

銀時の顔に焦りの色が浮かんだ。

局員が隠し通路を見つけてしまう。

そして、アレを見つけてしまう。

「しまった！映すんじゃねエエ！！」

「やめるオオオオオ!!」

銀時と銀龍が慌てて叫んだ。

だが、もう遅かった。

「!!!?」

映し出された映像に、銀時と銀龍以外の全員が絶句した。

ガラス張りのケースの中、緑色の液体の中を漂うアリシアが映し出された。

「……………」

「……………」

フェイトとなのはは、驚愕に言葉も発せられなかった。

「おい、万事屋……こいつぁどういう事だ?」

動揺しながら土方は、銀時に尋ねた。

だが銀時は、土方には答えず顔を険しくして歯を食いしばった。

局員がアリシアの亡骸が入ったケースに近づいた時、

「ぐわあああ!!」

ケースの前に現れたプレシアに弾き飛ばされた。

「私のアリシアに近づかないで!!」

局員を睨みながら叫んだ。

「う…撃てう!」

局員は武器を構えて、閃光を放った。

だが、閃光はプレシアの障壁によって掻き消された。

「うるさいわ…」

プレシアは、手を前に突き出した。

「危ない、防いで!」

リンディが叫ぶが、

「ぐわあああ!!」

玉座の間に沢山の雷が落ち、局員達は悲鳴を上げた。雷を受けた局員達は、その場に倒れた。

「いけない!局員達を送還して!」

リンディの指示で、局員達はアースラに転送された。局員達は怪我

を負ったものの、死者は一人もいなかった。

その事に、銀時は疑問に思った。

「おかしいぜ」

『うむ』

「どうした？万事屋、刀」

銀時と銀龍の言葉に土方が反応した。

「俺が受けたアイツの雷の威力は、あんなもんじゃなかった…」

「どういう事ですかイ。旦那」

沖田は訪ねるが、銀時は答えない。

（手加減してるのか？…それとも予想以上に病が進行してるのか？）

プレシアを見つめながら銀時は考えた。

「アリ…シア？」

フェイトは目を見開いて、映像に映る自分と瓜二つの少女を見つめた。

プレシアはゆっくりとアリシアに近寄った。

「もうダメね…時間がないわ…たった九つのジュエルシードで、アルハザードに辿り着けるかわからないけど…」

プレシアは後ろを振り返った。

「…フェイト。そこにいるんでしょう？」

「…！」

プレシアに名前を呼ばれて、フェイトは体を小さく震わせた。

「貴女はね…アリシアの代わりにしようと…私が造ったアリシアのクローンなのよ……」

「…！？」

驚愕の事実、フェイトは信じられないと言った表情をする。

「…プレシアは最初の事故の時に、実の娘のアリシア・テストロツサを亡くしているの。」フェイト」と言う名は、当時の彼女の研究につけられてた開発コードです」

エイミィが陰しい表情でみんなに話した。

「よく調べたわね……」

プレシアは、ゆっくりと体をこちらに向けた。

「フェイト。正直に言うわ……私ね……貴女を造りだした時から、貴女を好きになれなかったの……」

表情を暗くしながらプレシアは語る。フェイトは体をビクツと震わせた。

「何故、貴女を嫌っていたのか……ある人のお陰でようやくわかったわ。私は貴女を『アリシアの代わり』としてしか見てこなかった……」

フェイトも銀時も周りにいる全員が、黙ってプレシアの話を聞く。

「……でもそれは間違い。アリシアの記憶をあげても貴女はアリシアじゃないし、アリシアの代わりでもない……貴女は『フェイト』だもの……」

プレシアは遠い目をしながら話を続ける。

「フェイト……貴女を『フェイト』という、私の娘として見た時に……」

……私の気持ちは大きく変わったわ……」

フェイトはジツとプレシアを見つめる。

「ごめんなさいフェイト……今更謝っても許されないのは、わかっているわ……でも……これだけは貴女に伝えておきたいの……」

そこでプレシアは優しく微笑んだ。

「フェイト……貴女の事が大好きよ」

優しく微笑みながら、プレシアは娘に自分の想いを伝えた。

「……！……」

プレシアの言葉を聞いて、フェイトは体を大きく揺らした。

目からは大粒の涙が零れ、その場に泣き崩れた。

「アルフ。貴女もいるんでしょ？」

プレシアは、今度はアルフに声をかけた。

「こんな私が頼めた義理じゃないけど……これからもフェイトをお願い……」

「プレシア……」

その時、緊急事態のアラームが鳴った。

「大変！屋敷内に魔力反応多数！」

「何だ！？何が起こってる！？」

クロノが動揺する。

屋敷の床から、様々な形をした無数の傀儡兵が現れる。

「庭園敷地内に魔力反応！しかも50、80と数を増やしていきま  
す！！」

「プレシア・テストロツサ！一体何をするつもり！？」

プレシアは、アリシアの入ってるケースを固定装置から取り外した。

「それから銀時」

「！！」

銀時は画面のプレシアを見上げた。

「最後に貴方に礼を言うわ……」

笑みを浮かべるプレシア。

「ありがとう」

次の瞬間、九つのジュエルシールドが強い光を発した。

「次元震です！中規模以上！！」

「振動防御！ディストーション・シールドを！」

リンデイが局員に指示を出す。

「ジュエルシールド九個発動！次元震、更に強くなります！」

「転送可の距離を維持したまま、影響の薄い空域に移動！！」

「了解！」

指示を受けた局員が動く。

「規模は更に拡大！このままでは『次元断層』が！！」

『次元断層』とは、いくつもの並行世界を壊滅させる程の災害。

局員達が慌ただしく騒ぐ中、銀時は画面のプレシアを見つめていた。

（バカヤロー……）

爪が食い込む程に、拳を強く握る。

「この速度で震度が増加していくと、次元断層の発生予測値まで、

あと三十分足らずです！」  
局員が焦った声で、報告する。  
「あの庭園の駆動炉も、ジュエルシードと同型のロストロギアです！それを発動させて、足りない出力を補っています！！」  
エイミイが説明した。  
リンデイは、顔を険しくした。

\*

「……………銀時、銀龍」

銀時の後ろに立っているアルフが呼んだ。

銀時は静かに振り返った。

銀龍も姿を現す。

「あんた等……………全部知ってたのかい？」

怒り、悲しみ、様々な感情が混ざった視線を銀時に向ける。

「『……………』」

銀時と銀龍は黙ってる。

真選組や周りの視線も銀時と銀龍に集まる。

「答えてよ！」

アルフが声を荒げる。

「……………すまねえ」

「すまぬ……………」

「謝って済む問題か！！」

感情に任せて、アルフは右拳を銀時の顔に振るった。

殴った後、アルフはハツとなる。

「あ……………ごめん、銀時……………あたし……………」

アルフは、震える右手を引っ込める。

「…オメーが謝る事はねーよ」



『そうだ……黙っていた我等も悪い』

場が重い沈黙に支配される。銀時は、隣で泣き崩れてるフェイトを見た。

「フェイト」

銀時が声をかけた。

「すまねえ」

『すまぬな』

フェイトにも謝った。

「……………銀時と銀龍は……………悪くないよ……………」

小さな声で、フェイトは答えた。

フェイトを見つめながら、銀時は口を開いた。

「……………フェイト。プレシアはアルハザードに行こうとしている。アルハザードに辿り着けるかどうか、本当にアルハザードがあるかどうか……………それは俺にもわからねえ」

フェイトは俯いたまま、銀時の話を聞いている。

銀時は、話を続ける。

「ただ、このままプレシアを放っておけば……………アイツが、お前の手の届かない所に行っちまうって事だけは確かだ」

銀時の言葉に、フェイトはかすかに、本当にかすかに肩を震わせた。  
「このままここで泣き崩れてるか、今の自分の殻を破って前に進むか……………今ここで決める」

その言葉を最後に、銀時は黙った。

再び、場が沈黙になる。フェイトは考える。これからどうすべきか。隣にいる銀時は、静かにフェイトの答を待つ。

「……………私は……………今まで母さんの為に頑張ってきた……………母さんに笑ってほしくて……………」

顔を俯いたまま、フェイトが沈黙を破った。

「……………さつき母さんは……………私に笑ってくれた……………でも……………！」

フェイトは、ギョツと両手を強く握った。

「あの時の母さんの笑顔は……………すごく寂しい……………悲しい笑顔だった……………」

……！」

涙を流しながら、フェイトは言う。

「私は……もう母さんに、あんな笑顔をさせたくない！」

フェイトの声が、ブリッジに響いた。

やがてフェイトは、ゆっくりと顔を上げた。涙は止まっていた。

「銀時」

フェイトは、銀時を見上げながら言葉を繋げた。

「私、母さんを助けたい！」

迷いのない、固い決意の宿った瞳で銀時を見つめながら、フェイトは答を出した。

その答を聞いて、銀時は微笑んだ。いや、銀時だけではない。真選組の三人も微笑んでいた。

「フェイト」

アルフが声をかけた。

「アルフ……また、私に力を貸してくれる？」

立ち上がりながら、フェイトはアルフに尋ねた。

「もちろんだよ！フェイト……！」

フェイトに抱き付きながら、アルフは答えた。

「ありがとう。アルフ」

フェイトは微笑みながら、アルフに礼を言った。

「フェイトちゃん！」

呼ばれてフェイトは、振り返った。

なのはとユーノが立っていた。

「私も一緒に行くよ……！」

「僕も！」

二人が力強く、フェイトに言った。

「…………！！！」

なのは達の言葉に、フェイトは目を見開いた。

「僕も行く！このまま放つてはおけない！」

クロノが言った。

「みんな…」

フェイトは、なのは達を見渡した。

「お前は一人じゃねえって事さ」

横から銀時の声が聞こえた。

フェイトは、銀時に顔を向けた。

「あの…銀時…」

「ん？」

銀時は片眉を上げた。

フェイトは、頬を少し赤くしながら、何か言おうとして戸惑ってる。

「その…一緒に来てくれる？」

上目遣いに、おずおずとフェイトが尋ねた。

銀時は微笑みながら、ため息をついた。

「ああ。いいぜ」

「!!!」

銀時の答えを聞いて、フェイトは笑顔になる。

「俺は万事屋だ。頼まれれば何でもやるぜ！」

『そうだな』

銀時は、力強くフェイトに言った。

銀龍はそう答えた。

「トシ！総悟！俺達、真選組も行くぞ！」

近藤が、右手で拳を握りながら叫んだ。

「ああ、久しぶりの喧嘩だ。思いつきり暴れるぜ」

「そろそろ体動かさねーと、鈍っちまいますア」

土方と沖田もやる気満々である。

「よーし。行くぜお前ら！」

銀時が大声で叫んだ。

「待て万事屋」

「何だゴリラ？」

銀時が振り返った直後、

「オラアアアアアアアア！」

真選組の三人が銀時に襲いかかった。

「ごぼあ！な…何しやがんだテメーら…！？」

わけがわからないと、銀時は真選組に向かって叫んだ。

「テメーも、一人で背負ってんじゃねエエ！」

と土方。

「万事屋！一言、俺達にも言え！」

と近藤。

「すまねえ旦那。流れる的に俺も殴りまさら」

と沖田。

それぞれ言いたい事を言い終わると、再び銀時に鉄拳制裁を加えた。

「ぐわああああ！！」

暴力の爆心地から、銀時の断末魔のような悲鳴が聞こえた。

フェイトとなのはは、オロオロしながらその様子を眺めてる。

やがて、鉄拳制裁が終わり、銀時が床を這いずりながらフェイトの方へ向かった。

「ぎ…銀時…大丈夫…？」

心配そうにフェイトが尋ねた。

「お…おお…大丈夫だ…」

言いながら銀時は、顔を上げた。

「それじゃあ行くか。お前の母ちゃんの、本当の笑顔を取り戻しに」

「うん！」

「うん！」

銀時の言葉に、フェイトは力強く頷いた。

『おまけ』

『おまけ』

『おまけ』

銀八「教えて」

銀八「教えて」

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハイ。質問コーナー始めるぞオ。今回のアシスタントは」

沖田「沖田総悟でさア」

銀八「お前かよ！まあ、質問行くか」

沖田「わかりやした。まずはペンネーム『黒龍』さんからの質問  
『黒龍』では、最後に質問します」

1・なのはとフェイトにお知らせ。なんとクロノとミラクル があ  
なた達の大人モードの等身大人形で欲情して腰振ってたらしいです。  
2・近藤に質問。お妙と大人フェイトと大人なのはどっちが綺麗  
ですか？

3・ミラクル とトツシーに質問。なんと今度はフェイトがあなた  
方を好きだと申ししていました。喜んでください。『ほほう……（黒  
笑）』

沖田は質問を見て黒い笑みを浮かべた。

なのはとフェイトは……。

なのは「最低です！」

フェイト「変態！」

魔法をクロノとミラクル に放った。

クロノ・ミラクル 「そんな事してんぎゃああああああああ

ああああ！」「」

銀八「…………」

銀八は青ざめていた。

近藤「もちろんお妙さんだ！お妙さんが一番に決まっている」

銀八「こいつの事だからそう言うと思ったよ！最後だが」

フェイト「サンダーレイジー！」

トッシー・ミラクル 「「ぎゃあああああああああああ！！！」

フェイトは襲われる前に魔法をトッシーとミラクル に放った。

銀八「と言う訳で『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

沖田「次でさア。ペンネーム『支配者』さんからの質問

『まあ、質問です。』

神楽に質問

この世で一番ブライクでダサイヒロインは神楽だ！とクロノが言っていますか、どうしますか？

ミラクル に質問

クロノが貴方のことを「永遠にミラクル でいれば良いんじゃない

のか？所詮新八なんて存在する価値もないんだし」と言っていました。如何しますか？

お妙に質問

クロノが貴方と近藤の人形を使って結婚式を開いて遊んでいました。如何しますか？』これもまた面白そうでさア（黒笑）」

沖田がまた黒い笑みを浮かべる。

クロノはと言うと……。

神楽「あんだとコラアアアアアアアアアア！」

クロノ「ぎゃああああああああああああああ！」

ミラクル「価値がないとはどういう事だアアアアアアアアア！」

クロノ「ああああああああああああああ！」

お妙「そんな事するんじゃないやねええええええええええ！」

クロノ「ぐぎゃああああああああああああああ！」

クロノはもうボロボロであった。

銀八「と言う訳で『支配者』さん。廊下に立ってなさい」

沖田「次でさア。ペンネーム『ケン』さんからの質問

』早速質問するかな。

屁怒紹様へ

クロノが貴方様が大事にしていたお花や植物を管理局の正義の為に滅茶苦茶にし、更に貴方様の事を『生きる価値の無い化け物』と罵り、家族の事も罵っていました。

証拠映像もありますのでお話してやってください。

松平のつつあんへ

クロノが貴方様の娘である栗子さんを襲い、雌奴隷にしようと企んでいます。

このクロノを蜂の巣にしますか？それとも若本系の必殺技で処刑しますか？

土方へ

クロノが貴方が愛しているマヨネーズを『犬の餌』と罵り、唾を吐いて踏みにじり、貴方の事を変態トッシーと罵っていました。どうしますか？

クロノよ・・・絶望に唸るがいい・・・『今回はクロノ質問が多いですぜエ（黒笑）』

ただでさえボロボロのクロノに……。

屁怒紹「少しO H A N A S I I しましょうか」

クロノは怯えながら連れて行かれ……。





ら質問だ。

『クロノに質問…もし自分が女の娘になったら、どういった反応をする？』『クロノ』

クロノを無理矢理起こし、答えさせる。

クロノ「そりゃ、驚くだろ……」

短くしか言えず、力尽きたのか、ガクンとなってしまうた。

銀八「と言う訳で『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

沖田「質問は以上でさア」

銀八「それではまた」

第十七訓：笑顔にも色んな種類がある（後書き）

ナナフシ「『玄武』を決めました」

銀時「ほう」

ナナフシ「どうぞ！」

玄武帝<sup>げんぶてい</sup>

デザイン：刀身が通常の刀より三倍も大きく重量級の長刀。

柄が長く、柄の先端には蛇の頭が模されている。

鍔は亀の甲羅を模した形で、見た感じは亀の甲羅から刀と言う首が出ている感じだ。

刀の強度と破壊力は飛び抜けている。

鞘は刀に合わせた様に大きく、黄金の蛇の飾りが全体的に撒きついている。

刀身の強度は刀よりも更に硬く、盾に使える。

ナナフシ「『玄武帝』になりました。一樣、五天神刀の中では一番の強度だと思えますよ……ってか、元々そう考えてた」

銀時「そうかよ」

ナナフシ「また次回！」

銀時「たまには次回『~~~~』とか言ったらどうなんだ！」

ナナフシ「書く時の思いつきで」

銀時「おい！」

投稿してくれた人達ありがとうございました！

第十八訓：邪魔する奴ってやつば居るんだね（前書き）

ナナフシ「……」

銀時「どうした？」

ナナフシ「いや……『真王』さんの質問で冷血の鬼姫に出演しているオリキャラの容体プロフィール作ったら？ってあつたけど……髪型と髪色と目の色しか思いつかないんだよね。冷血の鬼姫でも目と髪の色だけだったし」

銀時「おい！」

ナナフシ「まあ……始めようか……」

なのは「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まります」

## 第十八訓：邪魔する奴つてやつぱ居るんだね

銀時達は、時の庭園に転送された。  
直後、

「おぼろろろろー!!!」

真選組は盛大なゲロを吐いた。

「きゃあ!?だ：大丈夫ですか!?」

「ど：どうしたんですか!?」

なのはとユーノが驚く。

「おいおい。今からそんなんじゃ、先が思いやられるねえ」

銀時は、憎たらしい笑みを浮かべて真選組を見下ろす。

「いや、あんたも最初に来た時、ゲロ吐いたじゃないか」

アルフが目を細めて言った。

「テメエも吐いてたのかよ!!!」

アルフの言葉を聞いて、土方は銀時に怒鳴った。

「バツカ、アルフ!お前それ言うなや」

と銀時。

「…気持ち悪……」

口を押さえながら、土方達が立ち上がる。顔色はまだ少し青い。

「銀時もそうだったけど。ここはさっきまでとは別空間で環境も違うから、魔導師でない貴方達は慣れないと体調が悪くなるみたいなの」

フェイトが土方達に説明した。

「なるほど：つかテメー知ってたんなら教えろや!」

土方は、銀時に向かって怒鳴った。

「いやゝ悪いな。すっかり忘れてたぜ」

悪意に満ちた笑みを浮かべながら、銀時が答えた。

「ふざけんなよ、コノヤロー!!!」

銀時に掴みかかる。

「ちよつ…止せ、トシ！」

『落ち着け土方！』

近藤と銀龍が、二人を止めようとする。フェイトやなのは達は、困りながら様子を見ている。

「旦那ア、土方さん」

沖田がいつものもの、のんびりとした声で二人を呼んだ。

「何だ！？」

二人は沖田に顔を向けた。

「お二人が騒いでる間に…」

言いながら沖田は、前方を指差した。

沖田が指差した先には、様々な鎧の形をした、沢山の傀儡兵が剣や槍などを持って構えていた。

「おいでなすつたぜイ」

ニヤリと沖田は、笑みを浮かべた。

フェイト達もデバイスを構える。

「い…いっぱいいるね」

なのはは、緊張した表情でレイジングハートを両手で構える。

「まだ入口だ。中にはもつといる」

クロノは、前方の敵を見据える。

銀時がゆっくりとフェイト達の前に出た。

「フェイト。俺達がいづらを片付けるから、お前達は俺達の後に続け」

「え？」

フェイトは、銀時を見上げた。銀時の横には、真選組が居た。

「でも銀時…」

心配になって、フェイトが声をかける。いくらなんでも敵の数が多すぎる。

「オメーは母ちゃんを助ける事だけ考えろや」

銀時は腰の木刀『洞爺湖』に手をかける。左手には銀龍を持つ。真選組も刀を構える。

沢山の傀儡兵が一斉に銀時達に襲い掛かる。

銀時は木刀を抜いて、横薙ぎに振るった。

次の瞬間、複数の傀儡兵は、胴が粉々になって吹き飛んだ。フェイトやなのは達は、目を丸くした。

「はいイイイ！次イイイ！」

銀時は傀儡兵の軍の中に飛び込みながら、さらに木刀と銀龍を振るった。

傀儡兵の頭は砕いたり、真っ二つに斬ったり、武器を破壊して倒していく。時には斬撃を放っている。

「うらアアア！」

土方の刀が、傀儡兵を真っ二つに両断した。休まず刀を横薙ぎに振るって傀儡兵の首と胴体を切り離す。

「やりますねエ。旦那」

沖田は目にも止まらぬ剣技で、傀儡兵達を次々と切り裂いていく。

「ぬうおりゃああああ！」

近藤が叫びながら、豪快に刀を振り下ろす。近藤の刀は、他より少しサイズが大きい傀儡兵を両断した。

「す…すごい…！」

なのは達は、デバイスを持ったまま身動きができなかった。

ハッキリ言って、なのは達が出る幕は、これっぽっちもなかった。

まさに鬼神の如き強さで暴れ回る万事屋と真選組。

「な…なんてデタラメな連中なんだ…」

クロノは、驚きを通り越して半分呆れていた。

もう誰にも止められない。銀時達が傀儡兵を次々倒していく。

そして、傀儡兵を倒し終える。

「よし！行くぞフェイト！」

「うん！」

銀時の声に答えながら、フェイトは走り出した。



\*

中に入って走り続ける。

床には所々、穴が空いていて空間が歪んでいる。

「その穴『虚数空間』だから気をつけて！」

クロノがみんなに叫んで注意した。

「虚数空間？」

沖田は首を傾げた。

「あらゆる魔法が一切発動しなくなる空間だ。落ちたら重力の底まで落下する。二度と上がってはこれない」

クロノの言葉を聞いて、なのはは冷汗を流した。

「まっ、要は落ちなきゃいいんだろ」

言いながら銀時は、走り続ける。

前にある扉を蹴破って中に入る。部屋には、更に沢山の傀儡兵がいた。

クロノが上に続く階段を見つけた。

「ここから二手に別れよう」

クロノがみんなに提案した。

「よし。そんじゃ公平に『ジャンケン』で分けるとすっか」

「え？」

銀時の案にクロノは顔をしかめた。

「銀時！こんな時にジャンケンなんて…」

「ジャンケンケン！」

クロノの異議をスルーして、ジャンケンを始める銀時。他のみんなも、戸惑いながらも手を構える。

「ポン！」

\*

「ひくじかゝた君。何で君は、いつつも俺と一緒にいるんだ？友達になりたいのか？友達になりたいのか？」

不機嫌な顔で銀時は、隣を走る土方を睨んだ。

「そりゃこつちのセリフだ。何で俺がテメーなんかと…！」

土方も銀時を睨みながら、眉を顰めた。

二人の後ろをフェイトとアルフ、クロノが走ってる。フェイトは苦笑いしながら、アルフとクロノは呆れながら二人の様子を眺めた。

ジャンケンの結果、なのは、ユーノ、近藤、沖田が最上階の駆動炉のロストロギア封印。銀時、土方、フェイト、アルフ、クロノが最下層にいるプレシアの元へ向かう事に決まった。

ちなみにさっきの部屋にいた傀儡兵軍は、またも万事屋と真選組によつて全滅した。

「足引つ張んなよ、大串君」

「誰が大串君だ！」

さつきからずくと、口喧嘩をしながら走る二人。

「あ…あの…」

フェイトが二人に声をかけた。

「何だ！？」

銀時と土方は振り返ってフェイトを見た。

「二人とも、仲良くやろう？」

微笑みながらフェイトは言った。

言われて銀時と土方は、互いに顔を見合わせた。

「…フェイトに言われちゃしようがねエ」

「…まっ、今は俺達で喧嘩してる場合じゃねーしな」

二人の喧嘩は収まった。

フェイトは嬉しそうに笑った。

「やれやれ。フェイトの方が大人だな」

「そうだねえ」

クロノとアルフが、ため息をつきながら言った。

\*

最上階。

なのは達はエレベーターを使って最上階にやってきた。

エレベーターから出ると、駆動炉を守る大量の傀儡兵がいた。

「デイベインバスター！」

「やりますねエ！俺も負けてらんねエ！」

なのはと沖田が速攻で敵を倒していく。

（銀さんと一緒に良かったのにー！）

なのはは銀時と同じチームになれなかった事に怒っていた。

なのはが砲撃で敵を蹴散らした。

沖田も平然と傀儡兵を斬っていく。

その姿にユーノと近藤は青ざめる。

ユーノは何故なのはが怒っているのかわからなかった。

\*

アースラ。

リンディが席を立った。

「私も出ます。庭園内でディストーション・シールドを展開して、次元震の進行を抑えます」

\*

「うおらアアアア!!!」

銀時達は、迫り来る傀儡兵達を倒しながら前に進む。飛行型の傀儡兵は、フェイト達が相手をする。

「サンダー・レイジー!!!」

フェイトから金色の雷が放たれた。雷を受けた傀儡兵達は爆発した。「スナイプ・シヨット!!!」

クロノの黒いデバイスから、青い閃光が放たれた。閃光は傀儡兵達を貫いて、傀儡兵達は爆発した。

「はああああ!!!」

アルフも鋭い爪で、傀儡兵を切り裂いていく。

「どけ、ガラクタ共オオオオ!!! てめーらに構ってる暇はねーんだアアアア!!!」

『どけエエエエエエエエエエ!!!』

叫びながら銀時は、木刀と銀龍で傀儡兵を斬り伏せながら先に進む。広い部屋に着いた瞬間、大きな音を立てて壁が崩れた。崩れて出来た穴から、両肩に砲身を付けた大型の傀儡兵が姿を現した。

「へっ。デケーのが現れやがったな」

「上等だコラ」

大型傀儡兵を睨みながら、二人は剣を構えた。

「銀時! いくら銀時でも...」

「お前達はそこにいろ!」

フェイトの言葉を最後まで聞かず、銀時と土方は大型傀儡兵に向かって走り出した。

「銀時!」

「土方さん!」

アルフとクロノが叫んだ。

大型傀儡兵は、銀時と土方に狙いを定めて砲身に魔力を集束する。魔力の光が強くなり、砲身から魔力砲が発射された。大爆発を起こ

して、部屋に轟音が響いた。

「銀時!!!」

煙が立ち込める中、フェイトが叫んだ。

大型傀儡兵がフェイト達に狙いを定めた時、

「どこ見てやがるウウ!!!」

煙の中から、頭から血を流した土方が飛び出して、大型傀儡兵の前に現れた。

「土方さん!!!」

クロノが叫んだ。

「うりゃああああ!!!」

上段に構えた刀を振り下ろす。大型傀儡兵はバリアを張る。土方が振り下ろした刀は、バリアに亀裂を作った。

「ダメか!?!」

クロノが叫んだ直後、

「うおおおお!!!」

木刀を構えた銀時が、煙の中から跳んで姿を現した。

「銀時!!!」

フェイトは弾んだ声を出した。

「食らいやがれエエエ!!!」

土方が作った亀裂に、銀時は木刀を突き刺した。

亀裂は広がり、バリアはガラスのように粉々に砕け散った。

銀時は着地した。

「俺達の...」

銀龍を上段に構える。

「勝ちだアアア!!!」

叫びながら銀時は、銀龍を振り下ろした。

巨大な銀色の斬撃が大型傀儡兵を真っ二つにした。

銀時と土方が離れた後、大型傀儡兵は爆発した。

「銀時!!!」

フェイト達が銀時と土方に駆け寄る。

「よお。怪我ねーか？」

そう言う銀時は、土方と同じく頭から血を流していた。

「いや、あんたが怪我してるじゃないか！」

アルフが声を上げた。

「こんなん、かすり傷だよ」

「…まったく、貴方達のデタラメさには本当に呆れる」

クロノは、ため息をついた。

「ふん」

土方は鼻を鳴らしながら、目を閉じた。

「そんじゃ、先に進むか」

銀時がそう言った途端だった。

「行かせねえよ」

いきなり目の前に人が現れた。

「行きたかったら、俺を倒してからにしな」

目の前に居たのは……、

「雷雅……」

「ちっ、厄介な奴が来やがった」

雷雅が居たのだ。

土方は舌打ちした。

「さア……始めようぜ……戦いを」

雷雅はそう言った。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハイ。質問コーナー始めるぞオ。今回のアシスタントは」  
土方「真選組副長土方十四郎だ」

銀八「ふんじゃ、始めるか」

土方「まずはペンネーム『支配者』さんからの質問  
『質問です。』

銀時へ

貴方に魔法少女『リリカル銀時』の称号を与えます。

銀龍へ

クロノが貴方の事を『ロストロギア』として封印しようとして襲い掛か  
ってきたら如何しますか？

なのはへ

クロノが銀時を犯罪者に仕立てて逮捕しようとしています。ぶっ飛  
ばしてやってください。『万事屋』

銀時「んな称号いるかアアアアアア！何故魔法少女『リリカル銀  
時』！？何故魔法少女ってついてるんだアアアアアア！？」

銀八「二つ目だが」

銀龍「その時は、やむをえないな。ぶちのめす」

銀八「だそうです。最後だが」

なのは「そんな事しないでエエエエエエエエ！」

クロノ「そんな事してnぎやああああああああああ！」

クロノはなのはの砲撃を喰らい、黒こげになった。

銀八「と言う訳で『支配者』さん。廊下に立ってなさい」

土方「次で最後だ。ペンネーム『黒龍』さんからの質問だ

『黒龍』まあ、彼女いない歴十六年は放って置いて、質問にいきましよう」

1・ミラクル に質問。カップルのイベントであるクリスマスが近づいてきてますけど、どう思いますか？（黒笑）

2・ナナフシさんはジャンプを呼んでますか？

3・ナナフシさんに聞きたいのですが、うちのリリカル銀魂ライダ―に出ている原作で知らない原作とありますか？『メガネ』

ミラクル 「どうもこうも、悲しいに決まってるだろオオオオオオオオオオ！黒龍！そんなに僕を苛めて楽しいか！？」

銀八「楽しいからやってんじゃないのか？二つ目と三つ目を答える。ナナフシ」

ナナフシ「そうですね。ジャンプは毎週買うお金がないので、立ち



読みをしています。そのせいで、見逃したりするのが多いんですがね……だから、ほぼ単行本で補ってます。三つ目ですが、恋姫十無双を知りませんね。仮面ライダークウガはもう記憶が曖昧ですし」

銀八「らしい。と言う訳で『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

土方「質問は以上だ」

銀八「それではまた次回」

第十八訓：邪魔する奴ってやっぱ居るんだね（後書き）

ナナフシ「次回は銀時VS雷雅です」

銀時「よく現れるな」

ナナフシ「だね。戦闘狂だから。あの子」

銀時「まあ、そうだな」

ナナフシ「それではまた次回！」

第十九訓：迅雷との戦い（前書き）

ナナフシ「うゝむ、サブタイトルがまともだ」

銀時「それしかなかったんだろ」

ナナフシ「そうなんだよねエ……と言っ訳で！」

フェイト「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始  
まります」

## 第十九訓：迅雷との戦い

「さア……始めようぜ……戦いを」  
雷雅がそう言う。

「あいつは俺に任せろ」

銀時が木刀だけを構えて言う。

「で……でも……あいつはやばい感じだよ銀時」  
アルフが銀時に言う。

「心配すんな……慣れてるさ」

銀時はそれだけを言う。

銀時はよく雷雅に狙われるのだ。

「あいつは万事屋に任せとけ」

土方も銀時に賛成する。

「う……うん」

フェイトは頷く。

銀時と雷雅が対峙する。

「行くぜ……銀の兄貴」

雷雅がそれを言うのと走り出した。

銀時も走り出す。

「ハア！」

雷雅が突きを放ってきた。

銀時はそれを左に交わして、木刀を雷雅の顔面目掛けて横薙ぎに振った。

「くっ！」

雷雅は薙刀の柄を少し上に傾けて防ぐ

雷雅はその後、素早く後ろに下がった。

「やっぱ、本気出すかなア」

雷雅はそう言うのと姿を消した。

『消えた！』

フェイト、アルフ、クロノは驚いていた。  
プシュツ。

銀時の体に切り傷が出来る。

それが引き金になり、ドンドン銀時の体に切り傷が出来る。

「ちっ！」

銀時は舌打ちをする。

素早くて見えない雷雅。

銀時は目で追いかけてよとしようとするが見えない。  
すると……。

「俺は後ろだぜ？」

銀時はその声に振り返った途端、腹に衝撃が走った。

銀時は腹を抑えて、ちゃんと見る。

雷雅が柄の先端で銀時の腹に打撃を入れたのだ。

「オラア！」

雷雅がそのまま薙刀を振り下ろしてくる。

銀時はそれを木刀で防ぐ。

つばぜり合いの状態だ。

「銀の兄貴……本気を出せよ」

「何言ってるんだ？俺は本気だぜ」

雷雅の言葉に銀時は答える。

「嘔吐くなよ……なあ『白夜叉』」

雷雅はそう言う。

「それを言うなよ……『迅雷』」

銀時はそう言った。

お互いを異名で言い合った。

二人は一旦離れて睨み合う。

そして……走り出した。

「てえやあああああああ！」

銀時が木刀を振り下ろす。

雷雅はそれを薙刀で防ぎ、銀時に蹴りを入れる。

「くっ！」

銀時は怯むが、雷雅に蹴り返す。

「ちっ！」

雷雅も怯む。

「ダラア！」

「でえいや！」

銀時と雷雅の武器が何度もぶつかり合う。

\*

フェイト達はそれを見て驚いている。

「あの男……銀時と対等にやり合ってる！」

フェイトは驚いていた。

「何て言う戦いなんだい」

もうあれは武神同士の戦いにしか見えなかった。

「身体能力だけであれだけの戦いを！」

クロノも驚いていた。

あれに介入すれば死は確定だった。

それを黙ってみるしかなかった。

\*

「オラア！」

銀時の木刀が雷雅の腹に叩き込まれる。

「ぐっ！ハア！」

雷雅は柄の部分で、銀時の顔を殴る。

「ちっ！てえや！」

「オラア！」

ガキイイイイイン！

木刀と薙刀がぶつかり合う。

「ちっ！」

銀時は雷雅を蹴り飛ばす。

「ぐっ！」

雷雅は態勢を立て直し、立ち上がる。

二人共ふらふらである。

「ハアハア……いい加減倒れるや」

銀時は言う。

「ハアハア……嫌だね」

雷雅がそう言う。

二人は睨み合ったまま動かない。

「なら……これで終わりだ！」

「望む所だ！」

それを言うと二人は走り出した。

「ハアアアアアアアア！」

「オオオオオオオオオ！」

銀時は木刀を振るい、雷雅は薙刀を振るう。

そして、すれ違う。

ブシュッ！

銀時の左肩に切り傷が入る。

そこから血が噴き出す。

「ぐっ！」

「ハアハア……また会おうや……銀の兄貴」

雷雅はそれを言うと倒れた。

「ハアハア」

銀時は息を整える。

「……やった！銀時が勝った！」

フェイトは喜ぶ。

フェイト達は銀時に近づく。

土方は手錠を取り出して、雷雅を逮捕しようとする。  
だが……。

「!!!」

土方は何かに気付き、後ろに飛んだ。

土方が立っていた場所にはクナイが数本刺さる。

「雷雅を逮捕なんてさせないよ」

現れたのは忍しのぶだった。

「ちっ！『流星の忍』 星斑 忍か！」

忍は雷雅を担ぐ。

「私達は元の世界に帰るわ。また会えたら会いましょう」  
それを言うつと姿を消した。

「ちっ！逃げたか」

土方は手錠をしまった。

「そんじゃ、行くか」

「うん！」

銀時がそう言うとフェイトは頷いた。

\*

時の庭園、最下層。

プレシアは、アリシアの入ってるケースの隣に立っている。

「誰か乗り込んできたみたいね……」

上を見ながら、プレシアは呟いた。

（恐らく管理局の執務官……）

プレシアは短く笑った。

「でも無駄よ。私を捕まえても……私はもう長くはない……」



悲しい表情を浮かべながら、プレシアはアリシアを見つめた。  
「アリシア…ごめんなさい。こんな事になってしまって……」  
庭園が激しく揺れる。

「フェイト…貴女だけでも幸せになって……」

プレシアがそう言った直後、背後から爆音が聞こえた。

「！」

慌ててプレシアは、振り返った。

「きたわね」

執務官が来たと思い、プレシアは杖を構えた。

だが、

「おう。最下層はここかい？」

聞こえてきた声にプレシアは驚いた。

聞き覚えのある声。

いえ、まさか……あの男がここに来るなんて……。

そして、壁に空いた穴から人影が姿を現した。

「どーも。万事屋です」

銀髪の侍。

そして、

「母さん！」

自分の愛する娘。

「銀時…フェイト……」

プレシアは、信じられないと言った顔をする。

フェイトは、固い決意の宿った眼でプレシアを見つめた。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハアイ。質問コーナー始めるぞオ。今回のアシスタントは」

なのは「高町なのはです」

銀八「それじゃ、質問行こうか」

なのは「まずはペンネーム『真王』さんからの質問

『咲や葵は出ないんで？』

『銀龍の出会いは？』

『新八と神楽の登場はいつに？』』咲さんと葵さんって誰？」

なのはは質問コーナーでも会った事がないので知らない。

銀八「後々に会おうぞ。咲は出てきます。葵は『月光閃火』さんが投稿したオリキャラと苗字は違うが名前は同じなので出すか、出さないか悩んでいるらしいです」

なのは「そうなんだ」

銀八「二つ目だが、銀龍との出会いは書きます。A、S編で書くそうです」

なのは「どんな風に出会ったんだろ？」

銀八「それはA、S編になってからな。最後だが、新八と神楽はA、S編に出します」

なのは「早く会ってみたいなあ」

銀八「と言う訳で『真王』さん。廊下に立ってなさい」

なのは「次です。ペンネーム『黒神』さんからの質問

『黒神

」では質問です」

近藤へ

『リリカル銀魂シリーズ』の新八は寺門通親衛隊の隊士軍曹から鉄の掟と言う名で『リリカルなのはシリーズ』のグッズを奪いました。これは立派な強盗と同じですので兄以前に警察としてはどう思いますか？（黒笑）

マヨラーへ

僕の小説、『リリカル銀魂strickers（攘夷戦争）』では桂は主役の1人として大活躍しており、山崎もディエチと言う彼女を持って出番があります。

それに対して自分は出番はまだ先なので、そんな2人にどう思いますか（黒笑）

総悟へ

なのは好きの新八がなのはが銀時に惚れている事を知ったら、彼が

どれだけの絶望を味わうか創造してみてください（黒笑）『全部凄  
いイジメ質問だね』

なのはは苦笑いする。

近藤「新八君！そんな事はしてはいけないぞ！警察として、将来の  
兄として言うておくぞ！」

新八「あんたの義弟になるつもりはねえよ！」

銀八「あのバカ共はほつといて、土方く〜ん」

土方「何で桂が活躍しているんだ！っていうか、何で山崎が先に出  
てるんだよ！何で彼女いるんだよ！」

銀八「こっちで葵が出れば、お前にもチャンスはあるだろうが」

土方「はあ？」

銀八「ダメだ……こいつもわかってねえ。最後だが」

沖田「そうですねエ……」

~~~~~

新八「なのはちゃんが銀さんの事が好きだなんて……」

沖田「キス（嘘）もしてやしたぜ」

新八「ガーーーーーン！」

沖田「更には

×××（嘘）もしたらしいですぜ」

新八「ガンガン！」

新八は廃人と化し……引きこもりになって、現実を見なくなった。

~~~~~

沖田「こんな感じですかい？」

銀八「作者がこういうの下手だからな」

銀時「おい！あれじゃ、俺がロリコンじゃねえか！」

沖田「安心してくだせえ……大人の時と言う事にしやした」

銀時「そう言う問題か！」

銀八「ついでに銀時もイジメたな」

なのはは沖田の回想を見て顔を真っ赤にさせて気絶した。

銀八「なのは！と言う訳で『黒神』さん！廊下に立ってなさい！」

なのは「あれ？私は……」

銀八「次の質問行くぞ」

なのは「あ、はい。最後です。ペンネーム『黒龍』さんからの質問

『黒龍「まあ、彼には頑張って耐えてもらうしかないですね。では、質問します」

1・クロノに質問。なんで自分が嫌われているか分かりますか？

2・銀さんに質問。時空管理局と全面対決、なんて展開になったらどうしますか？ やっぱここは逃げますか？

3・なのはとフェイトに質問。クロノを一言で表すとどんな感じになりますか」 『一つ目だけど

クロノ「分からない！何で嫌われているんだ!？」

銀八「知らないのかよ！二つ目だが」

銀時「さすがに無理あるからな。さすがに逃げ出すからな」

銀八「だそうだ。最後の質問をなのは、フェイト」

なのは「最低な人？」

フェイト「変態？」

質問コーナーのせいでクロノはなのはとフェイトにそう思われた。

銀八「だそうだ。と言う訳で『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

なのは「質問は以上です」

銀八「また次回」

第十九訓：迅雷との戦い（後書き）

ナナフシ「やっと……やっと無印編の最後に近づいたアアアアアアアアアア！」

銀時「よかつたな」

ナナフシ「早く終わらせたいなア」

銀時「頑張れ」

ナナフシ「俺は頑張るよ！銀さん！と言っ訳でまた次回！」

第二十訓：本当に大事なモノなら手放すな（前書き）

ナナフシ「銀魂のキャラポスコレクションを買ったぜ！」

銀時「で、何が当たったんだ？」

ナナフシ「高杉攘夷戦争時と沖田が当たった」

銀時「よかったじゃねえか」

ナナフシ「後、銀さんの攘夷戦争時がほしいなア」

銀時「金貯まったら買えばいいだろ」

ナナフシ「そうですね！それでは！」

銀時「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まるぜ！」



## 第二十訓：本当に大事なモノなら手放すな

「オラアアアアアア！」

沖田は刀を振るって傀儡兵を倒す。

「ぬうおりゃああああああ！」

近藤も刀を振るって傀儡兵を倒す。

そして、最後の一体を倒す。

周りには、傀儡兵の無残な残骸が散らばっている。

沖田と近藤の背後で、赤い光が輝いた。振り返って見ると、なのはが駆動炉のロストロギアの封印に成功した。

「やった！」

ユーノが声を上げた。

その時、

（皆さん、よく頑張りました）

なのはとユーノに、リンディからの念話が聞こえた。

（私も現地で次元震を抑えています。おそらく、これで次元断層は起こらないでしょう）

「よかった……」

リンディの言葉に、なのはは安堵のため息をついた。

これで最悪の事態は防げた。

残すは………。

\*

最下層。

フェイトは銀時達と共に、プレシアの前に降り立った。

「フェイト……どうして来たの……？」

プレシアは驚いた顔で、目の前にいるフェイトを見つめた。

「母さん……」

フェイトは、ゆっくりとプレシアに歩み寄る。

「貴女…何しにきたの…?」

目を細めてフェイトを睨む。その目にフェイトは足を止めてしまう。

「私は……」

真っ直ぐにプレシアを見つめる。

「母さんを助けにきました」

「……!」

フェイトの言葉に目を見開く。体がかすかに震えた。

「母さん。私は、母さんに笑ってほしかった……」

自分の想いをプレシアに伝える。

「母さんは…さっき私に笑ってくれた…けど、私が見たかった母さんの笑顔は…あんな悲しそうな笑顔じゃない!」

声が大きくなり、最下層にフェイトの声が響く。

プレシアと銀時達は、黙ってフェイトの話聞く。

「母さんには…楽しそうに…嬉しそうに笑ってほしいの…心からの、本当の笑顔になってほしいの!」

母に伝える娘の想い。

フェイトの言葉が、プレシアの心を揺り動かす。この娘は、こんな私をまだ『母さん』と呼んでくれる。こんな私の為に、危険を覚悟してここまでできた。

杖を握るプレシアの手が震える。

「だから、母さん……」

そっと、プレシアに手を伸ばす。

「一緒に帰ろう」

優しく微笑む。

フェイトの言葉に、笑顔に、プレシアは目を見開き涙が出そうになる。

フェイトは手を伸ばしたまま、プレシアの答を待つ。

「……………」

プレシアは顔を俯いて、迷いを振り払おうとする。

「フェイト……」

顔を上げてフェイトを見る。

「ごめんなさい」

「！」

プレシアは杖を掲げる。

『主！』

「わかってらァ！トシ！」

プレシアの動きに気付いた銀時と銀龍は、土方を呼びながら走り出す。

「お前が”トシ”って呼ぶんじゃねーよー！！」

銀時の意図に気付いた土方も走り出した。

プレシアは掲げた杖を地面に叩いて、魔法陣を展開した。プレシアの足場が崩れていく。

「母さん！」

フェイトが叫んで走り出す。フェイトの横を銀時と土方が通り過ぎた。

崩れた足場が、プレシアとアリシアを飲み込もうとした時、

「おおおおー！！」

銀時が叫びながら、アリシアの入ってるケースを後ろに押しつけ、崩れた足場に落ちていくプレシアの手を掴んだ。

後ろにいた土方が、ケースを受け止める。

「銀時！！」

プレシアとフェイトの声が重なった。

「く……！」

銀時は両膝を地面に着き、右手でプレシアの手を掴んでる。

「は……離しなさい銀時！このままだと貴方まで……！！」

プレシアは、銀時の手を離そうとする。

「プレシア……アンタ、まだフェイトから逃げてる事に気付かないの

か？」

「え…？」

プレシアの手の動きが止まる。

「フェイトが、本当はまだ自分を恐れているんじゃないかと…自分が一緒にいたら、フェイトは幸せになれないと恐れて…アンタはフェイトから逃げてるんだ」

歯を食いしばりながら、銀時が言う。

銀時の後ろに立ってるフェイトとアルフ、アリシアの入ってるケースを後ろに運んでる土方、様子を見守ってるクロノも銀時の言葉を聞いている。

「プレシア…アンタを助けるために、危険を覚悟でここまで来たフェイトがアンタを恐れていると思うか？自分を想ってくれる親がいて他に何がいるんだよ」

プレシアを真っ直ぐに見つめながら、銀時が言う。

「もう逃げるんじゃないエー！！」

プレシアに向かって怒鳴る。

銀時の声に、プレシアは目を見開く。

「本当にフェイトの事を想っているなら、アイツの傍にいやがれ！銀時の言葉がプレシアの心に響く。

「その手で、その腕で、思いつきり抱きしめろ！涙が出るくらいに強く抱きしめやがれ！！」

銀時の叫び声が、最下層に響いた。

「この手は離さねえ」

プレシアの手を、更に強く握る。

「もう目の前で、大切なモノは取り零さねエー！！」

「銀時…」

必死に自分を助けようとする銀時を見つめる。

その時プレシアは、銀時の瞳に一瞬、悲しみの色が見えた気がした。銀時がプレシアを引き上げようとした瞬間、地面に亀裂が入った。

ガラガラと音を立てて、銀時の足下が崩れる。

「え？」

後ろで見ていたフェイトが小さな声を出した。

目の前の光景が信じられなかった。フェイトの目の前で、銀時とプレシアが崩れていく足場に飲み込まれていく。

『間に合わない！』

シルバー・オブ・アーマー

銀龍は白銀の鎧を展開しようとしたが、間に合わなかった。

「銀時！！母さん！！」

「銀時！！」

フェイトとアルフが同時に走り出した。

「万事屋アア！！」

「銀時！！」

土方はアリシアの入ってるケースを置き、クロノと一緒に駆け出した。

フェイトが落ちていく銀時に手を伸ばす。

だが、フェイトの手は虚しく空を掴み、銀時とプレシアは虚数空間に落ちていく。

フェイト達は、ただその光景を見ている事しかできなかった。銀時とプレシアは穴の中に消えていった。

「…嘘だろ…？」

アルフが震える声で小さく呟いた。

「…母…さん……銀時…」

穴を見つめながら、フェイトは呟いた。

やっと、母さんと解り合えたかもしれないのに。銀時が必死に母さんを助けようとしたのに。

フェイトは、悲痛な顔で穴を見つめた。

その時、アースラにいるエイミーから連絡が入る。

「みんな！庭園が崩壊するわ！急いで脱出して！！」

焦った声で脱出を求めた。

「フェイト・テストロツサ！アルフ！土方さん！脱出するぞ！！」  
クロノが三人に向かって叫んだ。

「…行くぞ。フェイト、アルフ」

重い声で土方が二人に言った。

「…でも…銀時が……」

アルフは、今にも泣きそうな顔をしていた。

「…野郎は、こんな事でくたばる奴じゃねえ」

そう言つて土方は、フェイトの方を向いた。

「アイツを信じる。信じて待つてる。それに刀も居るしな」

それだけ言つて、土方は振り返つて歩き出した。

「フェイト……」

アルフが心配そうにフェイトを呼んだ。

フェイトは、拳を強く握つた。

「……行こう、アルフ」

穴に背を向けて、アルフを連れて走り出す。

崩壊する庭園の中、転移魔法を使い、アースラに帰還した。

\*

アースラ。

「庭園崩壊終了。全て虚数空間に吸収されました」

「次元震停止します」

「断層発生ありません」

「了解」

局員の報告を聞いて、リンディは頷いた。

そして、土方が持ってきたアリシアの亡骸が入ったケースは、別室に保管された。

\*

医務室。

「ぎ…銀さんが!？」

クロノから、銀時とプレシアが虚数空間に落ちた事を知らされた。なのはとユーノは愕然とする。

「…すまない」

クロノは頭を下げて、心からの謝罪をした。

「あの！何か助ける方法はないんですか！」

なのはは声を上げて言う。僅かな可能性を求めて。

「…方法は…ない」

目を固く閉じ、拳を震わせながら、クロノは悔しそうに答えた。

「そんな…」

なのはは表情を暗くする。

医務室は重たい空気に囲まれた。

\*

独房。

フェイトとアルフ、真選組が入っている。

真選組も同室する事で、フェイトへの拘束具の取り付けはなくなった。

やはり銀時とプレシアの事がショックなのか、フェイトは顔を俯いたまま黙っている。隣にいるアルフは、心配そうにフェイトを見つめてる。

「元氣出せ！お嬢ちゃん！」

近藤が沈黙を破った。

「万事屋の野郎は、そんな事でくたばるような男じゃない！きつと

プレシアさんを連れて帰ってくるさ！俺達が保証する！」

「旦那のしぶとさは、ゴキブリ並ですからねエ」

沖田も、いつもの軽い口調で言った。

「…うん」

フェイトは小さく頷いた。

(銀時…母さん…私、信じて待つてるから)

両手を胸に当てながら、フェイトは二人の無事を願い、信じて待つ  
のだった。

\*

真っ黒い空。

(アレ？なんだコレ？空が真っ黒だ…)

銀髪の男と長い黒髪の女が倒れてる。

(アレ？真っ黒なのは俺じゃねーか)

銀髪の男がつつすらと片目を開けてる。

(アレ？なんで俺、こんな所にいるんだ？アレ？こんな前にもな  
かったっけ？原作でやったよね？アレ…？)

\*

「ん…」

プレシア・テストロッサは意識を取り戻した。

ゆっくりと目を開けると、顔に何か当たってる感触がした。プレシ  
アは顔を上げて見ると、銀時の顔があった。

「きゃああ！？ぎ…銀時っ！？」



慌ててプレシアは起き上がって、銀時から離れた。

どうやら自分は、銀時の上に倒れていたようだ。深呼吸して気分を落ち着かせる。落ち着いて銀時の脈を確認したり、息をしているか確認する。脈はあるし、息もしている。銀時はただ眠っているだけだった。

「よかった…」

銀時が無事な事に、プレシアはひとまず安心した。

銀時の無事を確認した後、周囲を見渡した。何も無い真っ暗闇。だが明かりもないのに、自分の体と銀時の姿だけ妙にハッキリと見える。

「ここは一体…？」

プレシアは考えた。

自分達は確か、虚数空間に落ちたはず。という事はここは死後の世界？天国？地獄？少なくとも天国という感じではない。

顎に手を当てて考えていると、

「ふあ〜」

銀時が欠伸をかきながら、上半身を起こした。

「銀時！気がついたのね」

「あ…？プレシア…？」

寝ぼけながらプレシアを見た後、銀時は周りを見渡した。

「何この真っ黒い空間？」

銀時は目を細めた。

「私にも解らないわ」

プレシアは床に落ちてる、自分の杖を拾った。

銀時は立ち上がった。

「銀龍わかるか？」

「我にもわからない」

銀時は銀龍にも聞くが銀龍もわからないと答える。

「まさか仙人が出てくるとかないよな…？」

『それはないだろ』

銀時がそんな不安を抱いて、銀龍がツツコンの時、

「おお。これは驚きました。自力でこの空間に来るとはどこからか、男の声が聞こえてきた。」

「!?!」

すぐに銀時とプレシアは、周囲を警戒した。

周りには誰もいない。

「まあ待って下さい。私は敵ではありません」

また男の声が聞こえる。

「おい。コソコソ隠れてねーで、出て来たらどうだ？」

銀時は、腰に差してある木刀を掴む。左手には銀龍を握る。

プレシアも、杖を構えながら警戒を続ける。

「私なら、ここにいますよ」

「どこだよ？」

銀時はキョロキョロと周りを見る。やはり誰もいない。

「今、貴方達がいるこの空間ですよ」

「え？」

銀時とプレシアはポカンとなる。

『今………なんと言った？』

銀龍が確かめる。

「だから、今、貴方達がいるこの空間ですよ」

声はそう言う。

互いに顔を見合わせる。それから顔を前に向ける。

「この空間が…貴方？」

プレシアが戸惑いながら尋ねた。

「はい。申し遅れました。私『アルハザード』と言います」

空間が自己紹介した。

「は？」

銀時とプレシア、銀龍は間抜けな声を出した。

しばし呆然となって、場が沈黙する。

「あの〜」

沈黙に耐えられず、『アルハザード』を名乗る空間が二人と一本に声をかける。

銀時の目が、カツと見開かれる。

「『アルハザードオオオ!!?!?』」

ありつたけの声で、銀時と銀龍は叫んだ。銀時と銀龍の声が空間に響いた。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハイ。今回も質問コーナーやるぞオ。今回のアシスタントは」

フェイト「フェイト・テストロッサです」

銀八「それじゃ、質問行こうか」

フェイト「まずはペンネーム『黒龍』さんからの質問

『黒龍』では、質問にいきましょう」

1.なのはとフェイトへ。なんとクロノがあなた達の写真を見て欲情していました。どうしますか？

2・銀さんへ。このさい一夫多妻でラブーズたちを幸せにしたら？

3・ナナフシさんに質問です。全ての話をオリジナルにするのと、新八のハーレムものを書くの。どっちが辛いですか？』……なのは「

なのは「うん」

二人はデバイスとバリアジャケットを展開し、

なのは「デイベインバスター！」

フェイト「サンダーレイジー！」

クロノ「ぎゃあああああああああ！」

クロノに魔法を放った。

銀八「ほつといて、二つ目だが……」

銀時「いや、何でそうなの！？一夫多妻って！無理だからな！絶対嫌な予感しかしないからな！」

ナナフシ「良いかもしれない……」

銀時「するなアアアアア！」

ナナフシ「しょうがないなア、メインヒロインだけに」

銀時「変わらねえから！」

銀八「むかつく！ナナフシ最後の質問だけど」

ナナフシ「どつちでしょうね。新八のハーレムが一番考えにくいです。ね。オリジナルなら考えようがありますけど。だから、新八のハーレムが難しいです！」

銀八「だそつだ。『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

フエイト「次で最後です。ペンネーム『ケン』さんからの質問  
『まあいい・・・質問しよう。』

お妙へ

クロノが貴方の事を『傲慢雌豚貧乳ゴリラ』と罵り、貴方が作った料理を『犬の餌以下の食い物でダメエは料理を作るな』と言っていました。

どうしますか？

クロノへ

貴方はエロノと呼ばれている由来はいつも女子更衣室や女風呂、女子トイレの盗撮をしたり、セクハラをしている所からきたのですか？（黒笑）

クロノへ

貴方に顔が屁怒紹様の龍の屁怒紹ドラゴンと屁怒紹様の顔をしたキメラである屁怒紹キメラを貴方に送りました。これをどうしますか？ちなみに魔法等の力は一切効きませんので絶望に唸って苦しんでボロボロにされてくださいえ（黒笑）

以上です。『クロノ……』

フェイトはクロノが哀れと思った。

お妙「んだと、コラアアアアアア！」

クロノ「言ってるぎゃあああああああああ！」

銀八「二つ目だが」

クロノ「そ……そんな事……して……い……ない」

銀八「すんげえボロボロだな。三つ目だが」

屁努紹ドラゴン「少し、O H A N A S I しましょうか」

クロノは屁努紹ドラゴンと屁努紹キメラに連れて行かれた。

そして……、

クロノ「ぎゃあああああああああああ！」

クロノの断末魔が響いた。

銀八「と言う訳で『ケン』さん。クロノをちゃんと病院に連れて行ってやって」

フェイト「質問は以上です」

銀八「また次回」

第二十訓：本当に大事なモノなら手放すな（後書き）

ナナフシ「『アルハザード』に来ました」

銀時「そうだな」

ナナフシ「アリシアは蘇るのか!？」

銀時「どうなんだ？」

ナナフシ「まあ、『アルハザード』で無理でも別の方法があるけど」

銀時「は？」

ナナフシ「と言う訳でまた次回！」

銀時「おい！最後のどういう意味なんだ!？おい！」



## 第二十一訓：死んだ人と出会えると嬉しい（前書き）

ナナフシ「……」

銀時「珍しいな。お前が一日置きに投稿しないなんて」

ナナフシ「いやね。アリシアを蘇らせるべきか蘇らせないか悩んでた訳」

銀時「なるほど。で、後一つあるんだろ？」

ナナフシ「新しく買ったゲームのセブンスドラゴンにはまってました！今もはまり中！」

銀時「おい！」

ナナフシ「面白いんだから良いだろ！セブンスドラゴンで作ったキヤラクター三人とも俺が好きな声優だし」

銀時「誰と誰と誰だ？」

ナナフシ「杉さんと水さんと田さんだ！」

銀時「おiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！それ完全に俺とフェイトとなのはの声優じゃねえか！？」

ナナフシ「だから、好きな声優さんだよ！そろそろ始めようぜ！」

銀龍『『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まるぞ！』

## 第二十一訓：死んだ人と出会えると嬉しい

「『アルハザードオオオオ!!?』」  
ありつたけの声で、銀時と銀龍は叫んだ。銀時と銀龍の声が空間に響いた。

「まさか…ここが…アルハザード…?」  
プレシアも驚きながら、再び周囲を見渡した。

自分達以外、誰もいない。何も無い。ほとんど『無』に等しき空間。ここが、自分が探し求めてた場所『アルハザード』。

「嘘つくんじゃねエエ!こんな何も無い真っ黒い空間がアルハザードだったらなア、俺の家の押し入れもアルハザードだろうがアアア!!」

「ちよつとオ!押し入れと一緒にしないでくださいよオ!」

銀時の言葉にアルハザードは怒る。

(何故だ?懐かしい感覚がする……)

銀龍は不思議に思った。

その時だった。

「ゲホツ…!ゲホツ…!ゴホツ…!」

銀時の隣にいるプレシアが、急に咳込んだ。

「プレシア!!」

銀時が駆け寄る。

「大丈夫か!?おい!しっかりしろ!!」

銀時は、プレシアの肩を抱きながら声をかけた。咳は激しくなり、最後には吐血をした。

「ハア…ハア…:…:どうやら…:もう限界みたいね…:」

手に付着してる、自分の血を見ながらプレシアは呟いた。

「バカヤロー!諦めんな!何か方法があるはずだ!!」

『気をしっかりと持て!!』

必死にプレシアを助ける方法を考える。

その時、

「あの〜」

アルハザードの声がした。

「そちらの男ばかりに、気を取られて気付かなかったんですが…、  
貴女は病気なんですか？」

「ええ…不治の病よ……」

顔を上げながらプレシアは答えた。

プレシアの答を聞くと、アルハザードはしばし黙り込んだ。時折、  
うぐんと何か考え込んでいる声が聞こえた。

「…わかりました。貴方達がここに来たのも何かの縁。すみません。  
そちらの男の人の名前は？」

「銀時。坂田銀時だ」

アルハザードに聞かれて、銀時は名乗った。

「女性の方は？」

「プレシア。プレシア・テストロッサよ」

プレシアも自己紹介をした。

「では、坂田さん。テストロッサさんから少し離れてください」

「何するんだ？」

銀時は目を細めて空間を睨んだ。

「テストロッサさんの体を調べます。大丈夫です。絶対に危害は加  
えないと約束します」

ハッキリとアルハザードが言った。

銀時はしばし考えた後、プレシアに顔を向けた。咳は収まったが、  
プレシアは苦しそうな顔をしている。

まだアルハザードの事を、完全に信用したわけではない。だが、他  
に方法はない。

「…わかった。頼んだぜ」

「はい」

銀時の言葉に、アルハザードは力強く答えた。

銀時はプレシアから離れて様子を見る。

「では、テストロツサさん。そのまま動かさないでください」  
「え…ええ…」

戸惑いながらも、プレシアはアルハザードの声に従った。  
プレシアの足下に巨大な魔法陣が展開された。

「ふむふむ…なるほど」

魔法陣を展開してから、アルハザードはブツブツ呟く。プレシアの体を調べているのだろう。

銀時は静かに様子を見守り、プレシアも黙って座っている。  
しばらくして、

「あゝはいはい。わかりました」

アルハザードの軽い声が響いた。

「じゃあ今から治しますんで、そのままじっとしてて下さい」

「え？」

アルハザードの言葉に、プレシアはポカンとなる。

足下の魔法陣が少し強い輝きを放った。時間にして二、三秒くらいか。輝きはおさまり、足下の魔法陣も消えた。

「オツケーです」

アルハザードがそう言った直後、

「…！」

プレシアは、自分の体の異変に気付いた。

「体が…軽いわ！痛みも苦しみも全くない！！」

「えっ！？」

様子を見守ってた銀時も、驚きの声を上げた。

慌ててプレシアに駆け寄る。

「信じられないわ…不治の病が治るなんて…！」

「そちらの世界では、不治の病かもしれませんが、私にとってはそうではありません。あっ、ついでに病気で弱ってた体を回復させて、健康状態も良好にしました。それなら別の病気にかかる心配はないでしょう」

と、軽い口調でアルハザードが説明した。

プレシアは、まだ信じられないと言った顔をして、自分の体を眺めている。

「やるじゃねーかアルハザード！」

「いや、それほどでも」

銀時の言葉にアルハザードは照れた。

その時、プレシアはある事をアルハザードに聞くことにした。

「あの…アルハザードさん」

「あつ、呼び捨てで結構ですよ」

「じゃあ…アルハザード…貴方に聞きたい事があるの」

「何ですか？」

そこでプレシアは一旦、言葉を止めて目を閉じた。深呼吸をして、ゆっくりと目を開ける。

「貴方…死者の蘇生は可能かしら？」

険しい表情でプレシアは尋ねた。

隣にいる銀時は少し驚いたが、口は挟まなかった。

「死者の蘇生…ですか」

ポツリとアルハザードが呟いた。

プレシアは、手に汗を握りながら答えを待った。

そして、アルハザードはプレシアの問いに答える。

「申し訳ありませんが、いくら私の力でも死者の蘇生はできません」

プレシアは、アルハザードの答えを聞いて目を閉じた。

「そうよね…無理よね…そんな方法があるはず無いわね……」

顔を俯いて呟いた。

「…すみません」

本当に申し訳なさそうにアルハザードは謝った。

その時だった。

『あるのだから？』

銀龍が答えた。

『あるのだから？その魔法……何故隠す？』

銀龍が淡々と喋る。

「おい、銀龍？」

銀時は銀龍を不思議に思う。

プレシアは驚いた顔をしている。

「あなたは……その刀……まさか銀龍ですか？」

アルハザードが訪ねる。

『何故我を知っている？我は自己紹介はしていないぞ』

銀龍が言う。

「覚えてないんですか？」

『何をだ？』

アルハザードの問いに？マークを浮かべる銀龍。

銀時とプレシアもそうだ。

『我は記憶がないんだ。主と出会う前の記憶が……』

銀龍はそう言う。

「そうですね……」

アルハザードは黙り込む。

「銀龍……何であるって知ってたんだ？」

銀時が銀龍に訪ねる。

『何故だろうな……急にあると思った。記憶に一瞬だけそんなのが』

出てきた気がした』

銀龍はそう言う。

「わかりました……ありますよ」

「本当!？」

プレシアは驚く。

「ただし……特別ですよ」

「ええ」

プレシアは頷く。

「で……その死体は？」

『あ……』

アルハザードが訪ねると、二人と一本は間抜けな声を出した。事情をアルハザードに話す。

「では……ここに呼び出しましょう」

アルハザードがそう言うつと魔法陣が展開され、そこにアリシアの死体が現れた。

「それでは……」

アルハザードが言うと、アリシアの所に魔法陣が展開される。そして、光が収まる。

「……ん」

アリシアはゆっくりと目を開けた。

プレシアはそれを見て涙を流した。

「お母さん？」

アリシアはそう言うつ。

「アリシア！」

プレシアはアリシアに抱きつく。

「どうしたのお母さん？涙が出てるよ？」

「大丈夫よ……何でもないの」

プレシアはギュッとアリシアを抱く。

「あんがとよ。アルハザード」

「いえいえ、あ、確かもう一人娘さんが居るんですよ。裸のままも何ですし……テストロツサさん。アリシアさんから一度離れてください」

「え……ええ」

言われた通りアリシアから離れた。

「それでは！」

アリシアの所に魔法陣が展開される。

すると、アリシアはフェイトと同じくらいに成長し、服も着ていた。

「あれ？大きくなった！」

アリシアは喜んでいた。

「アリシアさんの方が姉なのに、妹より小さいのはね。服はサーピスです」

アルハザードはそう言うつ。

「あれ？おじさん誰？」

「おじ……！？」

銀時はおじさんと言われてへこむ。

「あのさ……俺……加齢臭とかする？おじさんはやめてくれない？お兄さんって呼んでくれない？まだ二十代だから」

銀時はそう言う。

「ゴメンなさい！私はアリシア・テストロッサ！」

「俺は坂田銀時だ」

銀時はそう言う。

アリシアは銀時をマジマジ見てから……。

「よろしくね！銀時！」

銀時に抱きついた。

「おう、よろしくな」

銀時はそのままアリシアの頭を撫でる。

アリシアはまだ無邪気な部分が残っていた。

アリシアは頭を撫でられた気持ちいいのか、嬉しそうな顔をする。

「さてと……銀龍」

『なんだ？』

アルハザードは銀龍に喋り掛ける。

皆の視線が銀龍に集中する。

その時！

「刀が喋ってる！すごい！」

アリシアが目を輝かせながら銀龍を見る。

銀時に抱きついたまま。

『我は銀龍だ。よろしくな』

「うん。私はアリシア」

銀龍とアリシアは挨拶をした。

「それでは本題に……あなたは本当に何も覚えてないんですか？」

『すまぬ……本当に覚えておらん』

銀龍はそう言う。



「そうですか……後、もう一つ、自分以外の喋る刀に会いました？」  
「あ？漸呀の奴が持つてなかったか？」

『ああ、『炎鳳』だったな』

銀時と銀龍がそう言う。

「え！？『炎鳳』と出会ってるんですか！？」

「ああ」

アルハザードは驚いていた。

「なら、私がアリシアさんを生き返らせる必要はなかったようですね。まあ、成長は私じゃないとダメですけど」

『どういう意味だ？』

「『炎鳳』にも、あなたと同じ、翼が魔力で出来るのを知っていますよね？」

「ああ、たまに空から一緒に攻めた」

銀時がそう言う。

「あの翼には能力があるんです」

「能力？」

「はい……死人を蘇らせる事が出来るんです」

「『はあああああああ！？』」

銀時と銀龍は驚いた。

「マジでか！？」

「はい」

銀時はアルハザードに訪ねるとはいと言う。

銀時は考える。

（なら、何で攘夷戦争の時に使わなかった？……あ……戦争で死んだ奴が蘇っても……苦しいだけだよな）

銀時はそう思う。

「どうしたの？銀時」

アリシアは銀時に訪ねる。

銀時は知らぬ間に悲しい顔をしていたのだ。

「いや、何でもねえ」

銀時は普段の顔に戻す。

「後……あらゆる『厄』をも被い清める程の力を持っています」

「マジでかアアアアアアアアアア！」

銀時は声を上げた。

「あの翼には鳳凰の力が宿っているとされているんですよ」

「ある意味凄いわー！」

銀時は叫ぶ。

「坂田さんが銀龍の主ですよな？」

「ああ」

アルハザードはそう言つと銀時は頷く。

「銀龍をどんな風に使っていますか？」

「……大切な仲間を護る為にだ」

銀時がそう答える。

「そうですね。それはよかったです。気を付けてください。銀龍は使い

方によっては……世界を救つし、世界を滅ぼしてしまいます」

「それはどういう事だ？」

「その内わかる時が来ます。絶対に銀龍を悪い事には使わないでく

ださいね」

「ああ」

銀時は頷く。

『そろそろ帰るとしよう』

銀龍がそう言つ。

「そうね。アルハザードありがとう」

「いえいえ」

プレシアはお礼と言う。

「アリシアは銀時にだいぶ懐いているようだし」

プレシアが銀時の方を見ると、アリシアはまだ銀時に抱きついてい

た。

それを見て、プレシアは微笑んだ。

「銀時」

「何だ？」

銀時はプレシアに声を掛けられ、返事をする。

「これからは、私とアリシアとフェイトと生きていくわ。もちろんアルフも」

「そうか」

銀時は微笑む。

プレシアは言い終えるとまた口を開く。

「それじゃあ元の世界へ戻りましょう」

「プレシア」

「何かしら？」

プレシアは首を傾げた。

「どうやって戻るんだ？」

「あ……」

そうだ。自分達は虚数空間に落ちてここに来たのだ。一体どうやって戻る？また虚数空間に落ちるか？いや、そんな事したら今度こそ命はない。

「ご心配なく。私が三人を元の世界へお送りします」

二人の足下に魔法陣が展開された。

「悪いな。いろいろ世話になったぜ」

「いえいえ。あっ、ただし一つお願いがあります」

「お願い？」

二人は首を傾げた。

「私の存在を外の世界に教えないでください。私の力を悪用しようとする者が、出てくるかもしれないので」

「ええ。わかったわ」

プレシアは頷いて答えた。

「貴方達だったら、いつでも歓迎しますけどね。まあ何もない所です」

「今度からキレイな姉ちゃん用意しときな」  
笑みを浮かべながら銀時が言った。

「それは無理です」

「即答かよ」

そんな話をしてる内に魔法陣の光が強くなる。  
そろそろお別れだ。

「それじゃあお二人さん、お幸せに〜」

「えっ!?!?」

アルハザードの言葉に、プレシアは頬を赤くした。

「ちよっ…ちよっと待ちなさい!私と銀時はそんなんじゃない!」  
プレシアが言い終わらない内に、二人の姿はアルハザードから消えた。

「あの様子だと、テストロッサさんの方はまんざらでもない感じだな」

アルハザードは一人、楽しそうに呟いた。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生!」

銀八「ハイ。質問コーナー始めるぞオ。今回のアシスタントは」

アリシア「復活したアリシア・テストロッサです!」

銀八「今回出てきて、今回アシスタントかよ!まあ、いいや。始めるぞ」

アリシア「はい！まずはペンネーム『クロウ』さんからの質問

『ナナフシさんに質問なんですが

銀さんのハーレムエンドを考えてくれませんか？

単独ヒロインではなく2・3人の複数ヒロインエンドをみてみたい  
です。』だって」

ナナフシ「そうですねエ……ここで言うとなタバレになりますので、  
考えておきます！」

銀八「むかつくんだけど！？と言う訳で『クロウ』さん。これの最  
終章はまだまだ先ですが、最終章の最終回を楽しみにしてしてくだ  
さい」

アリシア「次で最後だよ。ペンネーム『黒龍』さんからの質問

『黒龍「それじゃ、質問に参ります」

1・かまっ娘クラブの皆さんへ。クロノがあなた達のことをかわい  
い、と言っていましたけどどうしますか？

2・フェイトとなのはへ。銀さんがなんと、俺は俺より料理ができ  
る女が好きだぜ、とかなんとか言っていましたけど、どうしますか？

3・ミラクル とクロノが戦ったらどっちが勝ちますか？ 実際に  
戦わせてみてください。敗者にはナナフシさんが考えた罰を。』一  
つ目だけど」

アゴ美「あらア……可愛い子ねエ。キスしてあげるわ」

クロノ「ぎゃあああああああああああああああ！」

クロノはかまつ娘クラブの皆に捕まり、解放された後は、魂が抜けた様になっていた。

銀八「ドンマイだ。二つ目だが」

フェイト「私頑張るよー!」

なのは「私も!」

銀八「カーツペ!」

銀八は唾を吐いた。

アリシア「汚いよ。最後は」

ミラクル「絶対勝つ!」

クロノ「ちよつ、僕、今ぼろぼ「ぎゃあああああああああああああ  
あ!」

クロノはミラクル にボコボコにされた。

ナナフシ「勝者!ミラクル !よって敗者には!」

ナナフシの所にヒモが現れる。

それをナナフシは引っ張る。

ナナフシ「地獄で頑張ってきて」

ガゴン!

クロノの足下の床が開き、クロノは落ちていった。  
下にいたのは……。

「ウホ、いい男」

ホモの軍団だった。

クロノ「ぎゃあああああああああああああー！」

クロノの断末魔が響いた。

その床は閉じた。

銀八「と言つ訳で『黒龍』さん。クロノがこの後どうなったかは想像に任せます」

アリシア「それでは」

銀八「また次回！」





第二十二訓：弁護をするのも大変です……たぶん（前書き）

ナナフシ「アリシアは魔導士の才能がなかった事がわかりました」

銀時「そうなのか？」

ナナフシ「はい、ルシフェルさんに教えてもらいました。何処のホームページかも教えてくれたので、そのホームページで見ると元々なかった事がわかりました」

銀時「そうか」

ナナフシ「それでは！」

アリシア「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まるよ」

ナナフシ「セリフ取られたアアアアアアアアアア！」

第二十二訓：弁護をするのも大変です……たぶん

アースラ。

フェイト達が入ってる独房。

現在夜中の二時。

フェイトは眠れずにいた。真選組の三人とアルフは眠っている。

（母さん…銀時……）

両手を握って二人が帰ってくる事を祈る。

その時、フェイトの前で突然強い光が発せられた。

「！！！」

あまりの眩しさに、フェイトは手で目を隠した。

やがて光がおさまり、フェイトは手をどけて前を見た。

ソレを見て、フェイトは目を大きく見開いた。

「どこだ、どこ？」

「どこかの部屋みたいだわ」

「どこだろう？」

坂田銀時とプレシア・テストロッサとアリシア・テストロッサが、フェイトの目の前にいた。

「母…さん…？」

「え？」

声に気付いて、プレシアは振り返った。

そこには、自分の愛する娘がいた。

「フェイト……」

プレシアは体が震えた。目から涙が零れる。

「母さん……」

フェイトがゆっくりと近づいてくる。

「フェイト！！！」

プレシアは泣きながら、フェイトに抱き付いた。

「母さん！！！」

フェイトも涙を流しながらプレシアを抱いた。

「フェイト……ごめんなさい……ごめんなさいフェイト！」

「ううん！母さん……母さんが生きててよかった！無事でよかった！」  
プレシアとフェイトは涙を流しながら、離さないように互いの体を強く抱きしめた。

二人の様子を見つめながら、銀時は微笑んだ。

「よかったな……プレシア、フェイト」

すると、近藤が目を覚ました。

「何だか騒がしいな……」

目を擦りながら体を起こす。

そして目の前の光景に驚く。

「えっ！？万事屋！！？プレシアさん！！？」

近藤のデカイ声が、独房に響いた。

「よオ。いい夢見たかいゴリラ？」

銀時が近藤に言う。

「わぁ！ゴリラが居る〜！」

アリシアは近藤を見ながら言う。

「お嬢ちゃん！俺人間だから！ゴリラに似てると言われるけど人間だからって……」

近藤がアリシアを見て固まった。

「万事屋……もしかして……そいつは」

「ああ、アリシアだ」

土方の問いに銀時が答える。

「マジですかイ？死んでたんじゃ？」

「いやア……ドラゴ ボールを使って蘇らせたの」

「マジでか！？」

近藤は完全に銀時が言った事を信じてしまった。

アリシアはフェイトに気付く。

「お母さん、この子は誰？」

アリシアは自分とそっくりのフェイトを見て、目を輝かせていた。

「この子はフェイト……あなたの妹よ」  
「妹!」  
アリシアはそれを聞くと嬉しそうな顔をして、フェイトに近づく。  
「私はアリシア。よろしくねフェイト!」  
「よろしく、アリシア」  
二人は握手をする。  
銀時と真選組三人はそれを見て微笑む。

\*

銀時とプレシアが虚数空間から生還した事実、アース内の人達は全員度肝を抜いた。最初は幽霊だと騒いだ者もいたが、すぐに生きている生身の人間だとわかった。  
更には死んだはずのアリシアまで居るのだ。  
なのは銀時を見て、泣きながら抱きついた。  
当然、クロノとかに問い詰められたり。  
「一体どうやって虚数空間から戻ってきたんだ!？」  
「海を漂ってた、いつの間にか砂浜に着いてた感じ？」  
「じゃあ、死んでいたはずのアリシアはどうなんだ!？」  
「ドラゴンールを使った」  
「マジメに答える!!後、ドラゴンボールって何だ!？」  
約束通り、銀時とプレシアとアリシアはアルハザードの存在を誰にも話さなかった。  
銀時は、また騒がしい日常に戻った。

\*

翌日。

プレシアとフェイトはリンディに呼ばれてた。アリシアはプレシアとフェイトについてきた。部屋に入ると、リンディとクロノが待っていた。

「おはようございます。とりあえずお座り下さい」

リンディが椅子に座るように促した。

プレシアとフェイトは椅子に座った。

「それでは早速本題に入ります」

リンディは報告書を取り出た。

「フェイトさんとアリシアさんは、本局の保護施設に移送する事になります。ただ、今回の事件の重要参考人なので暫くは事情聴取を受ける事になります」

時折、紙に目を通してフェイトに説明した。

「あの…母さんは…？」

プレシアを心配そうに見ながらフェイトが尋ねた。

「…残念だけど、プレシアさんは管理法違反、しかも次元断層を引き起こそうとした張本人。私達も目をつむるわけにはいかないの」  
険しい表情でリンディが語った。

「そんな…」

フェイトは表情を暗くする。

「お母さん…何かしたの？」

アリシアはプレシアを訪ねる。

「大丈夫よフェイト。母さんは大丈夫だから。アリシアも心配しないで」

プレシアは微笑みながら、優しくフェイトとアリシアの頭を撫でた。

「じゃあクロノ。この報告書を提出して…」

リンディがクロノに報告書を渡そうとした時、

「異議あり！」

扉の向こうから、男の声が聞こえた。

全員が扉へ振り返った。直後、扉は勢いよく開かれ、スーツ姿の二人の男が中に入ってきた。

「いや、突然すいません」

男は、くいつと眼鏡を上げた。プレシアの横を通り過ぎて足を止める。

「私、急遽プレシア・テストロッサの弁護をさせていただく……」

そこで男はプレシアとフェイトに振り返った。

「弁護士の坂田です。よろしくお願ひします」

ニヤリと笑みを浮かべるのは坂田銀時。

「銀時！！？」

「あ、銀時」

プレシアとフェイトの声が重なった。

アリシアは銀時の名を呼んだ。

「こちらは、助手の沖田君と銀龍君だ」

銀時は、隣にいる栗色の髪の男と手に持っている白銀の刀を紹介した。

「沖田です」

『銀龍です』

沖田と銀龍は、間延びした声で名乗った。

「な……何のつもりだ！？」

クロノが二人に向かって叫んだ。

「先ほどのプレシア・テストロッサの措置について異議がありませんね」

銀時は、不敵な笑みを浮かべる。

「私は、プレシア・テストロッサの無罪を主張します！！」

銀時はリンディとクロノの前でプレシアの無罪の主張した。

「ま……また貴方は無茶な事を……！」

クロノが銀時を睨みつけた。

「銀さん。いくら何でも今回ばかりは……」

「報告書よこしなア」

リンデイが話してる途中で、沖田は報告書を取った。

「おい！勝手な事は許さんぞ！」

クロノが声を上げる。

だが、銀時と沖田は、クロノの声を可憐にスルーして報告書を見る。プレシアとフェイトは、もう黙って成り行きを見守る事にした。こつちが何を言っても、おそらく銀時は止まらない。今までの銀時の行動でよくわかった。

「なるほどねえ……」

報告書を読み終わった銀時は、ため息をついた。

「思ったとおりでしたねエ」

隣にいる沖田もため息をついてる。

『うむ、そうだな……』

銀龍はため息をつけないが「ハア……」と聞こえた。

「い……一体何なんだ？」

クロノが尋ねた。

銀時は目を細めて、クロノ達を見た。

「この報告書……」

スツと報告書を前に突き出した。

「間違いだらけじゃねえかアアア！！」

怒鳴りながら、報告書をデスクに叩きつけた。

リンデイとクロノ、プレシアとフェイトとアリシアは体をビクリと震わせた。

「全部書き直しだ」

「ちよつ……ちよつと待て！書き直してどついう事だ！？」

クロノが叫んだ。

「だーかーらー、間違いだらけの報告書を書き直せって言ってんだよ」

銀時は、眼鏡をクイツと上げながら言った。

「どこも間違えてないぞ！」

クロノが反論する。

『うむ、そうか。なら、主よ』

「おう、それじゃあ俺が間違いを指摘してやる」

そう言っただけで銀時は、報告書を開いた。

手には赤ペンを持つてる。

「『プレシア・テスタロツサはジュエルシードを使用して次元断層を引き起こそうとした』。はい、ココ間違ってますね」

赤ペンで『x』を書きながら、銀時が言った。

「いや、間違っただけでいいぞ！本人も認めてるんだ！」

クロノがデスクを叩きながら言った。

ここで沖田が手を挙げた。

「異議あり！どうせ不眠不休で相手を弱らせて、無理矢理、自供させたんだろ？そんな自供に証拠能力はありませんぜエ」

「いや、昨日一回話を聞いただけなんだが…」

クロノは顔をしかめた。

ここで銀時も口を開いた。

「次元断層が起きそうになったのは事実でしょう。しかし、これが故意に起きたのか偶発的に起きたのか甚だ疑問であります」

報告書を片手に銀時は言った。

「疑問って…プレシアが九つのジュエルシードを発動させて、次元断層が起これるようになったんだぞ。貴方も一緒に映像を見ただろ」

クロノが負けじと反論した。

また銀時が手を挙げる。

「異議あり！そもそもプレシアがジュエルシードを集めてた目的は、危険なロストログアを海鳴市から回収するため。つまり善意でジュエルシードを集めていたのです」

「ぎ…銀時？」

プレシアが声をかける。

『それにもしかしたら雷雅達に利用されていた可能性だってある！』  
銀龍は言う。

「でも…プレシアが雷雅達を雇ったのを自分で言っているんだぞ」



！」

クロノは言う。

「元々、あいつ等は俺達の世界では指名手配犯でさア……それにト口くて薄情でいい加減な組織、時空管理局の代わりに、雷雅達の企みを知ったテスタロッサ親子は必死になってジュエルシード集めをしてたんでさア」

沖田が説明した。

再び銀時が口を開く。

「むしろこれは対応の遅れた、おたくら時空管理局に問題があるわけであり、プレシアとフェイトには何の罪もない」

『それはお前等が原因だ』

ニヤリと憎たらしい笑みを浮かべる。

クロノはグツと歯を食いしばり、リンディも険しい表情をする。銀時の言う通り管理局の対応が遅れたのは事実。

「だが…次元断層が…！」

クロノが反撃しようとするが、

「異議あり！あれは回収したジュエルシードが暴走した結果であり、プレシアに罪はない！」

「そもそもジュエルシードを早く管理局が預かっていれば、あんな事にはならなかったとうワケでさア」

銀時と沖田は怯む事なくクロノに言った。

管理局の対応の遅かった点を攻める二人に、クロノはなかなか反論できない。

「では銀さん」

ここで、今まで黙ってたリンディが口を開いた。

「プレシア女史が局員を攻撃した事については、どう説明するつもりですか？」

リンディが反撃に転じた。

だが、銀時は怯まない。

「異議あり！！あれはプレシアが娘のアリシアを護るために行った

行為！母が娘を護る行為を責める事は、誰にも出来ない！！」

「銀時……」

銀時の発言に、プレシアは思わず涙目になる。

沖田も銀時に続く。

「更に言えば、善意でジュエルシードを集めてたプレシアの城に、勝手に侵入した時空管理局の方が住居不法侵入罪で犯罪者でさア」  
「ニヤリと腹黒い笑みを浮かべる沖田。」

「う……」

銀時と沖田の主張に、リンディの顔は険しくなる。

リンディの隣に立つてるクロノは苦い顔をしている。ダメだ。僕らじゃこの二人は止められない。この二人に勝てない。

「おや？どしたのかなクロノ君？リンディさん？」

「まさか証拠もなく、プレシアを犯罪者にしたのかイ？こいつア冤罪事件だねエ」

『それはダメだな……ちゃんとした証拠もなく犯罪者にするとは』  
銀時と沖田が口元を歪める。

リンディとクロノは、返せる言葉がなかった。

時の庭園は崩壊して、証拠と呼べる証拠はない。

リンディは眉間にシワを作って考えた。部屋が静寂に包まれる。しばらくして、リンディはため息をついた。

「……わかりました。報告書を書き直し、プレシア女史をフェイトさんとアリシアさんと同じく、管理局で保護します」

ついにリンディが折れて、プレシアもフェイトと一緒に管理局に保護される事になった。

いつもなら、ここでクロノがリンディに叫ぶのだが、今回はなかった。クロノは疲れ切った顔をしている。

（きつと向こうで裁判をしても…この二人に勝てる検事はいないだろうな……）

なんて事を考えながら、クロノはため息をついた。

「それじゃあ…私と母さんとアリシアは……」

フェイトは身を乗り出す。

「これから三人は一緒に暮らす事になります」  
リンディはフェイトに言った。

「母さん！」

すぐにフェイトは、プレシアに顔を向ける。

「フェイト！」

プレシアも笑顔でフェイトを見る。

アリシアも笑顔で居た。

そんな三人の様子を見て、リンディはため息をつきながら微笑んだ。

「ま…これはこれで、よかったのかもしれないわね」

リンディは席を立った。

「まったく…貴方は本当に……」

クロノは頭を抱えた。

「まあまあ。あんまり真面目すぎると、背が伸びねーぞ」

「背は関係ない!!」

今までの一番大きな声で、クロノが叫んだ。

「銀時！」

フェイトが銀時を呼んだ。

「ん？」

振り返ってフェイトを見る。

「ありがとう。銀龍もね」

笑顔でフェイトは、銀時に礼を言った。

「母ちゃん大事にしるよ」

『当然の事をしたまでだ』

そう言っつて銀時は部屋を出た。

「いや〜いい事した後には気分がいいですねエ」

沖田も部屋を出た。

「じゃあクロノ。悪いけど報告書の書き直し、お願いね。後、雷雅達、『雷撃』の組織をこちらでもSランクの指名手配をします」

「はい」

クロノは仕方なく報告書を受け取った。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハイ、質問コーナーを始めるぞオ。今回のアシスタントは」

ナナフシ「俺、ナナフシでエす！」

銀八「お前かよ！」

ナナフシ「良いじゃんか！一度くらい出てみたかったんだよ！」

銀八「たくつ、それでは質問行こうか」

ナナフシ「え〜と、まずはペンネーム『黒龍』さんからの質問

『黒龍』では、質問に入りましょう」

1・クロノに質問。最近の銀八先生コーナーで扱いが悪いですよね。だったら、あなたが取っちゃえば良いんじゃないですか？

2・フェイトとなのはに質問。アリシアが銀さんと結婚するなんて展開になったらどうしますか？

3・なのはとフェイトに質問。銀さんと新婚旅行に行くならどこに行きたい？『一つ目だけど……』

クロノ「それで扱いがよくなるなら取るよ！」

ナナフシ「大変な事になっちゃいそうなので……バットで」

カキーン！

クロノ「ぎゃあああああああああ！」

クロノは星となった。

ナナフシ「二つ目答えて」

フェイト「え、え〜と、ど……どうしよう」

なのは「その時は私もよく……」

フェイトにとってはアリシアは姉である。

なのははまだアリシアの事をよく知らない。

銀八「最後の質問は却下で！」

ナナフシ「で、どうなの？」

銀八「聞いてる！」

なのは・フェイト「銀時（銀さん）となら何処でも！」

銀八「やっぱな！と言つ訳で『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

ナナフシ「次で最後だ。ペンネーム『黒神』さんからの質問  
『質問します。』

ミラクルへ

僕の小説では銀時と神楽はメツチャ輝いています。  
そんな2人にどんな気持ちを抱いてますか？

お妙へ

九兵衛はチンクの事を強く嫌っています。

そんな九兵衛が嫌う相手として自分もチンクを嫌いますか？『ミラ  
クル」

ミラクル「羨ましいぞコンチクシヨオオオオオオオオオオオオ  
！」

ナナフシ「……ほつとこ。二つ目だけど」

お妙「うーん、九ちゃんがその子の事嫌いだからって、私は嫌った  
りしないわよ」

ナナフシ「でも……お妙はリリカル組女多いから、人気の為になん

かやりそう……って、ぐばあああああああああああ！

ナナフシはお妙にボコ殴りされた。

銀八「余計な事言うからだ。と言う訳で『黒神』さん廊下に立ってなさい」

ナナフシ「質問は……以上……です」

銀八「また次回」

第二十二訓：弁護をするのも大変です……たぶん（後書き）

ナナフシ「雷雅達指名手配犯になっちゃったね。こっちでも銀時「そうだな」

ナナフシ「ま、当たり前か」

なのは「当たり前なの!？」

フェイト「ナナフシが考える事がよくわからない」

アリシア「そうだね」

ナナフシ「それでは」

なのは・フェイト・アリシア「次回!」第二十三訓：別れは突

然に』です!」「」

ナナフシ「次回予告出来るから言おうとしたのにiiiiiiiiiiii

iiiiiiii!」



## 第二十三訓：別れは突然に（前書き）

ナナフシ「無印編さつさと終わらせたいから連続投稿！」

銀時「おい！」

ナナフシ「さてと……：A、S編では嵐が起きそうだ」

銀時「何故に!？」

ナナフシ「オリキャラも登場だからだよ。それでは」

フェイト「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始  
まります」

ナナフシ「アリスアの次はフェイトかよオオオオオオオオオオ！姉妹にセ  
リフ取られたアアアア！」

## 第二十三訓：別れは突然に

ここは海鳴温泉。

旅館の宴会場に銀時達はいた。

プレシアも無罪となり、事件が無事解決した事を祝うために海鳴温泉で宴会を開く事になったのだ。

宴会場には、銀時と、近藤、土方、沖田の真選組の三人もいた。もちろん、フェイト、アリシア、プレシア、アルフもいる。

なのはとユーノも。  
リンデイも、クロノとエイミィも、アースラに乗ってた局員達もいる。

とにかくみんな、いた。

近藤がビールの入ったコップを片手に立ち上がり、宴会場を見渡した。

「えー、皆さんの協力のおかげで無事、事件を解決する事ができました。今日は思う存分飲んで騒いで、疲れを癒してくれ」

そう言つて近藤は、コップを上に掲げた。

「みんな、今までおつかれやしたー！！」

「おつかれやしたー！！」

近藤の声の後、みんなが乾杯した。

「何でお前が仕切つてんだよ？」

酒を一口飲みながら銀時は呟いた。

皆はわいわい騒ぎながら、酒を飲んだり、料理を食べたりしている。沖田は、ユーノに絡んでいた。

「よオ、むつつりスケベ。今日はフェレット姿で女湯に入らねえのかイ？」

酒を飲んで酔っているのか、沖田の顔は少し赤かった。

「だからアレは誤解ですつてば！」

ユーノは必死で沖田に訴えた。

土方はクロノの隣で酒を飲んでた。

「土方さん。お疲れ様です」

「オメーもな。野郎に振り回されて大変だったろ」

「ええ…まあ」

クロノは苦笑いをした。

「まあ今日は飲もうや。愚痴を肴にしてな」

そう言つて土方はクロノのコップにコーラを注いだ。その後、自分のコップにも酒を注いだ。

フェイトは、銀時とプレシアとアリシア、アルフと一緒に料理を食べていた。

「フェイトちゃん」

そこへ、なのはがやってきた。

「あ…」

呼ばれてフェイトは、なのはへ顔を向けた。

「一緒にいいかな？」

「う…うん」

フェイトは少し戸惑った顔をする。なのははフェイトの隣に座った。

「私ね、フェイトちゃんに伝えたい事があるんだ」

「え？」

フェイトが少し驚いた顔をする。

「私、フェイトちゃんと友達になりたいんだ」

優しく微笑みながら、なのはは想いを伝えた。

「…あ…あのね…私…アルフ以外に友達とか出来た事ないから…どうすればいいのかわからなくて…アリシアはわかる？」

「うん、わからない」

胸に手を当てて、フェイトは戸惑う。

アリシアに聞くが、アリシアもわからないと答える。

「簡単だよ。友達になる方法…すごく簡単」

なのはの言葉にフェイトは首を傾げる。

「名前を呼んで」

「名前？」

「うん。君とか貴女とかじゃなくて、その人の名前を呼んであげて全部そこから始まっていくから」

優しく微笑んでるなのはを、フェイトは見つめる。

「……なのは」

目の前にいる少女の名前を呼ぶ。

「うん」

なのはは頷く。

「なのは……」

もう一度名前を呼ぶ。

「うん」

なのはは頷く。

「もう私とフェイトちゃんは友達だよ」

笑顔でなのはが言う。

フェイトは少し照れた顔をする。それからフェイトは優しく微笑んだ。

「ありがとう、なのは」

ハッキリと、なのはの名前を呼んだ。

それを聞いたなのはは、嬉しそうな笑顔で頷いた。

「うん！」

それから二人は笑顔で互いの手を握った。

互いが離れないように強く。

すると、アリシアがなのはに声を掛ける。

「私とも友達になってくれる？」

「うん！」

なのはが頷く。

アリシアは嬉しそうな顔をする。

「お母さん！友達が出来たよ！」

アリシアは笑顔でジャンプする。

三人の様子を銀時は微笑みながら、プレシアは涙目で微笑みながら

見つめた。

すると、

「ひっく……えぐ……」

プレシアの隣でアルフが泣いていた。

「何泣いてんのお前？」

「だってさ……なのはってばスゴく優しい子だし……フェイトも嬉しそうに笑ってるし……」

涙を流しながらアルフが言う。プレシアが涙を拭いてあげた。

「まあ……そうだな」

微笑みながら銀時は、酒を一口飲んだ。

いい感じになってるフェイト達だったが、この雰囲気をつち壊す人物が現れた。

「よし！次はカラオケいつてみようかア！！」

叫びながら近藤はカラオケセットを用意した。

「誰から行く！！」

近藤はそう言う。

「ゴリラが歌えよ」

「ん？そうか、万事屋が歌うか！」

「誰が歌うか！！」

銀時が近藤に言う。

「銀時歌ってよ」

アリシアが言う。

「いや、何故？」

「銀さんが歌う所見てみたいなあ」

なのはも銀時に言う。

「いや、だから」

「それじゃ、一緒に歌おうよ！」

フェイトはそう言うのと銀時の手を取り、連れて行く。

「だから何でだアアアアアアアアアアアア！俺、この歌知らねえしいイイイイイイイ！」

「あ、私もフェイトちゃん！」  
「私もオ！」

なのはとアリシアもついてきた。

「だから知らねえって言ってるだろうがアアアアアアアアアア！」

銀時は結局、なのはとフェイトとアリシアと一緒に歌わされた。

あ、銀龍もね……銀時が無理矢理にだけど。

\*

そして、歌い終わって、銀時達が元の場所に戻っていた。

「もう我慢できないでござるー!!」

急に誰かが立ち上がった。

その人物とは。

「ひ…土方さん!?!」

隣に座ってるクロノはビックリした。

銀時は片眉を上げた。

「ござる?まさか……………」

銀時はイヤな予感がした。

「フェイトちゃあああん!!」

土方はフェイトに向かって走り出した。

「えっ!?!」

フェイトは怯えて体を震わせた。

「ぼぼ、僕と握手して下さい!それとサインをおおお!!」

興奮しながらフェイトに迫る土方。

「フェイト!!」

プレシアとアルフがフェイトを護ろうとした時、

「トツシーイイイ!!」

叫びながら銀時は、土方…いや、トツシーにドロップキックを食ら

わせた。

へタレたオタク、トツシー出現。

「ぶはああ!!」

トツシーは床に倒れた。

「な…何をするんだ坂田氏!？」

「汚え手でフェイトに触ろうとすんじゃねエエエ!!」

『まだ成仏していなかったのかアアアアアア!』

銀時はトツシーに鉄拳制裁を加えた。

しばらくして『トツシー』から『土方』に戻り、銀時と喧嘩になった。

\*

銀時となのはが白いご飯の上に小豆を乗せる。

「ぎ…銀時、なのは…これは?」

「ん?小豆テンコ盛り『宇治銀時丼』だ!」

銀時がフェイトの顔の前までやる。

「食つか?」

銀時が訪ねる。

「一口だけ…」

「私も食べてみる」

「フェイト、アリシア!？」

フェイトとアリシアは『宇治銀時丼』に箸をのばす。

プレシアは驚いた声を上げた。

「やめときなよ!フェイト!アリシア!絶対まずいって!」

「おい、俺の『宇治銀時丼』をバカにするなよ」

アルフの言葉に銀時が言う。

二人はそれを口に入れて、ゆっくりと噛む……出た感想は

「おいしい」「  
「え!?!」

フェイトとアリシアの声が重なり、プレシアとアルフの声は驚いた声を上げた。

「マジでか!?!」

「本当!?! フェイトちゃん、アリシアちゃん!」

「うん、おいしいよ!」

「こんなのもあるんだア」

「う……嘘……」

フェイトとアリシアを見て、プレシアとアルフはそう言った。

その後、リンディも食べて、リンディも気に入った。

\*

まあそんな騒がしい宴会にも終わりはやってくる。みんな酒を飲んで騒いで疲れ切って眠っている。起きている者もいた。

銀時は宴会場の入口に一人座ってる。

するとフェイトがやってきた。

「どした?」

「ちょっと、お手洗いに行ってくるね」

そう言ってフェイトは宴会場を出た。

銀時は、フェイトの背中に声をかけた。

「フェイト」

「何?」

フェイトは足を止めて、振り返った。

「楽しかったか?」

「うん!」

フェイトは笑顔で頷いた。また歩き出して角を曲がって銀時の視界



から消えた。

銀時はため息をつきながら考えた。

プレシアも無事で、アリシアも蘇り、事件が解決したのはよかった。だが、肝心の元の世界に帰る方法はまだ見つからない。

どうしたものかと銀時が思った時、目の前に小さな光が現れた。

「ん？」

目を細めて光を見る。

やがて光が消えてある物が床にあった。黒くて長方形の形をした物。

「こいつア…無線機か？」

銀時がそう呟いた直後、

「銀の字！銀の字！応答願います！」

無線機から声が発せられた。しかも聞き覚えのある声。

「こちら源外だ！応答願います！」

銀時はすぐに無線機を拾った。

「じーさん！」

「おお、銀の字無事か！？」

「無事か？じゃねーよ！テメーのせいで俺達は大変な目にあっただぞ！」

無線機に向かって銀時は怒鳴った。

「すまなかつたな銀の字。後でちゃんと謝るから勘弁してくれ。こつちで、新八と神楽と咲がお前の事を心配しているぞ？」

「そうか」

銀時はそう答えた。

「それじゃ、本題を言う。すぐにこつちに戻す！」

「え？」

『すぐに』、という言葉に銀時は眉を寄せた。

「お前らを送った事で装置が故障してな。さつき、やっと装置の修理を終えたばかりなんだ。だが急いで直したもんだから、また何時故障するかわからん」

少し焦った感じで源外が説明した。

元の世界へ帰れるのは嬉しいが、まさかこんな急に帰る事になるとは。

「…わかった。あと真選組の三人もいるから」

「真選組！？なんで真選組がいるんだ！？」

無線機から源外の驚いた声が聞こえた。

「理由は後で話す。とにかく連中も一緒に連れていくから、ジーさんは装置を動かしたらどっかに隠れてろ」

銀時が言った。

源外は前に、カラクリ軍団を使って將軍の首を狙った事で指名手配されているのだ。

「しょうがねーなあ。わかった。そいつらも起こして連れてこい」

「悪いな」

無線機を片手に銀時は立ち上がった。

新八達を起こそうと振り返った時、

「帰っちゃおうの？」

後ろから声が聞こえた。

銀時は声がした方を向いた。

そこには、表情を暗くしたなのはとフェイトが立っていた。

「銀時（銀さん）…」

「なのは…フェイト…」

本来、出逢うはずの無かった三人。その三人に別れの時がきた。

旅館の廊下で互いを見合う銀時とフェイトとなのは。窓から差し込んでくる月明りが、三人の姿を照らす。

「…帰っちゃうんだね。銀時」

フェイトは、寂しい表情を浮かべる。

「ああ、悪いな。急に帰る事になっちまった」

頭を掻きながら銀時が謝る。

フェイトとなのはは首を横に振る。

「謝らないで。よかったね銀時」

「そつだよ。銀さん」

悲しい気持ちを無理矢理抑えて、フェイトとなのはは笑顔を作った。それを見た銀時はため息をついた。

「そんな顔するな。これが今生の別れになるわけじゃねーんだからよ」

銀時はフェイトに無線機を渡した。

「銀時？」

「やるよ。これで源外ってじーさんに連絡すれば、俺達の世界に来れる」

そう言っつて銀時は真選組を起こしにいった。

フェイトは銀時から渡された無線機を、ギュツと握り締めた。

なのははその無線機を見た。

\*

みんなを起こさないように、銀時は真選組を起こして事情を説明した。

「本当に元の世界に帰れるのか？」

目を鋭くしながら土方が尋ねた。

「ああ」

銀時は頷く。

「まあ他に方法はないんだ。信じてみよう」

近藤が言った。

隣で沖田は眠そうに欠伸をかいてる。

フェイトが銀時に歩み寄った。

「銀時。みんなは起こさなくていいの？」

「ああ。大勢で見送りとかさねちまうとな。あれだ」

銀時はそう言う。

「オメー等から皆に、世話になったなって伝えてくんねーか？」

「うん」

フェイトとなのはは頷いて答えた。

その時、

「銀時？」

フェイトの後ろから声が聞こえた。

見ると、さっきまで眠っていたはずのアルフが立っていた。

アリシアも居た。

「アルフ、アリシア」

「起きちゃったのか」

銀時はメンドくさそうに頭を掻いた。

「フェイト。銀時達……どうしたんだい？」

不安がこもった声でアルフは尋ねた。

「…帰るんだって…元の世界へ」

「えっ!？」

アルフは驚いて目を見開いた。

「そんな…!何で急に……もう少してもいいじゃないか!」

銀時の肩を掴んでアルフが叫んだ。

「そうなの?銀時?」

アリシアは涙目で訪ねる。

「悪いな。今帰らねーと、次はいつ帰れるかわかんねーんだ」

アルフは我慢できずに、涙を流して泣き出した。

「寂しいじゃないかあ……銀時……!」

泣きながら銀時に抱き付く。肩を震わせながら涙を流す。狼の耳も

元気なく、ペタンと倒れている。

「銀時……」

アリシアも涙を流す。

そんなアルフとアリシアの姿を見て、銀時はため息をついた。

「フェイトにも言ったがよ。別にこれで二度と会えなくなるワケじ

ゃねーんだよ」

アルフの肩に手を置きながら銀時が言った。

アルフは嗚咽をもらしながら顔を上げた。

「ほ…本当かい…？」

「ああ」

銀時は優しくアルフの頭を撫でた。

アルフは腕で涙を拭いた。

「…わかった。絶対にまた会おうね、銀時」

「約束だよ」

「ああ」

微笑みながらアルフとアリシアに答えた。銀時は窓の外を眺めた。

「そういや、お前らと初めて会った夜も、こんな感じだったな」

夜空に輝く月を眺めながら銀時は呟いた。

皆も月を見る。

銀時はなのはとユーノと出会い、そしてジュエルシードを集めるの

を手伝い、フェイトとアルフと出会った。その後、プレシアを説得

して、アリシアも蘇った。

忙しかったが、楽しい日々だった。

「おお、そうだ！」

突然、近藤が声を上げた。

「せっかくだから、ちゃんと俺達の自己紹介をしないか？」

『そうだな』

近藤の言葉に銀龍は答える。

「そうだろ？じゃあまずは俺達、真選組からだ！」

近藤がコホンと咳をする。

「真選組局長、近藤勲だ！」

力強い声で近藤が名乗った。

「…真選組副長、土方十四郎だ」

煙草をくわえながら土方は、クールに名乗った。

「真選組一番隊隊長、沖田総悟。でも明日には副長になってますア」

「テメーはホント、いい加減にしろよ総悟」

副長の座を狙う沖田を、土方は睨みつける。

『我は主の相棒の銀龍だ』

銀龍も自己紹介する。

「そして、俺はご存じ、万事屋のオーナーに坂田銀時だ」  
銀時も自己紹介をする。

「私は高町なのは」

なのはは笑顔で自己紹介をした。

「私はフェイト。フェイト・テストロッサ」

フェイトも笑顔で自己紹介した。

「私はアリシア・テストロッサ」

アリシアも笑顔で自己紹介した。

「あたしはフェイトの使い魔のアルフ！」

アルフは元気に自己紹介した。

互いに自己紹介が終わり、別れの挨拶に移る。

まずは真選組の三人から。

「元気だな！フェイトちゃん！アルフ！」

「…じゃあな。フェイト。アルフ」

「フェイトとアルフも、一緒に土方さんを殺りませんか？」

「斬るぞ teme ee ee!!!」

土方と沖田の喧嘩が始まった。近藤は必死に二人を止めようとする。それからフェイトは真選組の三人を見回した。

「近藤：土方：沖田：」

フェイトの目に涙が浮かんでくる。

最後に銀時と銀龍を見た。

「銀龍……銀時……」

銀時の名前を呼んで、フェイトは顔を俯いた。  
涙がポロポロと床に落ちていく。

「元気だな。なのは、フェイト、アリシア」

銀時は優しく微笑んで、なのはとフェイトとアリシアの頭を撫でた。

「アルフもな」

「うん！」

アルフは涙目で頷いた。

「銀の字！そろそろいいか？」

フエイトの手にある無線機から、源外の声が聞こえた。

「ああ」

銀時はなのは達から離れて、真選組の元へ向かう。

「待ってください！銀さん！」

なのはがそう言うと顔をバツと上げて走り出した。

「ん？」

銀時はなのはに振り向く。

なのはは思いつきりジャンプして、銀時の胸の中に飛び込んだ。

銀時は思わずなのはを抱いた。

「お…おい…なのは…」

なのはの行動に銀時が戸惑っていると、なのはは顔を銀時に近づけた。

次の瞬間、なのはと銀時の唇が重なった。

「!!!!!!？」

銀時は目を見開いて驚いた。

銀時だけでなく、真選組の三人……いや、その場に居る皆も啞然としている。

キスをした後、なのはは下りて銀時から離れた。顔を真っ赤に染めながらも、真っ直ぐに銀時を見つめた。

「銀さん。貴方が好きです」

微笑みながらなのはは、みんなの前で銀時に告白した。

「…え……ちよっ……」

何とか我に帰った銀時が何か言おうとした時だった。

「私もこれだけ言わせて！銀時……私も貴方が好きです」  
フエイトも言った。

「…え?……」

銀時は間抜けな声を出した。

そして、光が銀時達を包み、次の瞬間にはなのは達の前から消えて

しまった。

「「また会おうね銀時（銀さん）」」  
なのはとフェイトは窓の外の月を見ながら呟いた。

\*

江戸のかぶき町。

かぶき町にある、源外の工場内から強い光が発せられた。光は収まり、工場内にある装置の扉が開かれた。中から万事屋と真選組が出てきた。

「…本当に戻ってきたのか？」

真選組の三人は工場の外を見た。

居酒屋やスナックなどの店があり、街には着物を着た人達が行き交い、天人達も歩いている。

忘れるはずのない自分達の町。江戸のかぶき町である。

「…帰ってきたな」

土方が小さく呟いた。

ふと、三人は後ろを振り返った。

そこには、なのはにいきなりキスと告白の両方をされて、フェイトからは告白されて、どうしたらいいかわからないで呆然と立ち尽くす銀時の姿があった。

「じ…じゃあ俺ら屯所に帰るわ」

「じゃあな万事屋！」

「旦那ア、これから頑張ってください」

真選組の三人は逃げるように去っていった。

真選組がいなくなったのを確認して、隠れてた源外が出てきた。

「いや、悪かったな銀の字。まあ金はちゃんと払うから勘弁してくれ」



「銀さん、無事でよかった」

「そうアルな」

「神楽ちゃんは樂觀的だよ」

源外が頭を掻きながら謝った。

新八と神楽と咲はそう言う。(咲はオリキャラで、銀時の義妹です。

出会いは『銀魂』冷血の鬼姫の日常』の一訓を見てください)

だが、銀時は源外の言葉に反応しなかった。

「どうした銀の字？」

源外が尋ねた。

「銀さん？」

「銀ちゃんどうしたアルカ？」

「銀兄さん？」

銀時は口を開いた。

「……じーさん」

「ん？」

「俺はどうすればいいんだ？」

「は？」

源外は首を傾げた。

銀時は外に向かって、ゆっくり歩きながら呟く。

「どうすればいいの？なのはにキスされた俺はどうすればいいの？

なのはとフェイトに告白された俺はどうすればいいの？俺の心はど

うすればいいの？」

外に出て銀時は足を止めた。そして大きく息を吸い込み、

「教えてくれエエエ！レイジング・ハートオオオオオオオオオオ！！

！バルディッシュウウウウ！！！」

青空に向かって叫んだ。

新八達は力無く笑いながら、銀時の背中を見つめた。

雲一つない青空の下、銀時達がかぶき町に帰ってきた。

第二十三訓：別れは突然に（後書き）

ナナフシ「咲の出る時がグダグダだ」

銀時「おい！」

ナナフシ「ま、連続投稿なので銀八先生コーナーはありません」

銀時「次回からはA、S編突入だ！」

ナナフシ「それでは！」

## 第二十四訓：新しい物語の始まりです！（前書き）

ナナフシ「今回からA、S編だぜエエエエ！」

銀時「そうだな」

ナナフシ「テンション低っ!？」

銀時「いや、もうオリキャラが大量登場のこのA、S編は大丈夫なのだろうか」と

ナナフシ「心配しているのか!? 全員出せるか心配しているのか!？」

銀時「たりめーだろ」

咲「まあ、ナナフシはそう言う人だし」

ナナフシ「咲! やつと出たね。冷血の鬼姫では主人公なのにね。こちではヒロインの一人だけだ」

咲「ナナフシが出さなかっただけでしょ」

ナナフシ「まあ、そうだけどね。それでは!」

なのは「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』」始まります!」

ナナフシ「次はなのはかよオオオオオオオオオオオオ!」

## 第二十四訓：新しい物語の始まりです！

ジュエルシードの事件から数日。

銀時達は元の世界で平和な毎日を送っていた。

平和というか、依頼が来なくてグータラな毎日に戻っていた。

瞬間移動装置は、まだ調整が完全でないのでフェイト達の世界には行けない。

その代わり源外が送った無線機をフェイトが持っているので、それを使って連絡をとる事ができる。

そのフェイトは、銀時と沖田と銀龍の無茶苦茶な弁護のお陰で無罪となったプレシアやアルフ達と一緒に楽しく暮らしている。

ちなみに銀時達みんなに黙って帰った後、眠りから起きたリンデイ達がなのはとフェイトとアリシアとアルフから銀時達が帰った事を聞いた時は、黙って帰った事に激怒したとか。

\*

万事屋。

「もしもし。銀時？」

テーブルの上に置いてある無線機から、フェイトの声が発せられた。

銀時が無線機を取る。

「はい。こちら万事屋。どうぞ」

「あつ、銀時。今日も依頼はないの？」

フェイトは少し意地悪な事を言った。

「お前は俺をイジメて楽しいか？」

「あはは。ごめんね銀時」

フェイトが謝った。

「この前、送ったビデオメール観た？」

「ああ、観た観た」

先ほども述べた通り、瞬間移動装置はまだ完全ではない。が、源外が調整して、軽い物資を送れるくらいはできるようになったのだ。

フェイト達の方から連絡がきて、源外が装置を起動させてビデオメールをこっちに送らせた。

「元気でやってるみたいだな」

「うん。母さんやアルフとアリシア、クロノやリンディ提督と楽しくやってるよ」

無線機からフェイトの明るい声が聞こえてくる。

声を聞いて銀時は微笑んだ。

「後、こっちに來たら銀時と銀龍が驚く事が起きるよ」

「驚く事？」

銀時は？マークを浮かべた。

「ああ、アリシアは生前、魔導士の才能がなくて、復活した時に魔導士としての才能が目覚めたから、その魔法を見せるとか？」

そう、アリシアは蘇った事により、魔導士としての才能が目覚めたのだ。

アリシアは自分から魔導士になりたいと言い出したので、プレシアから魔法を教えて貰っていると聞いた。

「うーん、それもだけでもっと驚く事だよ」

フェイトが銀時に言う。

「ま、楽しみにしているわ」

『うむ、そうだな』

銀時がそう言うと、いきなり銀龍が姿を現して言った。

「どわっ！いきなり現れるな！」

『すまん、主』

銀龍が銀時に謝る。

「今度は銀時の家族を連れてくるんだよね？」

「まあ……家族みたなものだ」

フエイトの問いに銀時が答える。

「あつ、銀時、アルフに代わるね」

そう言つてフエイトはアルフに無線機を渡した。

「銀時い！あんた何時になつたらこつちに来るんだい！？」

アルフの大声が無線機から発せられた。

銀時は無線機を遠ざけて耳を塞いでる。

「だからア！まだ装置が完全じゃねえって何度言えばわかんた、犬っころ！」

「犬じゃない！いい加減『狼』つて言つてよ！」

こんなやり取りもいつもの事。無線機で話す度に二人は、こんな感じなのだ。

「つーかお前！ビデオメールに映ってる時、肉ばっか食ってんじゃねーよ！」

「いいじゃないか！」

「よくねーよ！」

ギヤーギヤー騒ぎながら会話した。

\*

アルフとの賑やかで騒がしい会話を終えた銀時は、再びフエイトと話を始めた。

「囑託魔導師？」

銀時は片眉を上げた。

「うん。それになつて管理局に協力しようと思ってるんだ」

「ふん」

「まあ、囑託魔導師になるには試験に合格しなくちゃいけないんだけどね」

笑いながらフエイトが言った。

「大丈夫なのか？」

「うん。筆記の方は母さんが教えてくれるし、実施はアルフと組手をやってるから」

「そうか。まあ頑張れよ」

「うん」

そこで会話が途切れる。

銀時は少し考えて、フェイトに”あの事”を聞く事にした。

「なあフェイト」

「何、銀時？」

「……お前…本気で俺の事、好きなの？」

こちらの世界に帰る直前に受けたフェイトの告白。

フェイトが、あんな冗談を言うとは思えないが一応聞いてみた。

「…うん。本気だよ」

フェイトは真剣に答えた。

マジでか？と銀時は心の中で呟いた。

「今はまだ子供だけど…いつか絶対、銀時を振り向かせてみせるから。後、なのはも本気だって言ってたよ」

無線機での会話なので、フェイトの顔は見れないが、多分フェイトは笑顔で答えている。

「お前等が本気だって事がよくわかったよ」

銀時はため息をついた。

「あつ、そろそろ試験の勉強の時間だから。またね銀時」

「ああ」

銀時が答えた後、無線機は切れた。

無線機をテーブルの上に置く。

「やれやれ」

銀時は天井を仰ぎながらため息をついた。

なのは達の世界。

6月4日。AM0:00。

海鳴市の中丘町。八神家で、ある魔導書が起動した。一人の少女の前で本は輝きを放ち、少女の中から小さな光の玉が出て、本に触れて強い光を放った。

光が収まると、少女の前に、見知らぬ四人の男女がいた。女性三人は黒いワンピースで、男性は黒いタンクトップとパンツ姿だった。

「『闇の書』の起動。確認しました」

ピンク色の髪でポニテールの女性が言った。

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士でございます」  
次に金髪の女性が言う。

「夜天の主の下に集いし雲」

白い髪で獣の耳と尻尾を付けた逞しい肉体の男性が言う。

「ヴォルケンリッター。何なりと命令を」

最後に赤い髪を三つ編みにした女の子が言った。

四人とも片手と膝を床につけ、頭を下げて主の命令を待った。

しかし、いつまで経っても命令が来ない。焦れた赤い三つ編みの女の子が、少女に近寄ってみた。

（ねえ。ちよつとちよつと）

女の子は念話で仲間に話し掛けた。

（ヴィータちゃん、静かに）

金髪の女性が、赤い三つ編みの女の子『ヴィータ』に注意する。

（でもさあ）

（黙っている。主の前で無礼は許されん）

ポニテールの女性もヴィータを注意する。

（無礼ってかさあコイツ…）

ヴィータは倒れてる少女の顔を覗き込んだ。

（気絶してるように見えんだけど）



「ええっ!？」

気絶した少女の名は、八神はやて。

両親を早くに亡くして、一人暮らしをしている足が不自由な少女だ。

突然、目の前に得体の知れない人達が現れて、ビックリして気絶してしまったのである。

守護騎士達は慌てて、はやてに駆け寄った。

\*

江戸のかぶき町。

そこに何でもやる万事屋があった。部屋の中で四人の人物がテレビを見ている。

死んだ魚のような目をした銀髪の天然パーマの男、坂田銀時。

地味な眼鏡男、志村新八。

宇宙最強の戦闘種族『夜兔族』の一人、神楽。

銀時の義理妹で、水色の髪のロングヘアの女、雨宮咲。

四人が見ているのは『魔法少女リリカルなのは無印』のDVDである。見終わって、新八はDVDをデッキから取り出した。

え?何であるのかって?それはね……

\*

大江戸ドーム。

今ここでは人気絶頂のアイドル寺門通のライブが行われていた。

「みんな〜!今日は私のコンサートに来てくれてありがとうきびウ

ンコオオ!!」

ステージに立つのはアイドルの寺門通。

「とうきびウンコオオ!!」

観客がお通の声に応える。

「それじゃあ最後の一曲『お前の母ちゃん 人だ?』!!」

最後の一曲をお通が熱唱し、ドームの中の熱気は最高潮に達した。

\*

ライブが終わり、ドームの中から沢山の人が出てくる。

「いや〜今日も盛り上がったなあ!」

と口を開いたのは寺門通親衛隊のタカチン。

「そうだなあ。お通ちゃんのライブは最高だよ!」

「なあ軍曹…アレ?軍曹?」

タカチンは周りをキョロキョロ見て人混みの中、軍曹を探す。

「軍曹ならそこで携帯いじってますよ」

一人の隊員が指差す。

そこには携帯の画面を見ながらニヤついている軍曹がいた。

「何やってんだ軍曹のやつ?まさか、また女とメールしてやがんのか!?!」

タカチンが額に血管を浮かべる。

「いえ違います。なんか最近、リリなんとかってアニメにハマったらしくて、暇さえあればそのアニメの待ち受け画像を見てるんですよ」

「アニメだとオ!?軍曹のくせに何やってんだ!?!」

タカチンが軍曹に掴みかかるうとした時。

「ぎゃああああ!?!」

軍曹が悲鳴を上げた。

見ると一人の男が軍曹の鼻の穴に指を突っ込んで体を持ち上げていた。

「……た……隊長オオオオ！！！！」  
隊員達が恐怖に駆られた声を上げた。

軍曹を持ち上げている眼鏡男は寺門通親衛隊隊長・志村新八。普段は地味なツツコミ眼鏡だが、寺門通の事になるとスウターがぶつ壊れるくらいの戦闘力を発揮する。

「軍曹オオオ！寺門通親衛隊規十二条を言ってみろオオ！！」

新八は鬼の形相で軍曹を睨みつける。普段の新八にはない重い威圧感を放っている。

「いだだだだつ！！」たつ、隊員はアニメ等の二次元の作品を観ることなかれ』であります！」

痛みと恐怖に怯えながらも軍曹は答えた。

「その通りだ！軍曹オオ！貴様は幹部でありながらこれを破った！よつて……」

新八の目がカツと見開かれる。

「鼻フックデストロイヤーファイナルブラスターの刑に処す！！！」  
叫びながら新八は軍曹の頭を地面で擦り、そのまま一本の太い木に向かつて投げた。

「ぶぎゃー！！」

軍曹は木にぶつかり、ズルズルと地面に落ちた。

「軍曹オオ！貴様の持つてるそのアニメのDVDやグッズは全て没収だア！全部俺が売ってやる！！」

\*

約一時間後。

軍曹は泣く泣く全てのアニメのDVDとグッズを新八に渡した。渡した後、軍曹は泣きながら帰っていった。

新八はDVDのパッケージを見た。そこには一人の少女が写っていた。

アニメ『魔法少女リリカルなのは』の主人公の高町なのは。

新八はパッケージに写ってる、なのはを見て顔を赤くした。

(あ…アニメなんて…アニメなんて…!!)  
DVDを持つ新八の手が震える。

(く…！ありがとうございます!!)

新八は頭を下げて心の中で礼を言った。一体誰に言っているのだろう。

そんで軍曹から没収した『リリカルなのは』のDVDとグッズを売らずに家に持って帰った。

\*

と言っ訳です。

新八の部分は見逃してください。  
変わってない事を。

新八達は銀時から話を聞いて驚いた顔をした。

最初は可愛そうな人と言う目で見られていたが、通信機の会話で本当である事がわかった。

『本当なら、あのままフェイトとプレシアは分かり合えず、更にはアリシアも復活していなかったのだな』

銀龍が言う。

「俺と銀龍が介入したせいで変わったのかもな」

『いや、近藤と土方と沖田も居たぞ』

銀時が言った言葉に銀龍が付け足す。

「おい、天パ、今度は私達も連れ行けヨ」

「わーってるって」

銀時はそう言う。

「楽しみだね」

咲も言う。

銀時はフェイトから送られてきた写真を見た。  
そこには、笑顔のフェイトとアリシアとプレシアとアルフが写っていた。  
それを見て銀時は微笑んだ。

\*

八神家。

「そつか。この子が闇の書ってもんなんやね」

車椅子に座り、手に闇の書を持ちながらはやてが言った。

「はい」

ポニテールの女性が答える。

「物心つく頃には棚にあつたんよ。綺麗な本やから、大事にはしてたんやけど……」

言いながら車椅子を動かして、棚の前に移動する。

「覚醒の時と眠ってる間に、闇の書の声を聞きましたか？」  
金髪の女性が尋ねた。

「ん〜私、魔法使いとちゃうから、漠然とやったけど……あ、あつた」

答えながら、はやては探し物を見つけた。

「わかつた事が一つある。闇の書の主として守護騎士みんなの衣食住、キッチリ面倒見なアカンゆうことや」

「え？」

はやての言葉に、ポニテールの女性がポカンとなる。

「幸い住むトコはあるし、料理は得意や。みんなのお洋服、買<sup>こ</sup>つてくるからサイズ測らせてな」

そう言っではやては、手に持つてるメジャーを伸ばした。

はやての少しズレた考えに、守護騎士達は呆然とする。

「ほんならまず…えっと……」

ポニテールの女性を見つめながら、はやてが悩む。

「私はベルカの騎士ヴォルケンリッターが将。『剣の騎士』シグナムと申します」

ポニテールの女性、シグナムが自己紹介した。

「私は『鉄槌の騎士』ヴィータ」

赤い三つ編みの女の子、ヴィータも自己紹介した。

「私は『湖の騎士』シャマルです」

金髪の女性、シャマルがヴィータに続いて自己紹介した。

「『盾の守護獣』ザフィーラ」

最後に獣の耳と尻尾がある男性、ザフィーラが名乗った。

「ほんなら、シグナムからサイズ測ろうか」

笑顔ではやてが言う。

はやての、これまでの主とずいぶん違った接し方にシグナム達は戸惑ったが、悪い気はしなかった。

この時、守護騎士も、はやても、誰も気付いていなかった。闇の書の中に眠る強大な『悪』の存在を。

その『悪』の鼓動に、誰も気付いていなかった。闇の書の中に眠る『悪』は、静かに時を待った。自分が復活する時を。

\*

時は流れ。12月1日。

時空管理局艦船アースラ内。

「管理局本局へのドッキング準備、全て完了です」

「んゝ予定は順調ね」

砂糖とミルクの入ったお茶を飲みながら、リンディ・ハラオウンは頷いた。

「やっと私達も一休みできますね」

エイミー・リミエッタがやってきた。

「そうねえ」  
「レテイ提督の方は大変みたいですけど…」  
「一級搜索指定のロストロギアで、搜索担当班は大変みたいね」  
リンディはため息をついた。

\*

アースラの戦闘訓練室。

フェイト・テストロッサとアルフ、クロノ・ハラオウンの三人が戦闘訓練を終えた。

「はあく疲れたあく」

背伸びをしながらアルフが訓練室を出た。その後ろをフェイトとクロノが歩く。

「アルフ、クロノ。お疲れ様」

「フェイトもお疲れ」

「ああ、お疲れ」

三人は汗をタオルで拭きながら廊下を歩いた。

「じゃあ僕はシャワーを浴びてくるよ」

「うん」

フェイト達と分かれて、クロノはシャワー室へ向かった。

「フェイト、アルフ」

廊下の向こうから、プレシア・テストロッサが二人に声をかけた。  
プレシアの隣にはアリシアが居た。

「母さん」

二人はプレシアに駆け寄った。

「二人ともお疲れ様。おやつ作ったんだけど、食べる？」

「一緒に食べよう！」

「うん！」

「わーい！」

二人は喜びながら、プレシアと一緒に部屋に向かった。

部屋に入った三人は、おやつを食べながら話をしていた。

「そういえば、もう少しで銀時がこっちの世界に来れるのよね？」

お茶を飲みながらプレシアが言った。

「本当かい!？」

アルフが嬉しさのあまり席を立つ。

「うん。装置の調整がもう少しで完成するって、源外さんが言ってたよ」

フェイトも嬉しそうな表情をしている。

「楽しみだな」

アリシアも楽しみにしていた。

「そうね。アリシアのそれを見せたら驚くかもね」

プレシアがそう言うところを見る。

アリシアの隣に、鞘と柄が黒く、柄の先端には黒い束ねられた糸があり、鍔がない刀が椅子に置かれてあった。

「そうだね。銀時と銀龍が驚く所早く見たいな」

その刀を鞘から抜く。刀身は黄色く煌めいていた。

「あゝ！早く銀時に会いたいなあ！」

アルフは、銀時との再会を楽しみにしながら、バクバクおやつを食べる。

「アルフ、一人で食べ過ぎよ」

「はい」

プレシアに注意されて、アルフは少しへこんだ。

そんな様子を見ながら、フェイトは微笑んだ。

(私も…早く会いたいな)

一枚の写真を手に取って見る。

銀時達から送られた写真。写っているのは万事屋の四人。

\*

12月2日。



海鳴市の市街地。

闇の書を巡る戦いが今始まり、銀龍達『喋る刀』の秘密が明かされる。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハアイ、質問コーナー始めるぞオ。今回のアシスタントは」

アリシア「アリシア・テストアツサだよ」

銀八「つい出てきたばっかじゃんか！」

アリシア「気にしない。質問行きます。ペンネーム『支配者』さんからの質問  
『質問です。』

ミラクルへ

リリカル銀魂全般での自分の扱いを如何思いますか？

ナナフシさんへ

A、Sのラスボスの怪物の事ですけど如何しますか？

銀時へ

銀龍の力を改めて如何思いますか？

では、さよなら「『ミラクル」

ミラクル 「アリシアちゃんまで！？まあ、それは……ほとんどが酷い扱いじゃねえかアアアアアアアアアア！良い扱いしてくれる所なんてめっちゃ少ないし!？」

銀八「だそうだ。 ナナフシ次」

ナナフシ「そうですねエ……今の所、思いついてますけど、『赤夜叉』さん、『支配者』さんを見るとこれで良いのか？と思っちゃうんですよね。だから、今でも考え中です。ラスボスはちゃんと出しますんで」

銀八「だそうだ。三つ目だが」

銀時「改めて思うと凄いやな。こんな能力もあって……」

銀八「だそうだ。と言う訳で『支配者』さん。ラスボスを楽しみにしててください」

アリシア「次だよ。ペンネーム『咲夜』さんからの質問  
『銀さんへ

この小説や他の小説でも新八がロリコンならフェイトやなのは好意を持たれているうえ、キスされたんだから銀時もロリコンじゃないんですか（ニヤリ）人の事を言えないので銀さんもお仕置きを希望します（黒笑）

二つ目の質問です

近藤達へ

もし銀さんがリリカルなのはフェイトになって現れたらどうしますか？

三つ目の質問です

新八とクロノへ

他の小説では悲惨な目に遭っている新八やクロノに朗報です。自分が書いているリリカル銀魂ではクロノと新八では見せ場があるので楽しみにして下さいね。『銀時』

銀時「俺はロリコンじゃねエエエエエエエエエエエエ！それは向こうからやってきたんだ！俺はロリコンになるつもりはこれっぽっちもねエエエエエエエエエエエエ！」

銀八「二つ目だが」

近藤「それは……プフ」

土方「そ……想像で……出来ねえ……ブツ」

沖田「面白そうでしたア（黒笑）」

銀八「一名危ない奴いる！？三つ目だが」

新八「よっしゃアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

クロノ「嬉しいぞ！『咲夜』さんよろしく頼む！」

ナナフシ「新八はこつちでも幸せになる可能性大なんだけどね」

新八「ホント！？」

ナナフシ「おう」

新八「嬉しいイイイイイイイイ！」

ナナフシ「壊れた。ついでにクロノは？だな」

クロノ「何故だアアアアアアアア！」

銀八「と言う訳で『咲夜』さん。廊下に立ってなさい」

アリシア「次で最後です。ペンネーム『キムチ』さんからの質問  
『月詠さんに質問です。』

銀魂原作で銀さんにフラグっぽいものが立ちましたが月詠さん自身は銀さんの事どう思ってるんですか？『月詠って？』

銀八「まあ、まだ会ってないもんな。月詠」

月詠「わっちは特に何も思ったらんが？」

銀八「らしいです。と言う訳で『キムチ』さん。廊下に立ってなさい」

アリシア「質問は以上です」

銀八「また次回」

第二十四訓：新しい物語の始まりです！（後書き）

ナナフシ「さてと、こんなもんでしょうか」

銀時「ちよつと待て！あれ……アリシアが持ってたのって」

ナナフシ「ふん！」

銀時「ゴバツ！」

銀時はナナフシに殴られて気絶する。

ナナフシ「ネタバレになるからダメでしょうが」

フェイト「わかる人にはわかっているとと思うよ」

ナナフシ「やつぱ？」

アリシア「それじゃ、また次回！」

第二十五訓：ピンチの時にカツコよく駆けつける主人公が多いよね（前書き）

ナナフシ「少し遅いですが、新年あけまして」

全員『おめでとございます！』

ナナフシ「田舎に帰ってて投稿出来なかったんだよね」

銀時「そうか」

ナナフシ「それでは！『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』 始まります！」

## 第二十五訓：ピンチの時にカッコよく駆けつける主人公が多いよね

12月2日。

海鳴市の市街地。

高町なのはは、謎の襲撃者に襲われていた。

襲撃者はヴィータ。赤いドレスのような恰好で、手にはハンマーのような物を持っている。

なのはもバリアジャケットを着て、レイジングハートを構える。

ヴィータは鉄球を上に向けて、なのはに向かった鉄球をハンマーで打った。

障壁を張ってなのはは、鉄球を防いだ。同時に二つの桜色の魔力弾を出した。

「どらああああ！！」

ハンマーを振り下ろしながら、ヴィータがなのはに迫る。

なのはは横に飛んで、ハンマーをかわした。

「いきなり襲い掛かられる覚えはないんだけど…！」  
空中で止まって、ヴィータに向き直る。

「どこの子！？一体なんでこんな事するの!？」

大きな声でヴィータに理由を尋ねる。

ヴィータは黙って指の間に、新たな鉄球を出す。

「教えてくれなきゃ、わからないってばア！」

そう言っただけなのはは、先ほど出した二つの魔力弾『ディバインシューター』を操作して、ヴィータの背中目掛けて放った。

ヴィータは一発目を避けて、二発目を障壁で防いだ。

「このやるおおお！！」

ヴィータは怒りながらハンマーを振り上げて、なのはに襲い掛かる。振り下ろされるハンマーを、なのはは後ろに飛んでかわした。レイジングハートをシューティングモードにして、距離をとる。

「話を！」



レイジングハートを構える。

「聞いてつてばアー!!」

ヴィータに向かってディバインバスターを放つ。ディバインバスターはヴィータの左側を掠った。その時に、ヴィータがかぶっていた帽子が落ちてしまった。

落ちていく帽子を見ながらヴィータは怒り、なのはを怒りの形相で睨んだ。睨まれたなのはは、少したじろいだ。

ヴィータは、足下に赤い魔法陣を展開する。

「グラーファイゼン！カートリッジロード!!」

ヴィータが叫んだ後、ハンマーがガシャンと撃鉄を打った音を立てて、ハンマーの形が変わった。

「え…え…!?」

ハンマーの形が変わって、なのはが驚く。

ハンマーは片方の先の部分が尖って、もう片方の面は噴射口みみたいだった。

「ラケーテン！」

片方の面がジェット噴射して、ヴィータは回転する。

回転の勢いを使って、なのはに襲い掛かる。なのははすぐに障壁を展開するが、簡単に破られ、レイジングハートに直撃してしまう。

「ハンマー!!!」

ヴィータはハンマーを振り抜き、なのははビルに向かって吹き飛ばされる。

「ああああ!!」

窓ガラスを破って、ビルの中に入った。

埃や煙が立ち込める中、なのはは咳をしながら立ち上がった。

「でえええい!!」

ハンマーを構えたヴィータが、突っ込んでくる。再び障壁を張って防ぐ。

「ぶち抜けエエエ!!」

「了解」

ヴィータの叫びに、持っているハンマーが応えると、障壁は破られた。バリアジャケットも破壊され、なのはは後ろに吹き飛び、壁に叩きつけられる。

ヴィータがなのはに近づく。

なのはは、なんとか傷ついたレイジングハートをヴィータに向ける。なのはの前でヴィータはハンマーを振り上げる。

（こんなので…終わり？嫌だ……ユーノ君…クロノ君…アリシアちゃん…銀さん…フェイトちゃん…！）

なのはは固く目を閉じた。

直後、金属同士がぶつかる音が前で響いた。

なのはは、ゆっくりと目を開けて恐る恐る前を見た。

そこには黒いマントを羽織って、自分を護っているフェイトの姿があった。

「ごめんなのは、遅くなった」

横から声をかけられて、なのはは見た。

「ユーノ、君…」

隣にいたのは、ユーノ・スクライアだった。

「く…！仲間か!？」

ヴィータはフェイトから距離をとった。

「友達だ」

バルディッシュを鎌に変形させ、構えながらフェイトが答えた。

「民間人への魔法攻撃。軽犯罪では済まない罪だ」

「なんだデメエ？管理局の魔導師か？」

ハンマーを構えながらヴィータが睨む。

「時空管理局囑託魔導師、フェイト・テストロッサ」

一歩前に踏み出す。

「抵抗しなければ、弁護の機会がキミにはある。同意するなら武装を解除して」

バルディッシュを構えながら、一応武装の解除を促す。

「誰がするかよ！」  
ヴィータはビルの外へ出た。  
「ユーノ、なのはをお願い！」  
「うん！」  
すぐにフェイトは、ヴィータの後を追った。  
残ったユーノは、なのはに回復の魔法をかける。

\*

空中でヴィータとフェイトが対峙する。  
「バルディッシュ」  
フェイトは、バルディッシュの金色の魔力の刃をヴィータに向かって放った。  
ヴィータも四つの鉄球をフェイトに向かって打ち放った。ヴィータは障壁を張って魔力の刃を防いだ。  
フェイトは鉄球をかわすが、追尾型の鉄球はフェイトを追い続ける。その時、アルフがヴィータに拳を放った。ヴィータがアルフに意識を向けた瞬間、フェイトは上に避けて鉄球同士がぶつかった。  
フェイトとヴィータがデバイスで打ち合う。十数回打ち合って、フェイトが一旦離れる。  
その直後、アルフがバインドでヴィータの動きを止めた。  
「く…！」  
ヴィータが歯を食いしばる。  
「終わりだね。名前と出身世界、目的を教えてもらうよ」  
ヴィータにバルディッシュを向けながら言った。  
その時、突如フェイトの前に剣を持ったシグナムが現れた。剣を横薙ぎに振り、フェイトはバルディッシュで防ぐが後ろに飛ばされる。  
「シグナム」  
ヴィータが呟いた。  
「おおおおお！！！」

別方向からザフィーラがやってきて、アルフに蹴りを放った。

「ああっ！」

アルフは腕で防御するが、吹き飛ばされてしまう。

「レヴァンティン。カートリッジモード」

シグナムの持つ剣が撃鉄を起こす。

直後、剣が炎に包まれた。

「紫電一閃！！！」

フェイトに向かって剣を振り下ろす。

バルディッシュで剣撃を防ごうとする。バルディッシュは真つ二つに斬れてしまった。

シグナムが再び剣を振り下ろす。フェイトは障壁を張って防御する。フェイトはビルの屋上に叩きつけられた。

「フェイト！！！」

アルフがフェイトの元へ行こうとする。

が、ザフィーラが行く手を阻む。

\*

アースラ内。

結界によって、画面に現地の様子が映らない。局員達が結界の解析を急ぐ。

「術式が違う。ミッドチルダ式の結界じゃない」

「そうなんだよ」

砂嵐の画面を見つめながら、クロノは表情を険しくし、エイミーは焦りの表情を浮かべる。

二人の後ろで、プレシアが心配そうに画面を見つめてる。現地の様子がわからなくて、プレシアの不安は大きくなる一方だった。

「フェイト…アルフ…」

プレシアは意を決して、黒い無線機を取り出した。

（まだ無理かもしれないけど……あの子達を助けて！）

無線機のスイッチを入れた。

\*

シグナムはヴィータの前に浮かんだ。

「どうしたヴィータ？油断でもしたか？」

「うっせーよ。こっから逆転するところだったんだ！」

「そうか。それは邪魔したな」

そう言っただけでシグナムは、ヴィータにかかっているバインドを破壊した。

「だが、あまり無茶はするな。無茶をして怪我でもしたら、我らが主が心配する」

「わーってるよ！」

ヴィータはそっぽを向いてしまう。

「ほら。落とし物だ」

シグナムはヴィータの頭に、先ほど落ちた帽子をかぶせた。ちなみに破損はシグナムが直してある。

「…ありがとう。シグナム」

ヴィータは俯きながら礼を言った。

ユーノも加わって、状況は三対三になった。

シグナムは、フェイトが落ちた屋上に降り立つ。倒れてるフェイトに近づいた。

「く…！」

フェイトは、目の前に立つシグナムを見た。

「じっとしている。抵抗しなければ、命までは取らない」

そう言っただけで剣を上に掲げる。

「だ…誰が…！」

足に力を入れて立ち上がろうとする。

「いい気迫だ。だが…残念だがここまでだ」

シグナムは剣を振り下ろす。

フェイトは目を閉じた。頭に浮かんだのは一人の男。

(銀時！)

とても強く、自分が好きになった男の名を心の中で叫んだ。  
直後、フェイトとシグナムの間に光が出現した。

「何っ！？」

「えっ！？」

驚いたシグナムは剣を止め、フェイトは目を開いて光を見た。

そして光の中から、一本の木刀が現れ、シグナムに向かって突きを放った。

「くっ！」

シグナムは剣で木刀の突きを防ぎ、光から離れた。

やがて光が収まり、一人の男が姿を現した。

フェイトは目を見開いて驚いた。フェイトはこの男を知っている。

銀髪の天然パーマ、白い着物、『洞爺湖』の文字が入ってる木刀。

「よオ」

男はフェイトに振り返った。

「久しぶりだな」

笑みを浮かべながら、フェイトを見た。

「ぎ…」

フェイトの顔が自然と笑顔になった。

「銀時っ！！」

大きな声で銀時の名を呼んだ。

「まっ、再会を喜ぶのは後にしよーや」

銀時はシグナムに向き直った。

「貴様…何者だ？」

銀時に剣を向けながら、シグナムは鋭い眼で尋ねた。

「なアに」

銀時は不敵な笑みを浮かべた。

「ただの通りすがりの侍と」

『その侍の刀だ』

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「はい、新年あけましておめでとございます。今回のアシスタントは」

なのは「高町なのはです」

銀八「それじゃ、行くか。まずはペンネーム『ケン』さんからの質問  
『屁怒紹様へ

新八は軍曹という人からリリカルなのはグッズを掟という名目で奪  
いました。

彼は反省もしてないのでお話しして更生してやってください。

はやてへ

俺の作品では天使という解放形態に目覚め、人外に匹敵する身体能  
力も得ました。

これをどう思いますか？

銀さんへ

これからフラグを立て増え続けるラバーズに対し一夫多妻制を使う  
しかないですよ。』一つ目だが」

屁努紹「志村さん。そんな事してはいけませんよ！少し話をしまし  
よう」

新八「は……はい」

新八は屁努紹に連れて行かれた。

銀八「二つ目だが」

はやて「そうなんや」。人外にも匹敵する身体能力もあるなんて…  
…凄いなア。うちもそんな風になってみたいな」

銀八「はい、作者は関西弁がうまく書けてるか不安らしいんで。作  
者関西人のくせに」

なのは「最後だけど、銀さん」

銀時「何で毎回一夫多妻のやつが来るんだよオオオオオオオオオ  
オオ！やるかアアアアアアアア！」

ナナフシ「ま、それは最終章の最終回を楽しみにしててください」

銀時「本当にやめるよオオオオ！」

銀八「と言う訳で『ケン』さん。新年あけましておめでとうござい  
ます」

なのは「次で最後です。ペンネーム『黒龍』さんからの質問

『1・咲に質問。あなたにとってなのはとフェイトが最大のライバ



ルと思いますが、どうしますか？

2・ナナフシさんに質問。劇場版銀魂（新訳紅桜編）を見た事がありますか？ でしたらなのはとフェイトを啜えた感想をお願いします。

3・なのはとフェイトに質問。これ以上銀さんにハーレムメンバーは必要ですか？『三つ目だけじゃないの！』

フェイト「うん！要らない！」

銀八「先に三つ目答えちゃったよ！一つ目だが」

咲「うん、どうしようか？」

銀八「まだよくわからないそうです。この子、根は優しいからな。二つ目だが」

ナナフシ「見た事ありますよ！DVDをレンタルして！凄くよかったです。銀さんと桂が格好良かったなア」

なのは「ナナフシに見せて貰ったけど、銀さん格好良かったの。桂さんも格好良かったね」

フェイト「そうだね。高杉に刺されるシーンは驚いたけど」

銀八「らしいです。と言う訳で『黒龍』さん。新年あけましておめでとございます」

なのは「質問は以上です」

銀八「また次回」

第二十五訓：ピンチの時にカツコよく駆けつける主人公が多いよね（後書き）

ナナフシ「ここ……変えようがなかったんです……」

銀時「おい」

ナナフシ「バトルシーンは違うと思うので、見逃してください！」

銀時「おいおい」

ナナフシ「連続投稿しますんで！それでは！」

第二十六訓：戦いは緊張感を持って戦え！（前書き）

ナナフシ「連続投稿です」

銀時「だな」

ナナフシ「と言う訳で！」

銀龍『『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まるぞ』

## 第二十六訓：戦いは緊張感を持って戦え！

空中ではザフィーラとアルフが戦っていた。

「ちっ！」

ザフィーラの攻撃に押され、アルフは防戦一方だった。

その時、

「わんっ！！！」

上空から犬の鳴き声のようなものが聞こえた。

「えっ！？」

二人は思わず上を見た。

巨大な白い犬のような生き物が、ザフィーラに向かって上空から突進…というか落ちてきた。

「なっ！？」

最初は驚いたが、すぐにザフィーラは障壁を張って防御した。白い犬はザフィーラの障壁にぶつかり、ザフィーラと白い犬はそのまま真下にあるビルの屋上に落ちた。

「な…何だいあの犬！？」

アルフが驚いていると、

「定春ウウウ！！！」

また上空から声が聞こえた。

しかし、今度のは聞き覚えのある声。

アルフはまた上を見た。そこにいたのは、傘を持った赤いチャイナ服を着た少女だった。

そのまま神楽は、定春とザフィーラが落ちた屋上に着地した。

「定春っ！！」

「わんっ！！」

神楽の声を聞いて、巨大な白い犬『定春』が駆け寄ってきた。

「定春！無事でよかったアル！」

神楽は定春を抱きしめた。

アルフも屋上に降り立った。

「あ、お前がアルフアルカ？」

「そうだけど」

神楽の問いにアルフは答える。

「私は神楽アル！よろしくネ」

「ああ、銀時が言ってた。よろしく」

神楽とアルフは握手した。

「俺まで何で……」

いきなり、隣から声が聞こえてそつちを見ると、金髪のウルフヘッドに淡い黒の瞳、ほどよく引き締まった体格のクールガイで甚平姿がトレードマークの男が居た。

「せんが漸呀アルカ」

「さつき会ったばかりで呼び捨てかよ」

神楽は男の事を漸呀と呼んだ。

漸呀は神楽にツッコんだ。

「たくつ、銀時も変な事に首をつっこんだな」

漸呀はそう言った。

神楽は定春の頭を撫でる。

その時、ザフィーラが起き上がった。

「定春、アルフ、下がってるアル」

神楽がそう言った時だった。

「俺に任せろ」

漸呀がそう言った。

そう言うといきなり刀が漸呀の手元に現れた。

刀は鞘と柄が黒く、鍔が少し特殊で、羽が円を描いた感じになっていた。

（銀時と同じ様に！まさか……あの刀、銀龍と同じ『喋る刀』！？）  
アルフはそれを見て思った。

「何を言ってるアルか！あいつは私が相手をするアル！」

「黙ってる夜兔族のガキ」

神楽はそう言われておとなしく退いた。

「それじゃ、始めようぜ」

漸呀は鞘から刀を抜く。

刀身は赤く、鳳凰えんおうが描かれていた。

「行くぞ。『炎鳳』」

「わかつている」

刀は喋った。

\*

ユーノもヴィータの攻撃に押されていた。

「ぶつ潰せエエエ!!」

ヴィータがハンマーを振り上げた直後、

「そこまでだ」

上空から声が聞こえた。

「えっ!?!」

ヴィータは上を見た。

上空から、刀を持った人物がヴィータに迫っていた。

「くっ!」

ヴィータはハンマーで、振り下ろされる刀を防いだ。

そのまま二人は屋上に着地した。刀を持った人物は一旦ヴィータから離れた。

「誰だテメエ!?!」

突然の乱入者にヴィータは怒鳴った。

乱入者は手に刀を持ち、黒い髪の毛を後ろに束ね、左目に眼帯を付けている。

「柳生九兵衛だ」

隻眼でヴィータを見据えながら九兵衛が名乗った。

「柳生：九兵衛？」

屋上の真上にいるユーノは、首を傾げた。

「若アアア!!!」

すると一人の男が九兵衛と同じように、突然屋上の真上に現れ、屋上に着地した。

「大丈夫ですか、若！？お怪我はありませんか!？」

長髪で目が細めで物腰柔らかそうな男、東城歩が九兵衛に駆け寄った。

「心配するな。怪我はない」

「そうですか。では……」

九兵衛の返事に安心した東城は、どこからともなく鎧を取り出した。「コレを着てください。雨が降りそうな天気なので」

と、東城が九兵衛に鎧を着させようとした瞬間、九兵衛は東城の頭に手刀を叩き込んだ。

「またやられてるよ。東城さん」

すると、また着地して現れた女性が居た。

水色の髪に腰まであるロングヘアだった。

雨宮咲である。

「さてと……私が相手だよ」

咲がそう言つと木刀を構えた。

\*

なのはは、屋上でみんなの様子を見ていた。

「銀さん！」

銀時の姿を確認して、なのはも明るい表情になった。

他にも巨大な白い犬や、見たことがない人たちがいる。

チャイナ服を着ているのは……写真に載ってた神楽ちゃんって言う



子だ。あの水色の髪の綺麗な女性は確か、銀さんの義理妹の雨宮咲さん。他にも見た事がない人も居る。

と、なのはが考えていると、

「なのはちゃん」

後ろから名前を呼ばれた。

なのはは振り返って後ろを見た。そこには志村新八がいた。

「え〜と、新八さんですか？」

「そうだよ。初めましてなのはちゃん」

「こちらこそ」

なのはは新八の名前を確かめてから笑顔で挨拶する。

ふと、なのはは新八の隣にいる女性二人に気付いた。

「紹介するね。僕の姉上の志村妙」

妙の方を見ながら、新八はなのはに紹介した。

「初めまして。志村妙です」

ニッコリ笑いながら、妙が自己紹介した。

「私はさっき知り合ったばかりで、神宮寺葵じんくうじって言うんだ」

「は…初めまして。高町なのはです」

ペコリと頭を下げながら、なのはも自己紹介した。

「なんだか大変な事になってるみたいだね」

状況を見ながら新八が呟いた。

「でも僕達が来たからには、もう大丈夫だよ！」

なのはを安心させるために、新八が力強く言った。

「はい！」

新八の言葉に、なのはは笑顔で頷いた。

\*

「うおおおおおお！」

ザフィーラの拳を軽々と漸呀は避ける。

「オラア！」

漸呀は炎凰を横薙ぎに振った。

「ぐっ！」

ザフィーラは何とか避けるが、肩にキズが入る。

「行くぞ！」

『ああ』

漸呀は刀を振り上げて……振り下ろした。

すると、金色の炎の斬撃が放たれた。

（魔法！？）

ザフィーラは驚いたが、すぐさま障壁を張り、防いだ。

「次行くぜ」

漸呀はそう言つと巨大な炎の球を作り始めた。

「喰らえ！ 剛炎球！」  
こうえんきゅう

そう言つとザフィーラに向かって投げた。

ザフィーラは障壁で防ごうとした。

威力が高い為か、障壁にヒビが入る。

「くっ！」

ザフィーラは苦しそうな顔をした。

「爆ぜるから気を付けろ」

「……！」

漸呀が言つた言葉にザフィーラが驚いた瞬間、炎の球が爆発した。

そこに煙が立ち上る。

アルフと神楽は驚いていた。

（やっぱり！ 銀龍と同じ『喋る刀』！！）

アルフは確信した。

マジックコントロール魔力操作を使つており、喋っているのだから。

煙が消えるとそこにはザフィーラが倒れていた。

「それぐらいじゃ、やられねえだろ？ 殺す気では行ってないからな」

ザフィーラにそう言うとザフィーラは起きあがった。

（何故あいつが魔法を使える！？魔導士ではないハズだ！それにあの刀……）

ザフィーラは驚きを隠せなかった。

『どうした？俺達に勝てると思うな』

炎鳳はそう言った。

「っ……強いアル」

「ワン……」

神楽と定春も驚いていた。

\*

「うおおおおおおお！」

ヴィータが叫びながらグラーファイゼンを振り下ろした。

咲はそれを受け流していた。

咲の剣は静剣である。

（まただ！）

一旦、咲から離れる。

（コイツ…力を力で受けるんじゃないで、私の力を受け流してやがる！）

「ふう……それじゃ、本気を見せてあげようか」

咲がそう言うと無表情に変わった。

そして、無表情なのに鬼の様な鋭い視線をヴィータに向けた。

咲は『冷血の鬼姫』と化した。

普段はそう簡単にならないが、今回は本気を出す事にした。

ヴィータは一瞬怯んだが、すぐさま気を取り直した。

「行くよ……」

咲がそう言うと走り出した。

「なら、これでどうだ!」

鉄球を四つだして、咲に向かって打ち放った。

それを咲は、無駄のない小さな動作で素早く鉄球をかわす。だが追尾型の鉄球は、また咲に迫る。避けても無駄だと判断した咲は動きを止めた。

(諦めたか?)

ヴィータがそう思い、鉄球が咲に当たる瞬間だった。パカン。

いきなり四つの鉄球が真つ二つに割れた。

「え!?!」

ヴィータは驚いた。

「よそ見してて大丈夫?」

咲はヴィータの目の前まで来ていた。

「ハア!?!」

咲が木刀を横薙ぎに振るう。

しかも、単純すぎるのだ。

「こんなの!」

ヴィータは防ごうとした時だった。

ガンツ!

顎に衝撃が走った。

顔を前に戻すと、咲が木刀を振り上げた格好で居た。

「なっ!?! さつきは横薙ぎに!?!」

「私の剣は高速で振って、幻影を生み出す。だから、何処から来るかわからないよ?」

(つまり、最初のは、罠!?! 次の攻撃が本命か!)

ヴィータはわかったが、剣技が速く、何処から来るのかわからなかった。

上と思ったら、右から。左からと思ったら下から。

舞いの様な剣にヴィータは翻弄されていった。

「ハア!」

咲は木刀を振るう。

それをヴィータは避けた。

「本当に……人間の技か？」

「人間だよ……やろうと思えば出来るんじゃないかな？私の剣技」

咲はヴィータに木刀を構えながらそう言った。

\*

シグナムは、屋上で銀時と対峙していた。

（一体何者だ、この男は？）

剣を構えながら、シグナムは銀時を見つめた。

（魔力を感じるが…魔導師ではない……だが…）

剣を握る手に力を入れる。

（この男…強い！）

鋭い眼光を銀時にぶつける。

対する銀時は、緊張した様子もなくシグナムを見ていた。

「おいおい。んな怖い顔してつと、せつかくの綺麗な顔が台無しだ

ぜ？」

「なっ!?!」

銀時の言葉に、シグナムは少し動揺する。

銀時の後ろにいるフェイトは、少しムツとした顔になる。

「どうだいネーちゃん。んな物騒な剣振り回さねーで、俺の股間の

け……」

と、銀時が言いかけた所で、フェイトが無表情で銀時の後頭部に、

バルディッシュの魔力の刃を刺した。

「ぎゃあああああ!」

後頭部を押さえながら、銀時が悲鳴を上げた。

「お…お前！何すんだコノヤロー!」

涙を流しながらフェイトに怒鳴った。

プイツとフェイトは無言でそっぽを向いた。

「おいコラ。助けてやったのに、そりゃないんじゃないの？ 銀さん泣くぞ？」

銀時が、そっぽを向いてるフェイトに話し掛ける。

が、フェイトはそれを無視。

「ん…コホンッ！」

二人の様子を見ていたシグナムが、わざとらしく大きな咳をした。そこで二人はようやくシグナムに向き直った。

「あ…悪い」

と、銀時が謝った。

気を取り直して、シグナムが剣を構える。

「貴様が何者か知らんが、邪魔をするなら容赦はしない」  
殺気をぶつけながらシグナムが言った。

「下がってる、フェイト」

「うん。銀時…気をつけて」

「後でチョコレートパフェ奢ってもらうからな」

フェイトは後ろに下がり、銀時は木刀を構えた。

銀時VSシグナム。

侍と騎士の対決が始まる。

他の所ではもう始まっているけどね。

第二十六訓：戦いは緊張感を持って戦え！（後書き）

ナナフシ「こんな感じでしょうか。月光閃火さん。漸呀の喋り方こんな感じでどうでしょう？葵は……もうちょっと後で。喋り方のチエツクは」

銀時「結局、あっちの白瀬葵は出さなかったな」

ナナフシ「無理！二人も同じ名前がいる奴が居たら無理！日常編は考えとくけど」

銀時「それでは！また次回！」

第二十七訓：最近の剣は色々な機能を付けすぎ……って銀龍もか（前書き）

ナナフシ「連続投稿」

銀時「暇人だな」

ナナフシ「うるさい。『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まります」



第二十七訓：最近の剣は色々な機能を付けすぎ……って銀龍もか

ビルの屋上で、剣がぶつかり合う音が響く。

木刀『洞爺湖』とアームドデバイス『レヴァンティン』が火花を散らせてぶつかる。

「く……！」

シグナムは苦戦していた。

（何だ？この男の剣は！？）

銀時と剣を交えて思った。

この男の剣には、決まった『型』がない。まるで雲の如く変化する剣。

（正規の剣術ではない！我流か！？）

今まで出会った事がない剣筋に、シグナムは苦戦していた。

剣筋が読み難いだけでなく、この男自身の身体能力も高い。力と速さ、反応速度が並の人間を大きく超えている。魔法を使わず、純粋な剣の腕のみでベルカの騎士の私と剣を交えている。

（こんな人間は初めてだ！）

剣の打ち合いは激しさを増していく。

「うおおおお！！！」

銀時が両手で持ちながら、木刀を上段から振り下ろした。

「くっ！」

シグナムは剣を頭上に構えて、木刀を防いだ。

銀時は、素早く木刀を引いて今度は右手に持ち替えて、横薙ぎの一撃を放った。シグナムも反応して剣で木刀を防ぐ。

戦況はシグナムが押され始めていた。

（くっ！やむを得ん！）

シグナムは一旦、銀時から離れて距離をとった。

「レヴァンティン！カートリッジロード……！」

レヴァンティンが撃鉄を起こした。

直後、レヴァンティンの刀身が炎に包まれた。

「な……!?!」

それを見た銀時は、驚いた顔をする。

「紫電一閃!!!!」

高速で銀時に接近し、炎を纏ったレヴァンティンを振り下ろした。

振り下ろされたレヴァンティンによって床が砕け、辺りに煙が立ち込めた。

「銀時!!!!」

下がって戦いを見守っていたフェイトが叫んだ。

レヴァンティンの炎が消えた。シグナムは悲痛な顔で煙を見つめた。

(…殺すつもりはなかったが…コレを使わなければ、私がやられていたかもしれん)

シグナムがそう思った直後、

「おい」

煙の中から声が聞こえた。

「!!!!」

シグナムは目を見開いて煙を見た。

煙は晴れていき、中から服を埃だらけにし、頭から少し血を流した銀時の姿が現れた。

「危ねーな。当たったらどうすんだコノヤロー」

いつもと変わらぬ口調で銀時が言った。

(ま、漸呀と炎風の炎よりまだマシだがな)

銀時はそう思った。

シグナムとフェイトは驚愕した。いや、一番驚いているのは、やはり技を放ったシグナムだった。

(ば…馬鹿な!!!紫電一閃を初見でかわした!!!?)

シグナムは驚愕を隠せなかった。

今までこの『紫電一閃』を初見でかわされた事は一度もない。

(この男の実力…甘く見ていたワケではないが……!!)  
再び銀時から距離とって、シグナムは剣を構え直した。

だが、さすがに今度は銀時もシグナムを追って距離を縮めた。

銀時が横薙ぎに木刀を振るうと、シグナムは上に飛んで避けた。

「！」

銀時は、空に飛んだシグナムを見上げた。

「我らは負けるワケにはいかないのだ！レヴァンティン！！」

シグナムが叫んだ直後、レヴァンティンは連結刃形態『シユランゲ  
フォルム』となった。

「おいイイイ！ちよつと待てお前！ソレもっ『剣』じゃねーだろ！  
別の武器だろ！！」

シユランゲフォルムを見て銀時が叫んだ。

シグナムは構わず連結刃で銀時を攻撃した。

「ちっ！」

銀時は横に跳んで刃をかわした。

連結刃は蛇のように動き、銀時を翻弄する。

シグナムは連結刃の刃に紫色の炎を纏わせた。

「…すまない」

シグナムは小さな声で、銀時に謝罪をした。

そして炎を纏った連結刃を操る。

「飛竜一閃！！！！」

炎を纏った連結刃を銀時に放った。

屋上は大爆発を起こした。

「シグナム！？」

周りで戦ってる人達の意識が、シグナム達が戦ってるビルに向いた。  
ビルの屋上には大きな穴が空き、中から煙が立ち上る。

「ぎ…銀時…？」

フェイトはゆっくりと穴に近づいた。

銀時が負けた？死んだ？

フェイトの目に涙が浮かんだ。

「銀時イイイ！！」

フェイトの叫び声が響いた。

空中に浮いてるシグナムは、肩で息をしていた。

（銀髪の男…せめて倒す前に、お前の名を知りたかった……）

シグナムは静かに目を閉じた。

そしてシユランゲフォルムを解除しようとするが、

「えっ？」

何かに引っ掛かっているのか、連結刃がピンツと真っ直ぐに張って  
いて戻らない。

（引っ掛かる？一体何に……）

シグナムがそう考えた時、

「オイ…姉ちゃん」

下から声が聞こえた。

シグナムは額から汗を流した。ゆっくりと声がした方……屋上に出  
来た穴を見た。

声を聞いたフエイトも穴を見た。

煙が晴れて、屋上の下の階にいる一人の男が姿を現した。

「刃物遊びは終わりだコノヤロー」

連結刃を木刀に絡め、両手で木刀を上段に構えている銀時が立つて  
いた。

右肩には連結刃でやられた傷があった。

「銀時！！」

「な…！？」

フエイトは嬉しさで銀時の名を呼び、シグナムは目を見開いて驚愕  
した。

「悪いな。テメーらにも譲れねーモンがあるみてえだが…」

木刀を持つ両腕に力を入れる。

「俺にも譲れねーモンがあるんだアアア！！」

叫びながら銀時は、思いつき木刀を振り下ろした。

「うわあっ！！」

レヴァンティンを持つてるシグナムは、引っ張られて屋上に叩きつ  
けられた。

床は砕け、シグナムも銀時がいる階に落ちた。銀時は絡めた連結刃を解いた。

「くっ！」

シグナムは立ち上がって、シュランゲフォームを解除し、元の長剣に戻した。

「いいか…テメーらがこの世界で何しようが、どうでもいいし俺の知った事じゃねエ」

木刀を突きつけながら、シグナムに言った。

「だが俺のこの剣。コイツが届く範囲は、俺の国だ」  
鋭い眼光をシグナムにぶつける。

「無粋に入ってきて、俺の大事なモンを傷つける奴ア」  
両手で木刀を握って構える。

シグナムも刀身を炎で包んで構える。

「フェイトは屋上から戦いを見守る。」  
「魔導師だろうが、騎士だろうが…ロストロギアだろうが！」

二人は同時に地を蹴って動いた。  
「ブツた斬る!!!」

すれ違い様に二本の刃が振り下ろされた。  
二人の動きがピタリと止まった。

わずか二、三秒の沈黙の後、  
「…無念」

シグナムが床に倒れた。

銀時は木刀を腰に差した。

「銀時!!!」  
フェイトが銀時に駆け寄った。

「銀時！大丈夫!？」

「ああ。心配いらねーよ」  
そう言っつて銀時は、フェイトの頭に手を乗せた。

\*

「ん……」

シグナムは意識を取り戻した。うつすらと目を開ける。

「あ……私は……」

ゆっくりと体を起こした。

「よオ」

声をかけられて見ると、銀時とフェイトがすぐ側に座っていた。

「き……貴様ら……!?!」

シグナムはすぐに立ち上がろうとしたが、

「ぐっ……!」

銀時にやられた傷が痛んで、立てなかった。

「おいおい。急に立ち上がろうとすんじゃねーよ」

そう言つて銀時は、シグナムに手を差し出した。

「え……?」

シグナムは呆然となつて、差し出された手を見た。

『何をぼーっとしている?』

銀龍が姿を現した。

「刀が喋っている……!」

シグナムもやはり驚いた。

「それはもう良いから。ほら。さっさと掴みな」

「あ……ああ」

戸惑いながらも、シグナムは銀時の手を掴んで立ち上がった。

「やれやれ。お前のせいで服がボロボロだぜ」

服を叩きながら銀時が呟いた。

「……魔法を使わず、剣の腕だけで私を倒すとは……強いな」

「なアに。アンタも強かつたぜ」

シグナムと銀時は、互いに笑みを浮かべた。

「ベルカの騎士、ヴォルケンリッターが将。『剣の騎士』シグナム。」

貴公の名は？」

「俺は銀時。坂田銀時だ」

「銀時か…魔導師の方の名は？」

シグナムはフェイトに顔を向けた。

「時空管理局囑託魔導師。フェイト・テストロッサ」

「テストロッサ…その刀にも名前はあるのか？」

『うむ、我は銀龍だ』

「銀龍か…二人と一本の名前しかと覚えた」

互いに自己紹介をした。

先ほどまでの緊張感はなくなっていた。

「シグナム。貴女達の目的を教えてくださいませんか？」

フェイトが真剣な表情で尋ねた。

「…すまないが、それは言えない」

シグナムも表情を険しくして答えた。

「おいおい。いきなり襲ってきて、そりゃないんじゃないの？」

と、銀時がシグナムに近づこうと歩き出した時、

「あ」

瓦礫につまづいてしまう。

グラついた銀時は、そのまま顔をシグナムの胸の谷間に埋めた。ちなみにシグナムの胸は結構デカイ。

「なっ！！？」

『主……』

シグナムと銀時の後ろにいるフェイトは、顔を赤くした。

銀龍は顔がないからわからないが、多分ため息を吐いた顔になっているだろう。

「お…おおっ！！？」

銀時も冷静さを失い、思わずシグナムの豊かな胸を掴んでしまう。

（け…結構デケーな…それに柔らけ……ってか何この O L O V

E 的展開？）

胸を揉みながら銀時は思った。

「お…おおっ！！？」

その時、凄まじい殺気を感じた。銀時は恐る恐る、もう冷汗をダラダラ流しながら顔を上げた。

顔を真つ赤にしたシグナムが、殺気を放ちながら銀時を睨んでいた。「いや…ちょ待てよ…まずは話し合おう…」

後退りながら銀時が言う。すると今度は背後から殺気を感じた。誰の殺気かはすぐにわかった。一応、銀時は後ろを振り返った。

そこには、シグナムと同じく顔を真つ赤にして、殺気を放ちながら両手でバルディッシュを構えるフェイトがいた。

「いや…お前これアレだよ？わざとじゃないから…事故だから…」

二人の鬼に挟まれて、銀時は生きた心地がしなかった。「…テストarovツサ。準備はいいか？」

「…はい、シグナム」

二人とも攻撃態勢に入る。「おい…何する気？ちょ、銀龍！」

『すまん。偶然とは言え、今回は助けられん』

左右に首を動かしながら、銀時は銀龍に助けを求めるが、銀龍にも見捨てられた。そして。

「紫電一閃！！」

「サンダースマツシャー！！」

二人の魔法攻撃が銀時に襲い掛かった。

「あああああ！！」

銀時は悲鳴を上げながら、攻撃を受けた。

『すまん……主』

最後に銀龍はそう言った。

\*



二人の攻撃を受けた銀時は、黒焦げになった。

ちなみにシグナムとフェイトは、まだご機嫌ななめである。

「そりゃ確かに俺が悪かったよ……でもコレやり過ぎじゃね？ペナルティーデカすぎじゃね？」

黒焦げの銀時が言うが、二人は口をきいてくれない。

「…何で俺ばつかこんな目に……」

落ち込んだ銀時は、その場に座り込んだ。

その時、

「なのはちゃん!!」

新八の叫び声が聞こえた。

銀時は立ち上がり、フェイトも新八の声がした方を見た。

なのはの体から、何者かの腕が出ていた。

なのはの体から出てる手の中に、光の玉があった。

「なのはアアア!!」

すぐにフェイトは飛んで、なのはの元へ向かった。

銀時はシグナムを睨みつけ、胸倉を掴んだ。

「シグナム！なのはに何しやがった!？」

怒りの形相でシグナムに怒鳴る。

「落ちて着け銀時！あれは『リンカーコア』を蒐集しているんだ!」

「リンカーコア?」

銀時は片眉を上げた。

「リンカーコアとは魔導師が持つ魔力の源だ。それを奪われたら、

しばらく魔法は使えなくなるが、命に別状はない」

銀時を落ち着かせるように、シグナムが説明した。

思えばそんな事聞いた様な……。

銀時はそう思った。

「…本当か?」

「嘘は言わん」

銀時は鋭い眼でシグナムを見つめ、シグナムも顔をそらす事なく銀

時を見つめる。

銀時は胸倉を掴む手を離れた。

「……すまない。だが我らには、こうする以外方法がないのだ」  
シグナムが苦悶の表情で銀時に謝罪した。

「……目的は何だ？」

銀時が尋ねた。

シグナムは意を決して目的を言った。

「……闇の書の完成です」

「闇の書？」

聞き慣れない言葉に、銀時は目を細めた。

その時、仲間のシヤマルからシグナム達に連絡が入った。

（蒐集は完了したわ。みんな各自離脱して）

（了解）

シヤマルに答えてからヴィータ達は離脱し始めた。

シグナムも銀時から離れる。

「おい、シグナム！」

「すまない銀時！我らは捕まるワケにはいかないのだ！」

そう言っつてシグナムも離脱した。

「……………」

銀時は静かにシグナムが去っていった方を見つめた。

銀龍は何故か考え事をしていた。

（闇の書？何処かで聞いた様な……………）

銀龍は自分の記憶に関係あるのか？と思った。

（何故だ？嫌な予感しかしないのは……………）

銀龍は考えた。

\*

リンカーコアを蒐集し、離脱したシグナム達は八神家へ向かっていた。

「シグナム、ヴィータちゃん、ザフィーラ、大丈夫？」

心配そうな表情で、シヤマルが三人に聞いた。

「ああ、大丈夫だ」

「全然平気だよ！」

「我も問題ない」

三人はシヤマルに答えた。

「シヤマルこそ大丈夫かよ？その腕」

シヤマルの左腕を見ながらヴィータが言った。

シヤマルの左腕には大きなアザがあった。

実は左腕のアザは、お妙にやられたのだ。なのはリンカーコアの

蒐集を終え、腕を引っ込めようとした時、

「ぎゃああああ！お化けエエエエ！！」

悲鳴を上げながら、お妙が腕に蹴りを決めたのだ。

「だ…大丈夫よ。これくらいすぐに治るから」

安心させるように、シヤマルは笑顔で答えた。

「…それにしても、途中から現れた彼らは何者かしら？」

シヤマルは先ほどの戦いに現れた、銀時達の事について考えた。

「魔力を感じなかったところを考えると…少なくとも魔導師ではな

いだろう」

狼形態になったザフィーラが言った。

「魔法も使ってたねーのに結構強かったし…」

口を尖らせながらヴィータが言った。

「それに一番無茶苦茶なのは、あの天然パーマの奴だ！一対一の勝

負でシグナムに勝ちやがった…！」

ヴィータが納得いかなかった顔する。

シヤマルもザフィーラも、シグナムが一対一で負けるとは想像もし

ていなかった。

そのシグナムは、銀時の事を考えていた。魔導師でもない、魔法を

使わず剣の腕前だけで自分を倒した男。銀時の姿が頭から離れない。いつの間にか、シグナムの頬は少し赤くなっていた。

「シグナム？」

「えっ？あ…ああ、どうした？」

隣にいるシヤマルに声をかけられ、シグナムは慌てて答えた。

「大丈夫？顔が少し赤いけど」

「だ…大丈夫だ。心配いらない」

平静を装ってシグナムが答えた。

一行は八神家に到着した。ドアを開けて中に入る。

「主、只今戻りました」

「ただいま」

中に入って挨拶をする。

「みんなお帰り」

車椅子に乗ったはやてが玄関に来た。

その時、シグナム達は目を細めた。はやてに変わった所はない。シグナム達は、はやての後ろに立っている男を見て目を細めたのだ。

「…誰だよお前？」

ヴィータが、はやての後ろに立ってる男に尋ねた。

男は長い黒髪に着物を着ていた。ヴィータに聞かれ、男は自己紹介をする。

「初めまして、桂小太郎です。好物はそばだ」

「…何故、好物を言った？」

「そば出せってか？そば出せってか？」

シグナムが眉を寄せ、ヴィータは桂を睨みつける。

「まあまあ、二人とも落ち着いて」

はやてがシグナムとヴィータをなだめる。

「桂さん、私の家の前に倒れててな。泊まる所もない言っから、家に泊めてあげる事にしたんや」

はやてがみんなに説明した。

「みんな仲良くしてな」

「よろしく頼む」

桂がシグナム達に頭を下げた。

まあ悪い人ではないようだから、シグナム達も警戒を解いた。ふと、シグナムは思った。

（この男の服装：銀時達に似ている？）

そんな事を思いながら、シグナムは中に上がった。

一行は、はやてと桂の後に続いて部屋に入った。

「うわああ!!?」

部屋に入って、ヴィータが驚きの声を上げた。

シグナム達も目を見開いて驚いている。

部屋の中に、白い体に黄色いくちばし嘴が付いた、ペンギンお化けのような奴がいたからだ。

「な…何だこの化物!？」

「化物じゃないエリザベスだ」

ペンギンお化けみたいな生き物『エリザベス』を指差しながら叫んだヴィータに、桂が名前を教えた。

エリザベスは、

『おかえりなさい』

と書かれたボードを掲げた。

「た…ただいま」

とりあえずシグナム達は挨拶した。

「ほんなら皆揃った事やし、夕飯にしようか」

はやてが台所に向かう。

「私も運ぶの手伝います」

シヤマルも台所に向かった。

「ところで八神殿、そばはないか？」

と桂が言った直後、ヴィータがハンマーで桂の頭を叩いた。

八神家に騒がしい居候が増えた。

\*

「やっぱ、この世界は捨てたもんじゃねえな」

そう言ったのは……雷雅だった。

彼はヴォルゲンリッターと銀時達の戦いを見ていたのだ。

「また……面白い事になりそうだ」

雷雅はそう言つと姿を消した。

第二十七訓：最近の剣は色々な機能を付けすぎ……って銀龍もか（後書き）

ナナフシ「もう……駄作者だな俺」

銀時「そうだな。何処もほとんど変わってねえもんな」

ナナフシ「悪かったな。それではまた次回」

第二十八訓：人の過去を勝手に話して良いのか？（前書き）

ナナフシ「さて……今回も頑張ろう！」

銀時「そうか」

ナナフシ「それでは」

なのは「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』 始まります！」



## 第二十八訓：人の過去を勝手に話して良いのか？

シグナム達との戦いを終えた銀時達は、なのはを保護して、時空管理局本局にいた。

なのはは、魔力の源であるリンカーコアが縮小している以外に、特に外傷はないのですぐに良くなるそうだ。

フェイトは銀時と通路を歩いている。

「それにしても本当に驚いちゃった。どうして銀時達が？」

「お前の母ちゃんに呼ばれたんだよ」

「え？」

フェイトは少し驚いた顔をした。

「急に無線機に連絡があつてな。『フェイトを助けて』って頼まれたんだよ。装置の調整は大体完成してて、いけねー事はなかったからな。じーさんに無理言つてこつちに来た」

「そつか…ごめんね銀時。迷惑かけちゃって…」

顔を俯きながらフェイトが謝った。

「なアに。再会が少し早くなっただけだ」

笑つて銀時が言った。

銀時の顔を見て、フェイトも微笑んだ。

「そういえば、今回は写真に写っていた人以外もいたけど」

「心配すんな。俺の知り合いだ」

そう言つて銀時とフェイトは、フェイトとなのはのデバイスの修復作業が行われてる部屋に入った。

部屋の中にはクロノやアルフ、ユーノ。万事屋と漸呀せんがと葵とお妙、九兵衛と東城がいた。

「紹介するぜ。コイツは柳生九兵衛だ。神速の剣の使い手だ」

「柳生九兵衛だ。よろしく」

銀時に紹介された後、九兵衛はフェイトに挨拶した。

「フェイト・テストロツサです。よろしくお願ひします」

フェイトも頭を下げ、挨拶した。

「んで隣にいるコイツは東城歩。頭はアホだが、剣の腕は柳生四天王最強だ」

「誰の頭がアホですか？私はただ、カーテンのシャーってなるやつが気になっただけです」

「お前はロフトに行って、二度と戻ってくるな」

そう言っ、て銀時は、東城の紹介を終えた。そして今度は新八とお妙の方を向いた。

「コイツ等は志村新八と志村妙。苗字からわかる通り、この二人は姉弟だ」

「志村新八です。よろしくフェイトちゃん」

「志村妙です。よろしくフェイトちゃん」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

新八とお妙とフェイトは、互いに頭を下げ、挨拶した。

「んで、こつちのチャイナ服とデケーのが…」

銀時は視線を神楽と定春に向けた。

「神楽アル！こいつは定春アル！」

神楽が定春の名前を言った。

「定…春？」

定春を見つめながら、フェイトが呟いた。

「わんっ！」

定春が元気よく吠えた。

フェイトは神楽と挨拶をした。

「で、俺の義理の妹の雨宮咲だ」

「よろしくね」

「こちらこそ」

咲とフェイトは挨拶をする。

「でだ…こいつは神宮寺漸呀だ」

「ま、よろしくな」

「はい」

漸呀とフェイトは挨拶をした。

「おい、炎鳳出せよ」

「あ？もう居んじゃない」

銀時が言うと、漸呀はそう言う。

炎鳳が漸呀の隣に居た。

『俺は炎鳳だ。銀龍を知っているのならわかると思うが俺も『喋る刀』だ』

「どうも」

フェイトは銀龍で慣れているのか、普通に挨拶をした。

『正確には、銀龍と違って記憶はある』

「そうなんですか？」

フェイトは驚く。

『ま、奴が思い出すまで何も言わんがな』

どうやら、炎鳳は銀龍に何も教えていないようだ。

「で、漸呀の隣に居るのが神宮寺葵だ。苗字からして、この二人は兄妹だ」

「よろしく」

「はい、こちらこそ」

葵とフェイトは挨拶をした。

えー、ちなみに何故、九兵衛と東城、お妙や定春がいるのかと言うと。

プレシアから連絡があった時、新八の家に九兵衛と東城がいたのだ。電話で銀時から連絡を受けた新八が行こうとしたら、お妙も行くと言い出したのだ。理由は新八の話で聞いてた、なのはやフェイト達に一目会いたからというものだった。すると九兵衛が、お妙の事が心配だからとついてきたのだ。東城も九兵衛を一人で行かせるワケにはいけないとついてきたのだ。定春は神楽が連れていきたいと言つて、連れてきたのである。

え？漸呀と葵はって？それはね、偶然源外の工場で出会って、銀時に無理矢理連れて来られたんだよ。

つて言うか、元々源外もそのつもりで呼んだらしいから。

「そういえばさあ、あの連中の魔法って何か変じゃなかった？」  
頭に包帯を巻いたアルフが尋ねた。

「あれは『ベルカ式』だ」

アルフと同じく、頭に包帯を巻いているクロノが答えた。

「ベルカ式？何ですかそれ？」

今度は新八が尋ねた。

「その昔、ミッド式と魔法勢力を二分した魔法体系だよ」

新八の問いに、頭に包帯を巻いてるユーノが答えた。

え？何で三人とも頭に包帯巻いてるかって？そりゃあ定春に頭を噛まれたからですよ。

「遠距離や広範囲攻撃がある程度、度外視して対人戦闘に特化した魔法で、優れた術者は『騎士』と呼ばれる」

クロノがユーノに続いて説明した。

「そっぴやシグナムの奴、騎士って言ってたな」

思い出したように銀時が言った。

「最大の特徴はデバイスに組み込まれたカートリッジシステムと呼ばれる武装だ。儀式で圧縮した魔力を込めた弾丸をデバイスに組み込んで、瞬間的に爆発的な破壊力を得る」

最後にユーノが説明をした。

「あれはマジで反則だろ。剣が炎に包まれるしよオ。そんな奴は炎凰だけにしてくれって言うんだ」

「ちよっ…銀さん！炎の剣なんて、僕達の世界では普通ありませんよ！」

銀時の言葉を聞いて、新八が注意した。

「銀時」

「ん？」

クロノが銀時を呼んだ。

「貴方に会わせたい人がいます」

\*

銀時はクロノの後ろ歩いてる。銀時の隣にはフェイトもいる。

フェイトが、

「私も一緒に行っていていいかな？」

と言ってきたのだ。

特に断る理由もなかったので、同行する事になった。

クロノの案内で、銀時とフェイトは部屋に入った。中には一人の老人が座っていた。

「グレアム提督。彼を連れてきました」

「やあクロノ。ご苦労だったね」

老人の名は、ギル・グレアム。時空管理局顧問官だ。

ふと、フェイトは銀時の顔を見た。何故か銀時は表情を険しくしていた。フェイトは、何故銀時がそんな顔をしているのかわからなかった。

グレアムに促された銀時とフェイトは、椅子に座った。

「私はギル・グレアム。君が坂田銀時さんか」

「…ああ」

銀時は素っ気ない返事をした。

「銀時！」

銀時の態度に、クロノが怒鳴る。

「いいんだクロノ」

「グレアム提督…」

グレアムに言われて、クロノは大人しくした。

銀時の隣に座ってるフェイトは、銀時の態度に違和感を感じた。

「で？俺に何の用ですか提督さん？」

「用という程の事ではない。ジュエルシード事件で活躍した、君の姿を一度見てみたくてね……後、銀龍さんにも興味があつてね」

穏やかな口調でグラムが言った。

『我に何か用か？』

銀龍は姿を現した。

「あなたが……デバイスでもないのに、持ち主の魔力を使える様にしている刀ですか……」

『そうだが？』

銀龍も素っ気なく答える。

「銀龍まで！」

クロノは銀龍にも怒鳴る。

「いいんだ。いや、興味があっただけだ」

「そうですか。じゃあ俺もう出ていいですか？糖分摂取してなくてイライラしてるんですよ」

言いながら銀時は立ち上がった。

「ぎ……銀時！？」

部屋を出ようとする銀時に、クロノが叫ぶ。

「ま……待って銀時！」

慌ててフェイトが後を追う。

二人はそのまま部屋を出てしまった。

「アイツ……！提督に対して……！！」

「いいんだクロノ。私なら気にしていない」

そう言いながら、グラムは珈琲を一口飲んだ。

\*

銀時とフェイトは通路を歩いていた。

「ねえ銀時、銀龍」

「ん？」

『なんだ？』

「銀時は……グラム提督が嫌いなの？」

フェイトは、さっきから気になっていた事を聞いた。

グレアム提督を見てから、銀時の態度は少しおかしかった。

「別に。嫌いとかそういうんじゃないよ」

『うむ、私もそういう事じゃない』

「え？」

嫌いとかじゃない？じゃあどうして。

フェイトが考え込んでると、銀時が言った。

「なんつーか…胡散臭い感じがしたんだよなア、あのオッサン」

『ああ、何というか……な』

「胡散臭い？」

フェイトは首を傾げた。

「まあ俺の勘違いかもしれねーから、気にすんな」

そう言つて銀時は頭を掻いた。

じはらく歩くと、前からプレシアとアリシアがやってきた。

「母さん、アリシア」

「フェイト！」

プレシアは駆け寄つて、フェイトに抱き付いた。

「フェイト！無事でよかつたわ！」

「心配かけてごめんね。でも、もう大丈夫だから」

安心させるように、フェイトが言う。

プレシアは顔を上げて銀時を見た。

「ありがとう、銀時」

「なアに、俺は万事屋だ。頼まれれば何でもやるぜ」

プレシアのお礼に、銀時は笑つて応えた。

「銀時久しぶり」

「おお、アリシアも元気でなによりだ」

銀時はアリシアの頭を撫でながら言った。

アリシアは撫でられて嬉しそうな顔をする。

「あ、銀時、銀龍！見せたい物があるんだ！」

「何だ？」

『どんな物だ？』

銀時と銀龍は聞く。

「じゃ〜ん!!」

アリシアは銀時に刀を見せた。  
鞘と柄は黒く、柄の先端には束ねられた黒い糸があり、鏢はなかった。

「刀身は黄色だよ」

アリシアはそう言った。

「で、刀がどうしたんだ？」

「うむ、刀を見せたかったのか？」

銀時と銀龍が訪ねると……、

『酷いですね。銀龍。私を忘れたのですか？』

いきなり、アリシアが持っていた刀がしゃべり出した。  
女の声だった。

「『え？』」

銀時と銀龍は驚いた声を上げた。

『銀龍……私です。雷麟です』

「もしかして……」

銀時はアリシアが持っている刀……雷麟を指差しながら聞いた。

「うん！銀龍と同じ『喋る刀』だよ」

「やっぱりかいいいいいいいいいい！！」

銀時はアリシアが答えた瞬間に声を上げた。

「てか、何処で手に入れたそれ!？」

「う〜ん……何処でって……たまたま見つけたんだ」

「たまたま!？」

銀時は驚いた。

てか、絶対あんたもたまたまだろ……銀龍見つけたの。

「うん、魔法をお母さんに教えて貰って、休憩をされていて、ちょっと遊びに行った時に見つけたの」

「いや、もう遊びに行った時にでよくな？」

銀時はツツコンだ。



アリシア曰く、森でたまたま見つけたらしい。岩に刺さっていて、興味本位で抜いたら、主として選ばれたらしい。

「で、お前の相棒になったと」

「うん！もうデバイスは必要ないね！銀時ともお揃いだし！」

銀時が聞くとアリシアはそう言った。

銀時と同じ『喋る刀』を持って嬉しいのだ。

その頃……その銀龍と雷麟は……。

『記憶がない！？』

『ああ、炎鳳と同じ反応をするな』

雷麟の問いに銀龍は普通に答える。

『炎鳳！？あいつも居るの！？』

『ああ、居るぞ』

雷麟は炎鳳が居る事に驚いた。

『炎鳳からは何か聞いたか？』

『いや、あいつは『記憶がないならないうで、思い出すのを待つわ』って言ってたぞ』

『ハア……そうだったか』

雷麟はため息を吐いた。

なら、自分も待つ事にしようと思った。

『なら、私も待つわ』

『そうか』

銀龍って……なんか微妙に銀時に似ている様な……。  
気のせいかな！

「作者……そんな事思ってたのか？」

銀時はツツコンだ。

すると、

「銀さん！」

今度は新八が走ってきた。

「どうした新八？」

新八は銀時の前で止まって、呼吸を整えた。

「桂さんとエリザベスがいません!!」

新八が大きな声で言った。

言われた銀時は数秒、呆然としてたが、やがて目と口を大きく開いた。

「ああああっ!!」

思い出したように、銀時は大声を上げた。

「しまったアア!!あのバカの事すっかり忘れてたアアア!!」

銀時は頭を抱えて叫んだ。

フェイトとアリシアとプレシアは、ワケがわからず首を傾げていた。

「どこを探しても二人がいないんです!無理矢理、装置に入ってきたから別の場所に移動しちゃったのかも!」

焦りながら新八が言う。

実は桂小太郎とエリザベスも、瞬間移動装置でなのは達の世界に来たのだ。

銀時達が装置の中に入った後、桂がやってきて『銀時!俺と共にこの国を変えよう!』としてこく譲夷志士の勧誘にきたのだ。そして無理矢理、装置の中に入って銀時達とは、はぐれたが結果的に『リリカルなのは』の世界にきたのである。

「もう知らねーよあんなバカなんて!エリザベスも一緒にいんだから大丈夫だろ!」

「いや、探してもあげましようよ!」

銀時と新八は、ギャーギャー騒ぎながら話し合った。

\*

八神家。

夜中に桂は目が覚めた。

リビングに明かりがついているので、物音を立てないように静かに

近づいた。

リビングにはシグナム達が集まって、何やら話合いをしている。

「こんな時間に何をしている？」

桂が声をかけた。

「えっ!？」

驚いたシグナム達は、桂へ顔を向けた。

「な…何もしてねーよ!」

言いながらヴィータは、持っている闇の書を背中の後ろに隠した。

「ふむ。ヴィータ殿。今後ろに何を隠した？」

「何も隠してねーよ!」

桂に向かってヴィータは叫んだ。

「まあ落ち着け。別にソレをどうこうしようと言っワケじゃない。

ただ、みんな深刻な表情をしていたので気になっただけだ」

真剣な顔になって桂が言った。

桂の真剣な顔を見て、シグナム達は顔を見合わせた。

やがてシグナムが口を開いた。

「…話を聞いてくれるか？」

「うむ」

桂は頷いた。

\*

桂はシグナム達から闇の書についての説明を聞き終えた。説明を聞いた桂は驚いた。

「なんと…!では闇の書を使えば、天竺への道が開かれるのか!？」  
闇の書を手にとって桂は興奮する。

「そうじゃねーよ!お前の頭力手割ってやる!!」

「ヴィータ!落ち着け!」

「ヴィータちゃん!」

グラーファイゼンを構えるヴィータ。必死にヴィータを止めようと

するシグナムとシヤマル。

「まあ落ち着け。つまりこの闇の書。空白の666ページ全てを埋めれば、所有者は大いなる力を得る。そういう事だな？」  
「そうだ」

桂の言葉にザフィーラが頷いた。

「しかし八神殿は力を欲している様子はないが…何故お前達は闇の書を完成させようとしているんだ？」

「…闇の書を完成させなければ、主はやてが死ぬからです  
険しい表情でシグナムが答えた。

「何？」

「主はやての足は病気ではなく、闇の書の呪いなのです。それは徐々に上の方に進行している。それを止めるために、私達は蒐集を行っているのです」

シグナムが説明を終える。

桂も表情を険しくした。

「自らの主を呪うとは…皮肉な話だな…：ちなみに他の方法はないのか？」

「ありません」

シグナムは苦悶の表情で答えた。

答えを聞いた桂は目を閉じて、腕を組んで考えた。しばらくして、ゆっくりと目を開けた。

「わかった。俺も闇の書の蒐集に協力しよう」

「えっ！！？」

桂の言葉にシグナム達は驚いた。

「魔法とやらは使えないが、剣の腕には自信があるつもりだ。足手まといにはならん」

「あの…本当にいいんですか？」

シヤマルが桂に尋ねた。

「正直、やり方には反対だが…八神殿を助ける手段がそれしかないのなら仕方なからう」

と桂が言った。

「貴方の協力は嬉しいが…何故そこまで？主はやてとは今日会ったばかりでは？」

シグナムが理由を尋ねた。

「八神殿は素性も知れぬ俺を家に泊め、飯まで世話をしてくれた。俺は侍だ。侍は受けた恩は返す」

桂はハッキリとそう言った。

「…わかりました。では、これからよろしく頼む」  
シグナムが頭を下げて言った。

「それじゃあ問題は…あの銀髪の男ね」

「銀髪の男？」

シヤマルの言葉に桂は目を細めた。

「シグナムを一对一の勝負で倒した化物だよ」  
ウィータが桂に教えた。

「ちよつと待て。シグナム殿。その男の名は坂田銀時ではないか？」  
「な…！？何故貴方が銀時の名を！？」

シグナムが驚いた顔で聞いた。

「やはり銀時か…」

桂はため息をついた。

「アイツの事知ってるのか？だったら教えてくれよ！」  
ウィータが袖を掴んで聞いてくる。

桂は少し迷ったが、シグナム達に話すことにした。

「…昔、俺達の世界で、宇宙から来た異人、天人あまんととの戦『攘夷戦争』が起こった。その戦の中で銀時は、その鬼神の如き強さで数多の天人を倒し、敵はおるか味方からも恐れられ、まるで夜叉の様な事から『白夜叉』と呼ばれたのだ」

桂は自分達の過去と、銀時について話した。

「白夜叉…」

話を聞いたシグナムが呟いた。

「正直、俺でも銀時の相手は骨が折れる。それに銀時以外にも助っ

人はいたはずだ」

「うむ。何故か炎系の魔法を使える金髪の男と、水色の髪の女で目にも止まらない剣の使い手だ」

ザフィーラが桂に答えた。

「あいつ等まで居るのか……少し厄介だな……」

「二人を知っているのか!？」

ヴィータは漸呀と咲について聞いた。

「うむ、さっき話した『攘夷戦争』だがな」

「ああ」

シグナムは頷く。

「まずは、水色の髪の女の方からだ。銀時の義理妹で雨宮咲と言い、唯一『白夜叉』の隣に立ち、『白夜叉』同様、敵はおるか味方からも恐れられ鬼が姫の如く舞う様な事から『冷血の鬼姫』と呼ばれた」

「冷血の鬼姫……」

ヴィータが呟いた。

「で、金髪の男が、神宮寺漸呀と言い、銀時同様鬼神の如き強さで数多の天人を倒し、敵味方双方から恐れられ、まるで戦鬼の様な事から『黄金戦鬼』と呼ばれた」

「黄金戦鬼」

次はザフィーラが呟いた。

「だが、銀時と漸呀以外には欠点がある」

「欠点？」

桂の言葉にシヤマルは首を傾げた。

桂はその欠点を口にした。

「空を飛べない事だ。俺も向こうも魔導師ではないからな」

「あつ！」

桂の言葉に、シグナム達は同時に声を上げた。

桂の言うとおり、魔導師でない新八達は空を飛ぶことはできない。いかに剣の腕が凄くても、空に逃げられては攻撃のしようがない。

「地上や屋上に降りずに、空中にいれば新八君達との戦闘は避けら

れる。その場合は、管理局とやらの魔導師と戦う事になるがな」

「なら問題ないじゃん！魔導師相手なら負けはねえ！」

ヴィータが強気な声で言った。

シグナム達もヴィータの言葉に頷いている。

「そうだ……そう言えば銀時と漸呀は？あいつ等も飛べないハズだ」  
ヴィータが桂に訪ねる。

「あの二人には『銀龍』と『炎鳳』が居る」

「銀龍がどうした？」

シグナムは桂に訪ねた。

「あいつ等は……シグナム殿達が言う魔力を扱える様にする刀だ」

「デバイスでもないのか！？」

ヴィータは桂が言った事に驚いた。

「そう言えば、漸呀と言う男は使っていたな」

ザフィーラはそう言った。

「そして、魔力を身に纏う事で、銀時はドラゴンの様な翼、漸呀は炎翼を魔力で作り出して飛ぶ事が出来る」

桂はそう言った。

「そうか」

「でも、大丈夫だ！二人だけなら何とかなるかもしれないだろ！」

ヴィータはそう言った。

「うむ。では皆あまり無理はせぬように」

「ああ」

こうして話合いは終わり、桂も闇の書を巡る戦いに参戦する事となった。

足りない

ドクン

力が足りない

ドクン

早くあの忌まわしき白銀を破壊してやりたい

ドクン

だが、もう少し魔力が必要だ

ドクン

守護騎士達よ……せいぜい頑張って蒐集を続けるがいい

ドクン

我が復活するために……そして我が復習を成し遂げる為に

ドクン

闇の書の中に眠る『悪』。  
ずっと待ち続ける。復活の時を……。



『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハイ、質問コーナー行くぞオ。今回のアシスタントは」

炎凰「主……つまりは漸呀の相棒の炎凰だ」

銀八「行くぞ」

炎凰「今回は一つだけだ。ペンネーム『月光閃火』さんからの質問  
『輝刃』ああ…特に漸呀の『炎凰』との協力での戦いっぷりは、な  
かなかにインパクトがあつて良かったぞ。あ…それと質問：行くぞ  
？まずは俺からだ。」

1. 新八に質問…もし自分に銀時や漸呀みたく『喋る刀』との出会  
いがあったら、どんなタイプの『喋る刀』が良い？ちなみに、銀時  
や漸呀の持つ『喋る刀』の系統とは別系なのでな。

ああ…『テイルズオブステイニー』の『ソーディアン』みたいな  
感じな…。次は俺からだ。

2. ナナフシさんに質問…『喋る刀』で一つ思いついたのがあるん  
だが、投稿いいかな？銀時や漸呀の持つ『喋る刀』とは別系統のだ  
けど…。

輝刃「…何と云うか…俺の予感である意味『凄まじい』モノが浮かぶな…（汗）。」「『一つ目だが』」

新八「そうですね。僕にも魔力があれば良いんですけどね。って言うか作者がテイルズはやった事がないのでわからないそうです。だから自分なりに答えます。とりあえず…別系統と言えば…持つたら目立てる刀がほしいです…」

銀八「そんな答えで良いのか？二つ目だが」

ナナフシ「そうですね…面白そうなので良いですよ！それを見てから使うか、使わないかは決めますので！」

銀八「らしい。と言う訳で『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

炎鳳『質問は以上だ』

銀八「また次回」

第二十八訓：人の過去を勝手に話して良いのか？（後書き）

ナナフシ「さてと……咲と漸呀の奴は……あれ……出しとこつと思  
ったので」

銀時「まあ、二人にも異名はあるからな」

ナナフシ「はい、咲は『冷血の鬼姫』、漸呀は『黄金戦鬼』です」

銀時「だな。漸呀強くねえか？」

ナナフシ「咲より強いかもね。と言う訳でまた次回！」

第二十九訓：引越しは楽しみかも知れない……多分（前書き）

ナナフシ「はつきり言ってサブタイトルって俺くらいじゃね？そう  
思ってたの」

銀時「さあな」

ナナフシ「と言う訳で」

炎鳳『『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まる  
ぞ』

## 第二十九訓：引越しは楽しみかも知れない……多分

今回の『闇の書事件』も、リンディ率いるアースラメンバーが捜査を担当する事に決定した。もちろん銀時達も一緒である。

なのはも起きて、フェイトと銀時達は、リンディ達と共に地球に赴いていた。アースラの整備が完了していないので、司令部をなのはの近所に移す事になった。

なのはは起きた時に銀時に思いつきり抱きついたのだ。

なのはは銀時との再会が嬉しかったのだ。

その時の新八……以上に恐かったそうだ。

アリシアも協力する事になり……。

「うわ〜！ 凄い近所だ」

「本当？」

「うん。ほら、あそこが私の家」

「何処？」

なのはとフェイトとアリシアは、ベランダから仲良く街を見ている。部屋の中では、銀時達が汗を流しながら荷物を運んでいた。

「な…何故私達が引越しの手伝いをしなければ…いけないのですか？」

「管理局のやつら…俺達を便利屋か何かと勘違いしてやがんだ。あゝ腹が立つ！」

「何でこんなメンドい事」

荷物を運んで、汗を流しながら東城が不満を言い、銀時と漸呀が文句を言う。

「貴方達の馬鹿力を有効に活用してるんですよ」

クロノが笑みを浮かべながら言った。

「おい東城、漸呀。後でコイツにヤキ入れようぜ。ついでに定春も連れてこい」

「なっ！？ ちょっと待て銀時！ 定春だけはやめてくれ！！」

「いや、いつその事、炎凰を使って黒こげに」  
「それも勘弁してくれ!!!」

定春の名を聞いて、クロノは顔を青くした。

漸呀が炎凰を使って、と言うと更に顔を青くした。

「みんなお疲れ様。一休みして頂戴」

プレシアが銀時達に言った。

「うース」

汗を拭きながら銀時達はリビングに向かった。

リビングにいるエイミィは、アルフとユーノを見つけた。

「ユーノ君とアルフは、こっちではその姿なんだ」

「新形態子犬フォーム!」

「なのはやフェイトの友達の前ではこっちの姿でないと…」

アルフは可愛い子犬姿で、ユーノは久々のフェレット姿になっていた。  
た。

「わくアルフちっちゃい!どうしたの?」

「可愛い!!!」

「あら、本当!」

「ユーノ君もフェレットモード久しぶり!」

フェイトとアリシアとプレシアは子犬フォームのアルフに驚き、  
なのは嬉しそうにフェレット姿のユーノに近寄る。

「可愛いだろ」

「うん!」

アルフがフェイトの頬を舐める。

「ぎゅううううううう!!!」

「ちよいと!アリシア!く、苦しいよ」

アリシアにいきなり抱かれて、アルフは驚いた。

ユーノは、なのはに頬ずりされて苦笑している。

「!」

その時、アルフは銀時の視線に気付いた。

銀時はニヤリと笑った。アルフは嫌な予感がした。

「アルフ！お前、今言ったなアア！！新形態『子犬』フォームだど！つまり、お前は自分が『犬』である事を認めたワケだアア！！」  
ビシッとアルフを指差しながら銀時が叫んだ。

「あっ……いや……そうゆうんじゃないよ……！」

「もう遅い！お前のさっきのセリフは、このカセットテープに録音してある！」

銀時は片手に持つてるカセットテープを見せた。

「何でそんなの持つてるのさ!？」

「そこはツツコむな！」

銀時とアルフがギャーギャー言い争う。

久しぶりに銀時とアルフの騒がしい会話を聞いて、フェイトは笑った。周りにいるのはや新八達も笑った。

「なのは、フェイト、アリシア。友達だよ」

「はい！」

クロノの言葉に、フェイトとアリシアとなのは嬉しそうな笑顔になった。

「こんにちは！」

「きたよ〜！」

玄関に行くと、アリサとすずかがいた。

「アリサちゃん、すずかちゃん」

「はじめまして……って言うのもちよっと変かな？」

「ビデオメールでは何度も会ってるもんね」

「うん。でも、会えて嬉しいよ。アリサ、すずか」

「よろしくね」

二人を見ながら、フェイトとアリシアは嬉しそうに笑った。

「うん！」

「私も！」

アリサとすずかも嬉しそうに笑う。

「それよりも……どっちがフェイトで、どっちがアリシアなの？」  
アリサが訪ねる。

確かにフェイトとアリシアは瓜二つなのだ。

違う所と言えば……。

「緑色のリボンがアリシアだよ」

フェイトがそう言った。

「そうなんだ」

「凄い……間違い探しだね」

アリサとすずかはそう言った。

え？銀時達は何で普通にフェイトとアリシアがわかるかって？

そりゃ、先にフェイトとアリシアから聞いたからだよ！

その後、アリサとすずかは初めて会った新八達に挨拶をした。

\*

銀時達は、リンディがなのはの両親に挨拶に行くという事で、喫茶翠屋へきていた。

「ユーノ君も久しぶりだね」

「キューキュー」

「こっちの犬も可愛い〜！」

「アーンツ」

外のテラスでなのは達は、アルフやユーノと一緒に談笑していた。ちなみに銀時というと。

「おお〜！こっちのも、うまそうだな！」

「それは今回作った新作なんですよ。よかったらお一つ食べてみますか？」

「え？マジで！？」

翠屋のケーキに目を奪われながら、士郎と仲良く話をしていた。

「……そんな訳で、これから暫くご近所になります。よろしくお願ひします」



「こちらこそお願いします」

リンデイと桃子が挨拶をしている。その時、店の扉が開かれて、フェイト達が中に入ってきた。フェイトとアリシアは両手で小包を抱えていた。

「リンデイていと…リンデイさん」

「はい。なあに？」

「…あの…コレ…」

戸惑いながらフェイトは、小包の中を見た。中に入っていたのは白い制服だった。

「制服？」

銀時が片眉を上げた。

「転校手続き取つといたから。週明けからなのはさんのクラスメイ  
トね」

笑顔でリンデイが言った。

「あら素敵」

「聖祥小学校ですか。あそこはいい学校ですよ。な？なのは」

「うん！」

「良かったわねフェイトちゃん、アリシアちゃん」

優しく微笑みながら、桃子が言った。

「あの…えと…はい、ありがとうございます…」

「ありがとうございます！」

恥ずかしがりながらも、フェイトは嬉しそうに制服の入った小包を抱きしめた。

アリシアは元気よく言った。

「よかったなフェイト、アリシア。友達百人できるかな？」  
と言いながら銀時はケーキを食べた。

『そう上手く出来るのか？』

銀龍は姿を消したまま、銀時の耳元で言った。  
するとリンデイが銀時と漸呀を呼んだ。

「銀さん、漸呀さん」

「ん？」

呼ばれた銀時は、フォークの動きを止めた。

漸呀は銀時の隣でボクツとしていたので、リンディを見た。

「実は銀さんと漸呀さんにも……」

リンディは悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「え？何？何か嫌な予感がするんですけど……」

「銀時……俺もだ」

瞬きしながら銀時が言った。

漸呀は自分も嫌な予感がすると言った。

\*

そしてフェイトとアリシアが、なのは達が通ってる小学校に転校する日。

聖祥大付属小学校。なのはのクラスはざわついていた。

「さて皆さん。実は先週急に決まったんですが、今日から新しい友達がこのクラスにやってきます。海外からの留学生さんです。フェイトさんとアリシアさん、どうぞ」

「し、失礼します」

「失礼します」

先生に呼ばれ、フェイトとアリシアが教室の中に入ってきた。

なのは達と同じ白い制服を着て、教卓の前に立った。

「あの……フェイト・テストロッサと言います。よろしく願います」

「私はアリシア・テストロッサです。よろしく願います」

恥ずかしがりながらも、フェイトは自己紹介をした。

恥ずかしがる事なく、アリシアは自己紹介をした。

クラスの皆は拍手をして、フェイトを笑顔で迎え入れた。フェイト

とアリシアは嬉しそうに微笑んだ。

「一様、この学校にはフェイトとアリシアは双子と言う事で話しを通してある。」

「それともう一つ皆さんにお知らせがあります。実は今日から私に代わって、しばらくの間臨時の二人の先生が皆さんの担任と副担任をやります」

先生がクラスの皆に言った。

その言葉に生徒達は再びざわついた。

（臨時の先生って…まさか！）

フェイトはハツとなって、教室の扉を見た。

なのもフェイトと同じ事を考えたのか、教室の扉に視線を向けた。

「それでは入ってきてください」

「うゝス」

「へゝい」

扉の向こうから気だるげな声が返ってきた。

ガラリと扉が開けられ、二人の男が入ってきた。

ズレた眼鏡に、白衣とネクタイをだらしなく身につけた銀髪の天然

パーマの男。

黒い服とネクタイを銀髪の男同様だらしなく身につけた金髪のウル

フヘツドの男。

「どーも。今日から皆さんと一緒におふざけ…じゃねーや。授業をする事になりました、担任の坂田銀八です」

「今日から皆さんと一緒に授業をする事になった、副担任の神宮寺漸八です」

この場に新八がいたら『今おふざけって言いそうになったろ！』というツツコミが入りそうな自己紹介をして登場したのは、坂田銀時と神宮寺漸八だった。

銀時…いや、銀八先生と漸八先生を見た生徒達は静まり、フェイトはズッコけた。

なのはは嬉しそうだったけど。

銀時と漸呀がなのは達の担任と副担任となつて学校に来たのは、デバイスを持つていない二人の護衛のためである。二人は銀龍と炎凰のお陰で魔力も扱えるうえ、身体能力もズバ抜けているからである。多分、生徒は思っただろう……「え？何このやる気なさそうな二人」と。

\*

マンション。

「あの、クロノ君。そもそも闇の書って一体何なの？」  
マンションに残つてる新八達は、クロノに闇の書について尋ねた。

「闇の書は魔力蓄積型のロストログア。魔導師の魔力の根源であるリンカーコアを食つて、全666ページを埋めるとその魔力を媒介に真の力を発揮する。次元干渉レベルの巨大な力をね」

「本体が破壊されるか所有者が死ぬかすると、白紙に戻つて別の世界で再生する」

クロノが説明をして、エイミイが補足をした。

「では、闇の書の破壊は不可能なのか？」

九兵衛が尋ねた。

「ああ。様々な世界を渡り歩き、自らが生み出した守護騎士によって守られ、魔力を食つて永遠を生きる。破壊しても何度でも再生する、停止させる事ができない危険な魔導書」  
クロノが険しい表情で説明した。

「という事は…我々に出来るのは闇の書の完成前の捕獲…ということとですか？」

涼やかな顔で東城が言った。

「そういう事になりますね」

\*

昼休み。

フェイト達は、お弁当を持って屋上へ向かっていた。屋上の扉の前に着いて、フェイト達は足を止めた。扉の前に『立入禁止』と書かれた看板のような物が立てられていたのだ。

「おかしいわね。昨日まではこんな物なかったのに」  
「さすがに困った顔をする。」

「こんなの無視しちゃえばいいのよ」

そう言つてアリサは、看板をどけてしまう。

フェイトが不安な顔になる。

「え？でも…いいの？」

「いいの、いいの」

「行こう行こう！」

アリシア……やはり中身は五歳のままだな……行こう行こうって。

アリサがドアノブを掴もうとした時、

「波アアア！」

扉の外から声が聞こえた。男の声である。

四人は顔を見合わせた。

「波アアアア！！」

また声が聞こえた。

アリサはドアノブを掴んで回すと、ゆっくりと扉を開けた。

そして四人は見た。声の主を。

「かーめー！めー波アアアアア！！！」

銀時が両手を構えながら、某メガヒット漫画に出てくる必殺技の練習をしていた。

フェイト達は、冷やかな目で銀時を見つめた。

近くでは漸呀が昼寝をしていた。

「なんか違うんだよな。もうちよいアレだな」

ブツブツ言いながら、銀時はまた構えた。

「かゝめゝゝめゝ…」

構えながら、何気なく屋上の入口を見た。

「！！」

そこには、冷やかな目で銀時を見るフェイト達がいた。

「んあ？どうした？」

銀時の声が聞こえなくなり、漸呀は起きた。

そして……銀時を見ているのはとフェイト達を見て……。

「だからやめろって言ったんだ」

この言葉が出たのであった。

\*

夕方。

帰りでアリサやなのは達と別れたすずかは、一人で図書館にきていた。

屋上の件は、あの後銀時は凄く落ち込んで、しばらく立ち直らなかつた。

（銀八先生…大丈夫かな？）

銀時を心配しながら、すずかは本を探した。すると、隣にいる人にぶつかった。

「あつ！すみません！」

「いや、こつちこそ悪かつたな」

二人は謝りながら相手の顔を見た。

「銀八先生!？」

「えっ？すずか!？」

顔を見て二人ともビツクリした。

その隣には漸呀も居た。

「銀八先生…どうしてこんな所に？」

「さすが驚いた顔で銀時に尋ねた。」

「いや、暇つぶしに来てみたんだが…ちょっと失敗したな。字ばかりで頭がクラクラするぜ」

「俺も試しに来たが…同じくだ」

頭を掻きながら銀時が言った。

と、銀時は急に申し訳なさそうな顔になった。

「あのよお…屋上の件はすまなかった…『立入禁止』ってやれば誰も来ないと思って…つい屋上で…」

「あ、いえ！私達は大丈夫ですから、銀八先生も元気出してください！」

慌ててすずかは銀時を励ました。

「サンキューな…」

すずかの励ましで、銀時は少し元気になった。

「お前はガキだな」

「うるせえ！」

漸呀に言われて銀時は叫んだ。

その時、車椅子の音が聞こえた。すずかは音のする方を見た。

車椅子に乗ったはやてと、後ろで車椅子を引いてるシグナムがいた。

「はやてちゃん！」

「すずかが、はやてを呼んだ。」

「あつ、すずかちゃん！」

はやてもすずかに気付いた。

シグナムもすずかの方に顔を向けた。

「なっ！？」

すずかの隣にいる銀時と漸呀を見て、シグナムは思わず声を上げた。

「あ」

銀時もシグナムを見た。

漸呀は……気にしてないだろ。

「すずかちゃん。そちらの方は？」

「私のクラスの臨時担任の坂田銀八先生と臨時副担任の神宮寺漸八先生です」

「すずかが、はやてに教えた。」

（た…担任教師と副担任教師！？この男二人が！？）

シグナムは内心驚愕した。

「シグナム。坂田先生と神宮寺先生の事知ってるん？」

「あ…え、ええ……まあ……」

はやての問いに、シグナムは曖昧な返事をする。

「銀八先生、漸八先生。私の友達の八神はやてちゃんです」

「すずかが銀時に、はやてを紹介した。」

「どうも。八神はやてです」

ペコリと頭を下げながら、はやてが挨拶した。

「あくどうもこちらこそ。すずかのクラスの臨時担任の坂田銀八です」

「同じく、すずかのクラスの臨時副担任の神宮寺漸八だ」

二人はそう言った。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！！」

銀八「ハアイ、質問コーナー始めるぞオ。今回のアシスタントは」





たまたま出会って、帰るまで居候させてもらっただけだ!!」

新八「天誅!!」

銀時「来るなアアアアアア!!」

銀時は新八から逃げた。

銀八「……二つ目だけど……」

なのは「黒龍さん……いつもそればっかだね……」  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

フェイト「覚悟出来てるよね?」  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

銀八「あのお二人さん?」

銀八は青ざめながら訪ねる。

漸呀もさすがに青ざめた。

なのは「デイベインバスター!!」

フェイト「サンダースマツシャー!!」

なのはとフェイトの砲撃が黒龍さんの所に飛んでいった。

銀八「……三つ目だが」

なのは「フェイト」「やっちやうかも……」

二人は顔を赤くしながら答えた。

銀八「カーツペ！と言つ訳で『黒龍』さん！廊下に立ってなさい！」

漸呀「八つ当たりすんな。次で最後だ。ペンネーム『支配者』さんからの質問だ

『質問です

漸呀に質問

銀時と自分、どっちが強いと思ってます？

高杉については如何思いますか？

ミラクル に質問

ついにロリコンアイドルアニオタ眼鏡として動き出す時が来ました  
が如何思いますか？いつその事Mにでも目覚めますか？（黒笑）  
一つ目だが……わからねえな。戦った事がねえし」

漸呀はわからないと答える。

あの二人が戦えば……その場所が焼け野原になっていると思います。

漸呀「二つ目だが……高杉の事は気に止めねえ……確かに高杉とも  
戦友だ。だが、あいつは変わり果てた……もし、高杉が仲間を傷つ  
けるなら俺は容赦しねえがな」

漸呀はそう答えた。

漸呀は確かに『攘夷戦争』を銀時や高杉達と共に駆け抜けた戦友で

ある。

だが……高杉が自分の仲間を傷つけるのであれば容赦はしないそう  
だ。

銀八「らしいです。三つ目だが」

ミラクル 「何故だアアアアアアア！M何かに目覚めてたまるか  
アアアアアアア！！」

銀八「だろうな。ミラクル ……良い事はその内起きるぜ」

ミラクル 「ちくしょおおおおおおおおおおおおお！！」

銀八「と言う訳で『支配者』さん。廊下に立ってなさい！」

漸呀「質問は以上だ」

銀八「また次回」

第二十九訓：引っ越しは楽しみかも知れない……多分（後書き）

ナナフシ「いや、漸呀も先生って面白そうだったのだから、ちやい  
ました！」

銀時「おい！」

ナナフシ「良いじゃん!!」

銀時「たくつ、また次回な」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2725z/>

---

リリカル銀魂～魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀～

2012年1月6日20時50分発行